





昭和六年二月十日印刷
昭和六年二月十五日發行



上製 新井石禪全集第十一卷

著作權者 祥雲晩成
編纂者 山田靈林
發行者 飯野政晴
東京府北豊島郡中新井一九三四番地
印刷者 加藤保
東京市神田區三崎町三丁目一二四番地
印刷所 加藤文明社印刷所

發行所
東京市芝公園十一號地八番
大本山總持寺東京出張所内
新井石禪全集刊行會
電話芝㈣一四八六番
振替東京四五四三二番

（製本 山田製本所）



獅子吼する音や樹の間の居士羅漢
銀龍洛下たゞそのまゝの不動瀧

片桐慈光尼に

雛祭花の香をくむ梅の春
震前の身となりにけり雛の前

春月女史に贈る

彼の岸は佛の國ぞ花ざかり

信水將軍の威德を仰ぎて

たつ波も慈悲の光や信の水
慈悲の身に將軍もある地藏尊
信水や大海原に月一つ
信水に浮べる月や影きよし

森口惠徹師に示す

松風の音や夢路の凉臺

柳　青柳の糸にひきよす春の風

十一月二日禁酒

笹の露うけぬも母のめぐみ哉

小野塚康嘉居士の八十の壽

今も尚むかしのさまよ春霞

老樂や月雪花の遊びぶり

冬　扇　翁　に

風をまつ心もあらじ冬扇

長岡禪學會員寒行托鉢

雪をふむ響もうれし法の聲

寒行や河水きよし鈴の音

三角港近く宿りて

梅が香に春のこゝろは知られけり

梅かほるへやは旅路のうさはらし

信水將軍の岩上說法

靈中上座に示す

麁朶とともにその身をやくな火吹竹

湯澤雜咏

秋深し筧の水の夜の音

これもまた佛の慈悲ぞ湯あみ澤

世の秋を知らでや鯉の躍りぶり

禪英上座に示す

作麼生も用不著なり雪達磨

瑞祥の大衆に贈りて

臘梅の唇さむし坐禪僧

明治十八年の春

梅　十八の春を迎へて於梅さん

敬老會を創立せし越後の某氏に贈る

千代の春秋かさねつゝ　いろうつろはぬ柏崎　なかにめでたき老樂の　つどゐぞいとゞうれしけれ　ことほぐ庭にあつまれる　人は一百九名にて　かぞふる年は八千に　三百歳をこゆとなん　雲にそびゆる米山も　高きよはひを示すらん　越の海原ふかきさへ　いはふ心のしるしかや　おいを敬ひ子をめづる　おもひぞみちのもとゐなれ　法を悦び恩を知る　人は佛の御子ならめ　雪をも淩ぐ呉竹の　淸きぞ君がこゝろなれ　鶴をやどせる高砂の　松こそ君がすがたなれ

## 福島縣梁川町敬老會に

萬世かけて濁なく　流れつきせぬ梁川に　年波高き老い人の　團欒ぞいともめでたけれ　雲に聳ゆる靈山は　搖るがぬ御世の姿なり　月をやどせる阿武隈の　水にも深き惠みあれ　翁は町の寶なり　媼は家の光なり　老を敬ふ人ならで　いかでか誠の道あらめ　秋を飾れば楓葉に　赤き心のあらはれて　喜び祝ふ雛鶴も　千代の榮えを歌ふらん

## 岡崎觀音寺觀音和讃

南無や大悲の觀世音　無畏の功德を身に聚め　久遠の過去に成佛し　正法明と號しける　されど利生の願力は　ことさら菩薩の身を現じ　衆生を我子とみそなはし　憐みたまふぞありがたき　眞觀淸淨智慧と慈悲　五觀の月のくもりなく　影を三十三身に　分ちて照らす光明には　六つの巷の暗も消え　七の災ひあともなく　現當二世の安樂を　惠まるる身ぞ樂しけれ　弘誓の海の限なく　福聚の海のいと潤し　み法の船に棹させば　彼岸もいかで遠からん　能見のみ山の木立にも　補陀羅の雲のたなびきて　うれしやそのまゝ淨土なり　南無や大悲の觀世音

らん　行ひ正しければ身淨し　心靜なれば境安し　信心内に堅ければ　佛の淨土も外ならず　煩惱邪念を放下して　解脱の境に入りぬれば　溪の響は法の聲　峰も佛の姿なり　世のなりはいも自から　實相眞如の德となり　よのつね行ふわざとても　皆佛身の莊嚴ぞ　朝々佛を抱いて起き　夜夜佛を抱いて眠る　國のおんため世のために　盡して止まぬ眞心に　柔和忍辱孝順と　慈悲の力も現はれて　草木國土に至るまで　佛の光に照されん　大乘菩薩の願行に　修證一如の妙道を　履みつゝ進む法の門　開悟の御園ぞ樂しけれ

## 卍山錄の題辭に

濁りなき　心の水にすむ月の　影は曇らじ千代までも　波間〳〵に影やどし　光は四方に輝きて　身に浮雲の跡もなく　福聚の海のいと廣く　慈悲のみ船に乘合の　その樂みや長からめ

## 宏綾子の結婚を祝して數珠袋の裏に

優にやさしき眞心を　磨ける珠のかどもなく　結ぶゑにしの一筋に　貞しき道や貫かん　忍辱柔和を經となし　孝順慈悲を緯となして　織り出したる綾錦　家門の譽となりぬべし　佛の數へ神の道　誠の德は蓬萊の　鶴龜よりも末永く　めでたき幸や來るらん

夢に消えにし諸人の　苦難を漏れなく救はんと　慈悲の光に萬世を　照らす能化の地藏尊　清く妙なる心もて　直ぐなる業を勵みつゝ　歸依しまつらば幸福の　惠みは永く消えざらん

## 開悟の樂園　旭廣女史の爲めに

法性無漏の大海は　隨縁の波常に動き　常住佛性の高嶺には　慈悲の雲長へに靉く　げに面白の人の世や
世はそのまゝの佛國土　さても嬉しき人の身や　身は法身の影なるぞ　まして世界に比ひなき　神のみ國
に生れ出で　我が大君の民となり　文化の惠みに浴しつゝ　ひじりの御代を畏みて　いとゞ心を磨きなば
佛の教へ神の道　共に我身の寶なり　迷ふが故に三界城　悟るが故に十方空　心の曇り晴れざれば　世は
ぬば玉の暗ぞかし　あはれ凡夫の恥かしさ　貪慾の風吹きすさむ　瞋恚の焰きえやらで　愚痴の水にぞ溺
れける　浮華放縱に染まりなば　汚れはいとゞ深からめ　輕佻詭激の心根は　思の棲家となりぬべし　誠
の道をふまざれば　八つの苦み絶え難し　正しき掟を守らずば　六つの巷に迷ふらん　佛は慈悲の光なり
法は眞理の鏡なり　貴き教に順ひて　廣き世に立つ本とせよ　山より高き君の恩　海より深き親の恩　社
會の惠み世のなさけ　限りも知らぬ衆生恩　かてゝ加へて神佛の　冥助は世々につきざらめ　四つの御恩
に報いてぞ　人の人たる道はあれ　諸行無常の世にありて　名利の巷に埋もるゝ　凡夫痴暗の振舞は　夢
に夢みるはかなさよ　善根の山たかくとも　誠の力ぞ登りなん　功德の池の深くとも　みのりの船や渡る

## 佛心會歌　直江津觀音寺のために

（一）

萬物の長てふ人の身を　受けしのみかは日の本の　民と生れて開けゆく　御代に逢ふこそ樂しけれ　（嬉しき身）

（二）

佛の心大慈悲と　知りて吾等も國の爲め　人の爲めにと身を盡し　聖の道にならはゞや　（佛の心）

（三）

知識は此世の光なり　德は此世の寶なり　信心堅固に法の道　勵むぞ人の鏡なれ　（人の鏡）

（四）

忠孝信義を修めつゝ　善根功德を樂みに　正しき業にいそしみて　四つの恩に報いなん　（四つの恩）

（五）

平常心は是れ道と　悟れば淨土も遠からず　御法の花も朝夕の　心の國に咲きぬべし　（法の花）

## 横濱總持館こども地藏臺座の銘

## 三徳歌　同

（一）

金剛石も磨かずば　玉の光も出でざらん　いでや吾等も朝夕に　學びの道にいそしみて　智慧の眼に行の足　慈愛の念も廣やかに　三つの美徳を養うて　あはれ有爲の人たらん

（二）

誠は神のおん姿　慈悲は佛のおん心　おろがむ淨き胸にこそ　感應の道あらはるれ　遠つ祖先をかしこみて　正しき業に進みなば　國のみ寶家の花　譽れは四方にかほるらん

## 丸田等觀仁者が介眉壽宴を開けるを祝して

玉を疊める米山は　搖がぬ御代の光なり　霞をこむる越の海は　深き御國の惠みなり　淨き筵にまとゐする　老いたる人の壽は　常磐の松の色かへぬ　千代の緑にまさるらん　翁は家の寶なり　嫗は庭の鏡なり　敬ひめづる門にこそ　うれしき幸も來るなれ　祝へや祝へ諸人よ　寒さを經ぬる老梅は　雪間に笑みをもらしつゝ　四方に香るぞめでたけれ

覺の花さきにけり　我が大仙を師となして　成田の瑞穗足柄の　峰にたなびく紫の　雲間を傳ふ一乘の
妙なる清水手に結ぶ　身には浮世の塵もなし

下山和歌女に與ふ

雲に聳ゆる明神の　山路に仰ぐ觀世音　圓通無碍の月影は　三十三に身を分つ　正しき道の知るべにと
建つる能化の地藏尊　此世の暗を照します　千代の光とたふとけれ

## 四　恩　歌　神戸修養會青年の爲めに

（一）

世界に輝く日の本の　み國の民と生れては　山より高き君の恩　海より深き親の恩　師長の敎へ友どちの
たがひに勵み勵まさる　四つの恩みに育ちゆく　幸ある身こそうれしけれ

（二）

萬物の長てふ人となり　聖の御代に値ひし身は　外つ國人におくれじと　品性高く德を積み　眞の心ひと
すぢに　忠と孝との二道を　守りて人の鑑とも　なりて此世に盡さばや

## 年の初に

あかつき告ぐる鐘の音に　うち出で見れば鶴山に　たなびく雲も新玉の　朝日を迎ふる風情あり　いでや我等も今よりは　妙なる法に身をよせて　無明の夢をさましつゝ　慈悲の光りに照されん　大に亨る開明の　正しき道をふみわけて　進む心の底にこそ　人の人たる德はあれ　福壽の春や智慧の花　誠一つの春風に　あふげばいとゞありがたき　年に逢ふこそうれしけれ

## 悉多太子の贊　神戸修養會の爲めに

朝日輝く藍毘尼の　み園をかざるもゝの花　わけて色ます無憂樹の　霞の中に釋尊は　うぶ聲高く生れまして　手もて天地指しつ　天上天下獨尊と　唱へたまふぞたふとけれ　我等もやがて　み佛の高き敎へに身を委ね　直ぐなる道をふみゆかば　さとりの園の春風に　心の花もさきそめて　忠孝仁義の香をこめて此身ながらに常樂の　法のうてなに生れなん

## 大雄山先達成田氏に崇德院淵榮榮信の號を授けて

心の空に輝ける　眞如の月の影淨く　功德の岸に遊びぬる　龜に千歲の壽を　あらはす法の御園には　妙

朝日ににほふ山櫻　大和心のうつくしさ　學びの園に忠孝の　花さく身こそうれしけれ　（四月）
園生にしげる若竹の　たゞしきふしにならひつゝ　法の敎へに基きて　なほき心を養はむ　（五月）
螢あつめて文よみし　むかしの人に劣らじと　法の光りをたのみにて　心の玉もみがゝまし　（六月）
暑さいとはずいそしみて　高くつみたる蟻の塔　たゆまず倦まず勤なば　いかなる業か成らざらん（七月）
水にうつらふ夕月の　涼しきかげをあふぎ見て　人の心もかくあれと　いよゝ進まむ法の道　（八月）
遠つ祖先のみ惠と　かしこき法のみ光を　心にしめて忘れずに　つくす誠ぞ人の道　（九月）
み園の菊の千代八千代　いやさかえ行く國民は　忠と孝とを盡しつゝ　外國までも名をあげよ　（十月）
こがらしすさぶ峰の松　千代にかはらぬみさをもて　我が天皇に盡すこそ　實に國民のつとめなれ（十一月）
雪花月と過ごし來て　殘り少なき年のくれ　心も身をもかへり見て　あだに過すな來ん年も　（十二月）

東京刑務協會の囑

改まる　年の始の　曉に　暗路もはれて新玉の　玉を磨ける富士の嶺に　たなびく雲ののどけさよ　いざや我等も大君の　深きめぐみを感じつゝ　無明長夜の夢さめて　正しき道にいそしまん　山を心の友として　八の風にも動くまじ　雲を心の影として　浮世の塵にそまるまじ　淨く直なる道をふみ　誠を守る身とならば　やがてさとりの花さきて　めでたき春を迎ふべし

ば　此世の功德ぞ基なり　あら面白の浮世かな　溪の響や峰の色　實相眞如の聲姿　淨土も外にあらざる
ぞ　あらありがたき人の身や　算盤鍬鎌持つ手にも　如來の光明かゞやきて　無邊の慈恩に浴しなん

神戸修養子供會雪合戰の寫眞に

神の港の御子たちの　淸き心のあらはれて　みのりの庭に降り積る　雪に粧ふ銀世界　玉をちぎりてなげ
かはす　平和に滿る戰は　寒苦を凌ぐ白梅の　花にもまさりてめでたけれ

櫻井大典師還曆祝章帖に

やみぢに迷ふ諸人を　ちゑの光にてらしつゝ　よにもいみじき慈悲の眼の　のりの惠みを敷島の　心の花
の櫻井は　年ふる每に色まさり　福聚の海の量りなき　君がよはひぞめでたけれ

十二月唱歌

さても樂しきお正月　朝日にかがやく國旗の下　智慧も心も榮えゆく　皇國とともに開けなん　（一月）
霜を侵してさく梅の　花うるはしき心もて　艱苦を忍びみほとけの　正しき敎を守らなむ　（二月）
心のどけき春の日や　名もなき山も朝がすみ　まことの德をみがきつゝ　いざや進まん法の道　（三月）

忘れ　虚名の爲めに義理を捨て　目前の欲に蔽はれて　虚僞の振舞最と多し　是れも偏へに御佛の　敎へにうとき爲めならめ　無量の諸佛ありませど　慈悲の心にへだてなし　法門多義に渉るとも　敎への本は只一つ　因果は宇宙の大法ぞ　善因あれば善果あり　現世に道を修めずば　いかで後生の樂を得む　惡は身を斬る斧ぞかし　善は功德の寶藏　敵すら無下に憎むまじ　受けたる恩には報ゆべし　まして世界に類なき　我が日の本にうまれ來て　仁慈の君を戴きし　此身は如何なる好運ぞ　殊に文化の御代に逢ひ　かてゝ加へて御佛の　法のえにしを結びしは　世々に得がたき幸なるぞ　山より高き君の恩　海より深き親の恩　是に報いて忠孝の　道をば常に勤めよや　社會の惠みなかりせば　倶に生存なりがたし　佛は之を諭されて　衆生恩とぞ說かれける　持ちつ持たれつ助け合ふ　中にぞ人の道はあれ　道には身をも惜むまじ　肉より靈こそ貴とけれ　正直の頭に神宿る　此の身のまもりは堪忍ぞ　かせぐに追付く貧はなし　なさけは人の爲めならず　心に叶はぬ事あらば　反りて吾が身を省みよ　正しき諭しに從うて　人たる務めを忘るなよ　戒を傳へて德を積み　禪に住して悟りを得　智慧を研きて理を究め　信を勵みて道に入る　邪見の穢あらされば　世の產業も菩薩行　妄念の障り除きなば　此身ながらに佛なり　心に迷ひ起りなば　釋迦牟尼佛を唱ふべし　忍びかたなき事あらば　皆な因緣と觀ずべし　三度の食時に臨みても　四の御恩をかしこめや　朝夕寢起するだにも　佛の御慈悲を喜べや　貧しき時も恨みなく　愉快に業務を勵むべし　苦しき時にも辛抱し　心丈夫に身を盡せ　信心決定する人は　後世の安樂違ふまじ　未來の善果を望みな

六の巷の暗路さへ　照さぬ里もなかりけり　吉祥の園いとひろく　護國の林いや深し　福聚の海に慈悲の岸　圓通無碍の舟遊山　仁者の命限りなく　七十年あまり七歳を　重ねし君がことぶきを　喜び祝ふぞめでたけれ

## 一休髑髏の圖に題す

にくげなき　此しやれかうべ穴賢　これより外にめでたきは　無しと有りとの二道を　離れて高きわが法を　こしのみやまに尋ねつゝ　つまぐる數珠に百八の　煩惱卽ち菩提ぞと　悟れば無漏路の一休み　千里萬里も一乘の　眞如の園の花散れば　いつも不老の春景色　こゝろの花のさきそめて　法のかほりに身をよせつ

## 御法の手引

そも御佛の御敎へは　人の人たる道を履み　此身ながらに極樂の　淨土に遊ぶ手引なり　世界一家の世となりて　文の華さく時なれど　まだ罪過の消えやらで　開き難きは悟りなり　されば浮世のさまを見よ　海には汽船陸に汽車　空行く旅さへ行はれ　學問技藝さま〴〵に　目を驚かす文明も　裏には暗き影ありて　形式上は進めども　心の道は猶ほ遠し　口に忠孝說きながら　身の行ひに仁義なく　利益に恩誼を打

入山金女の爲めに

七の寶堆き　福の入山春深く　和合の霞愛敬の　花もほゝゑむ野邊の草　眞心こめて面白く　歌ふもうれし鶯の　聲にも知らる法の華　山木ばかりに限らめや　松竹櫻そのまゝに　當意卽妙世に越えし　四季折折の配膳に　山と海との色そへて　法喜禪悅限りなき　醍醐の味ひかんばしく　名も入金の譽ある　光りは四方にかゞやかん

千代竹に題して大竹安太郎翁の米壽を祝す

紅葉する　草木にまさる大竹の　年經る毎に枝茂く　しげくぞ見える一むらは　葉なみたゞしく雪霜のかゝる浮世に生ひながら　色もかはらで安らかに　み法の園を家となし　すぐなる姿まことある　心の中のきよらけく　ちりもとゞめぬけだかさを　むらがりつとふ雀さへ　千代とうたふてことほぎぬ

柴山覺月禪尼の喜字を祝して

七の佛ののりの道　歩む心のいさましく　浮世の外に墨染の　衣につゝむ白雲や　水の流れを友として思ひぞ深き眞柴山　鷲高嶺にわけ上り　牟尼の敎へに身を委ね　ながめ盡せぬ大空の　月はさとりの姿かや

## 宏母堂の爲めに　二章

（一）

補陀落の　峰に輝く月影は　至らぬ里もなかりけり　心の水の澄みわたり　くだくる波も濁なき　身は品川の濱風に　迷の雲も散りぬらん　霞たなびく春の園　普門の枝に咲く花の　香りはいとゞゆかしけれ　鷲のみ山の法の道　宏き心にふむ足も　さわりなきこそ樂しけれ

（二）

浮雲を　はなれて淸き秋の月　心の空に澄みのぼる　影にはもるゝ露も無し　草葉に宿る白玉は　法のみ園にかゞやきて　宏き誓をあらはせり

## 德芳師の轉法輪を祝して

慈悲のみふねにのりの身は　雲と水とにかこまれて　山の霞める春の海　龍すむ淵に棹して　泉の如く涌き出づる　寺門の榮ぞめでたけれ

渡邊蓮子の君のみまかりたまひしを悼みて

いきしにの波間をこえてみ佛のたのしき岸に君や往くらん

渡 邊 政 氏 へ

なげかじな死出の旅路にゆく人も生まれこん日の遠くあらねば

大竹氏令室の牌前に回向して

浮雲の消えてあとなき秋空にかゞやきわたる月をしぞ思ふ

都築靈源師へ

道のため盡してやまぬ君が身は法の林の花にぞありける

松川十一郎氏へ

わが法は濱の松風みねの雲うきよの塵はとゞめざりけり

朝日さす海見るごとに椰子しげる布哇の濱を思ひ出でぬる

寶圓精舍に宿りて

開きぬる寶の鏡ちりたえて心の影もまどかなりけり

解脱と慈悲

世にありて世にそまらざる人にこそ世を濟べき道はありけり

夢

夢の世と思ふも夢とさとりなばさめんと願ふ心だになし

我が道

我が道は峰の白雲たにの松うき世の塵はとゞめざりけり

唯心淨土

み佛の國はと問はゞはちす葉のにごりにそまぬ心にぞある

堪忍

忍べたゞ塵にまじはる身にしあれば憂きこそ道のたよりなりけり

西吉尾魚藍觀世音菩薩御詠歌

くもりなき補陀落の月を桑取のきよき谷間にみるぞうれしき

幾千代の春を待つべき君なれば六十路も年のつぼみなりけり

八　幡　社

鶴が岡かしこき神のみ心を知れとや池に開くはちすば

菅原洞禪師作『三十三身の出來』

を拜讀して

三十あまり三つの光に世を照らし影さへにほふ梅の溪水

伊香保なる淺田萬子刀自に

求めなき身の安らかに浴みしていとゞ心も涼しかるらん

湧きいづる奇しき泉に惠まれてあはれ浮世の塵もとゞめじ

堀内將軍の信州掬水菴に在るに贈りて

手に掬ぶ玉の清水に影やどす月こそ君が姿なりけれ

片桐慈光尼に

こゝろして朝な夕なにいたはらん遇ひがたき世に逢ひがたき身は

ホノルヽの山本菊子に

すむ菴は海原遠くありぬとも通ふ夢路は隔てざりけり

み佛の慈悲の光に惠まれて六つの暗路もあらじとぞ思ふ

幽　　居

梅もなき我が菴ながら鶯は軒端まぢかく鳴きそめにけり

豐隆院徳相明望居士の靈前に

影やどす露の命は消ゆるとも月のひかりは世々につきせじ

本山婦人會西國巡禮納經の人々へ

春風のめぐみを袖に旅衣み法の花を身にまとひつゝ

横濱大梅老人老梅花下の達磨を

寫して贈られけるに寄す

少林のみ法の園にほころぶる五葉一華の春のあけぼの

鵜居利八氏令息のみまかりしを悼みて

浮雲の身は消ゆるとも世々かけて心の月はかはらざりけり

梅叟安河井磐根翁長歌集を讀みて

梅谷の花うるはしき言の葉は幾千代までも香をぞとゞむる

大阪勝田五郎氏夫人道子還暦祝詞

やめる身は赤き心を花として捧げまつらん多摩の御陵

兩女史の格子の裏に書す

うるはしき心の琳を磨きえて智慧の寶をつむぞうれしき（釋尼智賢顯廣貞琳大姉岩尾日出女）

幸おほき法の車にのりそめてまことの道に入るぞめでたき（眞乘諦道大姉矢野鳥銀女）

昭和の春を迎へて

あきらかにやはらぐ御代の春に逢ひていやます國の光をぞ思ふ

人に示す

夢の世に夢みる夢を夢ぞとも知らずにわたる夢の浮橋

金の生る木に題す

油斷なく心棒つよくいさぎよく規律正しく朝起きをせよ

三浦郡三崎延命地藏尊詠歌

慈悲の手に十種の福を授けつゝ八つの畏れを救ふたふとさ

南米に在る人に

隔なき慈悲の惠みの光には國の內外をなど隔つべき

偶成

すみぞめの袖も涙にしぐれして風さへしめる琴引の松
三年までものもいはんとつゝしみて先の帝の御靈まつらん

人に示す

いかならん身にあるとても樂みは足ることを知る人にこそあれ
露の身も法の蓮におくときは玉より淸き光とぞなる

本宮の香米を贈られけるを謝して

はるぐ\と贈りたまはるみ心はよねにもまして香ばしきかな

信州玄照寺靈石觀音に

朝日影くもらぬ法の力こそ此世を照らす光なりけり
搖るぎなき石を心にもろ人をもれなく救ふ慈悲ぞたふとき

小田原老母の香餠其他を贈られ
けるを謝して

ねもごろに贈りたまひし數々に盡きせぬ君がまことをぞ知る

大正天皇の御大葬を遙拜して

しろしめすこの世をあとに神去りしみあと遙におろがみまつる

信州にて或人に

よしや身は山川遠く隔つとも隔てぬ法の道ぞたのしき
雲深きみ山の奥にわけ入りて曇らぬ月を見るぞうれしき

或　人　に

よしや身は幾山川を隔つとも雲井の月は變らざりけり
秋の日に君を迎へてかたらへばふりしく雨もうれしかりけり

戒弟利根川利平氏に

二世かけて救ふ佛の道なれば未來のことも案じすごすな

石田義道氏越中宇奈月に建設せる

佛敎會堂を祝して

宇奈月の法の光のいやまして迷ふ暗路もあらじとぞ思ふ

大倉時女の絡子に

我が法の寳を積める大倉の開くる時は今ぞこの時

奉悼　大正天皇

天地も深きなげきに沈むらん風もかなしき琴引の松

蚤虱吠えつく犬に蛇と蜂生葱生菜酒の無理強い（食物など）

鈴木三郎兵衛翁の金婚式を祝して

相生の松の緑の色まして千代よびかはす蘆田鶴の聲

學生の歸省　東京朝日新聞の囑

まなびやをはなれて暫し故郷に歸る心ぞ涼しかりける

山田麻績子女史に

いたつきの身は鎌倉にすみながら心は鶴のみ山にぞある

世を照らす佛の道をたづぬれば己が心の光なりけり

新誌『つるはし』に題す

鶴嘴のさきよりはなつ光こそめでたき千代の寶なりけり

花月園夫人の歐洲より歸朝せらるゝを祝して

花に月にいや榮ゆらん國々の粹をさぐりし君がいさをに

小栗庸三氏に返して

秋風を窓にきゝつゝ思ふかな君が起き臥しいかにやあらん

いたつきの床に臥すとも心にはつゆわづらひのあらぬ君かな

葦澤家内室より暖衣を賜はりしを喜びて

旅衣木曾路の風もさむからずいと暖き君がめぐみに

玄照寺尸羅會に臨みて

陽光の霞をまとふ玄照のみ園にかほる法の花びら

無　畏　庵

うき波のありとも畏れなかりけり慈悲のみ船にまかせぬる身は

田淵强子の療養品を贈れるを謝して

はる／＼と贈りたまへるまごゝろに法のゑにしの深きをぞ知る

佐　藤　梅　乃　に

雪霜を凌ぎて開く白梅の花にぞ香ほる千代の春風

箱　岩　良　平　翁

良き人の心はいつも寶船波たひらかに風しづかなり

好まさるもの　某新聞に答ふ

無責任ものしり顔に醉つぱらひ御恩を忘れ嘘をいふ人　（他人）

借金とお金の無心食擇み朝寝晝寝に人のかげぐち　（自分）

或人に

千早振神の心をおろがまん五十鈴の川の清きながれに

人に與ふ

心せよ六つの巷のはてまでも己が姿の影にぞありける

別府海門方丈が靈泉湯之花を贈りたまへるを謝して

はる〴〵と惠みたまひし湯の花の香りゆかしき君がまごゝろ

高楠順次郎氏嚴父孫三郎正春翁が八十の壽を祝して

かぎりなき命の道をたどりつゝ八十路の春に遊ぶ君かな

三角港近くに宿りて

梅が香に波もかすみて三角潟旅寢の夢ぞめでたかりける

陽光山玄照寺本堂及吉祥閣を建立せる棟梁三田氏の信念と技術とは世の模範として傳ふべし

まごゝろといみじきわざに造りにし寺は永劫の寶なりけり

三重縣涌金山養泉寺即興

涌きいづる黃金の泉深ければ潤ひうけぬ民草もなし
黃金わく淸き泉にみそぎして法の寶を得よやもろびと

除　夜

往く年を惜むにあらねど徒らに過ぎぬと思へば悔やしかりけれ

元　旦

初日さす大內山のはるがすみ千代さかえゆく光をぞ見る
五十鈴川つきぬ流れは新玉の年ふるごとに澄みわたるかな

片桐慈光尼へ

耳に見て目に聞く人は大空の妙なる聲にふれぬ日はなし
たつねみよ數への外の法の花こゝろの奧のこゝろねにさく
聞くまゝに聞くとも知らぬ鐘の音は軒端の梅の花や知るらん

北平澤養勝寺本師藥師尊詠歌

淨瑠璃の光めでたきみめぐみに內外の病あとかたもなし
わづらひの暗はくまなく晴れぬべし此世を照らす瑠璃の光に

大倉喜八郎鶴彦翁の滿蒙視察ありて

歸朝せられたるを迎へまつりて

天かける鶴にもましてをゝしきは千代にさかゆくしるしなるらん

長谷川次郎兵衞氏手製の念珠をかけて

懺悔登壇の法式を勸めける

まごゝろにつなぎし數珠を手にかけて百世つきせぬ緣をぞ知る

人に示す

心をば心のまゝにせざるこそ心を磨くもとゐにぞある

峰の色溪のひゞきもみ佛の聲とも聞かん姿とも見ん

甲府風月堂定子刀自へ

風きよく月あきらけき秋空を曇らぬ君の心ともみん

本山三松會

露ふかき三本の松のかげに立ちて祖師のめぐみに袖ぬらしけり

島倉龍治君の『一つ臺』を讀みて

法の華妙なる法の香をこめて佛も我れも一つうてなに

玉林齋雜咏

春深きみ法の海の岸にさく玉の林の花ぞめでたき

法の花ほころぶ玉の林こそ此世ながらの淨土なりけれ

松村氏に

ゆくりなく相逢ふことのうれしさよ法の緣の深きをぞ知る

身もいとゞすくよかにこそなりぬべし信力つよき君にしあれば

妙嚴白麟方丈の訃を聞きて

おもひきや豊川深く澄む月もつれなき雲に影かくすとは

鍾慶帖

たゆみなく進まばやがて入りぬべし文の林のよし深くとも

橋本初子刀自の靈前に

浮雲にかげかくすとも大空の月の光はくもらざりけり

片桐慈光尼へ

法の道ひらく箱根の山の上に慈悲の光を見るぞたふとき

晴れわたる今宵の月をながめつゝ曇らぬ秋の心をぞ知る

新　年

初日さす御裳川の清ければ惠は千代につきじとぞ思ふ
限りなき千代の光を新玉の鶴のみ山に祝ふ今日かな
初日影さすや代々木の宮柱ゆるがぬ神の光かしこし

狗子佛性

ありや如何になしのつぶての佛性をなにとて人のくしといふらん

早坂與兵衞氏の厄除地藏尊に題す

厄難の暗もあとなくはれにけり與樂拔苦の慈悲の光に

禪鏡尼に

み佛のみ手に結びし親と子のゑにしは常に離れざりけり

德操妙高大姉大練忌　小田島タカ女

白露の身は消ゆるとも法の園花のうてなに君はすむらん

如忍庵に題す

求めなき身こそ安けれ世にありて心にかゝる事しなければ

吉野御陵にて

御陵にぬかづきまつるすみぞめの袂をぬらす松の下露

伊藤忠太博士の三猿曳牛圖に題す

年あけぬ心の牛に鞭うちて去年にもまさる力をやみん

六忘訓

あながちに心の智慧をたのむまじ忘れて悟る道もありけり

小栗庸三氏に

ともにすむ心こそすれ眞心のかよふ道には海山もなし

田村民子の誕生を祝して

彌榮の田村の庭に生え出し瑞穗ぞ民の寶なるらん

小島美奈女親ら腹巻を編みて賜りけるを謝して

まごゝろをこめて編みたる賜物に霜夜の寒さ忘られにけり

無題

雲水の身には浮世の關もなしきのふは山路今日は川の瀬

十五夜の月を觀る

なき親の塚を護れる鷄頭の一葉に千々のめぐみをぞ知る

北越本間健四郎氏に贈る

世を照らす眞澄の月の影清く雲井に高き光をぞ見る

神戸歡喜寺修養コドモ會創立五年

記念短冊の繪に題す

菊　朝露に色まさりゆく白菊はやまと心の姿なるらん

柿と栗　かきよする智慧のみ寶たのしまんひじりのふみを繰返しつゝ

同　くりかへし心のしぶをさりぬればそのまゝうれし甘柿の味

瀧勇子刀自特に防寒の内衣を賜

はりけるを謝して

あたたかき君が惠みを身にまとひ冬の寒さも覺えざらなん

梁川天神の昇格を祝して

千早振神の光のいやまして月影清し梁川の水

桃山御陵にて

御陵の神の御前にぬかづきて千代の光をおろがみまつる

うなひ子を敎へはぐゝむいとなみは三十三佛のわざにぞありける

昭らけく和らぐ御世の春にあひていとゞ御國の惠みをぞ思ふ

　高橋君の多年敎育にいそしみたまふを稱へて

敎へ草まなびの園に花さきて功ある身となるぞうれしき

　神戸直木絹女に返して

つれなしと思はんことも堪忍の寶つむべき時とこそ知れ

雜　詠

旅にある兒に幸あれと祈る身はいとゞ佛の慕はしきかな

水かれし田の面を見るにいとほしく雨のめぐみをまづ祈るかな

思ふこと荒磯の海のあら波もやすけくわたる法の舟人

　鷹藤龍馬氏の母みまかりたまひしに君が

　追孝世に超えて切なるに感じて靈前に

ありし世にましてかゞやく眞心によみぢの暗もあらじとぞ思ふ

　梁川大竹安太郎氏予の兩親の墓前なる

　鷄頭の葉を書狀に封じて送られける

暗黑界

貪　欲深く義理人情のなきものはやがて貧苦の身となりぬべし
瞋　腹たてゝ憎み妬みの心こそ地獄の鬼のすみかなりけり
痴　苦も樂もみな因緣とあきらめて愚痴の暗路に心迷ふな

光が丘に詣でて

世を照す光が丘の宮柱ゆるがぬ御代をなほまもるらん

黑川楞嚴寺觀音詠歌

くもりなき補陀羅の月を黑川の淸き波間に見るぞうれしき

梁川興風會少女會員渡邊萬子の孝道に感じて

萬兩の黃金とも見ん孝道のたからに富める君がふるまひ

同菅野松子を稱へて

雪霜に色まさりゆく姬松の梢にたかきほまれをぞみる

布哇柴山得造氏の銀婚式に

相生の松のみさほの色そへて八千代を祝ふ庭の雛鶴

某敎育家に贈る

禪鏡尼の攝取庵に住せるを祝ひて

悟り得し道をこゝろのます鏡ゆくすへながくみがけとぞ思ふ

竹田文吉翁の回春を祈りて

毘耶城の春のとぼそも開くらん窓にうれしき鶯の聲

寒川幾世女の還暦を祝して

みどり子の二葉にかへる姫小松今日を千歳のはじめにはして

村上大我居士に贈る

國のためしぼる袂の涙こそ此世を照す玉にぞありける

圓滿なる家庭と暗黑なる家庭との圖に題す

善惡の道に迷はで朝夕に清く正しき智慧をみがゝん

油斷なく己が務めを盡しつゝ邪まごとに心うつすな

光　明　界

智　よしあしの道に迷ふな極樂も地獄も己が心にぞある

斷　くもりなきみ法の月に照らされて正しき業を勵めもろびと

恩　世につくすなさけは人のためならず慈悲こそ德の本にぞありける

震災死者の遺族を思うて

わざはひにうせてし人を思ふにもあとの家人いかにあるらん

悟法院心鏡妙淨大姉の菩提を莊嚴し奉りて

磨きえし心の鏡淨ければ世々の菩提の影ぞうつれる

亡き母に追孝したまへるまごゝろに感じて

なき母をしたふ心のます鏡くもりがちなる人ぞうれしき

東郷元帥の偉德を仰ぎて

世を守る軍の神は國民を導く慈悲のひかりなりけり

國のため君のためにと盡してし功は民の鑑なるらん

大正十二年　東宮妃殿下特旨を以て御衣を淡海女學校長塚本佐登子刀自に賜ふを祝ひ奉りて

賜はりし玉の衣にまなびやの雪も螢も光ますらん

福聚海無量

かぎりなき身の幸は慈悲の海の深きみのりをくむ人ぞ知る

感應の瀧より出づる信水は北の海にも浪やあぐらん

梁川町某氏に寄す

とこしへに流れつきせぬ梁川の水にまことの深きをぞ知る

白玉の光めでたき月影を廣瀨の川にうつしてぞ見る

幸の基とぞ知る梁川の水より清き人のこゝろは

梁川の水にうつれる白菊は波にも千代の香をぞ留むる　（閑院宮御台臨）

片桐サク子の西國巡禮を喜びて

補陀落の月をおろがむ身にしあれば旅路も慈悲の光なりけり

朝夕の心にふかく心せよ心の外に道しなければ

乗松道光の寫せる法華經手引和讃に題して

水莖の露にもにほふ法の華八卷をこめてほころびにけり

信州下鄕製絲場にて

まめやかに正しき道を勵みなばやがてさちある身となりぬべし

呼續町稻荷山立木の觀音

世を照らす千代の光を稻荷山立木の松をおろがみまつる

人に與ふ

浮き沈む波間に影は消ゆるとも空ゆく月にかはりやはある

鶴見の春曙

鶴見山軒に霞のかゝれるはほゝゑむ梅のかほりなるらん

布哇の夏景

香をきそふ千種の花の色まして夏さへ春の心地こそすれ

木曾の秋月

おもひきや木曾の秋草ふみわけて山路に夜半の月を見んとは

古志の臘雪

草も木もみなそのまゝにみ越路の色おもしろき六つの花びら

三州田原藏王山龍門寺戒會にて

瑞穂かる田原の菴にみ佛のみのりゆたけき秋を見るかな

明神岳

明神が岳とし聞けばいやまして皇子の踏ませる跡ぞかしこし

信水將軍の北海道教化を喜びて

鷲の山高き教への林にものりの花さく春は來にけり

伴蒿蹊の贈位紀念に　勅題に因みて

あまつ日のひかりをうけて春の田の苗にも家のほまれをぞ知る

禪鏡尼に

幼兒をみのりの園にいざなひて佛のみことなすぞうれしき

圓芳寺戒會にて

すみぞめの袖に浮世のあやもなし黑澤尻の法のむしろは

宮初女に與ふ

別れてもはなれはせまじもろともにみのりの園にすめる身なれば

信水將軍に

雲水のゆくへさだめぬ身にしあれば旅路も家の心地こそすれ

熊本富女に

世を照す法の光りをたからにて心の富を得つる君かな

常滑製茶椀に題す

あだし世の迷ひの夢もさめにけり窓にうれしき松風の聲

松島の寫眞に題す

八百あまり八つの松島こけむして波にも千代の影ぞみへける

龍　神

龍の宮かみのめぐみにわく水はくめどもつきぬ寶なりけり

坂田みよ女の病を慰めて

みほとけの慈悲を力に冬がれの木にも花さく春ぞまたくるゝ

眞覺院釋圭淨居士

浮雲の身はきゆるともうつろはぬ山を心の姿ともみん

鷹照賢明師へ

天地の深き惠みを知らいとの一すじなりとあだに使ふな

天地の道はかはらじ春秋のうつる姿をそのまゝにして

明治天皇曾て驛を北越の木村家に駐めさせたまひし聖恩を記念せる碑の建つを畏みて

大君のめぐみを千代にあふぐらんいしぶみ高きみくるまのあと

金華山洞光寺授戒會中の作

## 寄竹祝壽

こととはにかはらぬ色の呉竹は君が千年の姿なるらん

日比野雷風氏に袈裟を授くるとき裏書に

鳴神の武威に敵する物はなし天地にひゞく一喝の聲

岡崎龜井氏に

萬世もつきぬ龜井の法の水結ぶゑにしの深くもあるかな

單傳山直指院の戒會にて

みほとけのゑにしを結ぶ糸魚川ふかきめぐみの流れつきせじ

福島縣郡山町橋本萬右衛門氏母

堂はつ子刀自の喜壽をことほぎて

よろこびの年をむかへし君なれば千歳の春をかさねますらむ

山崎德三郎母堂八十八の壽を祝す

千代つきぬ米のよはひを得し人は瑞穗の國の寶なりけり

越中伏木町五福鶴女の爲めに

祖師います鶴のみやまをまもる身にうくる五つの福はつきせじ

大正十一年七月十二日の夜長野市
外吉田婦人會員汽車の發車せし後
予を送られたるを聞きて

あひみんと思ひわづらふたよりにてあひしにまさるまことをぞしる

東京刑務協會の囑により亥年に因みて

たけり亥のわきめもふらぬ心もて正しき道に進みゆくべし

寳林寺に本山維那吉田本苗和尚の病を見舞うて

いたつきのとくいえよかし千代とよぶ鶴のみやまを守る身なれば

三竹堂製菓海草入翁飴

海草のかほりめでたき翁飴身をも心も養はれけり

水野良孝尼九州行脚に臨みて

春風を衣につゝむ旅なれば心の花はさかりなるらん

くもりなき補陀羅の月を旅の空ゆくさき／＼にながめてしがな

小杉町須藤與三郎氏の信行を隨喜して

あなうれし千代くもりなきみ佛の慈悲の光りに結ぶゑにしは

小杉町須藤與三郎氏に

しげりゆく小杉のもとに結びぬるゑにしは盡きじ苔むすまでも

實相山眞如院授戒會にて

浮雲のはれてあとなき實相の山に眞如の月をみるかな

さみだれのそらさへはれて道芝の露にもやどる法の月影

知　足

足ることを知る人ぞ知る世にありて兜率の空にまさる樂み

高岡驛前淺井こと女に

手に結ぶあさ井の水のいときよく深きみのりの淵とこそなれ

瑞龍寺方丈に

高岡のたかきみのりのうるほひはめでたき龍の澄めばなりけり

井口つね女山本とよ女六日町の玄徳
寺に入戒せしを喜びて

つねならぬ世とはいへども御佛ののりの光りはかはらざりけり　（井口つね女に）

いやたかき法の山本のぼり得て浮世の塵もとゞめざりけり　（山本とよ女に）

とつ國に開きそめたる法の道君がいさをは千代につきせじ

北海道の熊皮を惠まれけるを謝して

山にすむたけき獸の身をかへて法のむしろのしきゐとぞなる

神戸市直木女史に

いざゆかん法の道芝ふみわけて此身ながらの蓮のうてなに

夢にみし補陀羅の山の月影はさめての後の光りなりけり

たらちねにつかふる君がまごゝろはわがみ佛の道にぞありける

豊川智惠子に

法の道智慧の光りに照しつゝふみゆく身には塵もとゞめじ

大慈寺にて

庭の面に櫻の花の香をこめてさつきの空に春風ぞふく

本山晉山

いまよりは鶴のみやまにすみのぼる月をこゝろの鏡ともせん

某氏の懇情を謝して

天津そらくもらぬ月は鶴見がた洲さきのやみもはれにけるかな

法の花ひらく大枝のかげにこそつねぐすゝむ道はありけれ

齋藤龜之丞氏銀婚の祝辭

千歳ふる契りとこそは知られけり常磐の松に遊ぶ鶴龜

齋藤嚴父の古稀を祝うて

七十の君がよはひは相生の松とともにぞ萬代や經ん

太田治兵衛翁の征忌に

千代かけて鶴のみやまのひかりぞとあふぐは君がいさをなりけり

北米市俄古島津岬牧師に寄す

神の道佛の法もへだてなき君が心のまことにぞある

夏目直彦氏に

よしやよし目はかすむともくらからぬ心に見よや法の光りを

十年あまりかけにし袈裟にこもりぬるかほりを君の友垣とせよ（受用の絡子に裏書して）

春田源之丞氏の古稀を祝ふ

まれときく君がよはひのほぎことは千代をかぞふる始めなりけり

高田頴哉師の滿鮮布敎記念畫帖に題す

いたつきのさ霧もなどかはれざらん東風にもまさる人のなさけに

大榮寺佐々木師に寄す

いたつきのなやみにまして苦しきは約にそむきしことにぞありける

大正十一年二月廿八日小鈴谷より

小田原に移る時盛田大人わざ／＼

送りたまひしを謝して

遙々と相模の濱のはてまでも送りたまひしことのうれしき

相模潟濱の眞砂の數よりもなほかぎりなき君がまごゝろ

盛田令孃の歌の返しに

千代かけて榮えゆくらん小鈴谷の盛田の瑞穂みのりゆたかに

諸人の深きめぐみのかず／＼は年ふるとても忘れざらまし

臺灣布教監伊藤俊道師に

道のため世のためつくす君が身は法の林の花にぞありける

臺北大枝常之進大人の歌たまは

りけるにかへりして

夏目直彦翁に

應無所住而生其心の君なれば金剛不壞の身とはなりなん

禪　鏡　に

足柄の山より深き孝心の三谷の水は汲みもつくさじ

小鈴谷盛田邸了空室療病雜詠

法のためつくさんと思ふ心には惜からぬ身も惜まれにけり

いたつきも忘れられけり窓近く經讀む鳥の聲をちからに

朝ぼらけ木の下やみもはれわたり聲ものどかに鶯のなく

いたつきもとく癒えぬらん眞心の深くこもりし君がめぐみに

岩本彌左衛門氏靈前に薦む

いまごろは無漏の都にわけ入りて花のうてなに君やすむらん

盛隆院御征日に

彼の岸の淨きみ國を小鈴谷の濱邊のいほに見るぞうれしき

溝口幹氏に返して

神の道佛の法もおしなべてこの世を護る敎へなりけり

わらびすら食まぬ聖の心根を世のひと〴〵に移したく思ふ

人のわざ勵まん身にも心根は孤竹の君にならひてしがな

### 乾光院法會

さきそろふ醫王の園の法の花やがてさとりの實や結ぶらん

### 前田てつ女に

御ほとけにつかふる君が眞心はみ法の庭の花にぞありける

### 米國金貨をもて圓通大士を鑄造するをきゝ

とつくにのこがねも慈悲に照されてやがて佛になるぞうれしき

### 紀德碑

世に高き法のひじりの生えたちを千代に傳うる知多の石ふみ

### 人に示す

道をふみわざをたのしみ睦みあふ家の庭にぞ幸はありけれ

### 松田亮孝師に

朝夕に神や佛を祈るなり君のいたつきとく癒えよかし

いと深きのりのゑにしと知られけりくみもつきせぬ君がまごころ　（多包子女史へ）

春淺き庵もさむさを忘れけりまごゝろあつき君がめぐみに　（中井季子女史へ）

大阪禪學會總會に臨みて

いときよきみのりの庭のつどゐにぞさとりの花やさきそろふらん

神戸市大橋一惠女に

いたつきもとく癒えぬらんみ佛のみめぐみ深き君が身なれば

水野良孝尼に

よしや身は逢ひみることのあらずとも心は同じ法のはちす葉

影淨き補陀羅の月をながめつゝともに佛の光りにぞすむ

六十年ちかくなりにし身にも法の道ゆるみがちなることぞはづかし

皆人の心の玉を磨きえて法の光りとなさんとぞ思ふ

知　多　に　て

身はたとひ知多の濱邊に臥すとても心は鶴のみやまにぞある

春の日になすこともなくやすむ身は勤めにまさる勤めなりけり

身をやすめ動きなせそと誡むるくすしも禪の知識なるらん

風もなく波も靜けき海原をくまなく照す夜半の月かげ

世をわたる心もかくぞありたけれ海にありつゝ海を忘れて

元日攝政宮朝見の式に陪して堀内將軍の歌に返す

明らかに治め玉ひし大君ををろがみまつる心地こそすれ

日の本の光りは四方を照すらん天津御空は雲霧もなし

あまくだる神とぞをがむみすがたはげに日の本の光りなりけり

大正十年布哇にて病にかゝりし折福島市

齋藤きわ子の羽黒山に日參祈禱せられけ

るあつき志をきゝ感謝のあまり

いたつきの癒えしも君のまごころのふかき祈のしるしなるらん

春月女史に贈る

軒の端にほゝゑむ梅の香にそへて影もゆかしき春の夜の月

渡邊ぬい子に返して

信の針行の絲にて縫ひいだす心のにしききつる君かな

宮內省內儀の女史へ贈物の禮として

はらからの心の花の香をこめてはゝその森につかへてしがな

金井貞吉氏寢具を新調して供養せられけるを謝して

なさけあつき君がふすまにつゝまれて心までこそやすまれにけり

大正十年九月七日布哇を發し米國に向ふ

別れてもまた逢ふことのありそ海深きゑにしはくみもつきせじ

太平のなだとしきけど荒波はたゆる間もなく浮き沈みつゝ

結びぬる法のゑにしも深みどり花ふる島をいづるさみしさ

諸人の送りて我を呼ぶ聲に答ふるものはなみだなりけり

かぞふればはや七夜さの波まくら夢にもしのぶほのるゝの濱

一夜さに冬きにけりと思ふまでさむさ覺ゆる船の汐風（九月十一日寒さ强し）

鹽　湖

千ひろなす高き廣野に水すみてさゝ波きよし鹽のみづうみ

歸朝洋上にて

島もなく雲さへはれて大海の波より外に見るものはなし

波高き八重の汐路もやすらかに海の上とも覺えさりけり

山本清三氏の筑前琵琶をきゝて

松かげにこゝろつくしの琵琶の音に旅路のうさも忘られにけり

加哇島ワヒアワ布教所

久方の天つ國にもかよふらん母を慕へる深きこゝろは

八月十七日布哇各島巡錫を了り

ホノルヽにかへりて

法の海誓の舟になれし身は世のなみ風もなにいとふべき

山中百代女史ひとへものを寄するを喜びて

ぬいはりのいともかなしき夏ごろもたもとにあまる君がまごゝろ

完戒のよろこび

ほのるゝのみのりの園にさきそろふ花にたなびくむらさきの雲

加哇島

おしなべてかわいゝとおもふ島人と道をかたらふことぞうれしき

柴山得造氏が母堂を追弔して

いまごろは有爲の山路の關をこえ花のうてなに君やすむらん

踊れ〳〵世は活動の時なるぞ踊りて上れ雲の上まで

パイア

旅ごろもぱいあの里にきてみればのりの御園に紫の雲

小雨ふる馬哇の濱の朝風に帆かげすゞしくかへる漁舟

布哇島古那白峰山大福寺にて

まうなろのすそ野に開く法の花しらみね高く香やにほふらん

み佛の花のうてなにすむ身には旅路も家の心地こそすれ

町田しん子こわの杖を贈りしを謝して

老の身をたすくる杖を力にて千とせの坂もこえむとぞおもふ

虹瀧

たか岩をおちて玉散る瀧津瀬の霧のとばりにうつる虹かな

椰子島

世を捨つる人やすむらん椰子島の峰の木陰にうき波もなし

カワイロア耕地の囑に應じて

あしびきの山田にうゆる早苗こそ民の寶の穂や結ぶらん

あさゆふにゑにしぞふかき足柄の杉の下蔭おもはぬはなし

船醫金井松司氏に與ふ

いたつきも癒えにけるらしまことある醫師の君の深きめぐみに

富嶽の圖に題す

雲の上に高くそびゆる不二のねのきよきを人の心ともがな

いやたかき不二を心の友としてのりのひゞきを松風にきく

渡米船中にて

朝ぼらけ波も靜けき海原に山かとぞおもふ沖のむらくも

いざゆかんふるあめりかのはてまでもみちにさゝぐる露の身なれば

堡府滯錫病中の吟

風そよく椰子の葉音に夢さめて窓にうれしき弓張の月

常春の國とやいはん草も木もながめつきせぬ花のほのるゝ

堡府別院の吟

法の庭むれなす稚兒のさゝげぬる花にたなびく紫の雲

馬頂山滿德寺の盆踊

田村三代子の古稀を祝うて

み佛のめぐみうれしく百歳の春を待つべき君ぞめでたし

幼稚園訓歌

忠　善きわざを學び勵みて大君と御國の爲めに忠をつくさん

孝　行儀よくおとなしくして父母の教へを守り孝行をせん

仁　人々に親切にして犬猫や虫けらまでもいつくしまなん

義　兄弟や御友達にもむつましく倶にたゞしき道を守らん

信　朝夕に神や佛を拜みつゝ花よりきよき心もたなん

人に與ふ

よむ歌もみなまごゝろの數草かほりゆかしき水茎のあと

もろともに法の筵にまとゐして盡きぬゑにしを結ぶ嬉しさ

小野良孝子の餞歌にむくいて

山をなすこがねにましてうれしけれまごゝろふかき君が言の葉

大雄山を憶うて

足柄の雲間の月をながめぬる夢よびさますあかつきの鐘

越後國大巻村長廣田倉太大人定家卿の書を藏せらる月前念佛をよみたる歌かきたるものにていとめづらしこよなき家寶ならめ

これもまたみのりの月の光りかな影うるはしき水莖の跡

辛酉一月廿五日阿川辰子刀自の登山を喜びて

足柄のたかねを照らす月影を阿川の水にうつしてぞ見ん

法の水新井のそこし淺くともつきぬ阿川の流れをぞおもふ

大正十年二月三日大雄山を辭すとて

足柄も鶴海もおなじ春日影こゝろへだつな峰の白雲

へだてなきこゝろとも見よ野も山もみなおしなべて白妙の雪

人に與ふ

百行の本にしあれば束の間もおやにつかうる道な忘れそ

日比野雷風居士の爲めに

みほとけの心にみがく劍には手向ふ人のあらじとぞおもふ

鶴見

鶴海潟なみ間にうつる月影に心のやみもあらねとぞおもふ

### 秋田路にて

露ふかき秋田の山路こえ來れば波音寒し由利の濱風

秋風の立ちてまもなき鳥の海にまばらに見ゆる峰の初雪

濱松乘松辰四郎氏及姉きく室ちか女の西國四國納經に題して

峰の松谷間の澄れすみわたり聞くもうれしき法の聲かな

名古屋市夏目直一氏の病床を訪うて

白菊のきよき心は初冬の霜にも色はかはらさらまし

夜に入りて雨はれければ

大雄の高嶺の雪もきえうせて霞とともに春はたちけり

豆まきのよろこび

四方にまく寶の豆の一粒も百代つきせぬ幸とこそなれ

山中光子の予の五十五齢を祝するに答へて

春駒のいさましき身となりぬべし祝ひたまひし君がめぐみに

神刀流日比野雷風氏『心劍』發刊を祝して

ふりかざす大和心のつるぎにはうちむかふべき敵あらばこそ

むすびつる法のゑにしの深ければ幾世の後もはなれざりけり

曹澤戒場にて

みわたせば竹生島根も霞して波も靜けき春のあけぼの

けさみれば外山の雪もとけそめてほのかにかすむ比良の高峰

無題

咲き匂ふ花にもましてうれしきは心にひらく悟りなりけり

圓淨寺戒場にて

春深きみのりの園にまとゐしてくまなき月の光りをぞ觀る

駒形禪尼に

もろともに法の筵にまどゐしてさとりの春に逢ふぞうれしき

今成老母に

み佛の數に入ぬる身にしあれば慈悲のこゝろぞ住家なりけり

小栗三郎氏へ返書の末に

法の身のつとめも今は安らかに越の千里をめぐりけるかな

六の環のめぐる道芝露ほどもさわりなき身となりにけるかな

七里が濱閑居

おとづるゝ人こそなけれ朝夕の窓にうれしき富士の白雪

はりつめし氷も今はとけそめてかすみにわらふ軒の白梅

朝ぼらけ沖合とほくながむれば霞たなびく大島の山

霧ふかき有爲の山路をこえくれば濱名のそらにいづる月影

夏目直一氏夫人の入戒を喜びて

花ひらく法のむしろにまどゐして菩提の春に逢ふぞうれしき

落合峻造氏の逝去を悲みて靈前に手向く

露深き有爲の山路をけふこえて無漏の都にかへる君かな

高野隆雅畫伯の厚情を謝して

もゝちたびさとしたまへる眞心をいかでかあだに思ひなすべき

慧光玄照禪師の小祥忌に

法の身はいますが如く思へどもことはり知らぬ我涙かな

梅村かき子慈船禪師の遺物をおろがみてあるに

賜はりしかたみの品をみるごとに慈悲のみすがたしのばれにけり

利行　人のため國のためにと盡しなばその身ながらの佛なりけり

同事　瀧水の岩に碎くる波にだもひかりしずけくやどる月影

善光寺にて

善き光月を水内の旅衣結ぶゑにしも淸き朝霜

東京に着きて

白雪をみこしの濱路あとにして小春のどけき母ぎみのさと

柴山壽太郎氏へ返書の末に

こしの山法の水上そこひなく八島のそともうるほひにけり

名古屋禪芳寺病居

よしや身は暫しの病に臥すとても心は法の光りにぞすむ

もろびとの深きなさけに救はれて身のいたつきも忘れぬるかな

名古屋禪芳寺主大英老師に寄す

いまはゝやおきふし易き身となりぬ思へば君のなさけなりけり

名古屋夏目大人の余の病を案じ慰問の歌を贈られけるにいらへて

春風のめぐみをうけて降りつみし谷間の雪もとけそめにけり

### 初冬詠

秋深き古志の浦風吹き荒みつるぎの峯につもる初雪

はつゆきのふりしくやまにみほとけのむとせのあとのしのばるゝかな

霰ふる古志路の空に鳴神も法のつゞみの聲とこそきけ

宏母堂の我が爲めに北越に下向したまひて艱苦をも厭はせられざるを喜びて

吾ゆへにうきをもしのぶ母君のなさけにぬるゝ墨染のそで

うきつらき古志の山家もいとふまじ法を求むる身にてありせば

人に示して

わたつみの深き心にすみぬれば世の浮波もなに歎くべき

うきことの重なる身こそうれしけれ債をはたすゑにしと思へば

惜むとも惜みはつべき身ならねどなほ惜まるゝこゝろこそすれ

### 四攝法

布施　慈悲深き心ありぜば朝夕のしわざもやがて布施となりなん

愛語　禍の門とし聞けばよのつねの言の葉末に罪なつくりそ

佛法相縁

法の海誓の舟にのりし身は心うきたつ波風もなし

朝念觀世音

あさまだき草葉にやどる白露になに心なくうつる月影

暮念觀世音

今日もはや過ぬと告ぐる聲きけば鐘も大悲のみ法なりけり

念念從心起

よもすがら吹く松風の聲きけば枝に心のあるかとぞおもふ

念念不離心

月の夜やあとに伴ふ身の影を分たるものと誰かいふべき

酒を禁ず

今日よりは玉の杯なにかせん笹の露だにいとふ身なれば

雲密にして山に色無く。渓幽にして水に聲有り。少林端的の意。華果自然に成る。

題飲中仙客圖

飽喫醍醐味　人間不老仙　身無塵世縛　胸有洞中天　醉後融賓主　詩成樂聖賢　未登般若臺　猶勝野狐禪

飲中仙客の圖に題す――醍醐味を飽喫す。人間不老の仙。身に塵世の縛無く。胸に洞中の天有り。醉後賓主を融じ。詩成つて聖賢を樂む。未だ般若臺に登らざるも。猶ほ野狐の禪に勝る。

孝子大橋一惠氏於諸嶽山設施食會修十三周忌佛事因讃之

端操能守道　五十有八年　貞淑侔松栢　誠心似白蓮　專修悲智德　深結菩提緣　積善餘慶在　妙音長可傳

孝子大橋一惠氏諸嶽山に於て施食會を設け十三周忌佛事を修す。因て之を讃す――端操能く道を守る、五十有八年。貞淑松栢に侔しく。誠心白蓮に似たり。專ら悲智の德を修め。深く菩提の緣を結ぶ。積善餘慶有り。妙音長く傳ふべし

宿丸田氏邸主人優待且見示二律韻味可掬予深感之襲芳礎伸謝

駐笻禪定宿　殘月影斜臨　翠竹幽人志　青松古佛心　門庭無俗氣　靈室有慈陰　夢覺吟情動　開窗聽曉禽

丸田氏の邸に宿し主人優待し且つ二律を示さる韻味掬すべし。予深く之に感じ芳礎を襲ぎて謝を伸ぶ――笻を禪定の宿に駐め。殘月影斜に臨む。翠竹は幽人の志。青松は古佛の心。門庭俗氣無く。靈室慈陰有り。夢覺めて吟情動き。窗を開いて曉禽を聽く。

寶圓寺投宿偶吟

偶宿福田地　淡然情慮灰　圓池開寶鏡　密樹築瑤臺　境靜紅塵絶　山高紫翠堆　鐘聲從竹外　僧影瘦如梅

寶圓寺投宿偶吟——偶〻福田の地に宿し。淡然として情慮を灰す。圓池は寶鏡を開き。密樹は瑤臺を築く。境靜にして紅塵絶え。山高うして紫翠堆し。鐘聲は竹外よりし。僧影は瘦せて梅の如し。

龍岳院講習會席上偶吟

境幽人亦靜　松竹劃仙寰　講罷時觀水　禪談堪對山　虎溪傳秘曲　龍岳掩玄關　一念無賓主　白雲幾往還

龍岳院講習會席上偶吟——境幽にして人亦た靜に。松竹仙寰を劃す。講罷んで時に水を觀。禪談山に對するに堪へたり。虎溪秘曲を傳へ。龍岳玄關を掩ふ。一念賓主無く。白雲幾たびか往還す。

觀音大士畫賛

具足神通力　大施無畏身　千江皆印月　萬木等逢春　應物灑瓶水　隨緣轉法輪　普門觀自在　攝盡刹塵塵

觀音大士の畫賛——神通力を具足す。大施無畏の身。千江皆な月を印し。萬木等しく春に逢ふ。物に應じて瓶水を灑ぎ。緣に隨つて法輪を轉ず。普門觀自在。攝し盡す刹塵塵

題飛田周山氏達磨圖

嵩嶽高千仭　禪心一榻清　秋風吹落葉　片月度崢嶸　雲密山無色　溪幽水有聲　少林端的意　華果自然成

飛田周山氏が達磨の圖に題す——嵩嶽高きこと千仭。禪心一榻清し。秋風落葉を吹き。片月崢嶸を度る

す。澗は靈山の月を抱き。窗は少室の烟を籠む。此人此境に臨み。滿地福田を成す。

高照山曹源寺

到處是家鄕　家鄕皆道場　曹源波轉玉　高照月含霜　晨昏倶寂靜　坐臥兩淸涼　百億華藏界　總在此禪房

高照山曹源寺——到處是れ家鄕。家鄕は皆道場。曹源波玉を轉じ。高照月霜を含む。晨昏倶に寂靜。坐臥兩ながら淸涼。百億の華藏界。總て此の禪房に在り。

明治丙午秋三島山太平現董孝道宗師啓建尸羅會予應其囑臨法筵仍有作

新涼秋可掬　淨界路圓通　法旆飜禪宇　戒雲橫梵宮　松懷三島月　竹帶五湖風　人境倶淳朴　加行不許功

明治丙午の秋三島山太平現董孝道宗師尸羅會を啓建し予其囑に應じて法筵に臨む。仍て作有り——新涼秋掬すべし。淨界路圓通。法旆禪宇に飜へり。戒雲梵宮に橫はる。松は三島の月を懷き。竹は五湖の風を帶ぶ。人境倶に淳朴。加行功を許さず。

明治壬子五月永泉主盟祖庭宗師啓建戒會予深感其道力賦此以呈

道人多德力　忽見造營完　法雨霑新殿　檀雲繞古壇　洞源龍夢穩　樹密鶴情安　珍重永泉水　濺珠照碧巒

明治壬子五月永泉主盟祖庭宗師戒會を啓建す予深く其道力に感じ此を賦し以て呈す——道人德力多く。忽ち見る造營の完きを。法雨新殿を霑し。檀雲古壇を繞る。洞源龍夢穩かに。樹密にして鶴情安し。珍重す永泉の水。珠を濺いで碧巒を照らす。

東海神洲地　武勇人是城　忠臣如鐵硬　義膽似花明　一劍懲蠻露　三軍服滿清　魔雲隨處散　正氣護天兵
越後の長源寺戰捷祈禱――東海神洲の地。武勇の人是れ城。忠臣鐵の如く硬く。義膽花よりも明なり。一劍蠻露を懲し。三軍滿清を服す。魔雲隨處に散じ。正氣天兵を護る。

光嚴精舍雜詠

胡蘆依樣畫　任運耡心田　風月聯知己　詩書結淨緣　口唯堪喫飯　衲倘足支肩　愧吾無道德　徒似臘時扇
光嚴精舍雜詠――胡蘆樣に依つて畫き。任運に心田を耡す。風月に知己を聯ね。詩書に淨緣を結ぶ。口は唯飯を喫するに堪へたり。衲は倘ほ肩を支ふるに足る。愧らくは吾に道德無く。徒らに臘時の扇に似たり。

祝村上妙光禪尼喜壽

生涯唯一信　七十七春秋　常坐圓通座　時登護國樓　慧光心月淨　妙道德香浮　畢竟無量壽　橋流水不流
村上妙光禪尼の喜壽を祝す――生涯唯だ一信。七十七春秋。常に圓通の座に坐し。時に護國の樓に登る。慧光心月淨く。妙道德香浮ぶ。畢竟無量壽。橋流れて水流れず。

祝曹源活吟宗師晉山

究盡曹源路　德光高照天　八音歸一默　隻手接三賢　淵抱靈山月　脊籠少室烟　此人臨此境　滿地福成田
曹源活吟宗師の晉山を祝す――曹源の路を究盡し。德光高く天を照す。八音一默に歸し。隻手三賢に接

雪を嘗む。

次同荒庭韻

曳杖歩荒庭　花枝無客折　草濃仙跡存　石滑人蹤滅　羣雀戯頽籬　亂蛙鳴涸轍　天眞如是經　不止不須說

同じく荒庭の韻を次ぐ――杖を曳いて荒庭を歩む。花枝客の折る無し。草濃かにして仙跡存し。石滑かにして人蹤滅す。羣雀頽籬に戯れ。亂蛙涸轍に鳴く。天眞の如是經。不止不須說。

祝德本寺達恩建法幢

一入師翁室　多年飽棒頭　夙培功德本　今築善根樓　雲靜山圍翠　月明江印秋　秋光淸似水　接客掉慈舟

德本寺達恩の建法幢を祝す――一たび師翁の室に入り。多年棒頭に飽く。夙に功德の本を培ひ。今善根の樓を築く。雲靜にして山翠を圍み。月明にして江は秋を印す。秋光淸きこと水に似たり。接客慈舟に棹す。

勅題巖上松

巉巖欹錦屏　上有老松蟠　幹鏤千山雪　枝漂萬水瀾　雲龍遊玉闕　露月滴珠欄　捲盡春風髓　卓卓嘯崖端

勅題巖上の松――巉巖錦屏を欹て。上に老松の蟠る有り。幹は千山の雪を鏤め。枝は萬水の瀾を漂はす。雲龍玉闕に遊び。露月珠欄に滴る。捲き盡くす春風の髓。卓卓として崖端に嘯く。

越後長源寺戰捷祈禱

題蓮華寺良寛師肖像

嘗奪光翁印　眉間挿寶珠　禪鍼穿霧海　慧劍拂雲衢　入坐圓通発　出遊弘誓途　心蓮花片片　氣韻歴江湖

蓮華寺良寛師の肖像に題す——嘗て光翁の印を奪ひ。眉間に寶珠を挿む。禪鍼霧海を穿ち。慧劍雲衢を拂ふ。入りては圓通の発に坐し。出でては弘誓の途に遊ぶ。心蓮の花片片。氣韻江湖を歴す。

次鏡雨詞兄林間韻

飛瀑飜藍裯　斷崖披翠襟　竹無誇節色　松有沒絃琴　茶熟香烟細　月明簾影深　林間多韻味　觸目盡知音

鏡雨詞兄が林間の韻を次ぐ——飛瀑藍裯を飜へし。斷崖翠襟を披く。竹に誇節の色無く。松に沒絃の琴有り。茶熟して香烟細く。月明にして簾影深し。林間韻味多く。觸目盡く知音。

次同茅堂韻

抱夢臥茅堂　叢林資我悦　松疎骨覺涼　竹密情將熱　溪口醬雲緘　山腰噴水裂　酒枯詩亦飢　駐筆嘗塊雪

同じく茅堂の韻を次ぐ——夢を抱いて茅堂に臥し。叢林我が悦に資す。松疎にして骨涼を覺え。竹密にして情將に熱せんとす。溪口雲を醬んで緘し。山腰水を噴いて裂く。酒枯れ詩も亦飢え。筆を駐めて塊

題大榮珍龍老師畫蘭

名利非吾望　好居深谷中　幽香誰識得　秀葉守高風

大榮珍龍老師が蘭を畫けるに題す――名利は吾が望みに非ず。好んで深谷の中に居す。幽香誰か識得す。秀葉高風を守る。

贈栗木智堂師

佛心無異域　法海本同艘　華日期親善　相携化萬邦

栗木智堂師に贈る――佛心に異域無く。法海本より同艘。華日親善を期す。相携へて萬邦を化せん。

題木蝦蟆

踞然堅杜口　雙眼射虛空　肚裏藏何物　樂在不言中

木蝦蟆に題す――踞然として堅く口を杜ち。雙眼虛空を射る。肚裏何物をか藏す。樂は不言の中に在り。

奕葉山久昌寺戒會完戒示衆

孤雲遊萬嶽　收影巳歸山　覺性曾無動　安身蓮座間

奕葉山久昌寺戒會完戒示衆――孤雲萬嶽に遊び。影を收めて巳に山に歸る。覺性曾て動き無く。身を安ず蓮座の間。

大洞山靈松寺戒會

雲無還岫意　月有映波心　大洞涵秋色　靈松傳梵音

大洞山靈松寺戒會――雲に岫に還るの意無く。月に波に映ずるの心有り。大洞秋色を涵し。靈松梵音を傳ふ。

寄淀橋三槐淺田玄君

筆下驅風月　詩筒掛錦嚢　心頭無罣礙　處世不知忙

淀橋の三槐淺田玄君に寄す――筆下に風月を驅り。詩筒に錦嚢を掛く。心頭罣礙無く。世に處して忙を知らず。

大遠忌香語

鶴山含壽色　寶殿散天華　箇箇菩提道　普門無物遮

大遠忌香語――鶴山壽色を含み。寶殿天華を散す。箇箇菩提の道。普門物の遮る無し。」

蜆子和尙の賛——洞山綿密の處。箇の奇形兒を産む。蜆子頭の禪味。世人多くは知らず。

宿三角港醫師某氏宅

十州三島勝　山紫水明鄕　一夜蓬萊室　梅花入夢香

三角港の醫師某氏の宅に宿す——十洲三島の勝。山紫水明の鄕。一夜萊蓬の室。梅花夢に入つて香し。

寄横山健堂居士

隨處風光美　興來憶健公　知君山水樂　却在市塵中

横山健堂居士に寄す——隨處風光の美。興來つて健公を憶ふ。知る君が山水の樂み。却つて市塵の中に在ることを。

報恩講上供

法恩深似海　祖德秀於山　感應難思議　光明照世間

報恩講上供——法恩は海よりも深く。祖德は山よりも秀づ。感應難思議。光明世間を照らす。

天理山耕福寺戒會

青山元不動　遮莫白雲遷　只願隨天理　相携耕福田

天理山耕福寺戒會——青山元と動かず。遮莫あれ白雲遷る。只だ願くは天理に隨ひ。相携へて福田を耕さんことを。

成澤山龍雲寺戒會

成澤敷泉石　龍雲擁戒壇　去來無罣碍　覺界路頭寛

成澤山龍雲寺戒會——成澤泉石を敷き。龍雲戒壇を擁す。去來罣碍無く。覺界路頭寛し。

聾盲模象圖

群盲模大象　擬議費商量　若有英靈漢　一當卽百當

聾盲象を模するの圖——群盲大象を模し。擬議商量を費す。若し英靈の漢有らば。一當卽百當。

本山攝心會滿散上供

傳燈分遺照　諸嶽浴毫光　枯木巖前路　瑞華薫袖香

本山攝心會滿散上供——傳燈遺照を分つて。諸嶽毫光に浴す。枯木巖前の路。瑞華袖に薫じて香し。

天桂山廣濟寺戒會

龍松高疊綠　影向養泉長　遮莫雲來往　青山曾不移

天桂山廣濟寺戒會——龍松は高く綠を疊んで。影は養泉に向つて長し。遮莫あれ雲の來往。青山曾て移らず。

蜆子和尙贊

洞山綿密處　產箇奇形兒　蜆子頭禪味　世人多不知

題潮雲莊　山口縣道源權治氏別莊

雲靜潮音爽　微風吹老松　萬帆歸一望　神韻洗塵胸

潮雲莊に題す――雲靜にして潮音爽に。微風老松を吹く。萬帆一望に歸し。神韻塵胸を洗ふ。

竹田文吉翁追弔　於神戸歡喜寺

死生元有命　祇應了因緣　珍重菩提道　渾身坐紫蓮

竹田文吉翁追弔――死生元と命有り。祇應に因緣を了すべし。珍重す菩提道。渾身紫蓮に坐す。

題袈裟　應成澤山龍雲寺囑

離塵和合服　忍辱福田衣　成澤山川麗　龍雲護翠微

袈裟に題す――離塵和合の服。忍辱福田の衣。成澤山川麗しく。龍雲翠微を護る。

菅公贊

令德超今古　靈威放瑞光　一點梅花蕊　三千世界香

菅公の贊――令德今古に超え。靈威瑞光を放つ。一點梅花の蕊。三千世界香し。

手藏山長淵寺戒會

虛空無內外　水月有靈蹤　夜裏崑崙走　飜騰上鳥峰

手藏山長淵寺戒會――虛空に內外無く。水月に靈蹤有り。夜裏崑崙走り。飜騰して鳥峰に上る。

重擔曾不厭　時臥向陽春　頭角甘如密　無心迎歳新

牛を詠ず――重擔曾て厭はず。時に向陽の春に臥す。頭角甘きこと蜜の如く。無心歳新を迎ふ。

次本間健四郎氏病中口占韻

四山交逼身　人事多難恃　君子知天命　谷神終不死

本間健四郎氏病中口占の韻を次ぐ――四山交ゝ身に逼る。人事多くは恃み難し。君子は天命を知る。谷神遂に死せず。

身患心無患　床頭成句多　春回維摩室　幽鳥掠梅過

身患ふも心に患ひ無く。床頭句を成すこと多し。春は回る維摩の室。幽鳥梅を掠めて過ぐ。

海岸山玉林齋戒會

雲無歸岫意　鳥有惜花心　海岸春波靜　玉林紅霧深

海岸山玉林齋戒會――雲に歸岫の意無く。鳥に花を惜むの心有り。海岸春波靜に。玉林紅霧深し。

達磨賛

行到水窮處　坐看雲起時　少林壁觀意　忘醜爲憐兒

達磨の賛――行いては到る水の窮まる處。坐しては看る雲の起る時。少林壁觀の意。醜を忘るゝは兒を憐むが爲めなり。

題五箇如意珠圖

毫端現五珠　威德遍江湖　福壽總如意　恩光隨處敷

五箇如意珠の圖に題す——毫端五珠を現じ。威德江湖に遍し。福壽總て意の如く。恩光隨處に敷く。

賀藤井恕亮氏愛兒誕生

蘭庭生桂枝　仁者有賢兒　壽室多嘉福　慶雲舞玉墀

藤井恕亮氏の愛兒誕生を賀す——蘭庭桂枝を生じ。仁者賢兒有り。壽室嘉福多く。慶雲玉墀に舞ふ。

一休杖頭掛髑髏贊

杖頭孤髑髏　拈出與年新　莫道無生氣　長傳一脈春

一休杖頭髑髏を掛くるの贊——杖頭の孤髑髏。拈出すれば年と新なり。道ふ莫かれ生氣無しと。長く一脈の春を傳ふ。

爲信州某氏

畢竟無量壽　願行豈有窮　驀過生死窟　觸處是圓通

信州の某氏の爲めに——畢竟無量の壽。願行豈に窮り有らんや。生死の窟を驀過すれば。觸處是れ圓通。

詠牛

先帝奉悼會

開維新大化　恢國土文明　聖德空今古　遺光照八紘

先帝奉悼會――維新の大化を開き。國土の文明を恢む。聖德今古を空うし。遺光八紘を照らす。

持地山願成寺戒會

持地山頭月　清光印百川　忽歸西嶺去　餘照滿禪天

持地山願成寺戒會――持地山頭の月。清光百川に印す。忽ち西嶺に歸り去つて。餘照禪天に滿つ。

龍穩山安全寺戒會

慈雲燾海嶽　法雨潤叢林　乞見安全境　風清爽氣開

龍穩山安全寺戒會――慈雲海嶽を燾ひ。法雨叢林を潤す。乞ふ見よ安全の境。風清うして爽氣開く。

田口環氏大黑天開眼

摩訶迦羅尊　慈眼鑑乾坤　百福莊嚴瑞　山高雲自屯

田口環氏が大黑天の開眼――摩訶迦羅尊。慈眼乾坤を鑑らす。百福莊嚴の瑞。山高くして雲自から屯す

贈北越寶光寺大道師

全山皆淨土　滿目悉莊嚴　古殿雲深護　幽禽下碧巖

北越の寶光寺大道師に贈る――全山皆な淨土。滿目悉く莊嚴。古殿雲深く護り。幽禽碧巖に下る。

寒山拾得

兩頭窮鬼子　咳唾壓詩壇　遊戲禪天地　風流在指端

寒山拾得——兩頭の窮鬼子。咳唾詩壇を壓す。禪天地に遊戲して。風流指端に在り。

大黑天

雅量容法界　福德壽門開　嚢裏收珍寶　揮槌雨聖財

大黑天——雅量法界を容れ。福德壽門開く。嚢裏珍寶を收め。槌を揮へば聖財を雨ふらす。

金澤山興珊寺大般若法語

金澤生珍寶　興珊開福田　甚深般若德　雨霽日中天

金澤山興珊寺大般若法語——金澤珍寶を生じ。興珊福田を開く。甚深般若の德。雨は霽る日中の天。

宿酒井俊一氏邸

書畫含神韻　德行合佛心　滿庭風趣足　松影入披襟

酒井俊一氏の邸に宿す——書畫は神韻を含み。德行は佛心に合す。滿庭風趣足り。松影披襟に入る。

贈堀內信水將軍

月無浮水意　山有抱雲心　一夜繩床夢　與君彈古琴

堀內信水將軍に贈る——月に浮水の意無く。山に抱雲の心有り。一夜繩床の夢。君と古琴を彈す。

蛇泉斟めども乾かず。

題鯉魚圖

河水爲家宅　常抱衝天志　豈徒守舊棲　三級笑波低

鯉魚の圖に題す——河水を家宅と爲し。常に衝天の心を抱く。豈に徒に舊棲を守らんや。三級波の低きを笑ふ。

雀翁

此老安天命　悠悠友雀兒　胸中無所得　其樂有誰知

雀の翁——此老天命に安んじ。悠悠雀兒を友とす。胸中所得無し。其樂み誰れ有つてか知らん。

大雲山醫王寺戒會

瞻仰大醫王　隨緣放戒光　虛空無內外　休亂議行藏

大雲山醫王寺戒會——瞻仰す大醫王。緣に隨うて戒光を放つ。虛空內外無く。休亂行藏を議す。

玉峰山寶勝寺戒會

寶勝通玄路　戒雲圍玉峰　眞光無變易　莫認去來蹤

玉峰山寶勝寺戒會——寶勝玄路を通じ。戒雲玉峰を圍む。眞光變易無し。認むること莫れ去來の蹤。

鳥道無蹤跡　白雲示去來　曹源無底水　月印瑞川隈

曹源山瑞川寺戒會――鳥道蹤跡無く。白雲去來を示す。曹源無底の水。月は印す瑞川の隈。

藏王山龍門寺戒會

青山元不動　一任白雲遊　日日是好日　風來樹點頭

藏王山龍門寺戒會――青山元と動かず。白雲の遊ぶに一任す。日日是れ好日。風來つて樹點頭す。

龍蟠山蓮光寺戒會

月落潭無影　雲生山有衣　蓮光添瑞色　秀氣徹禪扉

龍蟠山蓮光寺戒會――月落ちて潭に影無く。雲生じて山に衣有り。蓮光瑞色を添へ。秀氣禪扉に徹す。

瑞巖山清月寺戒會本尊上供

稽首法中王　莊嚴功德藏　圓通無罣礙　盡界浴恩光

瑞巖山清月寺戒會本尊上供――稽首す法中の王。莊嚴す功德藏。圓通にして罣礙無く。盡界恩光に浴す

贈長岡平石武右衛門氏

存心能養德　隨處入禪觀　常坐圓通境　姥泉斟不乾

長岡の平石武右衛門氏に贈る――心を存して能く德を養ひ。隨處禪觀に入る。常に圓通の境に坐せば。

玄龜藏六侍　白鶴伴雲歸　壽室多嘉瑞　仙翁不動機

岡部長職子爵に贈る――玄龜六を藏して侍し。白鶴雲を伴うて歸る。壽室嘉瑞多く。仙翁機を動かさず

### 題寶船圖

朝陽輝覺海　浪靜玉龍眠　風到金帆動　歡聲湧寶船

寶船の圖に題す――朝陽覺海に輝き。浪靜にして玉龍眠る。風到つて金帆動き。歡聲寶船に湧く。

### 題養老孝子圖

飛泉化甘露　至孝動天心　父子如同體　古巖氣深

養老孝子の圖に題す――飛泉甘露と化し。至孝天心を動かす。父子如同體。古巖瑞氣深し。

### 直心會

眞應圓融德　直心是道場　餘恩長潤世　遺照自無量

直心會――眞應圓融の德。直心是れ道場。餘恩長く世を潤し。遺照自から無量。

### 圓藏寺戒會

慶峰迎戒月　玉影照圓藏　不恨花辭樹　滿庭放異香

圓藏寺戒會――慶峰戒月を迎へ。玉影圓藏を照らす。恨みず花樹を辭するを。滿庭異香を放つ。

### 曹源山瑞川寺戒會

普門開瑞色　隨處放靈光　山靜叢林密　溪深流水忙

普門瑞色を開き。隨處に靈光を放つ。山靜にして叢林密に。溪深うして流水忙し。

題竹圖

愛此虛心竹　亭亭勢最雄　滿庭禪味足　終日抱清風

竹の圖に題す――愛す此の虛心の竹。亭亭として勢最も雄なり。滿庭禪味足り。終日清風を抱く。

喜雨

打忘三伏熱　天龍護此山　澍來甘露雨　涼味徹雲關

雨を喜ぶ――打忘す三伏の熱。天龍此山を護る。甘露の雨を澍ぎ來つて。涼味雲關に徹す。

直指院戒會

去來無別路　進退總如如　隨處乾坤闊　山川皆我廬

直指院戒會――去來別路無く。進退總て如如。隨處乾坤闊く。山川皆な我が廬。

題書寫普門品

文文功德聚　字字放光明　無碍圓通道　普門攝衆生

書寫の普門品に題す――文文功德聚。字字光明を放つ。無碍圓通の道。普門衆生を攝す。

贈岡部長職子爵

圓通五五を融じ。眼處音聞を了ず。石は無根の樹を聳えしめ。山は不動の雲を含む。

南無觀自在　擧體大慈悲　山聳雲分影　水澄月宿池

南無觀自在。擧體大慈悲　山聳えて雲影を分ち。水澄んで月池に宿る。

願行曾不息　慧德兩英靈　坐石雲生袖　添泉月入瓶

願行曾て息まず。慧德兩ながら英靈。石に坐せば雲袖に生じ。泉に添へば月瓶に入る。

五觀明似月　十願麗於花　智慧神通力　寒巖吐彩霞

五觀は月よりも明かなり。十願は花よりも麗はし。智慧神通の力。寒巖彩霞を吐く。」

頭頭觀自在　處處補陀山　飛瀑含雲散　老松迎月閒

頭頭觀自在。處處補陀山。飛瀑雲を含んで散じ。老松月を迎へて閒なり

圓通微妙德　法界白毫輝　月落潭無影　雲生山有衣

圓通微妙の德。法界白毫輝く。月落ちて潭に影無く。雲生じて山に衣有り。」

南無觀世音　獨坐倚青岑　願海千尋浪　慈雲萬古心

南無觀世音。獨坐青岑に倚る。願海千尋の浪。慈雲萬古の心。

無雲生嶺上　有月落波心　手眼幾千億　慈光徹古今

無雲嶺上に生じ。有月波心に落つ。手眼幾千億。慈光古今に徹す。

任聖寺戒會中の供養香語――華藏戒寶を聯ぬ。別に是れ一乾坤。賢聖降臨する處。慈光覺園に滿つ。

華藏佳氣動　曙影彩雲垂　鐘磬傳神韻　叢林浴佛慈

華藏佳氣動き。曙影彩雲垂る。鐘磬神韻を傳へ。叢林佛慈に浴す。

春寒猶未去　梵苑盡含霞　法界圓通境　莊嚴美似花

春寒猶ほ未だ去らず。梵苑盡く霞を含む。法界圓通の境。莊嚴花よりも美はし。

### 法音寺戒會

春寒猶未去　利氣動香臺　勿怕風霜襲　桃櫻漏笑來

法音寺戒會――春寒猶ほ未だ去らず。利氣香臺を動かす。風霜の襲ふを怕るゝこと勿れ。桃櫻笑ひを漏らし來る。

### 觀音大士贊　十一首

山現眞如相　溪傳古佛心　普門春色靜　覺苑彩霞深

觀音大士の贊――山は眞如の相を現じ。溪は古佛の心を傳ふ。普門 春 色靜に。覺苑彩霞深し。

聖凡一等接　觸處白毫輝　三冬枯木秀　九夏雪華飛

聖凡一等に接し。觸處に白毫輝く。三冬枯木秀で。九夏雪華飛ぶ。

圓通融五五　眼處了音聞　石聳無根樹　山含不動雲

題大愚良寛道人記念道場

山深雲影簇　月落夢魂孤　欲究機先路　須參老大愚

大愚良寛道人記念道場に題す——山深うして雲影簇がり。月落ちて夢魂孤なり。機先の路を究めんと欲せば。須らく老大愚に參ずべし。

呈丸田倘一郎氏

捧君香一炷　春暮鳥聲悲　覺苑何功德　落花再上枝

丸田倘一郎氏に呈す——君に捧ぐ香一炷。春暮れて鳥聲悲し。覺苑何の功德ぞ。落花再び枝に上る。

雪達磨圖

渾身無熱氣　擧體白皚皚　寒雀禪林在　驀過頂顙來

雪達磨の圖——渾身熱氣無く。擧體白皚皚。寒雀禪林に在り。頂顙を驀過し來る。

呈山田大啓尊師

多年侍法王　隨處聞華藏　拈出遮那印　通身是戒光

山田大啓尊師に呈す——多年法王に侍し。隨處華藏を聞く。拈出す遮那の印。通身是れ戒光。

任聖寺戒會中供養香語　三首

華藏聯戒寶　別是一乾坤　賢聖降臨處　慈光滿覺園

し。何れの日か眞乘に駕せん。

江州曹澤寺法語　二首

暖日消殘雪　春風遶戒臺　洞雲凝不散　和氣漲三才

江州曹澤寺法語――暖日殘雪を消し。春風戒臺を遶る。洞雲凝つて散ぜず。和氣三才に漲る。

太湖三萬頃　滿目彩霞垂　薄暮雲消處　水光一段奇

太湖三萬頃。滿目彩霞垂る。薄暮雲消する處。水光一段奇なり。

彌彦山廣嚴寺戒會法語

春滿華藏界　櫻花彩戒壇　聖凡歸一會　倶蹬妙樓觀

彌彦山廣嚴寺戒會法語――春は華藏界に滿ちて。櫻花戒壇を彩る。聖凡一會に歸し。倶に妙樓觀に蹬る

觀音大士

大悲垂聖影　三十有三身　松栢迎風動　枝枝轉法輪

觀音大士――大悲聖影を垂る。三十有三身。松栢風を迎へて動き。枝枝法輪を轉ず。

呈松浦百英師

渾身廣長舌　觸處捲風雷　開口濺甘露　羣葩花氣薫

松浦百英師に呈す――渾身廣長舌。觸處風雷を捲く。口を開けば甘露を濺ぎ。羣葩花氣薫す。

天籟吹甘露　蟾華哭玉樓　滿盤盛法味　一飽拂千愁

矢野氏の法語――天籟甘露を吹き。蟾華玉樓に哭す。滿盤法味を盛り。一飽千愁を拂はん。

興國寺戒會

明明百草頭　箇箇含明月　拂露仰天涯　一輪懸玉闕

興國寺戒會――明明たる百草頭。箇箇明月を含む。露を拂つて天涯を仰げば。一輪玉闕に懸かる。

凌雲山英林寺戰捷祈禱

磨出凌雲氣　劍光横九霄　外魔窺沒路　一喝斷千妖

凌雲山林英寺戰捷祈禱――磨出す凌雲の氣。劍光九霄に横たはる。外魔窺ふに路沒く。一喝千妖を斷る。

同忠死者追悼

遊戲涅槃路　撥翻生死關　金剛皮肉骨　萬世照三山

同じく忠死者追弔――涅槃の路に遊戲して。生死の關を撥翻す。金剛の皮肉骨。萬世三山を照す。

小川得水老兄見惠玉什和韻呈似

參究深般若　歸崇佛法僧　力微而道遠　何日駕眞乘

小川得水老兄玉什を惠まる和韻して呈似す――深般若を參究し。佛法僧に歸崇す。力微にして而も道遠

踏斷寒山雨　放開興國秋　妙經如是轉　轉轉自悠悠

興國法座祝語――寒山の雨を踏斷し。興國の秋を放開す。妙經如是に轉ず。轉轉自から悠悠。

戰捷祈禱

海東開旭日　萬里照黯雲　水靜遊龍躍　清波漲錦文

戰捷祈禱――海東旭日を開き。萬里黯雲を照す。水靜にして遊龍躍り。清波錦文漲る。

戰死者追弔會　二首

丹心惟報國　一劍掃魔軍　勿道生兼死　松風捲紫雲

戰死者追弔會――丹心惟だ國に報じ。一劍魔軍を掃ふ。道ふ勿れ生と死とを。松風紫雲を捲く。

放身生死外　赤脚走刀山　節義高千古　逍遙向上關

身を生死の外に放つて。赤脚刀山を走る。節義千古に高く。逍遙す向上の關。

龍海上座乞號安以大運之二字

金龍潛巨海　一躍欲朝天　水擊三千里　風輪轉百川

龍海上座號を乞ふ。安するに大運の二字を以てす――金龍巨海に潛む。一躍天に朝せんと欲す。水は擊つ三千里。風輪百川を轉ず。

滴滴總甘露　塵塵盡寶珠　忠魂曾不滅　明月滿西湖

同じく戰死者追弔會——滴滴總べて甘露。塵塵盡く寶珠。忠魂曾て滅びず。明月西湖に滿つ。

賀大榮首座祥雲良瑞

返聞良遂諾　領略瑞巖禪　不犯隆明主　祥雲滿半筵

大榮首座祥雲良瑞を賀す——返聞良く諾を遂げ。領略す瑞巖の禪。隆明の主を犯さず。祥雲半筵に滿つ。

宿大田山龍雲寺

振衣南信野　寄錫大田峰　六字高堂額　長留古佛蹤

大田山龍雲寺に宿す——衣を南信の野に振ひ。錫を大田の峰に寄す。六字高堂の額。長く古佛の蹤を留む。

清水寺檀齋拈香

善根山織錦　功德海湛芳　進步機先路　叢林朶朶香

清水寺檀齋拈香——善根の山は錦を織り。功德の海は芳を湛ふ。步を機先の路に進むれば。叢林朶朶香し。

與國法座祝語

岩松寺戰死者追弔會

七生期報國　一死答天恩　月影無今古　波平水有痕

岩松寺戰死者追弔會——七生報國を期し。一死天恩に答ふ。月影今古無く。波平にして水に痕有り。

昌福寺開山忌法語　耕山堯大和尚

夕吟昌福月　朝嘯萬融雲　耕破三山路　滿庭花氣薫

昌福寺開山忌法語——夕に昌福の月に吟じ。朝に萬融の雲に嘯く。耕破す三山の路。滿庭花氣薫ず。

於見龍寺法正十四世天外賢龍和尚佛事

放身天外路　運步聖賢門　三戰金龍夢　怒濤平地飜

見龍寺に於ける法正十四世天外賢龍和尚の佛事——身を放つ天外の路。步を運ぶ聖賢の門。三戰金龍の夢。怒濤平地に飜へる。

同戰捷祈禱會

武夫提劍起　義氣拂妖氛　喝破清韓月　征衣帶彩雲

同じく見龍寺戰捷祈禱會——武夫劍を提げて起ち。義氣妖氛を拂ふ。喝破す清韓の月。征衣彩雲を帶ぶ。

同戰死者追弔會

驚破す單前の夢。凄風凶音を齎らす。前程飛雪急なり。歩歩安心を護らん。

人生如昨夢　心動奈風旛　餞汝無他語　行持在報恩

人生昨夢の如く。心動風旛を奈せん。汝に餞するに他語無し。行持報恩に在り。

高松山岩村寺完戒上堂

戒花開信樹　覺月耀禪天　鐵馬嘶春郊　泥牛枕草眠

高松山岩村寺完戒上堂――戒花信樹に開き。覺月禪天に耀く。鐵馬春光に嘶き。泥牛草を枕にして眠る。

同大活俊應和尙征忌拈香

山靜戒門聳　花明春色深　高松峰下水　徐奏不絲琴

同じく大活俊應和尙の征忌拈香――山靜かに戒門聳え。花明かに春色深し。高松峰下の水。徐に不絲の琴を奏す。

雪巖轉三和尙徒俗名鈴木金次請法號安以巖松說三之四字

喚應元一舌　一舌說三三　巖上松千尺　翠影落深潭

雪巖轉三和尙の徒俗名鈴木金次法號を請ふ安するに巖松說三の四字を以てす――喚と應と元と一舌。一舌三三を說く。巖上の松千尺。翠影深潭に落つ。

化門開不二　逢着老維摩　院靜禪心密　溪長道味多

宗福精舍に宿して肥田野居士に相見す——化門不二を開き。逢着す老維摩。院靜にして禪心密に。溪長くして道味多し。

秋晩浴湯澤

停錫浴靈泉　身閑骨欲仙　此中無俗氣　雲影與人眠

秋晩湯澤に浴す——錫を停めて靈泉に浴し。身閑にして骨仙ならんと欲す。此中俗氣無く。雲影人と眠る。

成　道　忌

眼裏花消盡　星光閃九天　金城千尺雪　猶吐昔時烟

成道忌——眼裏花消え盡くし。星光九天に閃く。金城千尺の雪。猶ほ昔時の烟を吐く。

一月三十一日鷹照賢明子接師僧遷化之訃電歸鄉　三　首

明子將辭我　不知何日歸　銕腸猶寸斷　血涙滴禪衣

一月三十一日鷹照賢明子師僧遷化の訃電に接し歸鄉す——明子將に我を辭せんとす。知らず何れの日にか歸る。銕腸猶ほ寸斷。血涙禪衣に滴る。

驚破單前夢　淒風齎凶音　前程飛雪急　步步護安心

賀道龍圓準禪師初轉法輪代作

一杖離生滅　幢竿聳半空　人天之大範　明月又淸風

道龍圓準禪師の初轉法輪を賀するの代作――一杖生滅を離れ。幢竿半空に聳ゆ。人天の大範。明月又淸風。

羅漢尊者贊　二首

朝遊南嶽雲　暮戲天台月　護法又安人　香霧漲仙窟

羅漢尊者の贊――朝には南嶽の雲に遊び。暮には天台の月に戲る。法を護り又た人を安んず。香霧仙窟に漲る。

稽首大羅漢　人天百福田　波淸和合海　明月滿春船

稽首す大羅漢。人天百福田。波は淸し和合の海。明月春船に滿つ。」

楳月常春大姉懺法會拈香

微風淌宿熱　涓滴濕塵沙　松奏無生曲　蓮開上品花

楳月常春大姉懺法會拈香――微風宿熱を淌ひ。涓滴沙塵を濕す。松は無生の曲を奏し。蓮は上品の花を開く。

宿宗福精舍相見肥田野居士

夜夜圓通月　觀來不染心　影透疎竹外　地上散黃金

暮に觀世音を念ず――夜夜圓通の月。觀來る不染の心。影は疎竹の外に透り。地上黃金を散ず。

## 念念從心起

念念從心起　頭頭坐道場　有時山水住　山水總家鄉

念念心より起る――念念心より起り。頭頭道場に坐す。時有つて山水に住す。山水總て家鄉。

## 念念不離心

念念不離心　心心觀世音　入流返照去　源妙不須尋

念念心を離れず――念念心を離れず。心心觀世音。流れを入して返照し去れば。源妙尋ぬるを須ゐず。

## 示學人

休傳耳口學　切忌傚他顰　若欲功名美　須斯實際人

學人に示す――傳ふることを休めよ耳口の學。切に忌む他の顰に傚ふことを。若し功名の美を欲せば。須く斯れ實際の人たるべし。

## 除夜

人世電光裏　光陰草露間　百憂燈下客　一快鬧中閒

除夜――人世は電光の裏。光陰は草露の間。百憂燈下の客。一に鬧中の閒を快ぶ。

佛法相緣

湛水生高浪　相緣竟不離　擧頭望海嶽　常日但如斯

佛法相緣る——水を湛へて高浪を生じ。相緣つて竟に離れず。頭を擧げて海嶽を望めば。常日但だ斯くの如し。

常樂我情

溪奏無絃曲　山呈不變身　見聞歡樂足　無酒氣常春

常に我が情を樂む——溪は無絃の曲を奏し。山は不變の身を呈す。見聞歡樂足り。酒無きも氣常に春なり。

朝念觀世音

天明迎旭日　設拜打山鐘　胸裏忘生滅　風廻巖下松

朝に觀世音を念ず——天明旭日を迎へ。拜を設けて山鐘を打つ。胸裏生滅を忘れ。風巖下の松を廻る。

暮念觀世音

徑雲を招いで爽氣新なり。隻手の妙音無聽の聽。溪聲鳥語代つて眞を談す。

賀英岳賢道第一座

月桂峰頭浴異光　鶴山深處護雲堂　既藏龍室參千佛　忽穿松關占半床　物外風流誰薦取　機先活計獨承當
他時擔荷宗乘去　冀爲人天振祖綱

英岳賢道第一座を賀す――月桂峰頭異光に浴し。鶴山深き處雲堂を護る。既に龍室を藏いて千佛に參じ。忽ち松關を穿つて半床を占む。物外の風流誰か薦取す。機先の活計獨承當す。他時宗乘を擔荷し去り。冀くば人天の爲めに祖綱を振へ。

寒泉映徹靈山月　天水交輝放淨光

大綱宗純禪匠が補陀寶刹に視篆するを祝す——教綱提げ來つて大綱を統べ。金晶臺裏德彌〻昌なり。久しく耕す諸嶽の閑田地。忽ち上る補陀の古道場。純一の宗風須らく振起すべし。幾千の公案宣揚に好し。寒泉映徹す靈山の月。天水輝を交へて淨光を放つ。

賀本山首座巍岳實英具壽

夙入龍源探九淵　更參諸嶽弄風烟　雲堂既占安居地　法界堪招祖域賢　白字溪頭波拍岸　放光臺畔月懸天
眞參實究家常事　英氣唯當起祖禪

本山首座巍岳實英具壽を賀す——夙に龍源に入つ九淵を探り。更に諸嶽に參じて風烟を弄す。雲堂既に占む安居の地。法界招ぐに堪へたり祖域の賢。白字溪頭波岸を拍ち。放光臺畔月天に懸る。眞參實究は家常の事。英氣唯當に祖禪を起すべし。

宿林昌精舍謝山主之道誼

林昌境靜地無塵　中有衲僧轉法輪　歡我駐笻禪骨穩　謝君倒履道情親　五峰擎月秋容麗　三徑招雲爽氣新
隻手妙音無聽聽　溪聲鳥語代談眞

林昌精舍に宿して山主の道誼を謝す——林昌の境靜にして地に塵無く。中に衲僧有り法輪を轉ず。歡ぶ我が笻を駐めて禪骨穩なるを。謝す君が履を倒にす道情の親しきを。五峰月を擎げて秋容麗しく。三

功は功を忘るゝに到つて智益〻圓かなり。珍重す東林垂手の力。三冬拈弄す火中の蓮。

賀東光寺法雲泰倫和尙初轉法輪

卓錫東光最上層　孤峰不許客塵登　忽翻法旆通玄路　更啓戒壇挑祖燈　海月山雲従白拂　巖猿野鶴擁烏藤
九旬踞斷空王座　複嶂重溪擧佛乘

東光寺法雲泰倫和尙の初轉法輪を賀す――錫を卓す東光の最上層。孤峰許さず客塵の登るを。忽ち法旆を飜して玄路を通じ。更に戒壇を啓いて祖燈を挑ぐ。海月山雲白拂に從ひ。巖猿野鶴烏藤を擁す。九旬踞斷す空王の座。複嶂重溪佛乘を擧ぐ。

賀觀法泰山具壽首版于岩松堂中

諦觀正法芥投針　占取岩松半座秋　慣跡先賢行不退　傾心古佛道無休　九旬風月超三界　一洞乾坤鎖六幽
今後彌磨精進力　吳雲蜀水打優遊

觀法泰山具壽が岩松堂中に首版たるを賀す――正法を諦觀して芥に針を投じ。占取す岩松半座の秋。跡を先賢に慣うて行じて退かず。心を古佛に傾けて道休する無し。九旬の風月三界を超え。一洞の乾坤六幽を鎖す。今後彌〻精進の力を磨して。吳雲蜀水優遊を打すべし。

祝大綱宗純禪匠視篆於補陀寶刹

教綱提來統大綱　金晶臺裏德彌昌　久耕諸嶽閒田地　忽上補陀古道場　純一宗風須振起　幾千公案好宣揚

鶴質松心淸福足　江風山月樂無邊

鐸木大人の金婚式を祝す——鴛鴦一たび良緣を結んでより。琴瑟和し來る五十年。經世の偉勳人德を頌し。齊家の淑範世賢と推す。幽庭膝を繞る皆な蘭桂。賀宴觴を揚ぐ悉く壽仙。鶴質松心淸福足り。江風山月樂み邊り無し。

大正辛酉一月被諸嶽山後董請賦感

自愧頂門眼未開　豈圖忽負重擔來　鶴灣春淺霜侵座　越嶺星稀雲鎖臺　幸爲脚跟無向背　乃知心地免塵埃
祖恩洪大宗恩厚　多少感懷付鐵梅

大正辛酉一月諸嶽山後董の請を被り感を賦す——自から愧づ頂門の眼未だ開かざるを。豈に圖らんや忽ち重擔を負ひ來る。鶴灣春淺うして霜座を侵し。越嶺星稀にして雲臺を鎖す。幸に脚跟向背無きが爲めに。乃ち知る心地の塵埃を免るゝを。祖恩洪大にして宗恩厚し。多少の感懷鐵梅に付す。

恭祝大泉堂頭無學老兄轉大法輪

親參眞諦吉祥禪　截斷衆流坐大泉　忽竪法幢通祖道　又開戒殿恢宗傳　學歸無學機彌活　功到忘功智益圓
珍重東林垂手力　三冬拈弄火中蓮

恭しく大泉堂頭無學老兄の轉大法輪を祝す——親しく眞諦吉祥の禪に參じ。衆流を截斷して大泉に坐す。忽ち法幢を竪てゝ祖道を通じ。又た戒殿を開いて宗傳を恢うす。學は學無きに歸して機彌々活し。

大正九年十一月淨春堂頭轉如宗師建立法幢尋莊嚴尸羅會龍象趨風人天歡喜仍賦此恭伸祝賀之意

圓覺伽藍他自靈　曇華現瑞淨春庭　杖頭開盡參玄路　槌下轉囘如是經　秋滿勝鬘敷錦繡　月輝雲閣繞珠屏
網羅相映禪兼戒　一法界中心境冥

大正九年十一月淨春堂頭轉如宗師法幢を建立し尋で尸羅會を莊嚴し龍象風に趨り人天歡喜す。仍て此を賦し恭しく祝賛の意を伸ぶ――圓覺の伽藍他自の靈。曇華瑞を現す淨春の庭。杖頭開き盡す參玄の路。鎚下に轉囘す如是の經。秋は勝鬘に滿ちて錦繡を敷き。月は雲閣を輝して珠屏を繞る。網羅相映ず禪と戒と。一法界中心境冥なり。

恭祝光照堂頭榮淳宗師建法幢

眞淳行業德彌榮　不怪宗光照覺城　修道敷仁君子志　安人護國衲僧情　法幢高竪香風動　福地偏由慈手耕
瑞氣雲鍾獅子座　堪看龍象趨幽閎

恭しく光照堂頭榮淳宗師の建法幢を祝す――眞淳の行業德彌〻榮え。怪まず宗光覺城を照すを。道を修め仁を敷く君子の志。人を安んじ國を護る衲僧の情。法幢高く香風に竪つて動き。福地偏に慈手に由つて耕す。瑞氣雲のごとく獅子座に鍾り。看るに堪へたり龍象幽閎に趨るを。

祝鐸木大人金婚式

鴛鴦一自結良緣　琴瑟和來五十年　經世偉勳人頌德　齊家淑範世推賢　幽庭繞膝皆蘭桂　賀室揚觴悉詩仙

龍松山養泉寺入佛授戒會――佛殿香閣珠網連り。龍松の影は蓋ふ勢陽の天。風は花雨を吹いて靈境に灑ぎ。月は檀雲に映じて福田を護る。法皷響く時定窟を開き。戒門高き處玄泉を養ふ。此場直に是れ曹溪の會。曉磬暮鐘皆な禪を說く。

恭祝瑞雲山歡喜寺主董梁山大棟宗師轉法輪

廣大化門融古今　全提正令芥投針　一會圓成歡喜地　九旬嚴飾吉祥林　瑞雲垂影灌甘露　皎月分光照翠岑
禪刹棟梁神通在　山色溪聲傳佛心

恭しく瑞雲山歡喜寺主董梁山大棟宗師の轉法輪を祝す――廣大の化門古今を融じ。正令を全提して芥に針を投ず。一會圓成す歡喜の地。九旬嚴飾す吉祥林。瑞雲影を垂れて甘露を灌ぎ。皎月光を分ちて翠岑を照らす。禪刹の棟梁神通在り。山色溪聲佛心を傳ふ。

恭祝常林堂頭大徹覺道宗師轉法輪

會弄華藏春色來　常林密處坐仙臺　已以圓覺爲禪座　好接大機養道胎　三島乾坤歸一會　九旬風月照孱嵬
雲間瞥見芙蓉影　八面玲瓏徹牖開

恭しく常林堂頭大徹覺道宗師の轉法輪を祝す――曾て華藏の春色を弄し來り。常林密なる處仙臺に坐す。已に圓覺を以て禪座と爲し。好く大機を接して道胎を養ふ。三島の乾坤一會に歸し。九旬の風月孱嵬を照らす。雲間瞥見す芙蓉の影。八面玲瓏牖に徹して開く。

恭賀宗福堂頭普价良觀老宗師轉法輪

曾向虛空驅鐵乘　叢林密處續宗燈　九旬宗風禪機活　一會乾坤道念澄　龍象接踵趨法座　水雲交影擁烏藤
吉峰諸嶽無量瑞　收在寶珠最上層

恭しく宗福堂頭普价良觀老宗師の轉法輪を賀す——曾て虛空に向つて鐵乘を驅り。叢林密なる處宗燈を續ぐ。九旬の宗風禪機活し。一會の乾坤道念澄む。龍象踵を接して法座に趨り。水雲影を交へて烏藤を擁す。吉峰諸嶽無量の瑞。收めて寶珠の最上層に在り。

龍源主董法雲宗師擧晋山式更啓建尸羅會賦此祝賀

嵐容黛色挾中津　坐斷龍源拂熱塵　深見曹溪千岳瑞　遠探少室一華春　開正法窟招緇素　泛大慈船融主賓
好弄中秋明月影　白雲閒處轉光輪

龍源主董法雲宗師晋山式を擧げ更に尸羅會を啓建す。此を賦して祝贊す——嵐容黛色中津を挾み。龍源を坐斷して熱塵を拂ふ。深く見る曹溪千岳の瑞。遠く探る少室一華の春。正法の窟を開いて緇素を招き。大慈の船を泛べて主賓を融ず。好し中秋明月の影を弄して。白雲閒なる處光輪を轉ぜん。

龍松山養泉寺入佛授戒會

佛殿香閣珠網連　龍松影蓋勢陽天　風吹花雨濺靈境　月映檀雲護福田　法鼓響時開定窟　戒門高處養玄泉
此場直是曹溪會　曉磬暮鐘皆說禪

恭しく通月山滿光堂頭寶道宗師の建法幢を祝す——大峰向上の禪に參飽して。法幢高く竪つ滿光の筵。雲を披いて拈弄す圓通の月。浪を劈いて操縱す般若の船。既に三乘を統べて至道に歸し。好し一實を以て機緣を接するに。九旬の消息人知るや否や。明鏡臺に當つて照鑑鮮なり。

恭祝寶泉堂頭大活隆禪宗師轉大法輪

親參安樂吉祥禪　獨駕玉龍入寶泉　高竪法幢行正令　不開戒殿攝人天　九旬風月超三界　百億乾坤擔一肩
現出祇園眞面目　未曾向耳口遍傳

恭しく寶泉堂頭大活隆禪宗師の轉大法輪を祝す——安樂吉祥の禪に親參し。獨り玉龍に駕して寶泉に入る。高く法幢を竪てゝ正令を行じ。戒殿を不開して人天を攝す。九旬の風月三界を超え。百億の乾坤一肩に擔ふ。祇園の眞面目を現出し。未だ曾て耳口に向つて遍ねく傳へず。

恭祝光傳主盟琢定宗師建法幢

曾投禪海搜龍珠　傳得靈光照暗衢　溪室月開圓覺眼　米峰雲護沒量軀　一堂賢聖圍獅座　九夏乾坤入玉壺
劫外春風吹不盡　仰看瑞靄蓋江湖

恭しく光傳主盟琢定宗師の建法幢を祝す——曾て禪海に投じて龍珠を搜り。靈光を傳へ得て暗衢を照らす。溪室の月は開く圓覺の眼。米峰の雲は護る沒量の軀。一堂の賢聖獅座を圍み。九夏の乾坤玉壺に入る。劫外の春風吹いて盡きず。仰ぎ看る瑞靄の江湖を蓋ふを。

恭祝梅梢山靈源寺孝如宗師轉法輪

慈孝發揮如實門　靈源一滴定乾坤　少林霞自梅梢動　鷲嶺雲於竹外屯　已有龍象圍法座　豈無鸞鳳護香爐
主中賓與賓中主　兩鏡交光道獨尊

恭しく梅梢山靈源寺孝如宗師の轉法輪を祝す——慈孝發揮す如實の門。靈源の一滴乾坤を定む。少林の霞は梅梢より動き。鷲嶺の雲は竹外より屯す。已に龍象の法座を圍む有り。豈に鸞鳳の香爐を護る無からんや。主中の賓と賓中の主と。兩鏡光を交へて道獨り尊し。

祝雙善堂頭道菴宗師初轉法輪

大丈夫兒運願輪　忽看枯木挽回春　莊嚴福慧完雙善　策進知行了一眞　愛國盡忠專報德　扶宗護法獨安神
九旬開得靈山會　三島深歡有此人

雙善堂頭道菴宗師の初轉法輪を祝す——大丈夫兒願輪を運し。忽ち看る枯木春を挽回するを。福慧を莊嚴して雙善を完うし。知行を策進して一眞を了ず。愛國盡忠專ら德に報い。扶宗護法獨り神を安んず。九旬開き得たり靈山の會。三島深く歡ぶ此人有るを。

恭祝通月山滿光堂頭實道宗師建法幢

參飽大峰向上禪　法幢高竪滿光筵　披雲拈弄圓通月　劈浪操縱般若船　既統三歸歸至道　好以一實接機緣
九旬消息人知否　明鏡當臺照鑑鮮

恭しく龍雲山興泉寺堂頭梅菴一華宗師の轉法輪を賀す——禹門一躍す浪三層。龍雲を得る時威氣騰る。愛根を截斷して孝順を成し。心地を耕耘して眞乘に上る。巖松月を帶ぶ光明聚。泉石霞を籠む賢聖僧。寶鏡圓臺春日を返し。老梅菴裏露華凝る。

恭祝鎌秀主盟泰堂宗師建法幢

頴脱靈機難覆藏　赤旛之下吐鋒鋩　金鶏唱曉楞伽室　玉鳳啣花般若臺　霜滿少林秋氣爽　月輝鷲嶺露華香
雅懷泰運無倫匹　文永峰頭話柄長

恭しく鎌秀主盟泰堂宗師の建法幢を祝す——頴脱の靈機覆藏し難く。赤旛の下鋒鋩を吐く。金鶏曉を唱ふ楞伽の室。玉鳳花を啣む般若臺。霜は少林に滿ちて秋氣爽に。月は鷲嶺に輝いて露華香し。雅懷泰運倫匹無く。文永峰頭話柄長し。

賀雲洞第一座大運龍海具壽登龍門

探盡龍泉物外區　分明捜得夜光珠　雲圍半座兎懷夢　月照雙肩鵲護雛　疊翠金城表覺道　横烟魚水隔塵衢
期汝汲取菩提海　大運神通潤五湖

雲洞第一座大運龍海具壽の登龍門を賀す——探盡す龍泉物外の區。分明に捜し得たり夜光の珠。雲は半座を圍んで兎夢を懷き。月は雙肩を照して鵲雛を護る。翠を疊む金城覺道を表し。烟を横ふ魚水塵衢を隔つ。期す汝が菩提海を汲取して。大いに神通運んで五湖を潤すを。

### 祝杉本道山老師喜壽

鐵石心腸物外身　衲衣未觸世間塵　禪觀常占眞如室　道骨笑迎喜壽春　不盡乾坤誰是主　無邊風月自來賓
雄峰別有長生訣　枯木龍吟曲入神

杉本道山老師の喜壽を祝す――鐵石の心腸物外の身。衲衣未だ觸れず世間の塵。禪觀常に占む眞如の室。道骨笑つて迎ふ喜壽の春。不盡の乾坤誰れか是れ主。無邊の風月自から來賓。雄峰別に長生の訣有り。枯木龍吟曲神に入る。

### 賀現寶鏡鈴木天山師六十

齡迎華甲曆茲還　一片願行身未閒　卓爾游神根境外　悠然振錫水雲間　傘松擁座風常爽　寶鏡當臺影自斑
珍重老兄長壽訣　禪天覺地靜於山

現寶鏡鈴木天山師の六十を賀す――齡は華甲を迎へて曆茲に還る。一片の願行身未だ閒ならず。卓爾神を游ばす根境の外。悠然錫を振ふ水雲の間。傘松座を擁して風常に爽かに。寶鏡臺に當つて影自から斑し。珍重す老兄長壽の訣。禪天覺地山よりも靜なり。

### 恭賀龍雲山興泉寺堂頭梅菴一華宗師轉法輪

禹門一躍浪三層　龍得雲時威氣騰　截斷愛根成孝順　耕耘心地上眞乘　巖松帶月光明聚　泉石籠霞賢聖僧
寶鏡圓臺春返日　老梅菴裏露華凝

寶珠院祖覺鐵眞師の轉法輪を祝す――性空心月の光に觸着して。寶珠影裏淸涼を占む。天龍瑞を現す安居の地。瑞鳳霞を散ず圓覺塲。佛祖相携へて戒殿に臨み。人天踊躍して禪床を繞る。道人更に丹青の筆有り。水石江山無盡藏。

次武石貞松詞宗見寄韻

空手去兮空手歸　雲遊萬里逐烟霏　太平洋上馳詩思　白堊館前振衲衣　世道荒寥無力濟　法燈明滅孰添輝
杖頭頗有江山在　不恨異鄉知己稀

武石貞松詞宗が寄せらるゝの韻を次ぐ――空手にして去り空手にして歸る。雲遊萬里烟霏を逐ふ。太平洋上詩思を馳せ。白堊館前衲衣を振ふ。世道荒寥力の濟ふ無く。法燈明滅孰れか輝を添はん。杖頭頗に江山の在る有り。恨まず異鄉知己の稀なるを。

次丸田等觀氏賚韻

三松不變歲寒姿　慙我數旬閉講帷　化杖未追溪水去　吟胸獨與海雲披　敎程縱背烟霞約　禪榻豈妨風月隨
黃鳥窺窗親問訊　晨朝點誦法華時

丸田等觀氏の賚韻を次ぐ――三松變ぜず歲寒の姿。慙づ我が數旬講帷を閉づるを。化杖未だ溪水を追うて去らず。吟胸獨り海雲と與に披く。敎程縱ひ烟霞の約に背くも。禪榻豈に風月の隨ふを妨げん。黃鳥窗を窺うて親しく問訊す。晨朝法華を點誦するの時。

## 堡府滯錫

錫影含潮渡太洋　法旛高竪布哇鄕　嘶風木馬來昇座　吼月石龍趨侍床　瑞霧祥雲春不老　甲山乙水夏猶涼
三千里外多知己　花氣薫裕室自香

堡府滯錫——錫影潮を含むで太洋を渡り。法旛高く竪つ布哇の鄕。風に嘶くの木馬來つて座に昇り。月に吼ゆるの石龍趨つて床に侍す。瑞霧祥雲春老いず。甲山乙水夏猶ほ涼し。三千里外知己多く。花氣裕に薫じて室自から香し。

## 拿亞努崖探勝

快車攀嶮上崔嵬　停杖天成展望臺　峭壁抱雲高蔽日　烈風飛石響疑雷　孤帆遠逐烟波去　幽鳥近尋蔬圃來
不盡乾坤無限興　禪心詩趣一時開

拿亞努崖探勝——快車嶮を攀ぢて崔嵬を上り。杖を停む天成の展望臺。峭壁雲を抱いて高く日を蔽ひ。烈風石を飛ばして響雷を疑ふ。孤帆遠く烟波を逐うて去り。幽鳥近く蔬圃を尋ねて來る。不盡の乾坤無限の興。禪心詩趣一時に開く。

## 祝寶珠院祖覺鐵眞師轉法輪

觸着性空心月光　寶珠影裏占淸涼　天龍現瑞安居地　瑞鳳散霞圓覺場　佛祖相携臨戒殿　人天踊躍繞禪床
道人更有丹靑筆　水石江山無盡藏

吉祥山に上る——曉快車を駈つて祖關に入る。樓臺影を垂れて溪澗に聳ゆ。何ぞ妨げん春雨の仙徑に濺ぐを。最も愛す香雲世寰を隔つるを。流水の曲は長し傘松閣。老櫻の花は鎖す吉祥山。晩來鐘磬の聲幽なる處。一隊の飛禽塔を望んで還る。

弔伊澤尾山氏

講學依仁五十年　行藏用捨則先賢　誨人不倦唯崇德　樂道忘憂獨伴仙　文海洋洋飜玉浪　尾山屹屹罩祥烟
靈光不隔幽明境　餘韻長薰北越天

伊澤尾山氏を弔ふ——學を講じ仁に依る五十年。行藏用捨先賢に則る。人を誨へて倦まず唯だ德を崇び。道を樂んで憂を忘れ獨り仙を伴ふ。文海洋洋として玉浪を飜へし。尾山屹屹として祥烟を罩む。靈光隔てず幽明の境。餘韻長く薰ず北越の天。

次高橋竹迷氏餞詞韻

濱港埠頭上鐵船　大洋東望水連天　神龍駕霧衝風浪　鷗鳥隨潮掠汽烟　三島十洲無異域　九山八海也家田
觀來法界恁麼濶　佛日何唯照大千

高橋竹迷氏が餞詞の韻を次ぐ——濱港埠頭鐵船に上り。大洋東を望めば水天に連なる。神龍霧に駕して風浪を衝き。鷗鳥潮に隨つて汽烟を掠む。三島十洲異域無く。九山八海也た家田。觀じ來れば法界恁麼に濶し。佛日何ぞ唯だ大千を照すのみならんや。

賀等觀居士銀婚式

琴瑟宣情廿五春　天祥地瑞自隨身　篤行文藻期修德　孝順端操克守眞　吟榻既存禪界趣　紗窗豈惹世間塵　慶雲繞座芝蘭室　福壽長歸和樂人

等觀居士の銀婚式を賀す——琴瑟情を宣ぶ廿五春。天祥地瑞自から身に隨ふ。篤行文藻期して德を修め。孝順端操克く眞を守る。吟榻既に存す禪界の趣。紗窗豈に世間の塵を惹かん。慶雲座を繞る芝蘭の室。福壽は長く和樂の人に歸す。

祝名古屋前禪芳門內大英師古稀

積功累德倣先賢　釣月耕雲七十年　多劫願行弘祖道　一生熱血奉金仙　吉峰霞繞華巖頂　少室月輝護國筵　法壽與芥城沒盡　仁王臺畔瑞光鮮

名古屋前禪芳門內大英師の古稀を祝す——積功累德先賢に倣ひ。釣月耕雲七十年。多劫の願行祖道を弘め。一生の熱血金仙に奉ず。吉峰の霞は繞る華巖の頂。少室の月は輝く護國の筵。法壽は芥城と盡ることなく。仁王臺畔瑞光鮮なり。

上吉祥山

曉駈快車入祖關　樓臺垂影聳溪間　何妨春雨濺仙徑　最愛香雲隔世寰　流水曲長傘松閣　老櫻花鎖吉祥山　晩來鐘磬聲幽處　一隊飛禽望塔還

古川碓悟師の名古屋幼年學校教頭に榮轉するを祝す――跡を盧公に慣ふ舂碓の房。磨精究粹玄綱を悟る。東西の學術心鏡を鑑らし。梵漢の秘文智嚢に收む。布化育英身益〻健かに。啓蒙垂教志彌〻強なり。豈に唯だ筆舌眞理を宣ぶるのみならんや。觸處不開す活道場。

祝石松山永福菴文山義臺和尚建法幢

夙入金城坐石床　今昇永福振玄綱　九旬開盡菩提座　一會莊嚴圓覺城　空手臨機揮智劍　全機接衆啓華藏
恁麼人打恁麼事　聞見無非大吉祥

石松山永福菴文山義臺和尚の建法幢を祝す――夙に金城に入つて石床に坐し。今永福に昇つて玄綱を振ふ。九旬開盡す菩提の座。一念莊嚴す圓覺城。空手機に臨んで智劍を揮ひ。全機衆を接して華藏を啓く。恁麼の人は打す恁麼の事。聞見大吉祥に非ざるはなし。

祝春日野歡喜寺鐵牛師晉山

千千手眼仰彌高　建化門頭樹偉功　白拂揮來歡喜地　烏藤卓去覺王宮　秋涵碧落雲藏影　月照烟波玉散風
屋裏靈牛身鑄鐵　崢嶸頭角勢衝空

春日野歡喜寺鐵牛師の晉山を祝す――千千の手眼仰いで彌〻高く。建化門頭偉功を樹つ。白拂揮ひ來たる歡喜の地。烏藤卓し去る覺王宮。秋は碧落を涵して雲影を藏め。月は烟波を照して玉風を散ず。屋裏の靈牛身は鐵を鑄し。崢嶸たる頭角勢天を衝く。

賀最乘寺首座雲嶺居道具壽

雲外遙望雪嶺天　飜身忽上大雄巓　安居有道行持密　明鏡無塵鑑照圓　深鎖六窓時對月　高通一洞好觀泉
寒單七尺篦三尺　敲唱吉祥安樂禪

最乘寺首座雲嶺居道具壽を賀す——雲外遙に望む雪嶺の天。身を飜へして忽ち上る大雄の巓。安居道有り行持密に。明鏡塵無く鑑照圓なり。深く六窓を鎖して時に月に對し。高く一洞に通じて好し泉を觀る。寒單七尺篦三尺。敲唱す吉祥安樂の禪。

祝觀音山慈眼院佛天愼瑞轉法輪

一條椎杖定乾坤　慈眼堂中竪法旛　鷲嶺烟霞籠笏室　吉峰風月滿禪園　追攀楷祖安居跡　開破觀音入理門
誰識佛天奇特事　須彌頂上怒濤飜

觀音山慈眼院佛天愼瑞の轉法輪を祝す——一條の椎杖乾坤を定め。慈眼堂中法旛を竪つ。鷲嶺の烟霞は笏室を籠め。吉峰の風月は禪園に滿つ。追攀す楷祖安居の跡。開破す觀音入理の門。誰か識らん佛天奇特の事。須彌頂上に怒濤飜へる。

祝古川碓悟師榮轉名古屋幼年學校教頭

慣跡盧公舂碓房　磨精究粹悟玄綱　東西學術鑑心鏡　梵漢秘文收智嚢　布化育英身益健　啓蒙垂教志彌强
豈唯筆舌宣眞理　徧處不開活道場

出山釋迦像――鵲巣蛛網六たび春を經て。威德莊嚴す丈六の身。一點の星光隻眼を穿ち。千峰の雲影孤巾を護る。未だ寸歩を移さずして寰海に遊び。舌頭を動さずして法輪を轉ず。相見了や相見了。山を出づるの人は是れ山に入るの人。

送神戸丹下良太郞君之米國

大丈夫兒志氣雄　渾身熱血是誠忠　探彼米國文明髓　資我神州濟美風　鐵脚踏飜邦遠近　智眸顧鑑海西東　此行豈爲翫山水　將廣見聞期奉公

神戸の丹下良太郞君が米國に之くを送る――大丈夫兒志氣雄に。渾身の熱血是れ誠忠。彼の米國文明の髓を探り。我が神州濟美の風に資す。鐵脚踏飜す邦の遠近。智眸顧鑑す海の東西。此行豈に山水を翫ぶ爲めならんや。將に見聞を廣うして奉公を期す。

祝釧路山定光寺古峰英仙師轉法輪

探得禪源遊學堂　掬來飽喫古溪香　高飜法旆震釧路　不啓華藏放定光　山色朝呈如是法　潮音夕打活商量　大圓鏡裏無遺照　無盡燈挑北海鄕

釧路山定光寺古峰英仙師の轉法輪を祝す――禪源を探り得て學堂に遊び。掬し來つて飽喫す古溪の香。高く法旆を飜へして釧路を震ひ。華藏を不啓して定光を放つ。山色朝に呈す如是の法。潮音夕に打す活商量。大圓鏡裏遺照無く。無盡燈は挑ぐ北海の鄕。

### 壽竹山香山翁七十七壽詞

渾身正氣老彌堅　友月朋雲養浩然　塵外占來三逕樂　閑中坐斷一乘禪　心虛涼動臨軒竹　志潔香浮出水蓮
孔聖有言仁者壽　斯翁宛是活神仙

竹山香山翁が七十七の壽詞――渾身の正氣老いて彌ゝ堅く。月を友とし雲を朋として浩然を養ふ。塵外占め來る三逕の樂。閑中坐斷す一乘の禪。心虛にして涼は動く軒に臨むの竹。志潔うして香は浮ぶ水を出づるの蓮。孔聖言有り仁者は壽なりと。斯翁宛も是れ活神仙。

### 呈井上圓了博士

破邪顯正暫無休　學海多年放慧舟　涉獵和洋探妙諦　圓融眞俗闡玄猷　眼光射透三千界　足跡充塡五大洲
掃蕩妖雲通活路　終身一志度迷流

井上圓了博士に呈す――邪を破り正を顯して暫も休むこと無く。學海多年慧舟を放つ。和洋を涉獵して妙諦を探り。眞俗を圓融して玄猷を闡く。眼光射透す三千界。足跡充塡す五大洲。妖雲を掃蕩して活路を通じ。終身志を一にして迷流を度す。

### 出山釋迦像

鵲巢蛛網六經春　威德莊嚴丈六身　一點星光穿隻眼　千峰雲影護孤巾　未移寸步遊寰海　不動舌頭轉法輪
相見了兮相見了　出山人是入山人

道龍圓準禪師の初轉法輪を賀するの偈——曾つて中島に登つて機鋒を露はし。唱へ起す峩雲嫡子の宗。德雨忽ち灑ぐ醫匠の窟。法輪圓に轉ず富双の峯。風旛月を動かし鸞鳳を飛ばし。烟艇流に棹さして臥龍を驚かす。誰か識らん金剛堂上の主。江湖の妙味獨り胸に藏す。

賀親應養麟首座八字之榮偈

金生麗水玉崑岡　剛毅莊嚴八字堂　首陽持節磨心鏡　座右垂綸歛智囊　親弄好風遊富嶺　廣挑霽月照東洋
養來佛祖浩然氣　麟角鳳毛兩有香

親應養麟首座八字之榮を賀するの偈——金は麗水に生じ玉は崑岡。剛毅莊嚴す八字の堂。首陽節を持して心鏡を磨し。座右綸を垂れて智囊を歛む。親しく好風を弄んで富嶺に遊び。廣く霽月挑げて東洋を照す。佛祖浩然の氣を養ひ來つて。麟角鳳毛兩ながら香有り。

祝秦慧昭老師鶯遷于丹州智源寺

德不孤兮必有鄰　智源深喜得其人　祖山留錫迎鸞鳳　禪海浮舟接錦鱗　籌室旣收嵩岳瑞　松溪忽現祇園春
燒香遙祝開堂會　滿地曇華影轉新

秦慧昭老師が丹州智源寺に鶯遷するを祝す——德孤ならず必ず鄰有り。智源深く喜ぶ其人を得たるを。祖山に錫を留めて鸞鳳を迎へ。禪海に舟を浮べて錦鱗を接す。籌室旣に收む嵩岳の瑞。松溪忽ち現ず祇園の春。香を燒いて遙に祝す開堂の會。滿地の曇華影轉た新なり。

與岡崎覺翁禪將

學道當期賑覺園　乃翁消息至今存　瘦梅立雪凌寒苦　黃鳥和霞出谷門　忍耐能成勳業本　恭謙正是德行源
請看趙老參方眼　一志以堪報佛恩

岡崎覺翁禪將に與ふ——覺道當に期すべし覺園を賑はすを。乃翁の消息今に至つて存す。瘦梅雪に立ちて寒苦を凌ぎ。黃鳥霞に和して谷門に出づ。忍耐能く成す勳業の本。恭謙正に是れ德行の源。請ふ看よ趙老の方眼に參ずるを。一志以つて佛恩に報ずるに堪へたり。

明治廿年冬賀淨春首座輝山本光師偈

本來一段大光明　曾在輝山頂上淸　學洞玄微功已熟　德兼文質道方成　三千淨氣通堂奧　五葉春風滿化城
不二門中分座客　堪聞默室發雷聲

明治廿年の冬淨春首座輝山本光師を賀するの偈——本來一段の大光明。曾て輝山頂上に在つて淸し。學は玄微に洞つて功已に熟し。德は文質を兼ねて道方に成る、三千の淨氣堂奧に通じ。五葉の春風化城に滿つ。不二門中分座の客。聞くに堪へたり默室雷聲を發するを。

賀道龍圓準禪師初轉法輪偈

曾登中島露機鋒　唱起嶷雲嫡子宗　德雨忽霑醫匠宿　法輪圓轉富双峯　風旛動月飛鸞鳳　烟艇掉流驚臥龍
誰識金剛堂上主　江湖妙味獨藏胸

賀寶國周道老禪轉法輪

肘懸國寶殿中瑛　龍澤那邊弄眼睛　雲擁鹿園三草潤　月輝少室百川清　任身教育廣時勢　盡力扶宗富道耕
今日法輪親轉事　赤旛之下放光明

寶國周道老禪の轉法輪を賀す――肘は懸く寶國殿中の瑛。龍澤那邊にか眼睛を弄ぶ。雲は鹿園を擁して三草潤ひ。月は少室を輝して百川清し。身を教育に任じて時勢に廣く。力を扶宗に盡して道耕に富む。今日法輪親轉の事。赤旛の下光明を放つ。

賀智嚴德全師首座于寶國

明珠一顆淨無瑕　況復琢磨驗正邪　龍女莊嚴猶半檄　胡僧看破始全塗　智遍寶國輝宗澤　德起風雲長覺華
借問飲光尊者後　人天眼目屬誰家

智嚴德全師の寶國に首座たるを賀す――明珠一顆淨くして瑕無く。況んや復琢磨正邪を驗するをや。龍女の莊嚴猶ほ半檄。胡僧看破して始めて塗を全うす。智は寶國に遍ねくして宗澤を輝し。德は風雲を起して覺華を長ず。借問す飲光尊者の後。人天の眼目誰が家にか屬す。

心箭離弦射大空　透關一着起宗風　少林春色靈山月　清影佳香在此中

長國新命透箭禪將の晉山式を祝す——心箭弦を離れて大空を射る。透關の一着宗風を起す。少年の春色靈山の月。清影佳香此中に在り。

祝小柳透箭宗匠鶯遷于睡翁山寶昌蘭若

玄箭透破十虛空　更轉神鋒射睡翁　從是寶昌加德化　布恩山紫水明中

小柳透箭宗匠が睡翁山寶昌蘭若に鶯遷するを祝す——玄箭透破す十虛空。更に神鋒を轉じて睡翁を射る。是れより寶昌德化を加へ。恩を布く山紫水明の中。

瑞龍寺尸羅會

瑞龍拈弄寶摩尼　放得戒光開德基　四衆等參靈夢境　莊嚴覺道絕多岐

瑞龍寺尸羅會——瑞龍拈弄す寶摩尼。戒光を放ち得て德基を開く。四衆等しく參ず靈夢の境。覺道を莊嚴して多岐を絕す。

賀大安道眠具壽首版于見龍堂中

夙參圓福吉祥宗　更踐金城撥亂蹤　法雨慈雲應罔極　竹篦三尺是神龍

大安道眠具壽が見龍堂中に首版たるを賀す——夙に圓福の吉祥宗に參じ。更に金城撥亂の蹤を踐む。法雨慈雲應に極り罔かるべし。竹篦三尺是れ神龍。

次長國悅音老兄韻　二首

一條拄杖一袈裟　擬倣西天老釋迦　得失是非都不管　風飡飽喫趙州茶

長國悅音老兄の韻を次ぐ——一條の拄杖一袈裟。擬倣す西天の老釋迦。得失是非都て管せず。風飡飽くまで喫す趙州の茶。

瓦瓶閑挿一枝蓀　滴露猶含造化元　暮請朝參皆祖徳　寸心何日報慈恩

瓦瓶閑に挿す一枝の蓀。滴露猶ほ含む造化の元。暮請朝參皆な祖徳。寸心何れの日か慈恩に報いん。

大正十五年冬寄前長國蘆舟老賢

水雲爲伴月爲朋　一片吟情萬慮澄　物外禪機須不盡　時驅筆硯説宗乘

大正十五年冬前の長國蘆舟老賢に寄す——水雲伴となる月朋となる。一片の吟情萬慮澄む。物外の禪機須らく不盡なるべし。時に筆硯を驅つて宗乘を説く。

祝長國新命透箭禪將晉山式

菅原洞禪師の本師及義母の喪を弔ふ——今師翁を失ひ昨は北堂。孝心哀別愁腸を斷つ。追恩の一着他事無し。法界更に添ふべし修養の光。

爲下山豐平氏板谷波山君作白磁觀世音菩薩開眼

四八端嚴功德聚　五觀十願攝羣生　即今開點圓通眼　慧日添輝影轉明

下山豐平氏の爲めに板谷波山君の作白磁の觀世音菩薩を開眼す——四八端嚴の功德聚。五觀十願羣生を攝す。即今開點す圓通の眼。慧日光を添へて影轉た明かなり。

大正癸丑夏會在田老兄於富城目擊道存因得一哩囉

欣君定力靜如山　慚我禪心似石頑　相逢懶話當年夢　消息圓通一笑間

大正癸丑の夏在田老兄に富城に會ひ目擊道存因て一哩囉を得たり——欣ぶ君が定力靜なること山の如きを。慚づ我が禪心は石に似て頑たり。相逢うて話するに懶ふし當年の事。消息圓通す一笑の間。

大正丙辰年六月繁久主盟老師拜請明鑑道機禪師猊下啓建尸羅會是實猊下北陸親化之嚆矢也

掃室歡迎不老仙　慈門一等接人天　祇園卉木繁而久　道果心華滿戒筵

大正丙辰年六月繁久主盟老師明鑑道機禪師猊下を拜請して尸羅會を啓建す。是れ實に猊下が北陸親化の嚆矢なり——室を掃つて歡び迎ふ不老の仙。慈門一等人天を接す。祇園の卉木繁くして久し。道果心華戒筵に滿つ。

今井村有今井四郎兼平公之城址公臣事源義仲參其帷幄追討平家進軍京都及迎擊賴朝之兵戰況不利遂殉粟津其墓現在江州膳所緣心寺靈源現住山田孝如和尚特往展墓令畫師描其眞容大正十五年九月二日修供養會村民隨喜開城山之參道且列法會予親捧心香

渾身熱血是誠忠　盖代將軍示偉功　只此精神長未滅　千秋誰不仰豪雄

今井村に今井四郎兼平公の城址有り。公は源義仲に臣事し其の帷幄に參じ平家を追討して軍を京都に進む。頼朝の兵を迎へ擊つに及び戰況利あらず遂に粟津に殉し其墓現に江州膳所の緣心寺に在り。靈源現住山田孝如和尚特に往いて展墓し畫師をして其の眞容を描かしめ大正十五年九月二日供養會を修す。村民隨喜して城山の參道を開き且つ法會に列す。予も親しく心香を捧ぐ――渾身の熱血是れ誠忠。盖代の將軍偉功を示す。只だ此の精神長へに滅せず。千秋誰か豪雄を仰かざらん。

三槐淺田玄大人見寄玉什次韻却呈

歲餘停錫臥沈痾　日月如流奈老何　禪窗幸得賚瑤韻　忽見白雲奇影多

三槐淺田玄大人玉什を寄せらる。韻を次いで呈却す――歲餘錫を停めて沈痾に臥し。日月流るゝが如く老を奈何せん。禪窗 幸 に瑤韻を賚はることを得て。忽ち見る白雲奇影の多きを。

弔菅原洞禪師本師及義母喪

今失師翁昨北堂　孝心哀別斷愁腸　追恩一着無他事　法界更添修養光

擧着す。竹篦上に走る鐵崑崙。

東濃長國寺戒會

紅葉謝枝山骨露　白雲關銐寺門幽　迎風送月家常事　唯有松聲不暫休

東濃長國寺戒會——紅葉枝を謝して山骨露はれ。白雲銐を關して寺門幽なり。風を迎へ月を送るは家常の事。唯だ松聲の暫らくも休まざる有り。

大正二年十月敦賀港永建道場請性海慈船禪師猊下啓建尸羅會予陪法駕列會賦此記喜

玲瓏殿閣劃仙區　月滿松原露作珠　況復法王垂化迹　分明錦上更花舖

大正二年十月敦賀港の永建道場性海慈船禪師猊下を請じて尸羅會を啓建し予も法駕に陪して會に列す。此れを賦して喜びを記す——玲瓏たる殿閣仙區を劃し。月は松原に滿ちて露珠を成す。況や復た法王化迹を垂れ。分明に錦上更に花を舖く。

大正五年三月於濃州妙勝精舍慧光玄照禪師猊下付安陀衣於永建泰禪老師予近侍猊下依賦一哩囉

慈眼當年展化光　如今永建振宗綱　恩衣擔去於山重　隨處待師開道場

大正五年三月濃州の妙勝精舍に於て慧光玄照禪師猊下安陀衣を永建泰禪老師に付さる。予猊下に近侍す。依つて一哩囉を賦す——慈眼に當年化光を展べ。如今永建に宗綱を振ふ。恩衣擔し去つて山よりも重し。隨處師を待つて道場を開く。

賀泰莽具壽首版于福源蘭若

夙投鎌秀大施門　更打金城古赤旛　泰坐交參莽裏主　半筵風月滿乾坤

泰莽具壽が福源蘭若に首版たるを賀す――夙に鎌秀の大施門に投じ。更に打す金城の古赤旛。泰坐交く參ず莽裏の主。半筵の風月乾坤に滿つ。

蝙蝠庵七周忌法供養拈香

蝶翎泯影七經年　遺德餘芳堪永傳　孝子頻流追遠淚　淚痕打濕博山烟

蝙蝠庵七周忌法供養拈香――蝶翎影を泯じて七たび年を經ぬ。遺德餘芳は永く傳ふるに堪へたり。孝子頻に流す追遠の淚。淚痕打濕す博山の烟。

洪德寺重興老師納舍利法會拈香

以道爲心法是身　莊嚴洪德化薰人　毘嵐覺破龍潭夢　猶見明光遺照新

洪德寺重興老師納舍利法會拈香――道を以て心と爲す法は是れ身。洪德を莊嚴して化は人を薰す。毘嵐覺破す龍潭の夢。猶ほ見る明光遺照の新なるを。

賀諸嶽山首座善光元信具壽

保任誠信養信元　占取三松半座園　乃祖家風誰擧着　竹篦上走鐵崑崙

諸嶽山首座善光元信具壽を賀す――誠信を保任して信元を養ひ。占取す三松半座の園。乃祖の家風誰か

——我れに贈るの花籃太だ絶奇。精工雅致兩ながら相宜し。翠筒常に現ず春天地。綉葉瓊葩香帷に徹す。

大正十年秋田中仁者探勝於飛陽中山谿谷偶得自然木圓通大士像面貌自備聖姿如生同十一年八月二十五日予宿同邸拜之感其奇縁賦此

菩薩尊容神若在　容姿端麗出天眞　長年韜晦中山地　感應唯歸厚信人

大正十年の秋田中仁者勝を飛陽中山の谿谷に探り偶〻自然木の圓通大士の像を得面貌自から備はり聖姿生けるが如し。同十一年八月二十五日予同邸に宿して之を拜す其の奇縁を感じ此を賦す——菩薩の尊容神在すか若く。容姿端麗天眞に出づ。長年韜晦す中山の地。感應唯歸す厚信の人。

與宗門雜誌記者諸彥

人心嚮背亂如絲　警世之功更待誰　護法文兮興國筆　望君教海作船師

宗門雜誌記者諸賢に與ふ——人心の嚮背亂れて絲の如し。警世の功更に誰れにか待たん。護法の文や興國の筆。望む君が教海に船師と作らんことを。

喜東京宗門雜誌記者來山

禪房下榻接佳賓　目擊道存情轉親　莫憾山中相待薄　叢林綠意迎君新

東京宗門雜誌記者の來山を喜ぶ——禪房榻を下りて佳賓を接す。目擊道存し情轉た親む。憾むこと莫れ山中相待すことの薄きを。叢林の綠意君を迎へて新なり。

二代尊正諱

坐斷是非不到處　吐吞雙箇月輪來　縱橫暢展超方路　無影樹頭花自開

二代尊正諱——是非不到の處を坐斷し。雙箇の月輪を吐呑し來る。縱橫暢展方路を超え。無影樹頭花自から開く。

太祖大師正諱

此日年年迎祖翁　心香拈出捧徵衷　報恩一着無多子　欲爲宗門献老躬

太祖大師正諱——此日年年祖翁を迎へ。心香拈じ出して徵衷を捧ぐ。報恩の一着多子無し。宗門の爲めに老躬を献ぜんと欲す。

萬年山東漸寺尸羅會

山是萬年無變色　寺名東漸道彌行　纔稱送迎遲八刻　誰聞空界擧家聲

萬年山東漸寺尸羅會——山は是れ萬年色の變ずる無し。寺は東漸と名けて道彌〻行はる。纔に送迎と稱するも遲きこと八刻。誰か聞かん空界擧家の聲。

昭和二年九月琅玕齋翁被贈花籃精巧高雅禪室加一段之莊嚴賦此伸謝

贈我花籃太絕奇　精工雅致兩相宜　翠筒常現春天地　綉渠瓊葩香徹帷

昭和二年九月琅玕齋翁花籃を贈らる。精巧高雅にして禪室一段の莊嚴を加ふ。此れを賦して謝を伸ぶ

寂後一千三百年　聖明偉德浩如天　欲酬正法紹隆惠　滿苑櫻花特地姸

宗正寺奉修聖德太子一千三百年忌の拈香法語――寂後一千三百年。聖明の偉德浩きこと天の如し。正法紹隆の惠みに酬いんと欲し。滿苑の櫻花は特地に姸なり。

豪湖筆瀑布圖

千條瀑布勢如龍　不識源頭何處峰　若得聞聲於眼裏　空華堆上了眞宗

豪湖筆瀑布の圖――千條の瀑布勢龍の如く。識らず源頭何處の峰なるを。若し聲を眼裏に聞くことを得ば。空華堆上に眞宗を了ぜん。

晩晴仁者新調十三佛及十六羅漢點眼供養　福島甲子三氏

網珠相映十三尊　二八曇華發梵園　毫端點著機先眼　照鑒何唯六趣門

晩晴仁者新調の十三佛及十六羅漢點眼供養――網珠相映ず十三尊。二八の曇華梵園に發く。毫端點着す機先の眼。照鑒何ぞ唯だ六趣の門のみならんや。

徹通禪師正諱

聞盡鷓鴣哥哥聲　拈來祖苑百花英　其機逸格其行密　留與家風護法城

徹通禪師正諱――聞き盡す鷓鴣哥哥の聲。拈じ來る祖苑百花の英。其機逸格にして其行は密。家風を留與して法城を護る。

永泉現董義道宗師晋院以來專圖寺門之興隆再建本堂添補什具更以明治壬子五月一日啓尸羅會予

深感其道力賦之呈似

靈境歡看殿閣新　檀雲朶朶簇玄津　洞龍翻破永泉水　潤澤華藏界裏春

永泉現董義道宗師晋院以來專ら寺門の興隆を圖り本堂を再建し什具を添補し更に明治壬子五月一日を以て尸羅會を啓く。予深く其の道力に感じ之を賦て呈似す——靈境歡び看る殿閣の新なるを。檀雲朶朶として玄津に簇がる。洞龍翻破す永泉の水。潤澤す華藏界裏の春。

信陽如法三十世老師十三周忌

曾自孤舟藏夜壑　春波秋浪十三年　今朝覺破金龍夢　一椀清風掬石泉

信陽如法三十世老師の十三周忌——曾て孤舟夜壑に藏れてより。春波秋浪十三年。今朝覺破す金龍の夢。一椀の清風石泉を掬す。

宗正寺啓建觀音大士入佛授戒會拈香

莊嚴覺界啓天堂　法雨慈雲護戒場　請見圓通無礙德　叢林朶朶放靈光

宗正寺啓建觀音大士入佛授戒會拈香——覺界を莊嚴して天堂を啓き。法雨慈雲戒場を護る。請ふ見よ圓通無礙の德。叢林朶朶靈光を放つ。

宗正寺奉修聖德太子一千三百年忌拈香法語

回天志氣壓堂雄　任運騰騰振祖風　瑞霧深籠鷲嶺座　祥雲半掩古禪宮

天祥瑞運其壽の半座を賀す——回天の志氣堂を壓して雄なり。任運騰騰祖風を振ふ。瑞霧は深く鷲嶺の座を籠め。祥雲半ば掩ふ古禪宮。

### 水原送別會席上

同盟送別太慇懃　感謝何言可報君　幸有異時來草屋　應分仙洞半間雲

水原送別會席上——同盟別を送る太だ慇懃。感謝何の言か君に報ず可けん。幸に異時草屋に來る有らば。應に分つべし仙洞半間の雲

### 三島山戒會鶴翁老和尚供眞法語

不萌枝上玉華鮮　鳳舞龍吟二百年　莫道師翁過去久　香風吹動一爐烟

三島山戒會鶴翁老和尚供眞法語——不萌の枝上玉華鮮かに。鳳舞ひ龍吟ず二百年。道ふ莫れ師翁過去して久しと。香風吹き動かす一爐の烟。

### 達磨賛

巖石作爐松作扃　未曾弄巧劃門庭　九年默坐何奇特　萬古獨傳無字經

達磨の賛——巖石は爐と作り松は扃と作る。未た曾て巧を弄して門庭を劃さず。九年の默坐何の奇特ぞ。萬古獨り傳ふ無字の經。

曹源十五世鐵山活牛和尙の正當拈香——鐵牛の機は活す鐵山の間。頭角衝開す生死の關。池塘芳草の夢を覺着して。曹源幽なる處雲を抱いて閑なり。

高照山曹源寺尸羅會

雨濕曹源樹影沈　雲圍賢聖戒門深　溪聲打着無間說　山色拈提不動心

高照山曹源寺尸羅會——雨は曹源を濕して樹影沈み。雲は賢聖を圍んで戒門深し。溪聲は打着す無間の說。山色は拈提す不動の心。

興泉寺觀音講拈香

聞思修入三摩地　淸淨眞觀悲智全　借問補陀巖上月　十方光影爲誰圓

興泉寺觀音講拈香——聞思修より三摩地に入る。淸淨眞觀悲智全し。借問す補陀巖上の月。十方の光影誰が爲めにか圓かなる。

祝靈源寺新董孝如禪匠晉山式

靈源皎潔派流長　孝順慈悲致吉祥　自是禪庭春花靜　萬紅千紫滿仙鄕

靈源寺新董孝如禪匠の晉山式を祝す——靈源皎潔にして派流長し。孝順慈悲は吉祥を致す。是れより禪庭春色靜に。萬紅千紫仙鄕に滿つ。

賀天祥瑞運具壽半座

し。一爐薫出す五分の烟。

次覺禪具壽韻　三首

道人豈意避塵寰　笑殺斷雲聞不聞　昨夜鐵牛生石卵　虚空拍手舞溪間

覺禪具壽の韻を次ぐ——道人豈に塵寰を避くることを意はんや。笑殺す斷雲の聞不聞。昨夜鐵牛石卵を生み。虚空に拍手して溪間に舞ふ。

七尺寒單別一區　全身脱去點塵無　簷前贏得三更月　滿面清光印五湖

七尺の寒單別に一區。全身脱し去つて點塵無し。簷前贏し得たり三更の月。滿面の清光五湖に印す。

片雲還岫伴吟身　脱落長安萬丈塵　運水搬柴無別事　風流自古屬閒人

片雲岫に還つて吟身に伴ひ。脱落す長安萬丈の塵。運水搬柴別事無し。風流古より閒人に屬す。

南北館大金光明最勝王天宮手斧式拈香

融合三身作一身　道交感應驗如神　門庭忽現法王刹　滿月新開不老春

南北館大金光明最勝王天宮手斧式拈香——三身を融合して一身と作し。道交感應驗神の如し。門庭忽ち法王刹を現じ。滿月新に開く不老の春。

曹源十五世鐵山活牛和尚正當拈香

鐵牛機活鐵山間　頭角衝開生死關　覺着池塘芳草夢　曹源幽處抱雲閒

布教師大會

自覺覺他是佛行　化門通處道縱橫　報恩一著無多子　只在傳燈與利生

布教師大會——自覺覺他是れ佛行。化門通ずる處道縱橫。報恩の一着多子無し。只だ傳燈と利生とに在り。

教育者大會供眞

人格大成存教育　智以可啓德以長　身心學道須精進　二利莊嚴最吉祥

教育者大會供眞——人格の大成は教育に存す。智以て啓く可し德以て長ずべし。身心學道須らく精進すべし。二利莊嚴す最吉祥。

三松會亡僧供養

光明臺上沒纖塵　心法雙忘性卽眞　況復金文微妙德　莊嚴覺路瑞光新

三松會亡僧供養——光明臺上纖塵沒く。心法雙べ忘じて性卽ち眞なり。況んや復た金文微妙の德。覺路を莊嚴して瑞光新なり。

示人

法身豈拘生死緣　觸處須參直指禪　曠劫無明當下滅　一爐薰出五分烟

人に示す——法身豈に生死の緣に拘らんや。觸處須らく直指の禪に參ずべし。曠劫の無明は當下に滅

清浦奎堂老公の丸田等観邸に宿するを聞いて欣然此を賦す——此日老公栢城に臨み。林巒泉石光榮に浴す。米峰の雲影鯖川の月。一片の赤心無限の情。

此日栢陽迎貴賓　滿庭風月擁公親　千秋堪飾家門史　櫻隱餘香薰室新

此日栢陽貴賓を迎へ。滿庭の風月公を擁して親む。千秋家門の史を飾るに堪へたり。櫻隱の餘香室に薰じて新なり。

石渡義助大人賜壽老人銅像賦此伸謝　二首

名匠鑄成壽老人　面容如活好仙神　謝君厚貺恩情切　瑞鹿含霞靜似春

石渡義助大人壽老人の銅像を賜はらる。此れを賦して謝を伸ぶ——名匠鑄成す壽老人。面容活けるが如し好仙神。謝す君が厚貺恩情の切なるを。瑞鹿霞を含んで靜なること春に似たり。

賜我金剛壽老人　仙容灑脫鹿隨身　烟霞影密三山曉　玄洞常開不老春

我れに賜ふ金剛の壽老人。仙容灑脫鹿身に隨ふ。烟霞影は密なり三山の曉。玄洞常に開く不老の春。

日曜學校大會

聞說栴檀自嫩香　兒童況入育英堂　由來智德基正信　學苑祇期放異芳

日曜學校大會——聞說く栴檀は嫩より香しと。兒童況んや育英の堂に入るをや。由來智德は正信に基く。學苑祇た期す異芳を放たんことを。

添へ。福聚莊嚴す正覺の園。

見瑞香大姉小照

及觀小照恨難禁　轉覺瑞香薫鶴林　日暮湘陽禽影絶　潮聲疑是撫瑤琴

瑞香大姉の小照に見ゆ――小照を觀るに及んで恨み禁じ難く。轉覺ゆ瑞香の鶴林に薫ずるを。日暮れて湘陽禽影絶え。潮聲疑ふらくは是れ瑤琴を撫するかと。

大本山顧問總泉四十三世竺菴北仙大和尚大練忌

八十六年護法城　飄身蓬地上雲程　劫來消息誰能識　白字溪頭殘月清

大本山顧問總泉四十三世竺菴北仙大和尚大練忌――八十六年法城を護り。身を飄へして蓬地に雲程に上る。劫來の消息誰か能く識らん。白字溪頭殘月清し。

東京金峰山高林寺戒會

月上金峰掛碧岑　慈雲靉靆滿高林　虛空有路任君散　依舊松風弄古琴

東京金峰山高林寺戒會――月金峰に上つて碧岑に掛かり。慈雲靉靆高林に滿つ。虛空路有り君が散するに任す。舊に依つて松風古琴を弄す。

聞清浦奎堂老公宿丸田等觀邸欣然賦此　二首

此日老公臨栢城　林탑泉石浴光榮　米峰雲影錦川月　一片赤心無限情

## 讀石川素童禪師詩傳

龜毛筆下綴空華　織出禪門老作家　越格靈機雄大業　行持總出一袈裟

石川素童禪師の詩傳を讀む——龜毛の筆下空華を綴り。織り出す禪門の老作家。越格の靈機雄大の業。行持總て出づ一袈裟。

## 三州伏龍山永澤寺戒會

昨迎明月浴慈光　今送白雲護戒藏　永澤從斯添德化　祖風豈只漲參陽

三州伏龍山永澤寺戒會——昨は明月を迎へて慈光に浴し。今は白雲を送つて戒藏を護る。永澤斯れより德化を添へ。祖風豈に只だ參陽に漲るのみならんや。

## 名古屋市玉琳山天寧寺戒會

戒光嚴飾玉琳峰　四衆相携入此宗　天寧地泰無窮瑞　錦上敷花知幾重

名古屋市玉琳山天寧寺戒會——戒光嚴飾す玉琳峰。四衆相携へて此宗に入る。天寧地泰窮り無きの瑞。錦上花を敷く知んぬ幾重ぞ。

## 觀照寺勸請四尊點眼

觀照圓通攝普門　群生誰不浴慈恩　四光交影添威德　福聚莊嚴正覺園

觀照寺勸請の四尊點眼——觀照圓通普門に攝す。群生誰か慈恩に浴せさらん。四光影を交へて威德を

三寶興隆僧是本　禪林丕塞在雲堂　鶴山鎭靜空王座　不盡乾坤選佛場

本山僧堂地鎭祭――三寶の興隆僧是れ本。禪林の丕塞は雲堂に在り。鶴山鎭靜す空王の座。不盡乾坤の選佛場。

弔佐野義勇君

毘嵐欻起散空華　夢醒無蝶過窗紗　悵然念誦壽量品　待他枯木又生花

佐野義勇君を弔ふ――毘嵐欻起して空華を散じ。夢醒めて蝶の窗紗を過ぎる無し。悵然壽量品を念誦して。待つ他の枯木又た花を生ずるを。

豐橋市吉田山龍拈寺戒會

春滿豐橋霞作章　靈苗獨向吉田長　網羅幢畔何奇特　瞥見金龍拈夜光

豐橋市吉田山龍拈寺戒會――春は豐橋に滿ちて霞章を作し。靈苗獨り吉田に向つて長し。網羅幢畔何の奇特ぞ。瞥見す金龍の夜光を拈ずるを。

題龍拈方丈信施袈裟

忍辱之衣和合服　莊嚴佛德護僧形　分明披奉如來敎　一縷猶堪度萬靈

龍拈方丈が信施の袈裟に題す――忍辱の衣和合の服。佛德を莊嚴して僧形を護る。分明に披奉す如來の敎。一縷猶ほ萬靈を度するに堪へたり。

信州洞上近世七尊師追恩帖に題す――瞻仰す信陽の老古錐。洞門長く稱す七尊師。其功顯赫其恩大なり。永劫看るに堪へたり德化の垂るゝを。

淀橋淺田玄太郎氏惠詩和呈

東風吹送陽春曲　觸著吟情暖解氷　慙我疎才無力應　知君雅澹靜於僧

淀橋の淺田玄太郎氏詩を惠まるに和して呈す――東風吹き送る陽春の曲。觸著す吟情暖にして氷を解く。慙づ我が疎才應うるに力無く。知る君が雅澹僧よりも靜なるを。

和同氏見示玉什叙近況　二首

利名多是刻舷求　爭似禪人樂至遊　無一物中無盡藏　山雲海月望悠悠

同氏が示されし玉什に和して近況を叙す――利名多くは是れ舷を刻んで求む。爭か似かん禪人至遊を樂しむに。無一物中無盡藏。山雲海月望み悠悠。

贈千葉藤一郎氏

千般業務統以誠　施法市鄽期共榮　清愼能容仁且斷　此行正是薩埵行

千葉藤一郎氏に贈る――千般の業務統ぶるに誠を以てし。法を市鄽に施いて共榮を期す。清愼能く容れて仁且つ斷。此行正に是れ薩埵の行。

本山僧堂地鎭祭

豈只一人之光榮而已

敎育多年期奉公　薰陶誨化出誠忠　殊勳特拜天恩渥　鄕黨歡呼頌懿功

我が鄕里梁川の小學校長藤田誠壽君女學校長を兼ねて多年敎育に從事し篤實勤勉効績顯著なり。曩に從七位に敍せられ今奏任官に敍せらる豈に只一人の光榮のみならんや――敎育多年奉公を期し。薰陶誨化誠忠に出づ。殊勳特に天恩の渥きを拜し。鄕黨歡呼して懿德を頌す。

呈高橋雄峰兄

抱痾山下臥雲床　偶逐春風入水鄕　多謝先生訪空室　友情如月照鎌倉

高橋雄峰兄に呈す――痾を抱いて山下雲床に臥し。偶〻春風を逐うて水鄕に入る。多謝す先生空室を訪ふを。友情月の如く鎌倉を照らす。

祝淸隆山福泉寺大門道路開通

淸隆山頂挽春回　喜見門頭大路門　一脈福泉添潤澤　叢林等點瑞花來

淸隆山福泉寺大門道路の開通を祝す――淸隆山頂春を挽いて回る。喜び見る門頭大路の通ずるを。一脈の福泉潤澤を添へ。叢林等しく瑞花を點じ來る。

題信州洞上近世七尊師追恩帖

瞻仰信陽老古錐　洞門長稱七尊師　其功顯赫其恩大　永劫堪看德化垂

第三十次曹洞宗宗議會開會——正法從來變易無く。化儀唯だ時と新ならんことを要す。幾多議件皆な公案。山の如き祖德に報じ得て親し。

世田谷中學創立二十五年記念

擧揚正法眼藏傳　振起常心是道禪　二十五周耕學地　只期覺樹德花妍

世田谷中學創立二十五年記念——擧揚す正法眼藏の傳。振起す常心是道の禪。二十五周耕學の地。只だ覺樹德花の妍ならんことを期す。

贈大隆大定師

觸處隨緣放德光　豫南亦見化功彰　知君安坐金剛座　慈眼分明鑑十方

大隆大定師に贈る——觸處緣に隨つて德光を放ち。豫南亦た見る化功の彰なるを。知る君が金剛座に安坐して。慈眼分明に十方を鑑するを。

前總務栗木智堂老師奉職於宗務院廿五年功績最大恭賦一絶以頌之

潛行密用執宗綱　德緯文經織作章　勤續二旬添五歲　鴻勳敎化兩洋洋

前の總務栗木智堂老師職を宗務院に奉ずること廿五年功績最も大なり。恭しく一絶を賦し以て之を頌す——潛行密用宗綱を執り。德緯文經織つて章を作す。勤續二旬五歲を添へ。鴻勳敎化兩ながら洋洋。

我鄕里梁川小學校長藤田誠壽君兼女學校長多年從事敎育篤實勤勉効績顯著曩叙從七位今叙奏任官

翁過去して久しきと。戒香舊に依つて華藏に滿つ。

靜岡縣青原山靜居寺天如眞禪大和尚

以道爲心法是身　靈臺不惹死生塵　青原莫道秋將暮　靜界長開刧外春

靜岡縣青原山靜居寺天如眞禪大和尚――道を以て心と爲す法は是れ身。靈臺惹かず死生の塵。青原道ふ莫れ秋將に暮れんとすと。靜界長に開く刧外の春。

謝楠正雄師

毫端點出白毫光　字宇莊嚴安養鄕　開卷喜君正信力　覺園長放五分香

楠正雄師に謝す――毫端點出す白毫光。字宇莊嚴す安養鄕。卷を開いて喜ぶ君が正信の力。覺園長に五分の香を放つ。

靜岡市顯光院戒會

包山雲現慈悲德　向日花存孝順心　萬境總無非佛戒　霜林依舊染秋深

靜岡市顯光院戒會――山を包の雲は慈悲の德を現じ。日に向ふの花は孝順の心を存す。萬境總て佛戒に非ざるは無く。霜林舊に依つて秋を染むること深し。

第三十次曹洞宗宗議會開會

正法從來無變易　化儀唯要與時新　幾多議件皆公案　報得如山祖德親

弔名古屋市萬年寺閑居祖道契禪和尙

證契卽通倣聖賢　興隆祖道護禪筵　鶴林一夜華既散　留與餘香徹萬年

名古屋市萬年寺閑居祖道契禪和尙を弔ふ――證契卽通聖賢に倣ひ。祖道を興隆して禪筵を護る。鶴林一夜花既に散じ。餘香を留與して萬年に徹す。

梁川町蠶絲品評會

蠶業由來殖產雄　岩磐二域最收功　誰知富國興家力　發自桑園百畝中

梁川町蠶絲品評會――蠶業由來殖產の雄。岩磐の二域最も功を收む。誰か知らん富國興家の力。桑園百畝の中より發することを。

愛知縣祥雲山長源寺戒會

掬得長源一脈泉　華藏臺上潤無邊　網羅幢畔請看取　數片祥雲護法筵

愛知縣祥雲山長源寺戒會――長源一脈の泉を掬し得て。華藏臺上無邊を潤ほす。網羅幢畔請ふ看取せよ。數片の祥雲法筵を護る。

顯光開山揚室印播大和尙

梵園挿草請醫王　化作福田顯異光　莫道祖翁過去久　戒香依舊滿華藏

顯光開山揚室印播大和尙――梵園草を挿んで醫王を請じ。化して福田と作り異光を顯はす。道ふ莫れ祖

萬德由來在報恩　華藏開盡菩提園　靈松擎出仲秋月　光境融來大洞門

長野縣大洞山靈松寺戒會——萬德由來報恩に在り。華藏開き盡す菩提園。靈松擎げ出す仲秋の月。光境融じ來る大洞の門。

山口縣瑞雲山大寧寺戒會

祖翁靈德儼然存　疊嶂聯溪護戒門　瑞雲圍繞華藏會　加行偏欲報慈恩

山口縣瑞雲山大寧寺戒會——祖翁の靈德儼然として存し。疊嶂聯溪戒門を護る。瑞雲圍繞す華藏の會。加行偏に慈恩に報ぜんと欲す。

拜瑞祥菴開基石屋禪師傳衣

一片袈裟薫異香　祝融山頂放靈光　遺恩六百餘年後　留與福田敷瑞祥

瑞祥菴開基石屋禪師の傳衣を拜す——一片の袈裟異香を薫じ。祝融山頂靈光を放つ。遺恩六百餘年の後。福田を留與して瑞祥を敷く。

山口縣總源山海潮寺開山不見明見禪師

提轉幻翁鼻孔來　海潮音裏築雲臺　猶餘一滴總源水　德化千秋潤九垓

山口縣總源山海潮寺開山不見明見禪師——幻翁の鼻孔を提轉し來り。海潮音裏雲臺を築く。猶ほ一滴總泉の水を餘して。德化千秋九垓を潤ほす。

新潟縣廣久山瑞泉寺戒會――祖德の餘恩廣く且つ久し。眞を迎へて瞻仰す法王壇。神龍今日甘露を降し。一脈の瑞泉玉瀾を揚ぐ。

新潟縣金藏山龍昌寺戒會

昨迎明月度澄潭　今送白雲歸碧岑　山色溪聲秋氣動　松風徐奏沒絃琴

新潟縣金藏山龍昌寺戒會――昨は明月の澄潭を度るを迎へ。今は白雲の碧岑に歸るを送る。山色溪聲秋氣動き。松風徐に奏す沒絃琴。

和小村恒太郎氏韻　二首

秋有月光春有花　涼風樹下絕咯嗟　吟情豈只融僧俗　東海北山同一家

小村恒太郎氏の韻に和す――秋は月光有り春は花有り。涼風樹下咯嗟を絕す。吟情豈に只だ僧俗を融するのみならんや。東海北山同じく一家。

新潟縣栃尾常樂寺水害慘死者追弔會

河瞋惡水驀頭來　無暇逃身遂斃災　今日爲君通覺路　幽明圈外上蓮臺

新潟縣栃尾常樂寺水害慘死者追弔會――河瞋つて惡水驀頭に來り。身を逃るゝに暇無く遂に災に斃る。今日君が爲めに覺路を通じ。幽明圈外蓮臺に上らしむ。

長野縣大洞山靈松寺戒會

圓通德化攝存亡　十願五觀聯吉祥　福聚海中浮覺月　菩提苑裏放毫光

多田母堂の守護觀音大士を讚し奉る――圓通の德化存亡を攝し。十願五觀吉祥を聯ぬ。福聚海中覺月を浮べ。菩提苑裏毫光を放つ。

一葉上如來

一葉一國一如來　滿地莊嚴般若臺　端的平常心是道　遊行步步覺門開

一葉上如來――一葉一國一如來。滿地莊嚴す般若臺。端的平常心是れ道。遊行步步覺門開く。

送清浦奎堂子爵遊禹域　二首

萬里觀光勢似飛　江山到處護征衣　知君擔取吟囊去　包得燕雲楚月歸

淸浦奎堂子爵の禹域に遊ぶを送る――萬里觀光勢飛ぶに似たり。江山到處征衣を護る。知る君は吟囊を擔取し去り。燕雲楚月を包み得て歸るを。

陸路航程望轉賖　欣君雄志向中華　此行豈只探名勝　國際亦知親善加

陸路航程望み轉た賖なり。欣ぶ君が雄志中華に向ふを。此行豈に只だ名勝を探るのみならんや。國際亦た親善の加はるを知る。

新潟縣廣久山瑞泉寺戒會

祖德餘恩廣且久　迎眞瞻仰法王壇　神龍今日降甘露　一脉瑞泉揚玉瀾

東京帝國大學物理療法內科眞鍋嘉一郎先生に贈る――妙術靈方皆な仁に出で。痾を除き病を去り技神の如し。欣ぶ君が國を醫し民を醫するの手。觸處に不老の春を挽回することを。

魚籃觀音

應物現成婦女身　端嚴妙相氣如春　慈光照耀籃兒裏　箇箇無非透網鱗

魚籃觀音――物に應じて現成す婦女の身。端嚴の妙相氣春の如し。慈光照耀す籃兒の裏。箇箇透網の鱗に非ざるは無し。

羽賀虎三郎氏六十賀詞

仁者迎祥曆學還　知君動處樂清閒　洋洋信水堪湔耳　門外常望悠久山

羽賀虎三郎氏六十の賀詞――仁者祥を迎へて曆學に還り。知る君が動處に淸閒を樂むを。洋洋たる信水耳を湔ふに堪へたり。門外常に望む悠久の山。

大坂府白雲山陽春寺題詠

陽春常帶鷲峯霞　俯瞰十州同一家　松榻冷然如白雪　禪身伍鶴臥雲涯

大坂府白雲山陽春寺題詠――陽春常に帶ぶ鷲峯の霞。俯瞰す十州同じく一家。松榻冷然白雪の如く。禪身鶴に伍して雲涯に臥す。

奉讃多田母堂守護觀音大士

世途夷險恣盤桓　航海豈辭風浪難　敎育熱誠凝似鐵　參加國際少年團

高島平三郎氏少年團を代表して渡歐するを送る――世途の夷險盤桓を恣にす。航海豈辭せんや風浪の難。敎育の熱誠凝つて鐵に似たり。參加す國際少年團。

航行陸旅轉加威　萬里鵬程一瞬飛　知君擔取吟嚢去　包得歐山米水歸

航行陸旅轉た威を加へ。萬里の鵬程一瞬に飛ぶ。知る君が吟嚢を擔取し去り。歐山米水を包得て歸るを。

眼目山立山寺戒會

嚴飾戒壇迎聖賢　加行幸得戒傳全　若識青山常運步　何疑月落不離天

眼目山立山寺戒會――戒壇を嚴飾して聖賢を迎へ。加行幸に戒傳の全きを得たり。若し青山常に步を運ぶを識らば。何んぞ疑はん月落つるも天を離れざることを。

新潟縣布袋山龍光寺戒會

天龍忽地降慈雨　綠樹聯珠放戒光　布袋山頭容法界　香雲靉靆擁華藏

新潟縣布袋山龍光寺戒會――天龍忽地に慈雨を降し。綠樹珠を聯ねて戒光を放つ。布袋山頭法界を容れ。香雲靉靆として華藏を擁す。

贈東京帝國大學物理療法內科眞鍋嘉一郎先生

妙術靈方皆出仁　除痾去病技如神　欣君醫國醫民手　偏處挽回不老春

山形縣天理山耕福寺戒會完戒示衆――天理山頭大雄に侍し。蓮華臺上薰風を掬す。人人王三昧に安住して。戒德莊嚴す動靜の中。

新潟縣安國山東龍寺戒會

東龍現瑞降慈雨　北越山河澤普滋　綠樹遍聯甘露玉　叢林放得戒光奇

新潟縣安國山東龍寺戒會――東龍瑞を現はして慈雨を降し。北越の山河澤普く滋し。綠樹遍く甘露の玉を聯ね。叢林放ち得たり戒光の奇なるを。

富山縣眼目山立山寺戒會迎聖

瞻仰立山古道場　人天眼目法中王　戒壇嚴飾迎三寶　錦上敷花放瑞光

富山縣眼目山立山寺戒會迎聖――瞻仰す立山の古道場。人天の眼目法中の王。戒壇嚴飾して三寶を迎へ。錦上花を敷いて瑞光を放つ。

北道院淨源風竹居士

河水逆流歸淨源　風松雨竹轉傷魂　爲君嚴飾菩提道　觸處打開正覺門

北道院淨源風竹居士――河水逆流して淨源に歸し。風松雨竹轉た魂を傷む。君が爲めに菩提道を嚴飾し。觸處に打開す正覺の門。

送高島平三郎氏代表少年團渡歐　二首

に散ずるを。餘香猶ほ滿山を覆うて奇なり。

鹿山院全德宗文居士　鈴木惣兵衛君

報答四恩事濟生　敬崇三寶守以誠　安民護國全終始　德化長留賢者名

鹿山院全德宗文居士——四恩に報答して濟生を事とし。三寶を崇敬して守るに誠を以てす。民を安んじ國を護りて終始を全うし。德化長く留む賢者の名。

賀長性山清閑寺本堂落成入佛

清閑靈境殿堂成　三寶長兼日月明　諸佛舒眉陞寶座　叢林齊發唄歌聲

長性山清閑寺の本堂落成入佛を賀す——清閑の靈境殿堂成り。三寶長く兼ぬ日月の明。諸佛眉を舒べて寶座に陞り。叢林齊しく發す唄歌の聲。

見陽山光明寺入佛法會

瞻仰見陽新殿堂　光明臺上更添光　聖賢携手臨蓮座　普令人天頌吉祥

見陽山光明寺入佛法會——瞻仰す見陽の新殿堂。光明臺上更に光を添ふ。聖賢手を携へて蓮座に臨み。普く人天をして吉祥を頌せしむ。

山形縣天理山耕福寺戒會完戒示衆

天理山頭侍大雄　蓮華臺上揖薰風　人人安住王三昧　戒德莊嚴動靜中

名古屋市金剛山長榮寺戒會

長榮殿上聞華藏　百億須彌等放光　春滿禪林花織錦　莊嚴覺道戒雲香

名古屋市金剛山長榮寺戒會――長榮殿上華藏を聞き。百億の須彌等しく放光す。春は禪林に滿ちて花錦を織り。覺道を莊嚴して戒雲香し。

名古屋市松峰山清音寺戒會

高設戒壇請聖賢　莊嚴覺道利人天　鳥歌花笑松峰曉　一味清音漲法筵

名古屋市松峰山清音寺戒會――高く戒壇を設けて聖賢を請じ。覺道を莊嚴して人天を利す。鳥歌ひ花笑ふ松峰の曉。一味の清音法筵に漲る。

大坂府鹽増山大廣寺戒會

建立法幢開戒藏　欲酬祖德拜餘光　百花競瑞鹽增頂　無影樹邊風自香

大坂府鹽增山大廣寺戒會――法幢を建立して戒藏を開き。祖德に酬いんと欲して餘光を拜す。百花瑞を競ふ鹽增の頂き。無影樹邊風自から香し。

久寶前住貫道師牌前燒香

德光應物立風規　斯道一以能貫之　不恨老櫻花已散　餘香猶覆滿山奇

久寶前住貫道師の牌前燒香――德光物に應じて風規を立つ。斯道一以て能く之を貫く。恨みず老櫻花已

柔和忍辱守以眞　孝順慈悲自潤身　若識平常心是道　坤光淑德與時新
婦人會大會——柔和忍辱守るに眞を以てし。孝順慈悲自から身を潤す。若し平常心是れ道なるを識らば。坤光淑德時と與に新ならん。

釋尊像開眼

瞻仰總持萬德身　莊嚴久遠實成人　即今拈出龜毛筆　五眼圓明照鑑新
釋尊像の開眼——總持萬德の身を瞻仰して　莊嚴す久遠實成の人。即今拈出す龜毛の筆。五眼圓明照鑑新なり。

長野縣陽光山玄照寺戒會

彩霞圍繞祇園春　覺道莊嚴玆送眞　錦上敷花玄照境　陽光長與德光新
長野縣陽光山玄照寺戒會——彩霞圍繞す祇園の春。覺道莊嚴玆に眞を送る。錦上花を敷く玄照の境。陽光長く德光と新なり。

同與吉家翁

仁以爲樂義以怡　懿德彰彰仰壽碑　薫化普敷玄照境　陽光滿地帶春熙
同じく吉家翁に與ふ——仁以て樂と爲し義以て怡ぶ。懿德彰彰壽碑を仰ぐ。薫化普く敷く玄照の境。陽光滿地春熙を帶ぶ。

福岡縣白鳥山道成寺戒會——殿閣を造營して宗光を恢め。戒壇を嚴飾す新覺場。白鳥花を銜む成道の座。人天手を攜へて華藏に入る。

福岡市太湖山安國寺戒會

老櫻漏笑賑華藏　風滿大湖雨亦香　萬古青山曾不動　白雲遮莫去來忙

福岡市太湖山安國寺戒會——老櫻笑を漏して華藏を賑はし。風は太湖に滿ちて雨亦た香し。萬古青山曾て動ぜず。白雲遮莫あれ去來忙し。

與承天堂金武良夫氏

醫國醫身出至仁　囘生德屬承天人　滿庭泉石富仙趣　卉木齊開不老春

承天堂金武良夫氏に與ふ——國を醫し身を醫するも至仁に出づ。囘生の德は屬す承天の人。滿庭の泉石仙趣に富み。卉木齊しく不老の春に開く。

長崎市海雲山皓臺寺戒會

蝴蝶夢醒花謝枝　餘香郁郁徹禪帷　皓臺千古無移動　依舊海雲倚嶮巇

長崎市海雲山皓臺寺戒會——蝴蝶夢醒めて花枝を謝し。餘香郁郁として禪帷に徹す。皓臺千古移動無く。舊に依つて海雲嶮巇に倚る。

婦人會大會

に通じ。放光動地三門を照らす。

大慈寺祖塔參拜

瞻仰法皇古道場　滿山花卉帶餘光　春秋六百今猶古　祖德分明無盡藏

大慈寺祖塔參拜——瞻仰す法皇の古道場。滿山の花卉餘光を帶ぶ。春秋六百今猶ほ古へのごとく。祖德分明なり無盡藏。

天草古城山遍照院戒會往途海上作

回汀曲浦繞仙洲　烟島霞巖眼下浮　數點帆船檣影靜　往還穿浪不驚鷗

天草古城山遍照院戒會往途海上の作——回汀曲浦仙洲を繞り。烟島霞巖眼下に浮ぶ。數點の帆船檣影靜なり。往還浪を穿てども鷗驚かず。

天草向陽山明德寺戒會

三寶圓融放戒光　一心明德露堂堂　蓮華臺上無邊瑞　直在向陽不覆藏

天草向陽山明德寺戒會——三寶圓融戒光を放ち。一心の明德露堂堂。蓮華臺上無邊の瑞。直に向陽に在つて覆藏せず。

福岡縣白鳥山道成寺戒會

造營殿閣恢宗光　嚴飾戒壇新覺場　白鳥銜花成道座　人天携手入華藏

盛岡市奕葉山久昌寺戒會

久昌堂裏戒門開　嚴淨毘尼接四來　十六摩尼光燦爛　聖凡携手上蓮臺

盛岡市奕葉山久昌寺戒會――久昌堂裏戒門開け。毘尼を嚴淨して四來を接す。十六の摩尼光燦爛。聖凡手を携へて蓮臺に上る。

成海九鬼隆一閣下七十七壽詞

福慧莊嚴喜壽春　凌霜氣節獨超倫　知君愛國誠忠志　凝作金剛不老身

成海九鬼隆一閣下の七十七壽詞――福慧莊嚴す喜壽の春。霜を凌ぐの氣節獨り倫を超ゆ。知る君が愛國誠忠の志。凝つて金剛不老の身と作ることを。

祝高楠順次郎氏嚴父孫三郎正春翁八十壽

二諦莊嚴八十春　信以爲福法爲身　渾身歸命無量壽　妙樂長存法悅人

高楠順次郎氏嚴父孫三郎正春翁の八十壽を祝す――二諦莊す嚴八十春。信以て福と爲し法を身と爲す。渾身歸命す無量壽。妙樂長く存す法悅の人。

佐世保市放光山西方寺仁王尊記念法要

堂堂安座仁王尊　威德莊嚴護覺園　道自西方通法界　放光動地照三門

佐世保市放光山西方寺仁王尊記念法要――堂堂安座す仁王尊。威德莊嚴覺園を護る。道は西方より法界

大正茲迎丙寅春　臺南遙想瑞光新　誰知家國興隆訣　獨屬聖心修養人

臺南の鐵關居士に贈る——大正茲に迎ふ丙寅の春。臺南遙に想ふ瑞光の新なるを。誰か知らん家國興隆の訣。獨り聖心修養の人に屬す。

眞島福藏氏金婚式

琴瑟相和五十春　門庭嘉運與年新　蓬萊瑞氣南山壽　總屬乾坤一德人

眞島福藏氏の金婚式——琴瑟相和す五十春。門庭の嘉運年と新なり。蓬萊の瑞氣南山の壽。總て乾坤一德の人に屬す。

題西行望富嶽圖

富嶽摩霄映碧灣　孤僧放杖望雲寰　無心開盡禪天地　山見人兮人見山

西行富嶽を望むの圖に題す——富嶽霄を摩して碧灣に映じ。孤僧杖を放ちて雲寰を望む。無心開き盡す禪天地。山は人を見人は山を見る。

蕉中院殿即法有堅大居士十三回忌　山座圓次郎氏

蝶翎泯影十三年　覺性元非幻夢邊　一點靈光長不滅　蓮華臺畔制機先

蕉中院殿即法有堅大居士十三回忌——蝶翎影を泯じて十三年。覺性元と幻夢の邊に非ず。一點の靈光長に滅せず。蓮華臺畔機先を制す。

圓福山妙嚴寺太祖大遠忌――萬德を總持して人天を照し。祖室燈を傳ふ六百年。諸嶽長く懐く空界の月。
夜來影を移して豐川に印す。

祝松原榮之和尚晉山龍登院

吉祥園裏打拈花　又入龍登雨法華　甘露慈雲何有極　肩頭擔箇佛袈裟

松原榮之和尚の龍登院に晉山するを祝す――吉祥園裏拈花を打し。又た龍登に入つて法華を雨ふらす。
甘露慈雲何ぞ極り有らん。肩頭擔ふ箇の佛袈裟。

駒澤大學太祖降誕會

眞人現迹洛之鄉　大地山河致吉祥　珍重幽庭霜下菊　香薰一萬四千芳

駒澤大學太祖降誕會――眞人迹を現ず洛の鄉。大地山河吉祥を致す。珍重す幽庭霜下の菊。香は薰ず一
萬四千の芳。

三州萬年山東漸寺戒會

東漸宗風樹德基　園林鬱罩萬千烟　卽今嚴飾華藏刹　珍重虛空笑展眉

三州萬年山東漸寺戒會――東漸の宗風德基を樹ゑ。園林鬱として罩む萬千の烟。卽今嚴飾す華藏刹。
珍重す靈空笑つて眉を展ぶるを。

贈臺南鐵關居士

明圀外渾身を現す。

祝赤柴八重藏君卒業陸軍大學赴任朝鮮大邱

至誠常佩活人劍　凝爲正氣發爲忠　智能操節磨金鐵　雞林隨處扇仁風

赤柴八重藏君が陸軍大學を卒業して朝鮮大邱に赴任するを祝す――至誠常に佩ぶ活人劍。凝つて正氣と爲り發して忠と爲る。智能操節金鐵を磨し。雞林隨處に仁風を扇ぐ。

泰仙忠榮居士七周忌

眞身恬泰絕煩纏　純信忠誠侍大仙　覺界歸崇三寶德　恩榮長結淨邦緣

泰仙忠榮居士七周忌――眞身恬泰煩纏を絕ち。純信忠誠大仙に侍す。覺界歸崇す三寶の德。恩榮長く結ぶ淨邦の緣。

三重縣涌金山養泉寺戒會

秋暮禪庭落葉堆　霜林靜處戒門開　養泉印出華藏月　影自千光王座來

三重縣涌金山養泉寺戒會――秋暮れて禪庭落葉堆く。霜林靜なる處戒門開く。養泉印出す華藏の月。影は千光王座より來る。

圓福山妙嚴寺太祖大遠忌

總持萬德照人天　祖室傳燈六百年　諸嶽長懷空界月　夜來移影印豐川

### 題餅舍

趣味雅懷最絶倫　超凡越聖是天眞　高風凌駕雲門境　餅舍收來四海珍

餅舍に題す――趣味雅懷最も絶倫。超凡越聖是れ天眞。高風雲門の境を凌駕して。餅舍收め來る四海の珍。

名古屋市天長山久國寺戒會

特地莊嚴古道場　聖賢携手入華藏　天長地久人皆揖　瞻仰戒光添國光

名古屋市天長山久國寺戒會――特地莊嚴す古道場。聖賢手を携へて華藏に入る。天長地久人皆な揖み。瞻仰す戒光の國光を添ふを。

名古屋市法王山善光寺戒會

善根山上放慈光　功德林中發戒香　此處應知安樂土　法王垂手擁華藏

名光屋市法王山善光寺戒會――善根山上慈光を放ち。功德林中戒香を發す。此處應に知るべし安樂土。法王手を垂れて華藏を擁す。

光輪不明老師廿七周忌

智光若日影成輪　德化如花香襲人　觸處全提高祖道　幽明圈外現渾身

光輪不明老師廿七周忌――智光日の若く影輪を成し。德化花の如く香人を襲ふ。觸處全提す高祖道。幽

勤儉力行能廣業　夙緣難遁忽歸空　慈光豈隔幽明境　佛界已觀覺道通

渡邊松太郎君を弔ふ――勤儉力行能く業を廣め。夙緣遁れ難く忽ち空に歸す。慈光豈に隔てんや幽明の境。佛界既に觀る覺道の通ずるを。

小野光景氏七周忌

寂後閲年已七周　知君常打淨邦遊　菩提園裏心華綻　薰出千林一樣秋

小野光景氏の七周忌――寂後年を閲する已に七周。知る君が常に淨邦の遊を打することを。菩提園裏心華綻び。薰出す千林一樣の秋。

愛知縣天桂山廣濟寺戒會

廣濟堂中瑞色開　戒雲回繞寶蓮臺　禪天托出眞如月　影自千光王座來

愛知縣天桂山廣濟寺戒會――廣濟堂中瑞色開き。戒雲回り繞る寶蓮臺。禪天托出す眞如の月。影は千光王座より來る。

三重縣龍松山養泉寺戒場

流通洞水養源泉　種殖靈苗賑福田　更設戒壇期熟脫　華藏開盡利人天

三重縣龍松山養泉寺戒場――洞水を流通して源泉を養ひ。靈苗を種殖して福田を賑はす。更に戒壇を設けて熟脫を期し。華藏開き盡して人天を利す。

山形縣大慈山長谷寺戒場――長谷深沈として梵筵を護り。秋澄んで喜び見る戒光の鮮なるを。誰か知らん靈鷲山頭の月。偏に大慈那畔に向つて圓なり。

祝首座祖庭廓仙

掬得清源無底泉　拈篦長谷半庭烟　須期却後彌精進　扶起眞風奉大仙

首座祖庭廓仙を祝す――清源無底の泉を掬し得て。篦を拈ず長谷半庭の烟。須らく期すべし却後彌〻精進し。眞風を扶起して大仙に奉せんことを。

勅額慶賛供養

曇華現瑞覆人天　諸嶽流芳六百年　聖德垂恩賜御額　法燈添耀大慈筵

勅額慶賛供養――曇華瑞を現はして人天を覆ひ。諸嶽芳を流す六百年。聖德恩を垂れて御額を賜ひ。法燈耀を添ふ大慈の筵。

阿保原地藏尊銅像開眼

金剛鑄出願王尊　默耀靈通六道門　杓底湛來無限水　化成甘露潤乾坤

阿保原地藏尊銅像の開眼――金剛鑄出す願王尊。默耀靈通す六道の門。杓底湛へ來る無限の水。化して甘露と成り乾坤を潤す。

弔渡邊松太郎君

宇橋邊の月。影は三縁山上に向つて圓なり。

詠山鹿素行

智德錬磨金鐵身　訓言說出義兼仁　護國威靈未曾滅　發爲明治維新春

山鹿素行を詠ず——智德錬磨す金鐵の身。訓言說き出して義仁を兼ぬ。護國の威靈未だ曾て滅せず。發じて明治維新の春と爲る。

祝花月園創業十周年　大入辨財天入佛式併行

南無大入辨財天　花月園名四海傳　正是東洋安養土　來人福壽自相完

花月園創業十周年 大入辨財天入佛式を併せ行ふ——南無大入辨財天。花月園の名は四海に傳ふ。正に是れ東洋の安養土。來る人は福壽自から相完し。

祝其潭堂龜昇翁七十

身如潭水心如月　慣跡蕉風獨自怡　孰識先生長壽訣　從心所欲不踰規

其潭堂龜昇翁の古稀を祝す——身は潭水の如く心は月の如く。跡を蕉風に慣うて獨り自から怡む。孰か識らん先生長壽の訣。心の欲する所に從つて規を踰えず。

山形縣大慈山長谷寺戒場

長谷深沈護梵筵　秋澄喜見戒光鮮　誰知靈鷲山頭月　偏向大慈那畔圓

永巖寺泰輪師七十七壽詞

齡迎喜壽氣如春　禪室常觀瑞色新　明月清風須不盡　閒雲野鶴足頤神

永巖寺泰輪師の七十七壽詞——齡喜壽を迎へて氣春の如く。禪室常に觀る瑞色の新なるを。明月清風須らく不盡なるべし。閒雲野鶴神を頤ふに足る。

與大石大梅師

心似春風身似梅　揮毫忽畫萬株梅　瓊花招鳥幽香動　一幅乾坤只是梅

大石大梅師に與ふ——心は春風に似て身は梅に似たり。毫を揮つて忽ち畫く萬株の梅。瓊花鳥を招いて幽香動き。一幅の乾坤只だ是れ梅。

次坂卷橘軒韻

仙園橘柚帶霜黃　金顆曾聞獻聖明　割愛賜全情太厚　喫來猶覺衲衣香

坂卷橘軒の韻を次ぐ——仙園の橘柚霜を帶びて黃み。金顆曾て聞く聖明に獻ずと。割愛賜全情太だ厚く。喫し來つて猶ほ覺ゆ衲衣の香しきを。

總持寺增上寺提携議成

道徹眞源淨卽禪　相携共棹合同船　玲瓏白字橋邊月　影向三緣山上圓

總持寺增上寺提携の議成る——道眞源に徹すれば淨卽ち禪。相携へて共に棹す合同船。玲瓏たる白

衆鶴踊兮羣鳳舞　村歌社飲也奇哉　誰知脚亂手忙裏　自有容姿合節來

盆踊――衆鶴踊り羣鳳舞ひ。村歌社飲也た奇なる哉。誰か知らん脚亂手忙の裏。自から容姿の節を合し來る有り。

新潟縣龍谷院内尼衆學林講堂落成式

龍谷曾開尼學園　增添黌舍奉宗門　二嚴三德彌精進　修業須期報四恩

新潟縣龍谷院内尼衆學林講堂の落成式――龍谷曾て開く尼學園。黌舍を增添して宗門に奉す。二嚴三德彌々精進し。修業須らく四恩に報ぜんことを期すべし。

隻履達磨

背却少林五葉春　枯笻好托水雲身　天涯萬里西乾路　風月總歸隻履人

隻履の達磨――背却す少林五葉の春。枯笻好し水雲の身を托するに。天涯萬里西乾の路。風月總て隻履の人に歸す。

祝中西重造君就任鶴見町長

千般事業守以誠　不怪此人有令名　月照鶴灣雲忽霽　衆流歸海玉波平

中西重造君の鶴見町長に就任するを祝す――千般の事業守るに誠を以てす。怪まず此人令名有ることを。月は鶴灣を照して雲忽ち霽れ。衆流海に歸して玉波平なり。

成澤山龍雲寺授戒會――道場を嚴飾して聖賢を迎へ。戒光月の如く影孤圓。神龍瑞を現はし雲は澤を成し。洗淨す上條の第一天。

### 題鬼念佛圖

佛心鬼面太風流　三界四生恣戲遊　寄語世間求道客　菩提元在念珠頭

鬼念佛の圖に題す――佛心鬼面太だ風流。三界四生戲遊を恣にす。語を寄す世間求道の客。菩提元と念珠頭に在り。

### 寶林山定正院開山上供

曇華現瑞遠傳香　鬱密寶林聯玉芳　珍重禪庭雲靜處　打開山紫水明鄉

寶林山定正院開山上供――曇華瑞を現はして遠く香を傳へ。鬱密たる寶林玉を聯ねて芳し。珍重す禪庭雲靜なる處。打開す山紫水明の鄉。

### 偶吟

雨滴聲聲和梵音　慈雲長在寶林岑　再來留錫神仙境　山色溪聲禪味深

偶吟――雨滴聲聲梵音に和し。慈雲長く寶林の岑に在り。再來錫を神仙境に留むれば。山色溪聲禪味深し。

### 盆歸

開く清淨の土。樹林便ち是れ祖師の心。

祝圓通大愚住津川正法寺

禪杖已挑正法符　揮龜毛拂接江湖　麒麟山上雲聯錦　賀水波頭月轉珠

圓通大愚の津川正法寺に住するを祝す――禪杖已に挑く正法の符。龜毛の拂を揮つて江湖を接す。麒麟山上雲錦を聯ね。賀水の波頭月珠を轉す。

題本間新作翁壽像

勸農益世老彌雄　官民誰不頌其功　天賞下兮銅像就　溫容常帶壽仙風

本間新作翁の壽像に題す――農を勸め世を益し老いて彌々雄なり。官民誰か其功を頌せざらん。天賞下つて銅像就り。溫容常に壽仙の風を帶ぶ。

祝渡邊莊輔氏創業百二十年

創業一百二十年　積善餘慶家運全　孝子順孫交養德　勤儉恭恕皆則天

渡邊莊輔氏の創業百二十年を祝す――創業一百二十年。積善の餘慶家運全し。孝子順孫交々德を養ひ。勤儉恭恕皆な天に則る。

成澤山龍雲寺授戒會

嚴飾道場迎聖賢　戒光如月影孤圓　神龍現瑞雲成澤　洗淨上條第一天

山形縣手藏山長淵寺授戒會

禪海風淸玉浪皺　長淵堪攝活金鱗　慈舟棹入華藏界　刧外春光特地新

山形縣手藏山長淵寺授戒會——禪海風淸くして玉浪皺み。長淵攝するに堪へたり活金鱗。慈舟棹し入る華藏界。刧外の春光特地新なり。

善寶寺卅七世梅瑞月乘大和尙眞前燒香

五十八年夢一場　只看遺德璨傳光　吾今寄錫已君去　設拜眞前空斷腸

善寶寺卅七世梅瑞月乘大和尙眞前燒香——五十八年夢一場。只だ看る遺德の璨として光を傳ふを。吾れ今寄錫すれば已に君は去る。拜を眞前に設けて空しく斷腸。

金剛山溫光寺白峰鐵雲和尙五十周忌

雲老謝緣五十年　嶺翁辭世歲已遷　二師皮肉今猶煖　堪見溫光漲法筵

金剛山溫光寺白峰鐵雲和尙の五十周忌——雲老緣を謝して五十年。嶺翁世を辭して歲已に遷る。二師の皮肉今猶ほ煖かに。見るに堪へたり溫光の法筵に漲るを。

福島縣小荒山安勝寺法要

小荒山靜化門深　安勝境幽塵不侵　殿閣自開淸淨土　樹林便是祖師心

福島縣小荒山安勝寺法要——小荒山は靜にして化門深く。安勝の境幽にして塵侵さず。殿閣自から

濟世陰功德澤深　滿腔渾是活人心　大道圓通生滅外　覺華長發菩提林

環醫士肖像の贊――濟世の陰功德澤深く。滿腔渾て是れ活人心。大道圓通す生滅の外。覺華長く發く菩提の林。

山口縣永珠山安養寺戒會

美哉山紫水明鄉　況復廣開功德藏　滿目莊嚴安養土　永珠顆顆放靈光

山口縣永珠山安養寺戒會――美なる哉山紫水明の鄉。況んや復た廣く功德藏を開くをや。滿目莊嚴す安養土。永珠顆顆靈光を放つ。

與天德寺永井大曉師

檀林往昔同螢雪　屈指經過四十年　相遇且欣知己健　喫茶話盡舊因緣

天德寺永井大曉師に與ふ――檀林往昔螢雪を同にし。屈指すれば經過す四十年。相遇うて且つ欣ぶ知己の健なるを。茶を喫して話し盡す舊因緣。

深谷錦岳翁七十七壽詞

錦老玆迎喜壽年　蓬萊堪祝地行仙　先生更有長生訣　物外淸娛畫裏禪

深谷錦岳翁の七十七壽詞――錦老玆に迎ふ喜壽の年。蓬萊祝するに堪へたり地行の仙。先生更に長生の訣有り。物外の淸娛畫裏の禪。

福井縣圓通山永賞寺戒會——一信能く生ず二八の禁。圓通五五も亦た唯心。仰ぎ觀る永賞華藏の會。滿地莊嚴す功德林。

次曹紹山永建寺主惠韻

曹紹山深帶紫烟　千林綠意亦新鮮　道人常在紅塵外　應化無方倣大仙

曹紹山永建寺主の惠韻を次ぐ——曹紹山深うして紫烟を帶び。千林の綠意亦た新鮮。道人常に紅塵の外に在り。應化無方大仙に倣ふ。

島根縣寶祐山永昌寺戒會

道依信念續彌彰　人待戒行德永昌　賢聖相携臨此會　等令羣類入華藏

島根縣寶祐山永昌寺戒會——道は信念に依り續いて彌ゝ彰かに。人は戒行を待つて德永く昌ゆ。賢聖相携へて此會に臨み等しく羣類をして華藏に入らしむ。

次松江東岳寺主賚韻

道盟曩日宿幽廬　屈指過來十歲餘　再會松陽山水美　碧雲湖畔霧晴初

松江東岳寺主の賚韻を次ぐ——道盟曩日幽廬に宿し。屈指すれば過ぎ來る十歲餘。再會す松陽山水の美。碧雲湖畔霧晴るゝ初め。

環醫士肖像賛

然として存す。

明治天皇頌德記念觀音大士開眼式拈香

露出金剛丈六身　瑞雲垂影鶴山春　仰觀明治聖皇德　手眼放光照鑑新

明治天皇頌德記念觀音大士開眼式拈香——露出す金剛丈六の身。瑞雲影を垂る鶴山の春。仰ぎ觀る明治聖皇の德。手眼光を放つて照鑑新なり。」

祝新潟農政發刊

富國之基在農政　智以興業德以全　欣君濟世利民志　筆钁文耕開福田

『新潟農政』の發刊を祝す——富國の基は農政に在り。智以て業を興し德以て全うす。欣ぶ君が濟世利民の志。筆钁文耕福田を開くを。

愛知縣海岸山玉林齋授戒會

玉林清處戒華開　羣鳥舞霞降梵臺　四衆等遊木叉會　仰瞻賢聖入場來

愛知縣海岸山玉林齋授戒會——玉林清き處戒華開き。羣鳥霞に舞うて梵臺に降る。四衆等しく遊ぶ木叉の會。仰ぎ瞻る賢聖場に入り來るを。

福井縣圓通山永賞寺戒會

一信能生二八禁　圓通五五亦唯心　仰觀永賞華藏會　滿地莊嚴功德林

和江州塚本源三郎氏山色連天賚韻

律轉鴻鈞淑氣通　湖光十里水涵空　連天山色含霞秀　影動銀波玉浪中

江州塚本源三郎氏が山色連天の賚韻に和す――律鴻鈞を轉じて淑氣通じ。湖光十里水空を涵す。天に連なる山色霞を含んで秀で。影は動く銀波玉浪の中。

爲龍洞院中興開基青沼彦治氏

誠忠篤孝義而仁　深信洪慈善且眞　況復中興龍洞德　現成衆寶妙嚴春

龍洞院中興開基青沼彦治氏の爲めに――誠忠篤孝義にして仁。深信洪慈善且つ眞なり。況んや復た龍洞を中興するの德。現成す衆寶妙嚴の春。

弔誠忠院節堂義孝居士　陸軍大將奈良武治氏令嗣砲兵中尉三郎君

一片丹心如錦繡　忠勇爲緯孝爲經　休言四大歸空了　萬世長存護國靈

誠忠院節堂義孝居士を弔ふ――一片の丹心錦繡の如く。忠勇緯と爲り孝經と爲る。言ふを休めよ四大空に歸し了んぬと。萬世長く存す護國の靈。

弔大庭柯公

英靈氣宇呑乾坤　筆劍舌刀雷電奔　凛凛雄飛天下志　幽明圈外儼然存

大庭柯公を弔ふ――英靈の氣宇乾坤を呑み。筆劍舌刀雷電奔る。凛凛たる雄飛天下の志。幽明圈外儼

此曉聖皇拜四方　恩光所照沒封疆　連天山色含春象　一帶烟霞瑞氣昌

久保田實宗師が新年の韻を次ぐ――此曉聖皇四方を拜し。恩光照す所封疆沒し。天に連なる山色春象を含み。一帶の烟霞瑞氣昌なり。

贈黃檗山普茶白雲菴

春珍京菜夏茄子　秋嗜菊花冬大根　一喫能知澹中味　茗蔬皆足供盤飧

黃檗山普茶白雲菴に贈る――春は京菜を珍とし夏は茄子。秋は菊花を嗜み冬は大根。一喫能く知る澹中の味。茗蔬皆な盤飧に供するに足る。

呈弘津說三老師

虛空發響聲彌大　妙韵祇當默處知　一洞閒雲凝不散　堪觀心月映瑤池

弘津說三老師に呈す――虛空響を發して聲彌〻大に。妙韵祇だ當に默處に知るべし。一洞閒雲凝つて散せず。觀るに堪へたり心月の瑤池に映ずるを。

田中惣七郎翁七十七壽詞

仁者玆迎喜字齡　猶以義俠鍊身形　此翁福壽當無盡　志操如花德愈馨

田中惣七郎翁の七十七壽詞――仁者玆に喜字の齡を迎へ。猶ほ義俠を以て身形を鍊る。此翁の福壽當に盡くること無く。志操花の如く德愈〻馨る。

分福茶釜の贊――守鶴茂林に幾たびか春を閲し。一朝變現す老狸の身。生を濟ひ福を分つは家常の事。道ふ莫れ靈機妙にして神に似たりと。

題山水圖

四海五湖龍世界　十洲三島鶴乾坤　孤舟占斷天眞樂　笑殺人間名利喧

山水の圖に題す――四海五湖は龍の世界。十洲三島は鶴の乾坤。孤舟占斷す天眞の樂み。笑殺す人間名利の喧。

祝香浦本間健氏六十

報效丹心則古賢　齡迎華甲志逾堅　經營悉出從忠孝　此老宜呼護國仙

香浦本間健氏の六十を祝す――報效の丹心古賢に則り。齡華甲を迎へて志逾ゝ堅し。經營は悉く忠孝より出づ。此老宜しく護國の仙と呼ぶべし。

日比野雷風別邸橫濱如是菴與德富蘇峰相會享饗

瀟洒禪菴淨沒塵　此中誰主又誰賓　雨奇晴好唯如是　話盡山雲海月眞

日比野雷風の別邸橫濱如是菴に德富蘇峰と相會して饗を享く――瀟洒たる禪菴淨くして塵沒く。此中誰れか主ぞ又た誰れか賓ぞ。雨奇晴好唯だ是くの如し。話し盡す山雲海月の眞。

次久保田實宗師新年韻

を含み。紫雲横ざまに染む明けんと欲するの天。

次愛梅閣主人北洲新年韻

六十六齡不老春　喜君吟骨與年新　笑他走利奔名客　爭似愛梅閣上人

愛梅閣主人北洲が新年の韻を次ぐ——六十六齡不老の春。喜ぶ君が吟骨年と新なることを。笑他す走利奔名の客。爭か似ん愛梅閣上の人。

次等觀居士韻

老松千尺傲霜華　每遇嚴寒翠愈加　君子更添春色瑞　胸襟宛是白梅花

等觀居士の韻を次ぐ——老松千尺霜華に傲り。嚴寒に遇ふ每に翠愈〻加はる。君子更に春色の瑞を添へ。胸襟宛も是れ白梅花。

祝安樂泰苗師七十

遐齡迎得古稀春　福壽自歸安樂人　歡喜堂中禪界濶　莫言吾是病餘身

安樂泰苗師の古稀を祝す——遐齡古稀の春を迎へ得て。福壽自から歸す安樂の人。歡喜堂中禪界濶く。言ふ莫れ吾れは是れ病餘の身と。

分福茶釜贊

守鶴茂林幾閱春　一朝變現老狸身　濟生分福家常事　莫道靈機妙似神

の禪を弘通せんことを。

寄木童

鶴嶺魚河同一家　新年佛法付梅花　乾坤等浴東皇化　山色連天半帶霞

木童に寄す——鶴嶺と魚河と同一家。新年の佛法梅花に付す。乾坤等しく浴す東皇の化。山色天に連つて半ば霞を帶ぶ。

次鷲峰道人新年吟韻　二首

鐘聲報曉歲茲回　春向鷲峰高處開　山色連天帶霞狀　形容宛是紫蓮臺

鷲峰道人が新年吟の韻を次ぐ——鐘聲曉を報じて歲茲に回り。春は鷲峰高き處に向つて開く。山色天に連なり帶霞の狀。形容宛も是れ紫蓮臺。

珍重梅花獨占先　德行慚我辱前賢　四恩難報身既老　大正空迎乙丑年

珍重す梅花の獨り先を占むるを。德行慚づ我が前賢を辱しむるを。四恩報じ難くして身既に老い。大正空しく迎ふ乙丑の年。

次島田町長鹽置氏韻

新年尙未上詩篇　瑞氣既浮東海邊　房總連峰含薄霧　紫雲横染欲明天

島田町長鹽置氏の韻を次ぐ——新年尙ほ未だ詩篇に上らず。瑞氣既に浮ぶ東海の邊。房總の連峰薄霧

三元瑞氣薫都鄙　祝聖先期奉詔旨　淬勵希固興國基　倶揚大正維新美

大正十四乙丑の新年――三元の瑞氣都鄙に薫じ。祝聖先づ期す詔旨を奉ぜんことを。淬勵希くは興國の基を固め。倶に揚げん大正維新の美。

同　寄木人社

暦改祥雲滿帝城　寒巖已見彩霞横　禪床夢覺吾忘我　一段工夫在雨聲

同じく木人社に寄す――暦改つて祥雲帝城に滿ち。寒巖已に見る彩霞の横はるを。禪床夢覺めて吾れ我を忘る。一段の工夫雨聲に在り。

寄新潟公友社主若井種次郎氏

公人豈可無公友　博愛共存交愈親　淬勵期揚文化美　開明嘉運與年新

新潟公友社主若井種次郎氏に寄す――公人豈に公友無かるべけんや。博愛共存交愈〻親し。淬勵期すらくは文化の美を揚げて。開明の嘉運年と新ならんことを。

新　年　吟

大正茲迎乙丑年　追懷往事意悽然　君恩祖德深於海　唯願弘通護國禪

新年吟――大正茲に迎ふ乙丑の年。往事を追懷して意悽然。君恩祖德海よりも深し。唯だ願はくは護國

本山成道會――端坐六年眼皮を穿ち。出山何ぞ入山の時に似ん。脚頭開破す圓通の路。枯木巖頭花自から披く。

六十自叙

六十一年漫算空　利生弘法愧無功　祖門猶抱興隆志　遮莫人呼還暦翁

六十自から叙す――六十一年漫に空を算し。利生弘法功無きを愧づ。祖門猶ほ抱く興隆の志。遮莫あれ人は還暦の翁と呼ぶ。

達磨贊

三秋航海入神丹　面壁九年毛骨寒　大丈夫存斯志氣　災餘何患復興難

達磨の贊――三秋海を航して神丹に入り。面壁九年毛骨寒し。大丈夫斯の志氣を存すれば。災餘何ぞ復興の難きを患へん。

祝長松院首座貫法默禪

貫道工夫只一誠　法門參徹養眞情　默然坐斷飲光座　禪月當軒照覺城

長松院首座貫法默禪を祝す――道を貫くの工夫は只だ一誠。法門參徹して眞情を養ふ。默然坐斷す飲光の座。禪月軒に當つて覺城を照らす。」

大正十四年乙丑

洞谷山永光寺上供——五老峰頭雲雨を釀し。天龍瑞を現して迅雷轟く。誰か知らん洞谷那邊の路。聽くに堪へたり當軒布皷の聲。

同　偶　感　二　首

洞谷深沈古道場　前樓後閣放遺光　休言開祖既過去　山月潤雲無盡藏

同じく偶感——洞谷深沈たり古道場。前樓後閣遺光を放つ。言ふを休めよ開祖既に過去すと。山月雲を潤して無盡藏。

何幸三登五老峰　深沈古殿白雲封　靈區自有溪山別　滿目總無非聖蹤

何の幸ぞ三たび五老峰に登る。深沈たる古殿白雲封ず。靈區自から溪山の別有り。滿目總て聖蹤に非ざるは無し。

祝久保田幸吉翁六十

六十一年曆日還　勵精嘗盡世途難　從斯鶴算彌添瑞　福海波平涵壽山

久保田幸吉翁の六十を祝す——六十一年曆日還り。勵精嘗め盡す世途の艱。」斯れ從り鶴算彌〻瑞を添へ。福海波平かにして壽山を涵す。

本山成道會

端坐六年穿眼皮　出山何似入山時　脚頭開破閫通路　枯木巖頭花自披

し。大圓鏡裏慈顏を現ず。

祝福嚴道賢建法幢

夙投雲洞搜眞源　忽使福嚴開化門　法旆高飜圓覺座　靈山一會儼然存

福嚴道賢の法幢を建つるを祝す――夙に雲洞に投じて眞源を搜り。忽ち福嚴の化門を開かしむ。法旆高く飜へる圓覺の座。靈山の一會儼然として存す。

太祖大遠忌奉告參拜永平寺承陽殿拈香

倣志總持開祖蹤　雲程遙上吉祥峰　溪聲山色今猶古　梵唄和風透傘松

太祖大遠忌奉告參拜永平寺承陽殿の拈香――志を總持開祖の蹤に倣ひ。雲程遙に上る吉祥峰。溪聲山色今猶ほ古のごとく。梵唄風に和して傘松を透る。

白狐山豊財院拈香

薩埵垂迹白狐身　移錫莊嚴洞谷春　養福豊財皆祖德　聖蹤千古寶光新

白狐山豊財院拈香――薩埵迹を垂る白狐の身。錫を移して莊嚴す洞谷の春。福を養ふ豊財は皆な祖德。聖蹤千古寶光新なり。

洞谷山永光寺上供

五老峰頭雲靉雨　天龍現瑞迅雷轟　誰知洞谷那邊路　堪聽當軒布鼓聲

宗議會開會拈香

龍象相携禮祖眞　公論出自報恩純　斯場直是菩提座　願使宗光與世新

宗議會開會拈香――龍象相携へて祖眞を禮す。公論は報恩の純より出づ。斯場直に是れ菩提の座。願はくは宗光をして世と新ならしめんことを。

題有願和尚鍾馗圖

威風凛凛孰能當　活捉鬼魔驚四疆　忽現雄姿有願筆　金剛寶劍放神光

有願和尚鍾馗の圖に題す――威風凛凛孰れか能く當らん。鬼魔を活捉して四疆を驚かす。忽ち雄姿を現ず有願の筆。金剛の寶劍神光を放つ。

震火追悼

天柱崩兮地軸摧　四山交迫死屍堆　幽途幸有菩提道　珍重死中求活來

震火追悼――天柱崩れ地軸摧く。四山交〻迫つて死屍堆し。幽途幸に菩提道有り。珍重す死中活を求め來るを。

大圓玄致禪師征月忌

紹隆威德克移山　樓閣巍巍照鶴灣　玄路從來無罣礙　大圓鏡裏現慈顏

大圓玄致禪師征月忌――威德を紹隆して克く山を移し。樓閣巍巍として鶴灣を照らす。玄路從來罣礙無

日月交光照八紘　乾坤一德致昌平　萬邦齊仰無疆瑞　億兆歡呼葵藿傾

東宮殿下成婚慶事記念帖——日月光を交へて八紘を照し。乾坤德を一にして昌平を致す。萬邦齊しく無疆の瑞を仰ぎ。億兆歡呼して葵藿傾く。

題十牛圖

荒草堆中逸牧牛　追蹤捉影恨無休　忽然探得吾忘我　春水一溪和月流

十牛圖に題す——荒草堆中牧牛を逸し。蹤を追ひ影を捉へて恨み休む無し。忽然探し得て吾れ我れを忘る。春水一溪月を和して流る。

題尋牛圖

家牛一去在那邊　杖索携來幾喫顚　撥草瞻風休佇思　當頭何處火無烟

牛を尋ぬるの圖に題す——家牛一たび去つて那邊に在るや。杖索携へ來つて幾たびか喫顚す。撥草瞻風佇思することを休めよ。當頭何れの處か火に烟無からんや。

孝子大澤龍次郎氏考妣報恩行持

至孝深酬考妣恩　二施淨業賑山門　莊嚴無上菩提道　行願如華滿覺園

孝子大澤龍次郎氏考妣報恩行持——至孝深く考妣の恩に酬い。二施の淨業山門を賑はす。無上菩提の道を莊嚴して。行願華の如く覺園に滿つ。

人人日日戒光明　日日光輝覆八紘　法界莊嚴功德聚　乾坤無處不圓成

同じく完戒——人人日日戒光明かなり。日月の光輝八紘を覆ふ。法界莊嚴す功德聚。乾坤處として圓成ならざるは無し。

詣興津淸見寺

瞻仰駿陽古梵城　前樓後閣劃仙鄕　幾人來此參禪味　讀破山雲海月章

興津の淸見寺に詣づ——瞻仰す駿陽の古梵城。前樓後閣仙鄕を劃す。幾人か此に來つて禪味に參じ。讀破す山雲海月の章。

房州北條善導館開館　二首

人心羸弱國家危　剛健能堪固德基　珍重房陽禪道會　興隆正法護皇維

房州北條善導館開館——人心羸弱にして國家危し。剛健は能く德基を固むるに堪へたり。珍重す房陽の禪道會。正法を興隆して皇維を護る。

天災人禍恨何勝　先自精神要復興　莫言世道陵夷甚　國力希依會館增

天災人禍恨み何ぞ勝へん。先づ精神より復興せんことを要す。言ふこと莫れ世道陵夷甚しと。國力希くは會館に依つて增さんことを。

名古屋延巖山金仙寺授戒會太祖眞儀點眼——覺道留めず生死の塵。延巖山上全身を現ず。等閒に點破す金剛の眼。悲願緣に應じて照鑑新なり。

靜岡縣龍池山洞雲寺八體佛開眼

移來靈土劃神鄕　迎得八尊開道場　點出龍池山上月　洞雲深處放淸光

靜岡縣龍池山洞雲寺八體佛開眼——靈土を移し來つて神鄕を劃し。八尊を迎へ得て道場を開く。點出す龍池山上の月。洞雲深き處淸光を放つ。

遠州日照山圓成寺授戒會迎聖

秋風呼雨洗塵埃　百億華藏驀面開　戒德圓成賢聖道　等會緇素上蓮臺

遠州日照山圓成寺授戒會迎聖——秋風雨を呼んで塵埃を洗ひ。百億の華藏驀面に開く。戒德賢聖の道を圓成して。等しく緇素を會して蓮臺に上らしむ。

同　爲堂頭和尙祝功勳

卓錫圓成二十年　莊嚴梵宇接機緣　法幢添得華藏瑞　化德增輝日照巓

同じく堂頭和尙の爲めに功勳を祝す——錫を卓して圓成す二十年。梵宇を莊嚴して機緣を接す。法幢華藏の瑞を添へ得て。化德輝を增す日照の巓。

同　完戒

で叢林に澍ぐ。

賛養德玄潤師七十記念自筆達磨圖

在世一百二十年　西天東土一袈裟　今安單古稀翁室　坐斷乾坤獨結跏

養德玄潤師が七十記念の自筆達磨の圖に賛す――在世一百二十年。西天東土一袈裟。今古稀翁の室に安單し。乾坤を坐斷して獨り結跏す。

詠耶馬溪禪海堂

轉凡入聖徹禪源　鐵壁銀山鑿洞門　耶馬溪頭留聖跡　願行銷却累生寃

耶馬溪の禪海堂を詠ず――凡を轉じ聖に入り禪源に徹し。鐵壁銀山洞門を鑿つ。耶馬溪頭聖跡を留め。願行銷却す累生の寃。

題南泉斬猫圖

利刀斬斷一團疑　萬古仰看王老師　殺活靈機誰勘破　不知試問死猫兒

南泉猫を斬るの圖に題す――利刀斬斷す一團の疑。萬古仰ぎ看る王老師。殺活の靈機誰か勘破せん。知らず試に問へ死猫兒。

名古屋延巖山金仙寺授戒會太祖眞儀點眼

覺道不留生死塵　延巖山上現全身　等閒點破金剛眼　悲願應緣照鑑新

安全寺改宗三百年賦此

洞水洋洋攝百川　春秋三百潤無邊　戒雲圍繞華藏刹　無限恩香薫四筵

安全寺改宗三百年此を賦す――洞水洋洋百川を攝し。春秋三百潤ひ無邊。戒雲圍繞す華藏刹。無限の恩光四筵に薫ず。

賀朴堂佐藤寅二氏邸宅落成

屋宅新成對遠嵐　門庭瀟洒似僧藍　辭華守朴家常事　好托禪心法喜菴　菴號命名法喜

朴堂佐藤寅二氏の邸宅落成を賀す――屋宅新に成つて遠嵐に對し。門庭瀟洒僧藍に似たり。華を辭し朴を守る家常の事。好し禪心を托す法喜菴　菴號を法喜と命名す

瞻仰島津義弘公親作阿彌陀佛

無量光壽德維新　體得佛心彫佛身　慈照既融幽顯境　永留靈像度羣倫

島津義弘公親作の阿彌陀像を瞻仰す無――量の光壽德維れ新なり。佛心を體得して佛身を彫む。慈照既に幽顯の境を融じ。永く靈像を留めて羣倫を度す。

安全寺完戒

人人盡有光明在　百億華藏只一心　龍穩山頭奇特事　海雲呼雨澍叢林

安全寺完戒――人人盡く光明の在る有り。百億の華藏只だ一心。龍穩山頭奇特の事。海雲雨を呼ん

願行成滿戒門開　持地山頭瑞氣堆　賢聖相携臨此會　令人等上蓮華臺

新潟縣持地山願成寺戒會啓建――願行成滿戒門開き。持地山頭瑞氣堆し。賢聖相携へて此會に臨み。人をして等しく蓮華臺に上らしむ。

同　完戒

法門三學戒爲先　二八禁門悉攝禪　昨夜秋風吹碧落　慈雲法雨滿山川

同じく完戒――法門三學戒を先と爲す。二八の禁門悉く禪に攝す。昨夜秋風碧落を吹き。慈雲法雨山川に滿つ。

大分縣龍穩山安全寺授戒會啓建

滄海波平龍夢穩　禪山雲靜白雲幽　戒光劈動安全境　瑞氣氛氳罩梵樓

大分縣龍穩山安全寺授戒會啓建――滄海波平にして龍夢穩に。禪山雲靜にして白雲幽なり。戒光劈動す安全の境。瑞氣氛氳として梵樓を罩む。

同　明治天皇登遐十三年于茲奉修追悼會

聖皇崩御十三年　恩澤今猶臨九天　爲報海山無極徳　欲弘興國濟生禪

同じく明治天皇登遐より茲に十三年追悼會を奉修す――聖皇崩御して十三年。恩澤今猶ほ九天に臨む。海山無極の徳に報いんが爲めに。興國濟生の禪を弘めんと欲す。

震災後の光景を見る——聖地端無くも震災に遭ひ。復興既に見る曙光の開くを。靈感劫後威徳を添へ。豫想す殃を轉じ福と成し來るを。

與知客眞加部唯一力生

自從掛錫大雄嶺　致力山門十八年　忠直精勤誰能及　期君長護最乘筵

知客眞加部唯一力生に與ふ——錫を大雄の嶺に掛けてより。力を山門に致す十八年。忠直精勤誰か能く及ばん。期す君が長く最乘の筵を護らんことを。

松山丸殉難者追弔會

黑風蹴浪船舫碎　人事盡來終殉難　但有慈門通淨域　眞如海上佛天寛

松山丸殉難者追弔會——黑風浪を蹴つて船舫碎け。人事を盡し來つて終に難に殉す。但だ慈門の淨域に通ずる有り。眞如海上佛天寛し。

本山小參

驕陽八月颺炎塵　熱殺人間幾許人　賴有三松涼味動　梢頭昨夜掛霜輪

本山小參——驕陽八月炎塵を颺げ。熱殺す人間幾許の人。賴に三松涼味の動く有り。梢頭昨夜霜輪を掛く。

新潟縣持地山願成寺戒會啓建

の靈筆天機動き。織り出す雲烟人物の眞。

題如意菴

數朶閒雲鎖碧嵐　一林幽鳥護禪龕　此間休說人生苦　神靜心怡如意菴

如意菴に題す――數朶の閒雲碧嵐を鎖し。一林の幽鳥禪龕を護る。此間說くことを休めよ人生の苦。神は靜に心は怡む如意菴。

爲鶴峰松嘉上座

壽鶴舞風千仭峰　瑞龍吟霧萬年松　普門踏着圓通路　觸處悠悠樂此宗

鶴峰松嘉上座の爲めに――壽鶴風に舞ふ千仭の峰。瑞龍霧に吟ず萬年の松。普門踏着す圓通の路。觸處悠悠として此宗を樂しむ。

最乘寺夏期講習會

山上雨降山下晴　松杉密處白雲横　爲君開破禪天地　誰聽無情說法聲

最乘寺夏期講習會――山上は雨降り山下は晴れ。松杉密なる處白雲横はる。君が爲めに開破す禪天地。誰か聽かん無情說法の聲。

見震災後光景

聖地無端遭震災　復興既見曙光開　靈感劫後添威德　豫想轉殃成福來

祝長谷川孝善師宗會議員當選

孝慈成德放靈輝　賢善方知衆望歸　剛直期君呈侃諤　他時宗會震全威

長谷川孝善師の宗會議員當選を祝す――孝慈德を成して靈輝を放ち。賢善方に知る衆望の歸するを。剛直期す君が侃諤を呈し。他時宗會に全威を震ふを。

祝布哇佛教青年會創立廿五週年

正化宣流廿五年　莊嚴一諦潤無邊　同胞俱樂平和苑　長向南洋開福田

布哇佛教青年會創立廿五週年を祝す――正化宣流す廿五年。一諦を莊嚴して潤ひ無邊。同胞俱に樂む平和の苑。長く南洋に向つて福田を開く。

本山報恩攝心會滿散

龍象接踵參鶴園　等閑開破別乾坤　即今拈出崑崙鐵　欲報乃翁罔極恩

本山報恩攝心會滿散――龍象踵を接して鶴園に參じ。等閑に開破す別乾坤。即今拈出す崑崙の鐵。乃翁罔極の恩に報いんと欲す。

寄倉田松濤畫伯在信州溫泉

遊戲乾坤身外身　溪山到處足怡神　一枝靈筆天機動　織出雲烟人物眞

倉田松濤畫伯の信州の溫泉に在に寄す――乾坤に遊戲す身外の身。溪山到る處神を怡ばすに足る。一枝

葵藿丹心奉至尊　欲揮隻手定乾坤　至誠不逐霜華滅　留與英靈浴聖恩

本間至誠の贈位――葵藿の丹心至尊に奉じ。隻手を揮つて乾坤を定めんと欲す。至誠は霜華を逐うて滅せず。英靈を留與して聖恩に浴す。

再祝洞光寺櫟太仙師六十

護國扶宗不惜躬　齢迎華甲志彌雄　禪仙未必居雲外　化錫縱横振祖風

再び洞光寺櫟太仙師の六十を祝す――國を護り宗を扶け躬を惜まず。齢華甲を迎へて志彌ゝ雄なり。禪仙未だ必ずしも雲外に居らず。化錫縱横祖風を振ふ。

祝水野禎三翁古稀

滿庭蘭桂露華滋　風月烟霞交介眉　君子別傳長命訣　從心所欲不踰規

水野禎三翁の古稀を祝す――滿庭の蘭桂露華滋く。風月煙霞交ゝ眉を介く。君子別に長命の訣を傳ふ。心の欲する所に從つて規を踰えず。

贈間島曹洞宗別院濱名祖光師

利生行願等金剛　護國精神孰敢當　間島莊嚴功德聚　祖庭堪想放祥光

間島曹洞宗別院濱名祖光師に贈る――利生の願行金剛に等し。護國の精神孰れか敢て當らん。間島莊嚴の功德聚。祖庭想ふに堪へたり祥光を放つを。

和木村松溪氏韻

詞林君子吐奇芬　禪苑孤僧不解文　多謝柏陽迎杖錫　頒吾吟榻一箋雲

木村松溪氏の韻に和す――詞林の君子奇芬を吐き。禪苑の孤僧文を解せず。多謝す柏陽杖錫を迎へ。吾に頒つ吟榻一箋の雲。

和丸田等觀氏韻　二首

綠樹成陰地没埃　柴扉獨爲老僧開　歡情未必須脣舌　目擊之中默似雷

丸田等觀氏の韻に和す――綠樹陰を成して地に埃沒く。柴扉獨り老僧の爲に開く。歡情未だ必ずしも脣舌を須いず。目擊の中默雷に似たり。

至孝淨齋傾信勤　覺王妙典要心聞　半甌清茗通身爽　瓶揷靈華滿室薫

至孝の淨齋は信勤を傾け。覺王の妙典は心聞を要す。半甌の清茗通身爽かに。瓶揷の靈華滿室に薫ず。

題現代越後

滿紙編收金玉辭　全篇堪做治生師　益人文出忠誠筆　産業須知興國基

『現代越後』に題す――滿紙編收す金玉の辭。全篇治生の師と做すに堪へたり。人を益するの文は忠誠の筆に出づ。産業須らく知るべし興國の基たることを。』

本間至誠贈位

黑漆崑崙夜裏奔　無端築着大乘門　休言寂後無蹤跡　闔國莊嚴祇樹園

大乘寺太祖眞前上香――黑漆の崑崙夜裏に奔る。端無く築着す大乘の門。言ふことを休めよ寂後蹤跡無しと。闔國莊嚴す祇樹園。

法苑山淨住寺太祖眞前上香

布薩堂中振祖綱　崑崙殿裏放靈光　星霜六百今猶古　法苑花開滿地香

法苑山淨住寺太祖眞前上香――布薩堂中祖綱を振ひ。崑崙殿裏靈光を放つ。星霜六百今猶古のごとく。法苑花開いて滿地香し。

總持寺別院後醍醐天皇奉齋

中興聖主德如天　勅問十條皆入玄　鳳詔築成千歲礎　嶽山長湛洞流源

總持寺別院後醍醐天皇奉齋――中興の聖主德天の如く。勅問十條皆な玄に入る。鳳詔築き成す千歲の礎。嶽山長く湛ふ洞流の源。

越後普門山妙智寺戒會

定慧莊嚴功德臺　聖賢垂迹戒門開　薰風滿地炎塵絕　涼味徐從海上來

越後普門山妙智寺戒會――定慧莊嚴す功德臺。聖賢迹を垂れて戒門開く。薰風滿地炎塵絕え。涼味は徐に海上より來る。

羽後鶴岡常念寺各宗聯合震死者追弔會——惟れ生惟れ死須らく緣を了ずべし。菩提の門は啓く劫空の前。眞光隔てず幽明の境。法界莊嚴す火裏の蓮。

羅漢講式

十六摩尼顆顆圓　靈光赫奕耀禪天　雙林花散春猶在　留與香雲潤福田

羅漢講式——十六の摩尼顆顆圓なり。靈光赫奕として禪天に耀く。雙林花散りて春猶在り。香雲を留與して福田を潤す。

廣堂萬山和尚追弔

鐵山聳處萬峰連　不管浮雲蔽峻嶺　賴有幽溪涵白月　清光穿水影嬋妍

廣堂萬山和尚追弔——鐵山聳ゆる處萬峰連り。管せず浮雲の峻嶺を蔽ふを。賴に幽溪白月を涵す有り。清光水を穿うて影嬋妍。

高岡市高木山龍雲寺戒會

高木露濃靈葉堆　龍雲垂影戒華開　誰知覺道莊嚴瑞　總自妙樓觀上來

高岡市高木山龍雲寺戒會——高木露濃にして靈葉堆く。龍雲影を垂れて戒華開く。誰か知らん覺道莊嚴の瑞。總て妙樓觀上より來るを。

大乘寺太祖眞前上香

堅く。報國の行持德鄰有り。

賀首座廣道

夙參慈眼扣玄門　廣學禪心究道源　占取寶山那半座　竹篦頭上攝乾坤

首座廣道を賀す――夙に慈眼に參じて玄門を扣き。廣く禪心を學び道源を究む。寶山の那半座を占取して。竹篦頭上乾坤を攝す

長野市盛傳寺戒會

賢聖降臨古道場　天龍現瑞寶華藏　斯筵直是靈山會　滿地叢林放戒光

長野市盛傳寺戒會――賢聖降臨す古道場。天龍瑞を現す寶華藏。斯筵直に是れ靈山の會。滿地の叢林戒光を放つ。

雲州洞光寺櫟太仙師六十壽詞

金華峰頂古仙鄕　一洞光雲繞石床　惟有道心難守靜　老來猶爲度生忙

雲州洞光寺櫟太仙師の六十壽詞――金華峰頂の古仙鄕。一洞の光雲石床を繞る。惟だ道心の靜を守り難き有り。老來猶ほ度生の爲めに忙はし。

羽後鶴岡常念寺各宗聯合震死者追弔會

惟死惟生須了緣　菩提門啓劫空前　眞光不隔幽明境　法界莊嚴火裏蓮

貴福山林泉菴戒會——戒雲圍繞す好林泉。嚴淨す華藏無漏の筵。四衆齊しく遊ぶ正覺の座。聖賢手を携へて禪天に下る。

観音贊　二首

千枝松發海潮音　一葉蓮妝菩薩心　法界衆生皆我子　貝文卷盡古來今

觀音の贊——千枝の松は發す海潮音。一葉の蓮は妝ふ菩薩心。法界の衆生は皆な我が子。貝文卷き盡す古來今。

四禪天外弄風光　法性海中占道場　請看神通遊戲路　無根樹上百花香

四禪天外風光を弄し。法性海中道場を占む。請ふ看よ神通遊戲の路。無根樹上百花香し。

賀大圓梅啓首座

積寶山頭養善根　林泉堂裏究靈源　竹篦敲破黃梅髓　半座啓來三昧門

大圓梅啓首座を賀す——積寶山頭善根を養ひ。林泉堂裏靈源を究む。竹篦敲破す黃梅の髓。半座啓き來る三昧の門。

贈村上大我居士

以道爲心法是身　玲瓏智鏡不留塵　丹誠一片堅於鐵　報國行持德有鄰

村上大我居士に贈る——道を以て心と爲す法は是れ身。玲瓏たる智鏡は塵を留めず。丹誠一片鐵よりも

一切の衆生は皆な我が子。通身手眼幾千千。

玉之井布敎所開堂式

萬朶檀雲繞化門　玉井忽地現祇園　禪風不隔眞兼俗　修證圓來報四恩

玉之井布敎所の開堂式――萬朶の檀雲化門を繞り。玉井忽地に祇園を現ず。禪風隔てず眞と俗とを。修證を圓にし來つて四恩に報ぜん。

上州青松山橋林寺戒會

橋林春靜百花開　嚴淨戒壇收四來　此土現成寂光刹　滿場總是藕華臺

上州青松山橋林寺戒會――橋林春靜にして百花開き。戒壇を嚴淨して四來を收む。此土現成す寂光刹。滿場總て是れ藕華臺。

觀音大士開帳

瞻仰圓通無量光　端嚴妙相大悲粧　慈光攝取恆沙界　隨處隨時倶吉祥

觀音大士開帳――瞻仰す圓通無量の光。端嚴の妙相大悲の粧。慈光恆沙界を攝取して。隨處隨時倶に吉祥。

貴福山林泉菴戒會

戒雲圍繞好林泉　嚴淨華藏無漏筵　四衆齊遊正覺座　聖賢携手下禪天

祝酢屋久平氏華甲

烟霞風月養其眞　慶運常從華甲人　喜見南山添壽色　天長地久太平春

酢屋久平氏の華甲を祝す——烟霞風月其眞を養ひ。慶運常に從ふ華甲の人。喜び見る南山壽色を添ふ。天長地久太平の春。

濃州長坂山妙應寺戒會

定慧莊嚴古道場　妙樓觀上閙華藏　誰知妙應靈通瑞　匝地漫天放戒光

濃州長坂山妙應寺戒會——定慧莊嚴す古道場。妙樓觀上華藏を閙く。誰か識らん妙應靈通の瑞。匝地漫天戒光を放つを。

越後柏崎二宮茂子刀自七十七壽詞

學園多歲力栽培　會得羣芳慶運開　孔聖有言仁者壽　歡君錦上布花來

越後柏崎二宮茂子刀自七十七壽詞——學園多歲栽培に力め。會得す羣芳慶運の開くを。孔聖言有り仁者は壽なりと。歡ぶ君が錦上花を布き來るを。

洗心菴主福島甲子三君主催千兒觀音開眼供養

五觀十願兩相全　福慧莊嚴久遠前　一切衆生皆我子　通身手眼幾千千

洗心菴主福島甲子三君の主催千兒觀音開眼供養——五觀十願兩ながな相全し。福慧莊嚴す久遠の前。

萬仭月峰雖叵攀　坦然大道本無關　木童傳箇補天石　護法安人禪界間

月峰山松元院戒會開山萬仭道坦和尚百五十回忌――萬仭月峰攀ち叵しと雖も。坦然たる大道本と關無し。木童箇の補天の石を傳へて。法を護り人を安んず禪界の間。

題德鑽教武力生書寫正法眼藏

寫出祖翁正法藏　硯田花發筆還香　知君信念太奇特　字字如珠放異光

德鑽教武力生が書寫の正法眼藏に題す――寫出す祖翁の正法藏。硯田花發いて筆還た香し。知る君が信念太だ奇特なるを。字字珠の如くにして異光を放つ。

壽俊逸如箭和尚古稀

友水交雲七十春　靈機俊逸占天眞　無邊風月無量壽　棟岳長願常樂身

俊逸如箭和尚の古稀を壽す――友水交雲七十春。靈機俊逸にして天眞を占む。無邊の風月無量の壽。棟岳長く願ふ常樂の身。

愛知縣玉峰山寶勝寺戒會

寶勝莊嚴寶戒壇　和風一脉繞林巒　春禽巧奏陽春曲　更見慈雲靉玉欄

愛知縣玉峰山寶勝寺戒會――寶勝莊嚴す寶戒壇。和風一脉林巒を繞る。春禽巧に陽春の曲を奏し。更に見る慈雲の玉欄に靉くを。

鈴木良平翁七十一の壽を祝す――七十一年唯だ誠を守り。老來猶ほ思ふ起居の輕きを。健康何ぞ必ずしも仙藥に由らん。報德の精神生を養ふに足る。

贈永田仁助氏

施氏濟衆克安仁　懿業如花薰紫宸　天賞忽降誠有故　芳譽堪稱國家珍

永田仁助氏に贈る――民に施し衆を濟ひ克く仁に安んじ。懿業花の如く紫宸に薰ず。天賞忽ち降る誠に故有り。芳譽國家の珍と稱するに堪へたり。

長谷川天顯和尚供眞

諸嶽堪傳補處功　玄波深漲總泉中　洞雲境裏神如在　梅老猶留幾點紅

長谷川天顯和尚供眞――諸嶽傳うるに堪へたり補處の功。玄波深く漲る總泉の中。洞雲境裏神在すが如く。梅花猶ほ留む幾點の紅。

靜岡市顯光院戒會

十方智者入斯宗　恭啓戒壇攀聖蹤　屋裏明珠須見取　顯光所照物皆雍

靜岡市顯光院戒會――十方の智者斯宗に入り。恭しく戒壇を啓いて聖蹤に攀づ。屋裏の明珠須らく見取すべし。顯光照す所物皆な雍し。

月峰山松元院戒會開山萬仞道坦和尚百五十回忌

く可し。更に期す鶴算の南山に等しきを。

東宮納妃方外石禪獻詞

聖德洋洋化大亨　淑儀穆穆覆蒼生　億兆黎民齊仰頌　光看玉潤響金聲

東宮納妃方外石禪詞を獻ず――聖德洋洋化大いに亨る。淑儀穆穆蒼生を覆ふ。億兆の黎民齊しく仰ぎ頌す。光は玉潤を看響は金聲。

祝大石高三翁八十壽

壽山高處瑞雲連　福祿相從三德全　閱曆八旬身益健　此翁眞是好神仙

大石高三翁八十の壽を祝す――壽山高き處瑞雲連り。福祿相從うて三德全し。曆を閱すること八旬身益〻健に。此翁眞に是れ好神仙。

題武市如意氏獄中雜詩

一筆深藏禍福緣　以身捧職復何悁　獄中幸有禪天樂　咳唾成珠五百篇

武市如意氏が獄中雜詩に題す――一筆深く藏す禍福の緣。身を以て職に捧ぐ復何をか悁へん。獄中幸に禪天の樂み有り。咳唾珠を成す五百篇。

祝鈴木良平翁七十一壽

七十一年唯守誠　老來猶思起居輕　健康何必由仙藥　報德精神足養生

呈雄峰居士高橋光威君

存志濟生經國功　舒情海月嶺雲中　忠誠一片如金鐵　只愛邦家不愛躬

雄峰居士高橋光威君に呈す——志を存す濟生經國の功。情を舒ぶ海月嶺雲の中。忠誠一片金鐵の如く。只だ邦家を愛して躬を愛せず。

高祖降誕會

眞人垂跡現扶桑　祖道高開正法藏　雪鎖傘松添瑞色　滿山齊放吉祥光

高祖降誕會——眞人跡を垂れて扶桑に現じ。祖道高く開く正法藏。雪は傘松を鎖して瑞色を添へ。滿山齊しく放つ吉祥光。

老狐僧衣圖

緇衲纏身老野狐　彰頭露尾數臨危　休憂五百生前事　昧落論來八刻遲

老狐僧衣の圖——緇衲を身に纏ふ老野狐。頭を彰はし尾を露はし數〻危きに臨む。憂うることを休めよ五百生前の事。昧落論じ來れば八刻遲し。

祝丸田等觀仁者開介眉壽宴

慶雲圍繞小仙寰　二十九星開笑顔　敬愛可以介眉壽　更期鶴算等南山

丸田等觀仁者が介眉壽宴を開くを祝す——慶雲圍繞す小仙寰。二十九星笑顔を開く。敬愛以て眉壽を介

蛛網鵲巢風露寒　動中消息靜中看　眼華空盡三千界　餘得雲堂七尺單

臘八攝心會献粥――蛛網鵲巢風露寒く。動中の消息靜中に看る。眼華空盡す三千界。餘し得たり雲堂七尺の單。

大正甲子新年　四　首

樓鐘破夢報年新　先捧心香拜紫宸　屋裏老梅呈喜色　數枝已漏祇園春

大正甲子の新年――樓鐘夢を破つて年の新なるを報じ。先づ心香を捧げて紫宸を拜す。屋裏の老梅喜色を呈し。數枝已に漏らす祇園の春。

三元瑞色及僧門　老去猶欣志氣存　人道佛乘無二致　願將布敎報天恩

三元の瑞色僧門に及び。老去つて猶ほ欣ぶ志氣の存するを。人道佛乘二致無し。願はくは布敎を將て天恩に報いん。

律轉鴻鈞萬物濡　都門已見瑞雲垂　復興須致精神力　護法終爲護國基

律は鴻鈞を轉じて萬物濡たり。都門已に見る瑞雲の垂るゝを。復興須らく精神の力を致すべし。護法は終に護國の基と爲る。

迎來六十一新年　稽首眞前愧瓦全　獨與梅花相對笑　暗香薫出祖師禪

迎へ來る六十一の新年。眞前に稽首して瓦全を恥づ。獨り梅花と相對して笑へば。暗香薫出す祖師の禪

本山羅漢供養――雙林の佛勅を擔荷し來り。正法を保持して香臺を護る。福田隨處に靈苗秀で。諸嶽看るに堪へたり紫翠の堆きを。

神樂十一世達宗正道和尙征忌

正傳屋裏打圓通　神樂臺前振祖風　法身舍利明於月　隨緣分影妙泉中

神樂十一世達宗正道和尙の征忌――正傳屋裏圓通を打し。神樂臺前祖風を振ふ。法身舍利月よりも明かに。緣に隨つて影を分つ妙泉の中。

高毅院憲道雄路居士

諸法觀來有夙緣　四山逼處忽歸玄　浮生一夢惺惺著　覺路莊嚴空劫前

高毅院憲道雄路居士――諸法觀じ來れば夙緣有り。四山逼る處忽ち玄に歸す。浮生の一夢惺惺著。覺路莊嚴す空劫の前。

相州藥王寺本尊藥師如來開眼

藥王悲願未曾休　療却身心二種憂　點出圓通無礙眼　收來法界攝雙眸

相州藥王寺本尊藥師如來開眼――藥王の悲願は未だ曾て休まず。療却す身心二種の憂。點出す圓通無礙の眼。法界を收め來つて雙眸に攝す。

臘八攝心會獻粥

海に似たり。恢開す護國濟生の門。

三重縣仲峰山妙雲寺戒會

七日加行永劫緣　戒雲垂影潤無邊　人人盡有光明在　南北東西月滿天

三重縣仲峰山妙雲寺戒會――七日の加行永劫の緣。戒雲影を垂れて潤ひ無邊。人人盡く光明の在る有り。南北東西月天に滿つ。

同太祖大遠忌

聖德傳光六百年　慈恩廣大浩四天　仲峰昨夜擎殘月　影映妙泉輝戒筵

同じく太祖大遠忌――聖德光を傳ふ六百年。慈恩廣大浩として天の如し。仲峰昨夜殘月を擎げ。影は妙泉に映じ戒筵を輝す。

題河村松巖師記念袈裟

披來無相福田衣　解脫幢中現德輝　禪氣何惶霜雪苦　古巖一任老松圍

河村松巖師記念の袈裟に題す――披し來る無相の福田衣。解脫幢中德輝を現ず。禪機何ぞ惶れん霜雪の苦。古巖は老松の圍むに一任す。

本山羅漢供養

擔荷雙林佛勅來　保持正法護香臺　福田隨處靈苗秀　諸嶽堪看紫翠堆

大圓玄致禪師征月忌

大業由來屬大人　智圓方識鑑機親　三松密處通玄路　妙致長堪招衆賢

大圓玄致禪師征月忌——大業由來大人に屬す。智は圓にして方に鑑機の親しきを識る。三松密なる處玄路を通じ。妙致長く衆賢を招くに堪へたり。

自　贊　大正十二年十一月爲禪嚴子題肖像

七處住山無定蹤　亂拈皮袋挂三松　老來猶未脫兒戲　頻向夜塘探活龍

自贊　大正十二年十一月禪嚴子の爲めに肖像に題す——七處の住山定蹤無く。皮袋を亂拈して三松に挂く。老來猶ほ未だ兒戲を脫せず。頻に夜塘に向つて活龍を探る。

二十五師拈香

二十五員皆俊哲　無非護道愛山人　願行豈滯幽明境　諸嶽長存淨法身

二十五師の拈香——二十五員皆な俊哲。道を護り山を愛するの人に非ざるは無し。願行豈に幽明の境に滯らん。諸嶽長く存す淨法身。

贈津田宗保氏

二諦融來報四恩　保任宗敎養靈源　心似大山量似海　恢開護國濟生門

津田宗保氏に贈る——二諦融じ來つて四恩に報い。宗敎を保任して靈源を養ふ。心は大山に似たり量は

揮拂鄰松恢法筵　住持四十有餘年　中興美績垂遺德　寶殿夜來殘月懸

同じく三世中興舜禎孝範和尚の法事――拂を鄰松に揮つて法筵を恢め。住持すること四十有餘年。中興の美績遺德を垂れ。寶殿夜來殘月懸かる。

次等觀仁者韻

帝都文化跡難尋　滿目風光觀叵禁　天譴太嚴人識否　復興唯在致誠心

等觀仁者の韻を次ぐ――帝都の文化跡尋ね難く。滿目の風光觀禁へ叵し。天譴太だ嚴なる人識や否や。復興唯だ誠心を致すに在り。

祝磐城時報刊行十年

侃諤之論警世筆　文壇正是一干城　刊行十年功愈熟　東北便成木鐸名

磐城時報の刊行十年を祝す――侃諤の論警世の筆。文壇正に是れ一干城。刊行十年功愈く熟し。東北便に成す木鐸の名。

心華院玉蓮慧性大姉一週忌

蝶夢醒來已一年　三松依舊帶風烟　誰知慧性無生滅　感應道交空劫前

心華院玉蓮慧性大姉の一週忌――蝶夢醒め來つて已に一年。三松舊に依つて風烟を帶ぶ。誰か識らん慧性生滅無く。感應道交す空劫の前。

桂泉院有賀隆光師の結制を賀す――祖道を紹隆して宗光を擧げ。法旆高く飜る圓覺場。請ふ看よ靈泉波静なる處。桂華月を含んで更に芳を描く。

第七十號潛水艦殉難者追悼

守職忘私克奉公　渾身熱血只誠忠　誰知激浪滔天裏　留得金剛不壞躬

第七十號潛水艦殉難者追弔――職を守り私を忘れ克く公に奉ず。渾身の熱血只だ誠忠。誰か知らん激浪滔天の裏。金剛不壞の躬を留め得たり。

爲中根環堂師題初平叱石圖

初平叱石起爲羊　也勝道生誇異常　今入環公三昧室　長髯羵首侍禪床

中根環堂師の爲めに初平石を叱するの圖に題す――初平石を叱すれば起つて羊と爲り。也た道生の異常を誇るに勝る。今環公三昧の室に入り。長髯の羵首禪床に侍す。

名古屋市鄰松山陽秀院戒會

鄰松嚴飾寶華藏　百億須彌放戒光　這裏誰知奇特事　無根樹上更描芳

名古屋市鄰松山陽秀院戒會――鄰松嚴飾す寶華藏。百億の須彌戒光を放つ。這裏誰か知らん奇特の事。無根樹上更に芳を描く。

同三世中興舜禎孝範和尚法事

別に禪機の在る有り。一葉の乾坤無盡藏。

永昌院瑞運居士一週忌

永養善根道樹榮　深歸三寶德慶昌　菩提園裏無窮樂　瑞運聯花步步香

永昌院瑞運居士の一週忌——永く善根を養うて道樹榮え。深く三寶に歸し德慶昌なり。菩提園裏無窮の樂み。瑞運花を聯ねて步步香し。

覺性院殿德巖雪堂大居士一週忌　早川千吉郎氏

覺性圓明絕去來　渾身安住涅槃臺　菩提園裏何奇特　無影樹頭花自開

覺性院殿德巖雪堂大居士の一週忌——覺性圓明去來を絕し。渾身安住す涅槃臺。菩提園裏何の奇特ぞ。無影樹頭花自から開く。

奉賛孝格天皇宸筆法華經

毫端開瑞舞鸞鳳　滿幅莊嚴功德藏　無上最尊之法寶　文文字字放神光

孝格天皇の宸筆法華經を賛し奉る——毫端瑞を開いて鸞鳳舞ふ。滿幅莊嚴の功德藏。無上最尊の法寶。文文字字神光を放つ。

賀桂泉院有賀隆光師結制

紹隆祖道擧宗光　法旆高翻圓覺場　請看靈泉波靜處　桂華含月更描芳

横濱裁判所追弔會

天劈地震業火燃　以身殉職也因緣　薦君萬德總持法　覺路莊嚴空劫前

横濱裁判所追弔會——天劈け地震ひ業火燃ゆ。身を以て職に殉する也た因緣。君に薦む萬德總持の法。覺路莊嚴す空劫の前。

名古屋市大雲山醫王寺戒會

戒光非色又非心　血脉緜緜絶古今　莫怪夜來天灑雨　醫王本在大雲岑

名古屋市大雲山醫王寺戒會——戒光色に非す又た心に非ず。血脉緜緜古今を絶す。怪む莫れ夜來天雨を灑ぐを。醫王本と大雲の岑に在り。

寄梁川大陽會

富潤家門德潤身　治生產業總歸眞　寄言吾黨諸君子　道義之鄉幸福臻

梁川大陽會に寄す——富は家門を潤ほし德は身を潤す。治生產業總て眞に歸す。言を寄す吾黨の諸君子。道義の鄉は幸福臻る。

應島倉氏囑題赤壁圖

桂櫂蘭舟入水鄉　嘯風吟月泝流光　坡翁別有禪機在　一葉乾坤無盡藏

島倉氏の囑に應して赤壁の圖に題す——桂櫂蘭舟水鄉に入り。風に嘯き月に吟じて流光に泝る。坡翁

華亭江上棹扁舟　獨向深灣垂直鈎　忽見金鱗跳活水　滔天波浪打竿頭

船子和尚――華亭江上扁舟に棹し。獨り深灣に向つて直鈎を垂る。忽ち見る金鱗活水に跳り。滔天の波浪竿頭を打つ。

山形市瑞雲山法禪寺戒會萬燈供養

點萬燈來供法王　光光相映網羅堂　眼中幻翳消亡跡　萬德莊嚴正覺場

山形市瑞雲山法禪寺戒會萬燈供養――萬燈を點し來つて法王に供ふ。光光相映ず網羅堂。眼中の幻翳跡を消亡し。萬德莊嚴す正覺場。

同關東大震災横死者追弔

劫火洞然地軸摧　豈圖忽地現三災　性天唯有圓通月　漠漠窮途照暗來

同じく關東大震災横死者追弔――劫火洞然地軸摧け。豈に圖らんや忽地に三災を現ず。性天唯だ圓通の月有り。漠漠たる窮途暗を照し來る。

横濱公園大震災横死者追弔會

天柱仆兮地軸摧　生靈幾萬斃三災　爲君嚴飾菩提道　冀向淨邦昇寶臺

横濱公園大震災横死者追弔會――天柱仆れ地軸摧け。生靈幾萬三災に斃る。君が爲めに嚴飾す菩提道。冀はくは淨邦に向つて寶臺に昇らんことを。

大雄山講習會――老杉翠を凝す白雲の中。塔影鐘聲梵宮を繞る。下界の路は溪口より斷え。人間の煩熱一時に空し。

初渡神泉橋

靈橋枕石跨神泉　水若飛龍下岫巓　此境應名慈濟澗　令人平等跨禪天

初めて神泉橋を渡る――靈橋石に枕して神泉に跨り。水は飛龍の若く岫巓を下る。此境應に慈濟澗と名つくべし。人をして平等に禪天に跨らしむ。

上山時與堀內將軍同着

賓中主與主中賓　携手雲梯謁嶽神　寄語四來參學士　從門入者亦家珍

上山の時堀內將軍と同じく着す――賓中の主と主中の賓と。手を携へて雲梯嶽神に謁す。語を寄す四來參學の士。門より入る者も亦た家珍。

福壽觀世音

靈芝現瑞化觀音　妙相端嚴不可侵　珍重通身功德聚　眼前感應普陀潯

福壽觀世音――靈芝瑞を現して觀音と化し。妙相端嚴侵す可からず。珍重す通身功德聚。眼前感應す普陀の潯。

船子和尚

勝妙堂。

賀小荒井光子刀自九十壽

秋月春風九十年　滿庭蘭桂繞慶筵　由來仁者多嘉福　慈室別開長壽天

小荒井光子刀自の九十壽を賀す――秋月春風九十年。滿庭の蘭桂慶筵を繞る。由來仁者嘉福多く。慈室別に開く長壽の天。

賀齋藤登喜子誕生

丹桂今添一朶花　芳香滿室影登紗　門庭今後應多喜　龜鶴堂中瑞氣加

齋藤登喜子の誕生を賀す――丹桂今添ふ一朶の花。芳香室に滿ちて影紗に登る。門庭今後應に喜び多かるべし。龜鶴堂中瑞氣加はる。

次加藤毅氏韻

函山凝翠濺虛欞　鶴夢抱雲猶未醒　最愛夜來風月好　松間避影步閒庭

加藤毅氏の韻を次ぐ――函山翠を凝して虛欞に濺ぐ。鶴夢雲を抱いて猶ほ未だ醒めず。最も愛す夜來風月の好きを。松間影を避けて閒庭を步す。

大雄山講習會

老杉凝翠白雲中　塔影鐘聲繞梵宮　下界路從溪口斷　人間煩熱一時空

贈石川泰助君

殊勳赫赫達天閽　瑞氣如雲覆市門　一片至誠千載範　闔鄕齊仰厚生恩

石川泰助君に贈る――殊勳赫赫天閽に達し。瑞氣雲の如く市門を覆ふ。一片の至誠千載の範。闔鄕齊しく仰ぐ厚生の恩。

贈栗木智堂師

多年當局統宗規　執務忠誠燮理宜　他日若編宗政史　大正柱石欲推師

栗木智堂師に贈る――多年局に當つて宗規統べ。執務忠誠にして燮理宜し。他日若し宗政史を編まば。大正の柱石師を推さんと欲す。

贈濱岸繁太郎氏

歡喜堂中養信根　禪林果熟綠陰繁　檀波羅密資三有　福地莊嚴報四恩

濱岸繁太郎氏に贈る――歡喜堂中信根を養ひ。禪林果熟して綠陰繁し。檀波羅密三有に資し。福地莊嚴四恩に報ず。

寄會津安穩寺主

福慧莊嚴安樂場　利生弘法也無量　山雲溪月深高意　來者等遊勝妙堂

會津安穩寺主に寄す――福慧莊嚴す安樂場。利生弘法也た量無し。山雲溪月深高の意。來者等しく遊ぶ

曇華現瑞藍毘園　七步周囘稱獨尊　不許雲門輕觸犯　指頭開破盡乾坤

釋尊降誕像——曇華瑞を現はす藍毘園。七步周囘獨尊と稱す。許さず雲門輕く觸犯することを。指頭開破す盡乾坤。

太祖六百年報恩攝心會上供

拈破蒲團開祖門　坐王三昧報慈恩　即今耕得閒田地　熟脫不留鍬子痕

太祖六百年報恩攝心會上供——蒲團を拈破して祖門を開き。王三昧に坐して慈恩を報ず。即今耕し得たり閒田地。熟脫して鍬子の痕を留めず。

夏期參禪會圓成日上供

王三昧裏乾坤闊　起坐俱居寂滅場　曩祖眞前相見了　無邊風月一爐香

夏期參禪會圓成日の上供——王三昧裏乾坤闊く。起坐俱に居す寂滅場。曩祖眞前に相見し了れば。無邊の風月一爐香し。

澄鑑水

珍重校庭澄鑑水　玲瓏皎潔潤殊多　汲來須識恩情大　心可洗兮智可磨

澄鑑水——珍重す校庭の澄鑑水。玲瓏皎潔潤ひ殊に多し。汲み來つて須らく恩情の大なるを識るべし。心洗ふ可し智磨く可し。

次日置禪師韻　二首

側耳松聲和磬音　挑簾幽石倚危岑　相携遊戯圓通境　一洞禪雲繞錫深

日置禪師の韻を次ぐ――耳を側つれば松聲磬音に和す。簾を挑ぐれば幽石危岑に倚る。相携へて圓通境に遊戯すれば。一洞の禪雲錫を繞つて深し。

鳥語溪聲傳梵音　法幢高動白雲岑　夜來聞盡庭前雨　綠樹陰森入夢深

鳥語溪聲梵音を傳へ。法幢高く動く白雲の岑。夜來聞き盡す庭前の雨。綠樹陰森夢に入つて深し。

越後栖吉山普濟寺授戒會

松風徐奏無生曲　巒色清粧古佛身　法界莊嚴功德聚　戒門欲普濟羣賓

越後栖吉山普濟寺授戒會――松風徐に無生の曲を奏し。巒色清粧す古佛の身。法界莊嚴の功德聚。戒門普く羣賢を濟はんと欲す。

賀普濟首座英山國雄

脫俗曾投安樂宮　吉嶺既擅八字雄　他時更養英靈氣　長爲國家振祖風

普濟首座英山國雄を賀す――俗を脫し曾て投ず安樂宮。吉嶺既に擅にす八字の雄。他時更に英靈の氣を養つて。長く國家の爲めに祖風を振ふ。

釋尊降誕像

四八端嚴妙相鮮　慈雲蓋覆界三千　請看常在靈山月　玉影分光幾百川

石黒大次郎氏の釋尊畫像開眼——四八端嚴妙相鮮に。慈雲蓋覆す界三千。請ふ看よ常在靈山の月。玉影光を分つ幾百川。

次等觀仁者賚韻

慈雲張翼覆禪天　覺苑花開欲競妍　更有瑞巖擎戒月　清光如玉照前川

等觀仁者の賚韻を次ぐ——慈雲翼を張つて禪天を覆ひ。覺苑花開いて妍を競はんと欲す。更に瑞巖の戒月を擎ぐる有り。清光玉の如く前川を照す。

長岡昌福寺屋宇竣功慶讃會

屋宇全收改葺功　曇華現瑞古禪宮　自今昌福更添福　永向長陵擧化風

長岡昌福寺屋宇竣功慶讃會——屋宇全く收む改葺の功。曇華瑞を現す古禪宮。自今昌福更に福を添へ。永く長陵に向つて化風を擧げん。

長岡體育協會運動場地鎭祭

體育由來興國礎　宜依運動鍛精神　此場正是好爐鞴　驀地鑄成金鐵身

長岡體育協會運動場地鎭祭——體育由來興國の礎。宜しく運動に依つて精神を鍛ふべし。此場正に是れ好爐鞴。驀地に鑄成せよ金鐵の身。

能州龍蟠山蓮光寺授戒會——慈雲影を垂る古仙郷、法雨敷き霑す戒道場。四衆風に趨る賢聖の會。蟠龍江上瑞蓮香し。

同太祖六百年遠忌

遺德流輝六百年　慈恩廣大浩如天　蓮光今日香風起　忽見蟠龍躍九淵

同じく太祖六百年遠忌——遺德輝を流す六百年。慈恩廣大浩として天の如し。蓮光今日香風起り。忽ち見る蟠龍の九淵に躍るを。

能州本山別院太祖眞前

慧照傳燈六百年　法孫將啓報恩筵　萬餘門葉添風韻　堪見三松含瑞烟

能州本山別院太祖眞前——慧照燈を傳ふ六百年。法孫將に啓かんとす報恩の筵。萬餘の門葉風韻を添へ。見るに堪へたり三松瑞烟を含むを。

新潟縣瑞巖山清月寺戒會

天降甘露洗塵埃　百億華藏聯玉開　衆鳥啣花圍寶座　慈雲垂影繞仙臺

新潟縣瑞巖山清月寺戒會——天甘露を降して塵埃を洗ひ。百億の華藏玉を聯ねて開く。衆鳥花を啣んで寶座を圍み。慈雲影を垂れて仙臺を繞る。

石黒大次郎氏釋尊畫像開眼

明の治績今に到つて新なり。

秋田縣巖松山藏堅寺戒會

下方路達上方天　一洞堪迎幾聖賢　雨霽緑陰梅子熟　巖松獨帶舊風煙

秋田縣巖松山藏堅寺戒會——下方の路は上方の天に達し。一洞迎ふるに堪へたり幾聖賢。雨霽れて緑陰梅子熟し。巖松獨り帶ぶ舊風煙。

贈青沼彥治氏

志存忠孝歸三寶　擁護寺門酬四恩　隨處莊嚴菩提道　萬行無不大悲門

青沼彥治氏に贈る——志忠孝に存し三寶に歸す。寺門を擁護して四恩に酬ゆ。隨處莊嚴す菩提の道。萬行大悲の門ならざるは無し。

贈早坂與兵衛氏

深歸三寶護禪宮　建立山門奉大雄　龍洞長留忠孝德　令人平等入圓通

早坂與兵衛氏に贈る——深く三寶に歸して禪宮を護り。山門を建立して大雄に奉ず。龍洞長く忠孝の德を留め。人をして平等に圓通に入らしむ。

能州龍蟠山蓮光寺授戒會

慈雲垂影古仙鄉　法雨敷霑戒道場　四衆趨風賢聖會　蟠龍江上瑞蓮香

明閣。極樂の莊嚴は此山に在り。

越後河水山泉藏寺授戒會

驀面打開功德藏　法泉涌出濕羣芳　戒光禪味元無別　等會人天入道場

越後河水山泉藏寺授戒會――驀面に打開す功德藏。法泉涌出して羣芳を濕す。戒光禪味元と別無し。等しく人天を會して道場に入る。

同　供　養

禪河水急動微涼　泉眼迸珠波放光　這裏降臨三世佛　檀心如月照華藏

同じく供養――禪河水急にして微涼を動かし。泉眼珠を迸らして波光を放つ。這裏降臨す三世の佛。檀心は月の華藏を照すが如し。

題城公書

詩趣禪心竟一如　漁村水驛雅情舒　三千七百舊公案　分付城公筆下書

城公の書に題す――詩趣禪心竟に一如。漁村水驛雅情舒ぶ。三千七百の舊公案。分付す城公筆下の書。

泉藏寺戒會明治天皇奉悼會

允文允武世無倫　乃聖乃神德有鄰　遺照獨存八洲外　聖明治績到今新

泉藏寺戒會明治天皇奉悼會――允文允武世に倫無く。乃聖乃神德鄰有り。遺照獨り八洲の外に存し。聖

岡崎市大雲山極樂寺戒會開闢二世慶安周賀大和尚三百年忌

北斗藏身三百年　靈光留影大雲嶺　心香薫破幽明境　法界皆歸極樂筵

岡崎市大雲山極樂寺戒會開闢二世慶安周賀大和尚三百年忌――北斗身を藏して三百年。靈光影を留む大雲の嶺。心香薫破す幽明の境。法界皆歸す極樂の筵。

題寫經

信心爲筆又爲墨　寫出衍乘理趣經　字字莊嚴功德聚　曇華聯玉紙還馨

寫經に題す――信心筆と爲り又墨と爲り。寫出す衍乘理趣の經。字字莊嚴す功德聚。曇華玉を聯ねて紙還た馨し。

三州藏王山龍門寺戒會

開破華藏王刹天　莊嚴菩薩戒傳筵　信波釃玉龍門會　欲振曹溪一脉禪

三州藏王山龍門寺戒會――開破す華藏王刹の天。莊嚴す菩薩戒傳の筵。信波玉を釃へす龍門の會。曹溪一脉の禪を振はんと欲す。

次岡崎矢野慶明師韻

不隔世間出世間　觀來大道本無關　慶雲普繞光明閣　極樂莊嚴在此山

岡崎の矢野慶明師の韻を次ぐ――隔てず世間出世間。觀じ來れば大道本と關無し。慶雲普く繞る光

追孝至誠心境冥　佛壇新設奉其先　香煙嚴飾菩提影　魚磬轉來如是經

秋田縣本莊町渡邊善之助氏邸玉廣院十三周忌——追孝の至誠心境冥す。佛壇新に設けて其先に奉ず。香煙嚴飾す菩提の影。魚磬轉じ來る如是の經。

逢芳川雄悟師於瑞川寺

別後經過二十春　相逢尙覺道情親　商量數刻無他事　敎界何時見革新

芳川雄悟師に瑞川寺に逢ふ——別後經過す二十春。相逢うて尙覺ゆ道情の親しきを。商量數刻他事無し。敎界何れの時か革新を見ん。

尾州萬年山總心寺戒會

青山不動古仙臺　遮莫白雲頻去來　昨夜虛空添瑞氣　寒巖枯木放花開

尾州萬年山總心寺戒會——青山動かず古仙臺。遮莫白雲頻に去來す。昨夜虛空瑞氣を添へ。寒巖枯木花を放つて開く。

高岡徹宗供養拈香

老松長疊萬年綠　四衆傳心古佛心　賢聖齊臨供養會　華藏開瑞紫雲深

高岡徹宗の供養拈香——老松長に萬年の綠を疊み。四衆心に傳ふ古佛の心。賢聖齊しく臨む供養の會。華藏瑞を開いて紫雲深し。

同寺佐々木檀頭の供養――淨信齋を設けて四恩に報じ。瑞川玉の如く曹源に耀く。法幢影は動く華藏の頂。常恒莊嚴す功德の園。

賀同寺法幢開闢授戒

瑞川水淨潤禪林　雲擁華藏影滿岑　法旆高開正法眼　曹源長印祖師心

同寺法幢開闢授戒を賀す――瑞川水淨くして禪林を潤し。雲は華藏を擁して影岑に滿つ。法旆高く開く正法眼。曹源長く印す祖師の心。

能代港萬年山長慶寺戒會

慶雲長護古禪林　啓建戒壇傳福音　四衆齊圍萬年座　德香薰出聖賢心

能代港萬年山長慶寺戒會――慶雲長に護る古禪林。戒壇を啓建して福音を傳ふ。四衆齊しく圍む萬年の座。德香薰出す聖賢の心。

賀大雲山醫王寺首座禪脫星峰

鐵漢甞投福壽堂　靈犀點出一星光　分明獨坐雄峯曉　占取大雲那半床

大雲山醫王寺の首座禪脫星峰を賀す――鐵漢甞て福壽の堂に投じ。靈犀點出す一星光。分明に獨坐す雄峰の曉。占取す大雲那の半床。

秋田縣本莊町渡邊善之助氏邸玉廣院十三周忌

網羅幢畔の月。清光影を垂れて禪林を照らす。

與同寺檀頭佐々木庄五郎氏

信行專慕上宮風　外護堪比須達功　錦上敷華瑞川水　淸波皎月兩玲瓏

同寺檀頭佐々木庄五郎氏に與ふ――信行專ら慕ふ上宮の風。外護比するに堪へたり須達の功。錦上華を敷く瑞川の水。淸波皎月兩ながら玲瓏。

同寺庭前石像十六羅漢點眼

擔荷双林佛勅來　紹隆正法照三才　瑞川今日波濤活　二八靈光羃面開

同寺庭前の石像十六羅漢點眼――双林の佛勅を擔荷し來り。正法を紹隆して三才を照す。瑞川今日波濤活し。二八の靈光羃面に開く。

同寺開基鈴木和泉守塔前供養

賢良堪稱士林英　嶺室長留俊傑名　一脉瑞川流不盡　松風猶發活龍聲

同寺開基鈴木和泉守塔前の供養――賢良士林の英と稱するに堪へたり。嶺室長く留む俊傑の名。一脉の瑞川流れて盡きず。松風猶ほ發す活龍の聲。

同寺佐々木檀頭供養

淨信設齋報四恩　瑞川如玉耀曹源　法幢影動華藏頂　常恒莊嚴功德園

なるに勝る。

信水越山吟興新　六環常與白雲親　松溪獨奏無絃曲　不借推敲自入眞

信水越山吟興新なり。六環常に白雲と親む。松溪獨り奏す無絃の曲。推敲を假らずして自から眞に入る。

岩手縣大里村龍澤寺降誕會

此日如來示誕生　藍毘園裏放光明　如今龍澤天花簇　嚴飾閻浮八萬城

岩手縣大里村龍澤寺降誕會——此日如來誕生を示し。藍毘園裏光明を放つ。如今龍澤天花簇り。嚴飾す閻浮の八萬城。

同少年運動場開場式

現出少年遊戲場　薫風滿地送微涼　溪聲自奏天眞曲　山色長施爛漫粧

同じく少年運動場開場式——現出す少年の遊戲場。薫風滿地微涼を送る。溪聲自から奏す天眞の曲。山色長に施す爛漫の粧ひ。

宮城縣古川町曹源山瑞川寺戒會

瑞川水淨紫雲深　古岸抱波樹作陰　請看網維幢畔月　淸光垂彩照禪林

宮城縣古川町曹源山瑞川寺戒會——瑞川水淨うして紫雲深く。古岸波を抱いて樹は陰を作す。請ふ看よ

新年の作——律は鴻鈞を轉じて玉曆回る。山雲瑞を呈して曙光開く。禪林也た新年の興有り。一椀の煎茶壽杯に代ふ。

大正歡迎十二年　枯形唯恥瓦之全　何時文化添光彩　國運長倶法運闐

大正歡び迎ふ十二の年。枯形唯恥づ瓦の全を。何れの時か文化光彩を添へ。國運長く法運と倶に闐ならん。

次丸田君韻

夢覺車窗了法空　故人迎我立薫風　刹那相見感無極　道在雙眸相擊中

丸田君の韻を次ぐ——夢覺めて車窗法空を了す。故人我を迎へて薫風に立つ。刹那相見て感極り無し。道は雙眸相擊の中に在り。

次木村松溪氏韻　三首

一條枯杖鳥遊空　數首詩篇竹嘯風　感興由來存默處　吟情卷盡刹那中

木村松溪氏の韻を次ぐ——一條の枯杖鳥空に遊び。數首の詩篇竹風に嘯く。感興由來默處に存す。吟情卷き盡す刹那の中。

吟心復接越山川　更喜知音惠玉篇　客路不關春已去　好詩妍勝老梅妍

吟心復た越の山川に接し。更に喜ぶ知音の玉篇を惠むを。客路關せず春已に去る。好詩の妍は老梅の妍

二八禁門在一心　慈悲孝順發胸襟　水明山紫玲瓏境　隨處無非功德藏

岩手縣和賀山染黑寺戒場――二八の禁門一心に在り。慈悲孝順胸襟に發す。水明山紫玲瓏の境。隨處功德藏に非ざるは無し。

大正十二年初春小田原向松菴靜養

向松菴裏足頤神　不羨羲皇以上人　籬畔老梅花半發　稚鶯纔漏一聲春

大正十二年初春小田原向松菴に靜養――向松菴裏神を頤ふに足る。羨まず羲皇以上の人。籬畔の老梅花半ばは發き。稚鶯纔に漏す一聲の春。

酬丸田氏贈詩　二首

友情何必隔山川　机上忽看全玉篇　想像栢陽春已動　淸新佳句綴花姸

丸田氏詩を贈らるに酬ゆ――友情何ぞ必ずしも山川を隔てん。机上忽ち見る全玉の篇。想像す栢陽春已に動くを。淸新の佳句は花を綴つて姸なり。

寄我雄篇白雪新　方袍縫掖道相親　何時諸嶽春深處　共語山雲海月眞

我れに寄す雄篇白雪新なり。方袍縫掖道相親む。何れの時か諸嶽春深き處。共に語らん山雲海月の眞。

新年作　二首

律轉鴻鈞玉曆回　山雲呈瑞曙光開　禪林也有新年興　一椀煎茶代壽杯

舍利合成現佛身　端嚴妙相自通神　千秋不變金剛體　法界觀來假卽眞

舍利佛點眼――舍利合成して佛身を現じ。端嚴の妙相自から神に通ず。千秋變せず金剛の體。法界觀じ來れば假卽眞なり。

釋尊降誕會

此日瞿曇出母胎　悠悠高唱獨尊來　至今人界皆驚駭　瞋霧擬雲遶古臺

釋尊降誕會――此日瞿曇母胎を出で。悠悠高く獨尊と唱へ來る。今に至るも人界皆な驚駭し。瞋霧擬雲古臺を遶る。

和加藤毅氏韻

天外故人奈難尋　雲門胡餅也知音　謝君千重恩情渥　不止養身兼養心

加藤毅氏の韻に和す――天外の故人尋ね難きを奈せん。雲門の胡餅也た知音。謝す君が千里恩情の渥きを。止に身を養ふのみならず兼て心を養ふ。

夜步觀音　染黑寺

金剛正體大悲粧　染黑堂中現吉祥　福聚山兮弘誓海　盡乾坤裏放奇光

夜步觀音――金剛の正體大悲の粧。染黑堂中吉祥を現す。福聚の山弘誓の海。盡乾坤裏奇光を放つ。

岩手縣和賀山染黑寺戒場

福智莊嚴妙喜菴　山門常見鳳鸞參　聖賢交擁菩提座　萬朶慶雲遶佛龕

長岡妙喜菴の菴號公稱慶讃法會を賀す――福智莊嚴す妙喜菴。山門常に見る鳳鸞の參するを。聖賢交〻菩提座を擁し。萬朶の慶雲佛龕を遶る。

圓藏寺戒會

薫風徐動寶慶鄕　新綠陰濃濺戒場　戒子須觀如是法　見聞無處不華藏

圓藏寺戒會――薫風徐に動く寶慶の鄕。新綠陰濃にして戒場に濺ぐ。戒子須らく如是法を觀るべし。見聞處として華藏ならざるは無し。

次佐藤大鱗師韻

圓通臺上望悠悠　山色水光淸似秋　此地方知安樂土　不求騎鶴上楊州

佐藤大鱗師の韻を次ぐ――圓通臺上望悠悠。山色水光淸きこと秋に似たり。此地方に知る安樂土。鶴に騎して楊州に上るを求めず。

車中相見舊知人　未發話頭情入眞　與我一篇絃外曲　江雲山月寫來新

車中相見る舊知の人。未だ話頭を發せずして情眞に入る。我れに與ふ一篇絃外の曲。江雲山月寫し來つて新なり。

舍利佛點眼

越後の大島淸七氏法事施食――信力莊嚴す甘露門。曇華影を交ふ菩提の園。羣靈等しく慈悲の潤ひに浴す。回向懇に酬ゆ祖孝の恩。

### 新潟縣寶慶山圓藏寺戒會

寶慶山靜綠成陰　雲擁華藏瑞氣深　佛日增輝賢聖會　網羅交影映禪林

新潟縣寶慶山圓藏寺戒會――寶慶山は靜にして綠陰を成し。雲は華藏を擁して瑞氣深し。佛日輝を增す賢聖の會。網羅影を交へて禪林に映ず。

### 杉本周德氏求法號命名素絢周德逸士

素以爲絢德茲周　菩薩願行豈有休　世諦佛乘其道一　深欣有髮大比丘

杉本周德氏法號を求む。素絢周德逸士と命名す――素以て絢を爲す德茲に周し。菩薩の願行豈に休すること有らん。世諦佛乘其道一なり。深く欣ぶ有髮の大比丘。

### 遭難水死者追弔

信川波激暮雲昏　落日淒風轉斷腸　賴有覺王神力在　爲君開破菩提門

遭難水死者の追弔――信川波激して暮雲昏く。落日淒風轉た斷腸。賴に覺王神力の在る有り。君が爲めに開破す菩提の門。

### 賀長岡妙喜菴菴號公稱慶讃法會

圓藏首座大機眞悟を賀す――大道參じ來つて道念濃なり。機先占取す寶慶の宗。眞風擧着す圓藏の訣。悟後須らく古聖の蹤を傳ふべし。

福壽雪艇老宗師曾侍法雲普蓋禪師巾瓶十有餘年形影相隨我先師頌之賦以一偈予亦同參交情最密約以兄弟之誼今及見先師筆蹟覺道情彌加仍襲韻呈似

陰德安身福壽林　憶君葵藿捧丹心　道情曾結連枝約　欲化芝蘭學古箴

福壽雪艇老宗師曾て法雲普蓋禪師の巾瓶に侍する十有餘年形影相隨ふ。我が先師之を頌して賦するに一偈を以てす。予も亦た同參交情最も密にして約するに兄弟の誼を以てす。今先師の筆蹟を見るに及び道情彌々加はるを覺ゆ。仍て韻を襲いで呈似す――陰德身を安んず福壽の林。憶ふ君が葵藿丹心を捧ぐるを。道情曾て結ぶ連枝の約。芝蘭を化して古箴を學ばんと欲す。

無縫塔點眼

檀雲圍繞無縫塔　功德林中放異光　覺破迷衢長劫夢　羣靈携手入華藏

無縫塔點眼――檀雲圍繞す無縫塔。功德林中異光を放つ。迷衢長劫の夢を覺破して。羣靈手を携へて華藏に入る。

越後大島清七氏法事施食

信力莊嚴甘露門　曇華交影菩提園　羣靈等浴慈悲潤　回向懇酬祖孝恩

獅子飜躑圖

獸王豪氣示禪機　蹴踏稚兎奮猛威　動地驚天飜躑勢　電光影裏火雲飛

獅子飜躑の圖——獸王の豪氣は禪機を示し。稚兎を蹴踏して猛威を奮ふ。動地驚天飜躑の勢。電光影裏に火雲飛ぶ。

本山顧問會開祖上供

祖翁聖鑑在機先　遺照圓明六百年　雲衲頻傾葵藿悃　欲臨恩海探深淵

本山顧問會開祖上供——祖翁の聖鑑機先に在り。遺照圓明六百年。雲衲頻に傾く葵藿の悃。恩海に臨んで深淵を探らんと欲す。

米子安國寺長老來示先師如禪老漢所與七絶及長篇仍襲其韻賦此贈和尚以爲記念

空谷無端聞夙聲　先師面目太分明　松烟未散龜毛蹟　忽化法雷當眼轟

米子安國寺長老來つて先師如禪老漢が與ふる所の七絶及長篇を示さる。仍つて其韻を襲ぎ此を賦して和尚に贈り以て記念と爲す——空谷端無くも夙聲を聞き。先師の面目太分明。松烟未だ散せず龜毛の蹟。忽ち法雷と化して眼に當つて轟く。

賀圓藏首座大機眞悟

大道參來道念濃　機先占取寶慶宗　眞風擧着圓藏訣　悟後須傳古聖蹤

擔荷大梅綿密禪　更昇寺格奮正傳　請看眞淨臺前路　瑞氣如雲覆碧巓

眞淨寺片法幢會昇格慶讃記念――大梅綿密の禪を擔荷して。更に寺格を昇して正傳を奮ふ。請ふ看よ眞淨臺前の路。瑞氣雲の如く碧巓を覆ふ。

### 江崎山名立寺戒會

天降甘露潤叢林　山抱白雲奇趣深　萬樹櫻花添雅艷　點開禪戒一如心

江崎山名立寺戒會――天甘露を降して叢林を潤ほし。山は白雲を抱いて奇趣深し。萬樹の櫻花雅艷を添へ。點開す禪戒一如の心。

### 同明治天皇奉悼會

聖明治蹟定乾坤　至聖至仁稱獨尊　此地往年迎鳳駕　山川今尙沐天恩

同じく明治天皇奉悼會――聖明の治蹟乾坤を定め。至聖至仁獨尊と稱す。此地往年鳳駕を迎へ。山川今尙ほ天恩に沐す。

### 伴嵩蹊贈位記念

筆耕墨種養閒田　文草詩苗罩瑞烟　更浴載陽春日惠　一鄉堪樂有虞年

伴嵩蹊の贈位記念――筆耕墨種閒田を養ひ。文草詩苗瑞烟を罩む。更に載陽春日の惠に浴し。一鄉樂むに堪へたり有虞の年。

祝言首座天山愼一を賀す——參禪親しく叩く瑞圓の扉。愼獨の工夫一機に徹す。忽ち領す萬山の那畔座。大圓鏡裏靈輝を放つ。

東陽寺先住卍玄和尚拈香

東陽擧着密傳禪　卍字堂中了却玄　淸淨法身曾不滅　遺香徐動一爐烟

東陽寺先住卍玄和尚拈香——東陽擧著す密傳の禪。卍字堂中玄を了却す。淸淨法身曾て滅せず。遺香徐に動く一爐の烟。

法性山大廣院授戒會

梵音旣震德圓通　觀入楞嚴三昧中　法性山頭添瑞色　百花交影笑春風

法性山大廣院授戒會——梵音旣に震うて德は圓通す。觀じ入る楞嚴三昧の中。法性山頭瑞色を添へ。百花影を交へて春風に笑ふ。

神戸持田常吉君母堂五十周忌書寫三體般若心經資其冥福

孝子不堪追慕念　心經寫得報慈恩　摩訶般若波羅蜜　字字莊嚴功德園

神戸の持田常吉君母堂の五十周忌に三體の般若心經を書寫し其の冥福に資す——孝子追慕の念に堪へず。心經を寫し得て慈恩に報ず。摩訶般若波羅蜜。字字莊嚴す功德園。

眞淨寺片法幢會昇格慶讃記念

にす傑人の名。

米子總泉寺開山拜登拈香

感應道交心合心　滿庭凝翠紫雲深　誰知一脉總泉水　潤澤山陰功德林

米子總泉寺開山拜登拈香――感應道交心心に合し。滿庭翠を凝して紫雲深し。誰か知らん一脉總泉の水。潤澤す山陰の功德林。

淺草萬年山祝言寺戒會

驀直打開功德藏　禪庭薰遍五分香　妙樓觀上紅塵絕　滿目齊無不吉祥

淺草萬年山祝言寺戒會――驀直に打開す功德藏。禪庭薰じ遍す五分の香。妙樓觀上紅塵絕え。滿目齊しく吉祥ならざるは無し。

崇福寺泰全和尚拈香

至孝不堪葵藿情　献芹供養致丹誠　四師感應君知否　翠柳紅花帶露淸

崇福寺泰全和尚拈香――至孝葵藿の情に堪へず。献芹の供養丹誠を致す。四師の感應君知るや否や。翠柳紅花露を帶びて淸し。

賀祝言首座天山愼一

參禪親叩瑞圓扉　愼獨工夫徹一機　忽領萬山那畔座　大圓鏡裏放靈輝

和永塚春一氏韻

幽鳥銜花影自鮮　紫雲垂瑞洞光邊　相逢贈我親交曲　吟斷金華最上天

永塚春一氏の韻に和す——幽鳥花を銜んで影自から鮮かに。紫雲瑞を垂る洞光の邊。相逢うて我れに贈る親交の曲。吟斷す金華最上の天。

天德廿六世南嶺太壽大和尙拈香

光明七十八星霜　畢世行持振祖猷　行願未休眞古佛　法身依舊露堂堂

天德廿六世南嶺太壽大和尙拈香——光明七十八星霜。畢世の行持祖猷を振ふ。行願未だ休せず眞の古佛。法身舊に依つて露堂堂。

次儒者山口英道氏韻

春在山月花在烟　華藏啓瑞繞禪筵　誰言欲界多塵垢　脚下既開微妙蓮

儒者山口英道氏の韻を次ぐ——春は山月に在り花は烟に在り。華藏瑞を啓いて禪筵を繞る。誰か言ふ欲界塵垢多しと。脚下既に開く微妙の蓮。

山中幸盛

渾身熱血是忠誠　大丈夫何問死生　吐月峰頭神若在　山陰獨擅傑人名

山中幸盛——渾身の熱血是れ忠誠。大丈夫何ぞ死生を問はんや。吐月峰頭神在すが若く。山陰獨り擅

明治天皇嘗て蹕を北越木村家に駐めらる。今や碑を建て以て恩光を記す。豈に家門の光榮のみに止まらんや――聖帝往年蹕を駐むるの郷。地靈の望み遠く感殊に長し。山川天恩の渥きを紀するに似たり。碑石千秋德光を放つ。

塚本八郎君特被送淨供賦此謝之

多謝道情誠誼催　爲吾辱送淨供來　舌根觸着醍醐味　肚裏莊嚴甘露臺

塚本八郎君特に淨供を送らる。此を賦して之に謝す――多謝す道情誠誼の催し。吾が爲めに辱くも淨供を送り來る。舌根觸着す醍醐味。肚裏莊嚴す甘露臺。

京都府光泰山永明寺戒會

光泰莊嚴寶戒壇　紫雲垂瑞鎖禪欄　梅花綴玉櫻含笑　春月永明中畫欄

京都府光泰山永明寺戒會――光泰莊嚴す寶戒壇。紫雲瑞を垂れて禪欄を鎖す。梅花は玉を綴り櫻は笑を含む。春月永明畫欄に中る。

北白川宮殿下奉悼會

風入瓊林花忽散　浮雲蔽月海天昏　神光不隔幽明路　玉駕茲遊解脫門

北白川宮殿下奉悼會――風は瓊林に入つて花忽ち散じ。浮雲月を蔽ひ海天昏し。神光隔てず幽明の路。玉駕茲に遊ふ解脫の門。

皇上至仁特賜内帑之貲廣分賑恤之惠本會亦辱其恩賜感泣罔措謹賦小詩一篇以表謝恩之微忱

雲雨行施覆燾恩　雍容聖化滿乾坤　無窮德澤緣何報　欲致匪躬奉至尊

皇上至仁特に内帑の貲を賜はり廣く賑恤の惠を分たる。本會亦た其恩賜を辱うし感泣措く罔し。謹んで小詩一篇を賦し以て謝恩の微忱を表す――雲雨行施す覆燾の恩。雍容聖化乾坤に滿つ。無窮の德澤何に緣てか報ぜん。匪躬を致して至尊に奉ぜんと欲す。

酬加藤毅先生

道本圓通豈別求　由來蘿蔔出鎭州　睦公棒喝多機變　爭似俱胝一指頭

加藤毅先生に酬ゆ――道本と圓通豈に別に求めん。由來蘿蔔は鎭州に出づ。睦公の棒喝機變多きも。爭か似かん俱胝の一指頭。

井口北洲詞宗見贈其著愛梅閣詩曆賦此伸謝

六十三篇皆錦綉　仙鄉詩曆獨歸君　誰知白雪陽春曲　祇合愛梅閣上聞

井口北洲詞宗其著『愛梅閣詩曆』を贈らる。此れを賦して謝を伸ぶ――六十三篇皆な錦綉。仙鄉の詩曆獨り君に歸す。誰か知らん白雪陽春の曲。祇だ合に愛梅閣上に聞くべし。

明治天皇曾駐驆於北越木村家今也建碑以記恩光豈止家門之光榮而已

聖帝往年駐驆鄉　地靈望遠感殊長　山川似紀天恩渥　碑石千秋放德光

眞人今日現扶桑　祖席莊嚴正法藏　雪鎖鶴山敷白玉　滿林齊放吉祥光

高祖降誕會——眞人今日扶桑に現じ。祖席莊嚴す正法藏。雪は鶴山を鎖して白玉を敷き。滿林齊しく放つ吉祥光。

川上忠禪老兄八十壽言

種月排雲八十年　山光野趣養身全　老來更有長生術　常捧信心歸大仙

川上忠禪老兄の八十壽言——種月耕雲八十年。山光野趣身を養うて全し。老來更に長生の術有り。常に信心を捧げて大仙に歸す。

放光堂供養

三松夕抱眞如月　性海朝浮般若船　覺道遂無生死險　當頭坐斷紫金蓮

放光堂供養——三松夕に抱く眞如の月。性海朝に浮ぶ般若の船。道を覺れば遂に生死の險無く。當頭坐斷す紫金蓮。

題神奈川縣在住宮城縣人會名簿

芝蘭契合灑丹心　況復同鄉友義深　不獨交情如膠漆　山川丘壑亦知音

神奈川縣在住宮城縣人會名簿に題す——芝蘭契合して丹心を灑ぐ。況んや復た同鄉友義深し。獨だ交情膠漆の如きのみならず。山川丘壑亦た知音。

### 倉田松濤畫伯百奇遊戯圖跋　二首

毫端幻出活伽藍　凡聖同居興那堪　遊戯一場多少衆　前三三與後三三

倉田松濤畫伯が百奇遊戯圖の跋――毫端幻出す活伽藍。凡聖同居して興那ぞ堪へん。遊戯一場多少の衆。前三三は後三三と與にす。

萬象描來筆力豪　卷中無一不風騷　百奇同會多禪味　萬壑老松翻碧濤

萬象描き來つて筆力豪なり。卷中一として風騷ならざるは無し。百奇同會して禪味多く。萬壑の老松碧濤を翻へす。

### 龜鶴山慶德寺香積臺落成記念　二首

龜踞鶴舞瑞雲開　構造新成香積臺　珍重吉祥慶德瑞　無量福壽不招來

龜鶴山慶德寺香積臺落成記念――龜は踞し鶴は舞うて瑞雲開き。構造新に成る香積臺。珍重す吉祥慶德の瑞。無量の福壽招かずして來る。

靈龜仙鶴散香華　福壽莊嚴慶德加　聖皇賜號名成實　普雨祥氣鎭國家

靈龜仙鶴香華を散じ。福壽莊嚴慶德加はる。聖皇號を賜うて成實と名づけ。普く祥氣を雨らして國家を鎭す。

### 高祖降誕會

同芝出張所祝聖

律轉鴻鈞曆母回　山雲垂瑞曙光開　無邊淑氣無量壽　分付香臺一朶梅

同じく芝出張所祝聖――律鴻鈞を轉じて曆母に回る。山雲瑞を垂れて曙光開く。無邊淑氣無量の壽。分付す香臺一朶の梅。

贈本山勘次郞君

謝君遙贈珍如意　宛若龍王抱寶珠　忽覺風雲拈處動　叢林必見衆萠蘇

本山勘次郞君に贈る――謝す君が遙に珍如意を贈らるゝを。宛も龍王の寶珠を抱くが若し。忽ち覺ゆ風雲拈處に動き。叢林必ず見ん衆萠の蘇へるを。

祝松坡翁古稀　二首

仁人保壽復奚疑　德業堪爲百世師　此老更存無限樂　從心所欲不踰規

松坡翁の古稀を祝す――仁人壽を保つ復た奚ぞ疑はん。德業百世の師と爲すに堪へたり。此老更に無限の樂みを存す。心の欲す所に從つて規を踰えず。

勸農興學幾施功　愛國憂民克奉公　齢達古稀身未老　雅懷既占翰場雄

農を勸め學を興し幾たびか功を施し。國を愛し民を憂ひ克く公に奉ず。齢古稀に達して身未だ老いず。雅懷既に占む翰場の雄。

贈正五位九州植月重佐公の英靈を弔ふ——身を輕んじ義を重んじて皇基を護り。族を擧げ難に殉じて所期に酬ゆ。果し天恩の枯骨に及ぶを見。千秋高く聳ゆ表忠の碑。

### 高祖大師夜雨草菴

空手還鄕德豈孤　此間佛法一毫無　松風覺破禪窓夢　夜雨聲聲打結跏

高祖大師夜雨草菴——空手還鄕德豈に孤ならんや。此間佛法一毫無し。松風覺破す禪窓の夢。夜雨聲聲結跏を打つ。

### 大正十二年癸亥元旦本山祝聖

鳳曆更端壽色鮮　山雲垂瑞彩禪天　仁王般若波羅蜜　一炷心香祝萬年

大正十二癸亥年の元旦本山祝聖——鳳曆更端壽色鮮なり。山雲瑞を垂れて禪天を彩る。仁王般若波羅蜜。一炷の心香萬年を祝す。

### 同本山祝語

曉鐘破夢報昌辰　瞥見山中既帶春　般若臺前無限瑞　唯期道業與年新

同じく本山祝語——曉鐘夢を破つて昌辰を報ず。瞥見す山中既に春を帶ぶるを。般若臺前無限の瑞。唯だ期す道業年と新なることを。

るのみならん。風に吼ゆるの鐵幹化して龍と成る。

碓房六祖

臼房八月混泥沙　明鏡當臺驗正邪　米白了兮何要簸　三更碓觜結空華

碓房の六祖――臼房八月泥沙に混じ。明鏡臺に當つて正邪を驗す。米白了せり何ぞ簸すことを要せん。三更碓觜空華を結ぶ。

巖上祖師巖下問僧

萬仞高巖是梵臺　誰知默處震風雷　堪憐樹下試探勝　誤惹一場懊憹來

巖上の祖師巖下の問僧――萬仞の高巖是れ梵臺。誰か知らん默處風雷を震ふを。憐むに堪へたり樹下探勝を試み。誤つて一場の懊憹を惹き來る。

市川富七翁喜壽　乙川文獅氏父子孫六十餘人

仁者由來富壽量　信心況又得安康　蘭孫桂子交圍座　瑞氣深籠龜鶴堂

市川富七翁の喜壽――仁者由來壽量に富む。信心況んや又た安康を得るをや。蘭孫桂子交ゝ座を圍み。瑞氣深く籠む龜鶴の堂。

弔贈正五位九州植月重佐公英靈

輕身重義護皇基　擧族殉難酬所期　果見天恩及枯骨　千秋高聳表忠碑

郡山橋本萬右衞門氏母堂七十七壽

端一誠莊世所尊　猶修陰德爲兒孫　齡迎喜壽身强健　龜鶴交遊不老門

郡山橋本萬右衞門氏母堂の七十七壽――端一誠莊世の尊ぶ所。猶ほ陰德を修めて兒孫の爲にす。齡喜壽を迎へて身强健。龜鶴交ゞ遊ぶ不老門。

題能州和田山櫻帖

櫻霞競美艶陽晨　地僻却知花有神　北陵獨擅芳野譽　令人長樂太平春

能州和田山櫻帖に題す――櫻霞美を競ふ艶陽の晨。地僻にして却つて知る花に神有るを。北陵獨芳野の譽を擅にし。人をして長く太平の春を樂ましむ。

題蘆雁圖

楚地燕雲萬里秋　滿天涼氣滿蘆洲　一聲叫破江南夢　歷盡瀟湘不惹愁

蘆雁の圖に題す――楚地燕雲萬里の秋。滿天の涼氣蘆洲に滿つ。一聲叫破す江南の夢。瀟湘を歷盡して愁を惹かず。

題栽松道者

獨拈钁子破頭峰　栽遍春天帶雨松　何止棟梁支大廈　吼風鐵幹化成龍

栽松道者に題す――獨り钁子を拈す破頭峰。栽ゑ遍す春天雨を帶ぶるの松。何ぞ止に棟梁大廈を支ふ

創刊而來廿七春　文章威力與年新　山雲垂瑞洛陽曉　拈筆警醒天下人

癸亥の新年中外日報に寄す——創刊而來廿七春。文章の威力年と新なり。山雲瑞を垂る洛陽の曉。筆を拈じて警醒す天下の人。

祝中外日報滿七千號

警世文章護法城　常從高處打論評　排邪顯正誰能抵　教界專擅木鐸名

中外日報滿七千號を祝す——警世の文章法城を護り。常に高處より論評を打す。邪を排し正を顯す誰か能く抵らん。教界專ら擅にす木鐸の名。

祝神戸修養會新年

歡喜林中迎吉辰　先期修養與年新　山雲垂瑞三光曉　瞥見寒梅旣占春

神戸修養會の新年を祝す——歡喜林中吉辰を迎へ。先づ期す修養の年と新なることを。山雲瑞を垂る三光の曉。瞥見す寒梅の旣に春を占むるを。

成道會拈香

蛛網鵲巢六閱年　明星一閃眼華鮮　請看正覺山前路　數片閒雲伴大仙

成道會拈香——蛛網鵲巢六たび年を閱し。明星一閃眼華鮮なり。請ふ看よ正覺山前の路。數片の閒雲大仙を伴ふ。

順德天皇行宮遺蹟保存の事天聽に達し補助金を賜はる。此れを賦して寺泊の本間健四郎君に呈す――誠忠既に達す九重の天。叡旨忽ち雲外より傳ふ。聖蹟無限の瑞を添へ來つて。神光普く耀く越の山川。

草野論吉國手贈如意賦此伸謝

贈吾屋裏寶如意　多謝道情如海深　殺活靈機須不盡　拈來天下覓知音

草野論吉國手如意を贈らる。此れを賦して謝を伸ぶ――吾に贈る屋裏の寶如意。多謝す道情海の如く深きを。殺活の靈機須いて盡きず。拈じ來つて天下に知音を覓む。

祝大觀久賀博士首版于慶德

聖諦廓然餘韻深　萬行一信道玆尋　至誠追蹤醫王跡　欲救玄沙三種痯

大觀久賀博士慶德に首版たるを祝す――聖諦廓然餘韻深し。萬行一信道を玆に尋ぬ。至誠追蹤す醫王の跡。救はんと欲す玄沙三種の痯を。

賀田中舍身居士還曆

悲願現來居士身　濟生威德豈無鄰　齡迎華甲彌加健　斥小彈偏也至仁

田中舍身居士の還曆を賀す――悲願現じ來る居士の身。濟生の威德豈に鄰無からんや。齡華甲を迎へて彌ゝ健を加へ。小を斥け偏を彈ずる也た至仁。

癸亥新年寄中外日報

古河家佛事

三寶放光空古今　鶴山高處紫雲深　白溪那畔秋方暮　滿地皆爲錦繡林

古河への佛事――三寶光を放つて古今を空うし。鶴山高き處紫雲深し。白溪那畔秋方に暮れんとし。滿地皆錦繡の林と爲る。

太祖大師降誕會

眞人垂迹豈無緣　偉德光明照萬年　一句平常心是道　扶桑國裏總歸禪

太祖大師の降誕會――眞人迹を垂る豈に緣無からんや。偉德光明萬年を照す。一句平常心是道。扶桑國裏總て禪に歸す。

祝曹澤禪底師還曆

曹澤那邊慕祖風　齡迎華甲志彌雄　道人更有長生訣　巒色湖光樂不窮

曹澤禪底師の還曆を祝す――曹澤那邊祖風を慕ひ。齡華甲を迎へて志彌々雄なり。道人更に長生の訣有り。巒色湖光樂み窮らず。

順德天皇行宮遺蹟保存之事達天聽賜補助金賦此

呈寺泊本間健四郎君

誠忠已達九重天　叡旨忽從雲外傳　聖蹟忝來無限瑞　神光普耀越山川

定業逼身終叵免　遭難喪命實堪憐　爲君開盡華藏路　露地莊嚴十二緣

新高艦及漁業遭難者追弔――定業身に逼つて終に免れ叵く。遭難命を喪ふ實に憐むに堪へたり。君が爲めに開き盡す華藏の路。露地に莊嚴す十二緣。

和加藤毅氏韻

孤峰獨許白雲來　心鏡何曾惹點埃　莫道四門遮鳥道　不勞彈指一時開

加藤毅氏の韻に和す――孤峰獨り許す白雲の來るを。心鏡何ぞ曾て點埃を惹かん。道ふ莫れ四門鳥道を遮ると。勞せず彈指一時の開。

梁川興國寺授戒會歸鄉歡迎會席上

鶴灣空抱慕鄉心　及入故國歡叵禁　滿目山河皆舊識　迎吾君子盡知音

梁川興國寺授戒會歸鄉歡迎會席上――鶴灣空しく抱く慕鄉の心。故國に入るに及んで歡び禁し叵し。滿目の山河皆な舊識。吾を迎ふるの君子盡く知音。

同　大陽會

芝蘭契合大陽會　倶出感恩酬德情　禪心茶味無窮樂　菊有淸香松有聲

同じく大陽會――芝蘭契合す大陽會。倶に感恩酬德の情に出づ。禪心茶味無窮の樂み。菊に淸香有り松に聲有り。

福岡精一氏の賚韻を次ぐ——祖園に入つて異芳を探らんと欲し。春寒を厭はず風霜を犯す。耳根忽ち鶯聲に拔かれて。觸着す老梅滃渤の香。

贈梅花丸田等觀大人

滿庭春色日新鮮　萬朶梅花交競妍　包得清香添簡牘　付鴻遙寄栢陽賢

梅花を丸田等觀大人に贈る——滿庭の春色日に新鮮。萬朶の梅花交〻妍を競ふ。清香を包得て簡牘に添へ。鴻に付して遙に寄す栢陽の賢。

和加藤毅氏韻

多謝春風無負期　早梅含笑兩三枝　人間曆日分新舊　問着虛空總不知

加藤毅氏の韻に和す——多謝す春風期に負く無きを。早梅笑を含む兩三枝。人間の曆日新舊を分つも。虛空に問着すれば總て知らず。

明治天皇十年祭恭賦

允文允武世無倫　大化猶觀遺德新　一段神光何有滅　至今四海等歸仁

明治天皇十年祭　恭しく賦す——允文允武世に倫無し。大化猶ほ觀る遺德新なり。一段の神光何ぞ滅すること有らん。今に至つて四海等しく仁に歸す。

新高艦及漁業遭難者追弔

櫻井大典師の渡天を送る——覺王の靈蹟慈光を帶ぶ。鷲嶺恒河皆な道場。海陸憂ひ無し行路の迥なるも。五天隨處是れ家鄕。

鹿園明月待君臻　鷲嶺白雲迎錫頻　設拜伽耶靈塔去　擔來覺樹一枝春

鹿園の明月君の臻るを待ち。鷲嶺の白雲錫を迎ふること頻なり。設伽耶の靈塔を拜し去らば。擔ひ來れ覺樹一枝の春。

名古屋光眞寺入佛授戒會

滿地莊嚴法界宮　妙樓觀上振眞風　華藏百億無邊瑞　收在光眞新殿中

名古屋光眞寺入佛授戒會——滿地莊嚴す法界宮。妙樓觀上眞風を振ふ。華藏百億無邊の瑞。收めて光眞新殿の中に在り。

越後柿崎三竹堂珍菓海草製翁飴

質長甘味宜營養　三竹堂名遠近鳴　一喫快然神欲醉　芳滋豈只衛其生

越後柿崎三竹堂の珍菓海草製翁飴——質は甘味に長じて營養に宜し。三竹堂の名は遠近に鳴る。一喫快然神醉はんと欲す。芳滋豈に只だ其生を衞るのみならんや。

次福岡精一氏賽韻

欲入祖園探異芳　春寒不厭犯風霜　耳根忽被鶯聲拔　觸着老梅滃渤香

志。護法由來護國の行。

曹洞宗議會開會式拈香

和合海中懇討論　更新憲制奉宗門　從斯本末加親密　欲報祖翁罔極恩

曹洞宗議會開會式拈香——和合海中懇に討論し。憲制を更新して宗門に奉ず。斯れより本末親密を加へ。祖翁罔極の恩に報いんと欲す。

糸魚川單傳山直指院完戒

法界虛空攝戒光　當頭無處不華藏　要知直指單傳法　須了平常是道場

糸魚川單傳山直指院完戒——法界虛空戒光を攝し。當頭處として華藏ならざるは無し。直指單傳の法を知らんと要せば。須らく了ずべし平常是れ道場なることを。

覺性院殿德巖雪堂大居士大練忌　早川千吉郎氏

覺性圓明智德全　空華現跡影嬋妍　雪堂閒抱眞如月　遺照今猶滿百川

覺性院殿德巖雪堂大居士大練忌——覺性圓明智德全し。空華の現跡影嬋妍。雪堂閒に抱く眞如の月。遺照今猶ほ百川に滿つ。

送櫻井大典師渡天　二首

覺王靈蹟帶慈光　鷲嶺恒河皆道場　海陸無憂行路迥　五天隨處是家鄉

郡山大慈堂洞昌寺入佛點眼法語

諸嶽峰頭無底泉　郡山忽現萬尋淵　玲瓏清水波濤活　萬派分流潤福田

郡山大慈堂洞昌寺入佛點眼の法語——諸嶽峰頭の無底泉。郡山忽ち現ず萬尋の淵。玲瓏たる清水波濤活たり。萬派流れを分つて福田を潤す。

眞心淨國禪師十三周忌大圓玄致禪師三周報恩會　大正十一年十一月十六日於本山出班燒香

拈直心來爲道場　大圓鏡裏放玄光　其功其德高無上　鶴嶺長傳二法王

直心淨國禪師十三周忌大圓玄致禪師三周忌報恩會——直心を拈じ來つて道場と爲す。大圓鏡裏玄光を放つ。其功其德高きこと無上。鶴嶺長く傳ふ二法王。

祝金源寺阿部泰莽師建法幢

佛陀行願在平常　社會無之不道場　今日金源飜法旆　山容水態浴毫光

金源寺阿部泰莽師の建法幢を祝す——佛陀の行願平常に在り。社會は之れ道場にあらざるは無し。今日金源法旆を飜へし。山容水態毫光に浴す。

宗議會開會上供

本末歸宗葵藿傾　祖翁家訓要研精　兒孫等抱酬恩志　護法由來護國行

宗議會開會上供——本末宗に歸し葵藿傾く。祖翁の家訓研精を要す。兒孫等しく抱く恩に酬ゆるの

白字溪頭梅帶笑　三松關外曳丹虹　闔山淨侶皆雲水　五蘊空來空亦空

本山示衆――白字溪頭梅笑を帶び。三松關外丹虹を曳く。闔山の淨侶皆な雲水。五蘊空じ來りて空亦た空。

## 本山涅拌忌　大正十二年

覺王示寂跋河邊　這裏休論生死緣　誰識鶴林枝密處　一輪白月出雲圓

本山涅拌忌――覺王寂を示す跋河の邊。這裏論ずるを休めよ生死の緣。誰か識らん鶴林枝密なる處。一輪の白月雲を出で圓なることを。

## 本山授戒會完戒

三松垂瑞護華藏　萬朶香雲遶祖堂　古佛豈留來去跡　臨軒新月影將圓

本山授戒會完戒――三松瑞を垂れて華藏を護り。萬朶の香雲祖堂を遶る。古佛豈に來去の跡を留めん。軒に臨むの新月影將に圓ならんとす。

## 薰育院創立二十年記念會拈香

人鮮尤惡教從之　薰育方知興國基　聖化無窮三寶德　佛心倫理本同軌

薰育院創立二十年記念會拈香――人尤惡なるは鮮し教へば之に從はん。薰育方に知る興國の基なるを。聖化窮り無し三寶の德。佛心倫理本と軌を同うす。

自から文を成す。

富山市春日山光嚴寺戒會　二首

風過山有迎雲意　雁度潭無留影心　公案現成三世佛　慈光照破古來今

富山市春日山光嚴寺戒會——風山を過ぎて雲を迎ふるの意有り。雁潭を度りて影を留むるの心無し。公案現成す三世佛。慈光照破す古來今。

慈悲孝順在唯心　分作正傳二八禁　大道坦然無罣礙　網羅堂畔戒雲深

慈悲孝順唯だ心に在り。分れて正傳二八の禁と作る。大道坦然として罣礙無く。網羅堂畔戒雲深し。

次福島市菅野寅吉氏韻　二首

胸中開得別乾坤　人爵如何天爵尊　淨國娑婆間一髮　脚跟下是菩提門

福島市菅野寅吉氏の韻を次ぐ——胸中開き得たり別乾坤。人爵は天爵の尊と如何ぞや。淨國と娑婆と間一髮。脚跟下是れ菩提の門。

雙韻如花飛入堂　不關風雪擊窗狂　觀來妙法存于我　三界無行不道場

雙韻花の如く飛んで堂に入る。關せず風雪窗を擊つて狂ふも。觀じ來れば妙法我れに存し。三界行くとして道場ならざるは無し。

本山示衆

軍艦新高殉難死者追弔

死生有命豫難期　奉國殉難眞耐悲　心月何關波出沒　慈航不恐業風吹

軍艦新高の殉死者追弔――死生命有り豫め期し難し。國に奉じ難に殉ずる眞に悲むに耐へたり。心月何ぞ波の出沒に關せん。慈航恐れず業風の吹くを。

太祖大師献香

慈光赫奕照禪天　此道儼存六百年　欲識祖翁親密意　虚空拍手舞溪邊

太祖大師献香――慈光赫奕として禪天を照し。此道儼存す六百年。祖翁親密の意を識らんと欲せば。虚空に拍手して溪邊に舞ふべし。

默童默仙素童三禪師供眞

三師辭世數經年。戒殿懇開供養筵　眞淨界中消息絕　靈音獨有老松傳

默童默仙素童三禪師供眞――三師世を辭して數たび年を經たり。戒殿懇に開く供養の筵。眞淨界中消息絕え。靈音獨り老松の傳うる有り。

兩祖大師供眞

吉峰長捧千秋月　諸嶽深籠萬古雲　兩祖法身明歷歷　香烟影密自成文

兩祖大師供眞――吉峰長く捧ぐ千秋の月。諸嶽深く籠む萬古の雲。兩祖の法身明歷歷。香烟影密にして

一生奉國不謀身　千古留碑泣鬼神　誰識不忠不孝士　飜爲盡孝盡忠人

渡邊崋山の玉碎碑――一生國に奉じて身を謀らず。千古碑を留めて鬼神を泣かしむ。誰か識らん不忠不孝の士。飜て盡孝盡忠の人と爲る。

祝某氏古稀

行藏用捨兩相宜　不盡乾坤屬白眉　此老豈無長壽訣　從心所欲不踰規

某氏の古稀を祝す――行藏用捨兩ながら相宜し。不盡の乾坤白眉に屬す。此老豈に長壽の訣無からんや。心の欲する所に從つて規を踰えず。

靈源寺孝道和尙三周忌

孝順由來至道門　利生弘法報深恩　靈源涌出曹溪水　潤澤頸城祇樹園

靈源寺孝道和尙の三周忌――孝順由來至道の門。利生弘法深恩に報ず。靈源涌出す曹溪の水。潤澤す頸城の祇樹園。

靈源寺屋宇改葺信者祖先回向

嚴飾靈源古道場　屋頭添美放祥光　檀波羅蜜無邊德　風拂炎塵爽味長

靈源寺の屋宇改葺　信者祖先の回向――嚴飾す靈源の古道場。屋頭美を添へて祥光を放つ。檀波羅蜜無邊の德。風は炎塵を拂つて爽味長し。

最乘寺夏期講習會　二首

鬱密老杉雲半封　同參獨坐大雄峰　林間忽聽無絃曲　信水轉珠驚臥龍　堀内信水居士說法于林間

最乘寺夏期講習會――鬱密たる老杉雲半ば封じ。同參獨坐す大雄峰。林間忽ち聽く無絃の曲。信水珠を轉じて臥龍を驚かす。（堀内信水居士林間に說法す）

滿目老杉隔世塵　溪聲山色也天眞　此間休說炎涼事　倶是吉祥安樂人

滿目の老杉世塵を隔て。溪聲山色也た天眞。此間說くことを休めよ炎涼の事。倶に是れ吉祥安樂の人。

贈鈴木善兵衞氏　大雄山檀徒總代

長年擁護大雄峰　一貫行持獨自悰　謝君功績淸於玉　致力山門形影從

鈴木善兵衞氏に贈る――長年擁護す大雄峰。一貫の行持獨り自から悰む。謝す君が功績玉よりも淸く。力を山門に致して形影從ふことを。

攝取菴書院新築

遺德長輝攝取菴　客堂新就倚烟嵐　此房宜號紫雲閣　諸嶽風光也足參

攝取菴書院の新築――遺德長く輝く攝取菴。客堂新に就つて烟嵐に倚る。此房宜しく紫雲閣と號すべし。諸嶽の風光也た參ずるに足る。

渡邊華山玉碎碑

熱。禪談熟する處淸風有り。

賀本山首座虎岳禪勇具壽　二首

探盡寒巖虎嘯門　逍遙諸嶽別乾坤　三松半座休遲擬　須奮禪勇報祖恩

本山首座虎岳禪勇具壽を賀す――探盡す寒巖虎嘯の門。逍遙す諸嶽の別坤乾。三松の半座遲擬することを休めよ。須らく禪勇を奮つて祖恩に報ずべし。

虎嘯龍吟究正宗　岳邊雲密護三松　禪天忽地飜筋斗　勇氣既呑鷄足峰

虎嘯龍吟正宗を究め。岳邊雲密にして三松を護る。禪天忽地飜筋斗。勇氣既に呑む鷄足峰。

題深草閑居圖

空手還鄉德豈孤　此間佛法一毫無　眼横鼻直唯如是　不許傍人錯遡模

深草閑居の圖に題す――空手還鄉德豈に孤ならんや。此間佛法一毫無し。眼横鼻直唯だ是くの如し。許さず傍人の錯遡模。

題雪夜草菴圖

西來祖道獨傳東　種月耕雲樂豈窮　雪夜草菴人不到　乾坤一白玉玲瓏

雪夜草菴の圖に題す――西來の祖道獨り東に傳ふ。種月耕雲樂み豈窮まらんや。雪夜草菴人到らず。乾坤一白玉玲瓏。

は以て朋と爲り水は師と作る。

織日驅人坐甑中　火雲難避伎方窮　衲僧不待雷車到　贏得禪心一榻風

織日人を驅つて甑中に坐せしめ。火雲避け難く伎方に窮す。衲僧雷車の到るを待たず。贏ち得たり禪心一榻の風。

向　松　菴

三旬駐錫向松菴　遮斷塵緣打放參　坐見函山湘海景　涼風遶榻伴清談

向松菴——三旬駐錫す向松菴。塵緣を遮斷して放參を打す。坐して見る函山湘海の景。涼風榻を遶つて清談を伴ふ。

和　某　氏　韻

身似虛空不記年　心如水月謝諸緣　閒來偶入經三昧　飽喫清風一味禪

某氏の韻に和す——身は虛空に似て年を記せず。心は水月の如く諸緣を謝す。閒來偶〻入る經三昧。飽喫す清風一味の禪。

次草野諭吉氏韻

消息曾通目擊中　深緣再寄水雲躬　這裏休論三伏熱　禪談熟處有清風

草野諭吉氏の韻を次ぐ——消息曾て通ず目擊の中。深緣再び寄す水雲の躬。這裏論ずるを休めよ三伏の

祝高岡新報一萬號

經國文章警世論　重號一萬勢如奔　筆端自具神通力　直下旋乾又轉坤

高岡新報の一萬號を祝す――經國の文章警世の論。號を重ぬること一萬勢奔るが如し。筆端自から神通力を具し。直下に旋乾又轉坤。

今上御大典記念帖

日月雙懸照八洲　鳳臺垂瑞紫雲浮　萬邦仰德乾坤耀　萬歲聲中頌聖猷

今上御大典記念帖――日月雙び懸つて八洲を照らし。鳳臺瑞を垂れて紫雲浮ぶ。萬邦德を仰いで乾坤耀き。萬歲聲中聖猷を頌す。

和等觀居士韻

放下塵緣與世忘　兎毫驅我使招忙　禪餘時入詩三昧　萬壑松風一味涼

等觀居士の韻に和す――塵緣を放下して世と忘れ。兎毫我を驅りて忙を招かしむ。禪餘時に入る詩三昧。萬壑の松風一味の涼。

次某氏賚韻

八洲丘壑雅情馳　一樹嶺松雲霧披　靜室想君風韻富　竹以爲朋水作師

某氏の賚韻を次ぐ――八洲の丘壑に雅情馳せ。一樹の嶺松に雲霧披く。靜室想ふ君が風韻に富むを。竹

次丸田等観居士韻　二首

行脚何妨西又東　化遊宛似處虚空　栢陽君予數迎我　鐵樹聯花枝有風

丸田等観居士の韻を次く——行脚何ぞ妨げん西又東。化遊宛ら虚空に處するに似たり。栢陽の君子數く我れを迎へ。鐵樹花を聯ねて枝に風有り。

山形杖子迹西東　自笑加行似算空　平等觀來禪世界　知音千里是同風

山形の杖子迹西東。自から笑ふ加行空を算するに似たるを。平等に禪世界を觀じ來れば。知音千里是れ同風。

吉向松月氏見惠壽老人

名手製陶技逼眞　將言偶像有精神　松風蘿月無窮樂　鶴髮童顏壽老人

吉向松月氏壽老人を惠まる——名手の製陶技眞に逼る。將に言はんとす偶像精神有りと。松風蘿月無窮の樂み。鶴髮童顏の壽老人。

祝神戸修養會少年音樂隊演奏式

佛門本有聲明學　導德宣情儀亦調　堪祝少年音樂隊　方斯修養好資糧

神戸修養會少年音樂隊演奏式を祝す——佛門本と聲明の學有り。德を導き情を宣べ儀も亦た調ふ。祝するに堪へたり少年音樂隊。方に斯れ修養の好資糧。

萬感銜胸默沒辭　追懷往事佇多時　捧君一片忠誠涙　海霧猶朝遺蹟碑

寺泊の聚感園――萬感胸を銜いて默として辭沒し。往事を追懷して佇むこと多時。君に捧ぐ一片忠誠の涙。海霧猶ほ朝す遺蹟の碑。

### 贈絡子於祥雲晩成師以爲渡米記念

半歳遊行錫影輕　米山布水路縱橫　謝君異域扶吾化　觸處應緣築法城

絡子を祥雲晩成師に贈り。以て渡米記念と爲す。――半歳の遊行錫影輕く。米山布水路縱橫。謝す君が異域吾が化を扶け。觸處緣に應じて法城を築くを。

### 題聖人與偉人

偉賢至聖道惟基　遺訓堪爲百世規　若使後生修厥德　何憂人海思潮移

『聖人と偉人』に題す――偉賢至聖道惟れ基。遺訓百世の規と爲すに堪へたり。若し後生をして厥德を修めしめば。何ぞ憂へん人海思潮の移るを。

### 賀蓬萊藤右衛門翁　河合眞英師實父齡八十

仰見南山懸壽星　神龜瑞鶴表遐齡　仁人自解長生術　呑吐蓬萊山水靈

蓬萊藤右衛門翁を賀す――仰き見る南山壽星を懸くるを。神龜瑞鶴遐齡を表はす。仁人自から長生の術を解し。呑吐す蓬萊山水の靈。

校庭牽杖望空洋　佐島連山帶夕陽　學界謝君彊敎育　幾千子弟浴恩光

寺泊校長の韻を次ぐ――校庭杖を牽いて空洋を望めば。佐島の連山夕陽を帶ぶ。學界謝す君が敎育に彊め。幾千の子弟恩光に浴するを。

次柏崎木村松溪居士韻　二首

薫風萬里路西東　獨有米峰凭半空　最喜松溪傳妙曲　幾回令我浴涼風

柏崎の木村松溪居士の韻を次ぐ――薫風萬里路西東。獨り米峰の半空に凭る有り。最も喜ぶ松溪妙曲を傳へ。幾回か我れをして涼風に浴せしむ。

米峰鯖水兩相親　況復松溪洗世塵　莫道柏陽風月古　一回屬目一回新

米峰鯖水兩ながら相親む。況んや復た松溪世塵を洗ふ。道ふ莫れ柏陽風月古なりと。一回の屬目は一回より新なり。

實相山眞如院戒會題安陀衣

逍遙物外揚英氣　擧唱大雄正令新　實相山頭無限瑞　一袈裟下攝羣賓

實相山眞如院戒會安陀衣に題す――物外に逍遙して英氣を揚げ。大雄の正令を擧唱して新なり。實相山頭無限の瑞。一袈裟下に羣賓を攝す。

寺泊聚感園

朝鮮全北日報東光新聞の發展を賀す――經國の文章警世の論。洋洋たる硯海筆瀾翻る。北羅添へ得たり東光の瑞。八道の山河曉暾耀く。

與坂井松坡居士

竹爲良友水良師　梅隴松坡亦舊知　今日相逢談忽熟　交情倶入佛慈悲

坂井松坡居士に與ふ――竹は良友爲り水は良師。梅隴松坡も亦舊知。今日相逢うて談忽ち熟し。交情倶に佛の慈悲に入る。

贊富山畫工華卿所寫寒山拾得圖

兩頭禿髮鬼耶仙　幻出華卿健筆前　頼有老松捧澹月　描來萬法一如禪

富山の畫工華卿が寫す所の寒山拾得の圖に贊す――兩頭の禿髮鬼か仙か。幻出す華卿が健筆の前。頼に老松の澹月を捧ぐる有り。描き來る萬法一如の禪。

賀海嶽寺首座石天芳珊

禪月破雲昇玉欄　心芳吐玉影珊珊　胸中頼秘補天石　海嶽山頭手脚安

海嶽寺首座石天芳珊を賀す――禪月雲を破つて玉欄に昇り。心芳玉を吐いて影珊珊。胸中頼に補天の石を秘し。海嶽山頭手脚安し。

次寺泊校長韻

永明の住持普山和尚に與ふ——三寶住持古風を慕ひ。山門見るに堪へたり紹隆の功。利生弘法無量の瑞。盡く衲僧道念の中に出づ。

新潟縣同窗會追弔會

道友結交情致長　螢窗况復臥同床　誠心不隔幽明境　沈水一爐滿殿香

新潟縣同窗會追弔會——道友交を結んで情致長し。螢窗况んや復た同床に臥す。誠心隔てず幽明の境。沈水一爐滿殿香し。

賀晧臺霖玉仙老師古稀　二首

洞門元老獨推師　化錫縱橫洽四維　誰識道人長生訣　從心所欲不踰規

晧臺霖玉仙老師の古稀を賀す——洞門の元老獨り師を推す。化錫縱橫四維に洽ねし。誰か識らん道人長生の訣。心の欲する所に從つて規を踰えず。

恩霑中外化彌滋　緇素迎風獻壽詞　一樹仙桃春不老　晧臺高秀萬年枝

恩は中外を霑して化彌〻滋く。緇素風を迎へて壽詞を獻ず。一樹の仙桃春老いず。晧臺高く秀づ萬年の枝。

賀朝鮮全北日報東光新聞發展

經國文章警世論　洋洋硯海筆瀾飜　北羅添得東光瑞　八道山河耀曉暾

朶の慶雲大雄を繞る。

爲倉田松濤畫伯贈予常用絡子

茶禪俳味兩天眞　潑墨灑來筆有神　畫房靜似僧房靜　松影成濤洗世塵

倉田松濤畫伯の爲めに予が常用の絡子を贈る――茶禪俳味兩ながら天眞。潑墨灑ぎ來つて筆に神有り。畫房靜なること僧房靜なるに似たり。松影濤を成して世塵を洗ふ。

鷹藤龍馬與法號稱禪驥天仗上座

安分樂業守以誠　修德求仁養雅情　龍驥豈停塵界絆　禪天隨處自縱橫

鷹藤龍馬に法號を與へ禪驥天仗上座と稱す――分に安んじ業を樂み守るに誠を以てし。德を修め仁を求めて雅情を養ふ。龍驥豈に塵界の絆に停まらんや。禪天隨處自から縱橫。

題鷗夢庵

富嶽穿雲聳半空　萬松凝綠咽淸風　人間得失總忘却　廓落托身鷗夢中

鷗夢庵に題す――富嶽雲を穿つて半空に聳え。萬松綠を凝らして淸風に咽ぶ。人間の得失總て忘却し。廓落身を托す鷗夢の中。

與永明住持普山和尚

三寶住持慕古風　山門堪見紹隆功　利生弘法無量瑞　盡出衲僧道念中

る處惟れ天國。博愛行はるゝ時福音有り。

祝春田源之丞氏古稀

一誠英氣一生涯　壽域春深鶴相隨　誰識仁人長壽訣　從心所欲不踰規

春田源之丞氏の古稀を祝す――一誠の英氣一生涯。壽域春深うして鶴相隨ふ。誰か識らん仁人長壽の訣。心の欲する所に從つて規を踰えず。

次韻與松田亮孝和尚　二首

渾身擔荷祖師禪　豈測病魔侵座邊　攝取庵中心自健　臥三昧裏思通玄

韻を次いで松田亮孝和尚に與ふ――渾身擔荷す祖師の禪。豈に測らんや病魔の座邊を侵さんとは。攝取庵中心自から健かに。三昧裏に臥して思ひ玄に通ず。

磨甎作鏡意何親　八福田中不厭辛　孝順慈悲深似海　期君爲法愛其身

甎を磨して鏡と作す意何ぞ親き。八福田中辛を厭はず。孝順慈悲深きこと海に似たり。期す君が法の爲めに其身を愛まんことを。

次環溪禪師韻

鶴駕降臨入碧叢　滿山草木浴皇風　薩埵威德添光彩　萬朶慶雲繞大雄

環溪禪師の韻を次ぐ――鶴駕降臨して碧叢に入り。滿山の草木皇風に浴す。薩埵の威德光彩を添へ。萬

齋藤龜之丞氏銀婚祝辭　法名眞如庵釋妙覺德秉壽仙上座

琴瑟相調廿五年　靈龜瑞鶴侍佳筵　玉川波泛眞如月　蓬島花含富嶽煙

齋藤龜之丞氏銀婚の祝辭――琴瑟相調ふ廿五年。靈龜瑞鶴佳筵に侍す。玉川の波は泛ぶ眞如の月。蓬島の花は含む富嶽の煙。

題一雄子圓鏡

三十餘員皆道人　普賢山上結眉親　大圓鏡裏曇華影　嚴飾禪幢一院春

一雄子の圓鏡に題す――三十餘員皆な道人。普賢山上結眉の親。大圓鏡裏曇華の影。嚴飾す禪幢一院の春。

大原敬吉氏奉職小學校勤續四十年今辭職歸鄉

奉職庠堂執敎鞭　諄諄授業極精研　育英四十年來績　令譽長兼德化傳

大原敬吉氏職を小學校に奉じ勤續四十年今職を辭して鄉に歸る――職を庠堂に奉じて敎鞭を執り。諄諄業を授けて精研を極む。育英四十年來の績。令譽は長く德化と傳ふ。

寄北米市俄古島津岬牧師

修德育英信念深　異鄉傳道也神心　平和現處惟天國　博愛行時有福音

北米市俄古の島津岬牧師に寄す――德を修め英を育して信念深く。異鄉道を傳ふ也た神心。平和の現す

倣跡毘耶臥病床　夢醒春日轉憂長　梅花不管黃鶯囀　默處呼霞放暗香

蹤を耶毘に倣うて病床に臥し。夢醒めて春日轉た憂長し。梅花は管せず黃鶯の囀ずるに。默處霞を呼んで暗香を放つ。

寄大榮寺佐々木師

多年期訪大榮門　深喜今春臨戒園　何事病魔妨我志　虛窗北望夕陽曛

大榮寺の佐々木師に寄す――多年訪はんことを期す大榮の門。深く喜ぶ今春戒園に臨むを。何事ぞ病魔我が志を妨ぐ。虛窗北望すれば夕陽曛す。

寄杉本道山宗師

喜師行願若金剛　禪杖代吾宣化光　北越春寒猶未去　法身專祈益安康

杉本道山宗師に寄す――喜ぶ師が願行金剛の若きを。禪杖吾れに代つて化光を宣ぶ。北越の春寒猶ほ未だ去らず。法身專ら祈る益々安康ならんことを。

呈臺灣布敎監伊藤俊道師

駐錫南洋統祖綱　三千里外布恩光　眞人所住無殊域　澎島臺灣咸道場

臺灣布敎監伊藤俊道師に呈す――錫を南洋に駐めて祖綱を統べ。三千里外恩光を布く。眞人住する所殊域無し。澎島臺灣咸な道場。

薦岩本彌左衞門氏靈前

六十一年夢忽醒　幻身既入涅槃城　眞靈豈滯存亡境　覺苑春深心月明

岩本彌左衞門氏の靈前に薦す――六十一年夢忽ち醒め。幻身既に入る涅槃城。眞靈豈に存亡の境に滯らんや。覺苑春深うして心月明かなり。

小鈴谷盛田邸了空室療病雜詠　五首

老軀復被病魔瞞　閒却姫城寶戒壇　賴有禪心存定力　萬緣休去夢還安

小鈴谷盛田邸の了空室療病雜詠――老軀復た病魔に瞞ぜられ。閒却す姫城の寶戒壇。賴に禪心の定力を存する有り。萬緣休し去つて夢還た安し。

病牀數日閉幽扃　惱亂吟心句未形　最喜新鶯來慰我　隔窗頻轉法華經

病牀數日幽扃を閉ぢ。吟心を惱亂して句未だ形らず。最も喜ぶ新鶯來つて我れを慰むるを。窗を隔てて頻に轉ず法華經。

療心療病其歸一　醫戒亦兼禪戒同　安靜由來養生訣　了空室裏萬緣空

療心療病其歸一なり。醫戒も亦た禪戒と同じ。安靜由來養生の訣。了空室裏萬緣空し。

人生行路易蹉過　道骨無端招病魔　最恨前程違數約　床頭憶着老維摩

人生の行路蹉過し易く。道骨端無くも病魔を招く。最も恨む前程數約を違ふを。床頭憶着す老維摩。

本山別院後堂芳春玄機老師夙藏名匠所模二八尊者今春丁予擧晉山開堂之典特施裝幀爲十六幅見贈以表祝意筆致精妙生氣躍動予深喜其道情以爲本山之重寶玆製僧伽黎衣聊以伸謝

二八尊容畫逼眞　道人祝我意殊深　靈山付屬如山重　欲倣護持正法輪

本山別院後堂芳春玄機老師夙に名匠模する所の二八尊者を藏す。今春予が晉山開堂の典を擧くるに丁り特に裝幀を施し十六幅と爲して贈り以て祝意を表せらる。筆致精妙生氣躍動予深く其の道情を喜び以て本山の重寶と爲す。玆に僧伽黎衣を製し聊か以て謝を伸ぶ――二八の尊容畫眞に逼り。道人我を祝する意殊に深し。靈山の付屬山の如く重し。倣はんと欲す護持正法の輪。

高岡山瑞龍寺開祖廣山恕陽大和尙三百年忌拈香

古佛曾開大道場　了翁洞老各聯芳　香華嚴飾追恩會　滿目叢林璨放光

高岡山瑞龍寺開祖廣山恕陽大和尙三百年忌拈香――古佛曾て開く大道場。了翁洞老各〻芳を聯ぬ。香華嚴飾す追恩の會。滿目の叢林璨として光を放つ。

讀杉本藏右衞門氏傳有感

挺身犯死入慈門　强訴救來二百邨　壯烈行持菩薩德　千秋傳德地藏尊

杉本藏右衞門氏の傳を讀みて感有り――挺身死を犯して慈門に入り。强訴救ひ來る二百邨。壯烈の行持は菩薩の德。千秋德を傳ふ地藏尊。

## 龍淵山大慈寺授戒會　二首

一新寺格恢慈門　萬朶祥雲滿赤旛　授戒參禪無別意　興隆正法報天恩　昇格祝聖

龍淵山大慈寺授戒會――寺格を一新して慈門を恢うし。萬朶の祥雲赤旛に滿つ。授戒參禪別意無し。正法を興隆して天恩に報いんとす。（昇格祝聖）

人人本具戒光珠　非色非心絕有無　殘櫻五月猶聯錦　鳥嶺摩天白玉膚

人人本具戒光の珠。色に非ず心に非ず有無を絕す。殘櫻五月猶ほ錦を聯ね。鳥嶺天を摩す白玉の膚。

### 神后山蚶滿寺開山忌

神光靈地高僧蹟　洞水揚波三百年　干滿龍珠添瑞彩　恩光長照羽州天

神后山蚶滿寺開山忌――神光の靈地高僧の蹟。洞水波を揚げて三百年。干滿の龍珠瑞彩を添へ。恩光長く照す羽州の天。

### 常在山自得寺開山無際純證禪師報恩供眞

唯一金剛堅密身　三摩提裏獨留眞　誰知常在靈山月　夜夜清光射古津

常在山自得寺開山無際純證禪師報恩供眞――唯一金剛堅密の身。三摩提裏獨り眞を留む。誰か知らん常在靈山の月。夜夜の清光古津を射るを。

光明山西有寺戒會　二首

印水月無留影意　懸谿雲有護山心　光明峯頂無限瑞　優鉢花開功德林

光明山西有寺戒會――水に印するの月は影を留むるの意無く。谿を懸すの雲は山を護るの心有り。光明峯頂無限の瑞。優鉢の花は開く功德の林。

山高水遠本無私　柳綠花紅萬古規　淨國不遐心旣佛　須參孝順與慈悲

山は高く水は遠くして本と私無く。柳綠花紅は萬古の規たり。淨國遐からず心旣に佛。須らく孝順と慈悲とに參すべし。

鐵枴仙人分身圖

喚稱仙人吾不知　上天下地興方奇　神通妙用家常事　形影相睎主是誰

鐵枴仙人分身の圖――喚んで仙人と稱するも吾れ知らず。上天下地興方に奇なり。神通妙用は家常の事。形影相睎ふ主は是れ誰そ。

髑髏

皮膚脫來眞實存　此間休做死生論　蘆花帶露秋將老　無我無心我道尊

髑髏――皮膚脫し來つて眞實存す。此間做すことを休めよ死生の論。蘆花露を帶びて秋將に老いんとす。無我無心にして我が道尊し。

萬行所貴孝兼忠　世出世間是我家　世局推移雲出沒　依然獨坐大雄峰

丸田等觀仁者が雄峰居士に贈るの韻を次ぎて却呈す――萬行貴ぶ所は孝と忠のみ。世出世間是れ我家。世局の推移は雲の出沒。依然として獨坐す大雄峰。

橫濱西有寺戒會直心淨國禪師十三回忌

釣月耕雲九十年　二嚴三德得其全　紹隆偉績無倫匹　正法眼藏擔在肩

橫濱西有寺戒會直心淨國禪師十三回忌――月に釣り雲に耕す九十年。二嚴三德其の全きを得たり。紹隆の偉績倫匹無く。正法眼藏擔して肩に在り。

同淺草本然寺供眞

瞻仰本然清淨身　湘南猶見白毫新　遺音十有三年後　潤澤華藏百億春

同しく淺草本然寺供眞――瞻仰す本然の清淨身。湘南猶ほ見る白毫の新なるを。遺音十有三年の後華藏を潤澤す百億春。

祝聖

拈香先祝聖皇壽　陞座單提護國禪　鳳舞鶴翔諸嶽頂　三松疊綠影朝天

祝聖――香を拈じて先づ聖皇の壽を祝し。座に陞つて單提す護國の禪。鳳は舞ひ鶴は翔く諸嶽の頂。三松綠を疊みて影天に朝す。

觀音大士の贊――遊戲神通物の遮る無く。手中常に捧ぐ法蓮華。五觀十願月よりも圓に。智德珠の如く瑩として瑕を絕つ。

原敬氏追弔會　法諱大慈寺殿逸山仁敬大居士　施主未亡人

一生心血殉君國　絕代經綸出至誠　千載不磨忠孝德　此心何敢隔幽明

原敬氏追弔會――一生の心血君國に殉し。絕代の經綸は至誠に出づ。千載不磨なり忠孝の德。此心何ぞ敢て幽明を隔てん。

太田治兵衛翁小練忌　西有寺開基

梵刹開基奉大雄　平常施設出誠忠　信行千載垂嘉範　鶴嶺長留護法功

太田治兵衛翁の小練忌――梵刹開基大雄を奉じ。平常の施設は誠忠に出づ。信行千載嘉範を垂れ。鶴嶺長く留む護法の功。

題高田頴哉師滿鮮布教記念畫帖

化錫縱橫滿與鮮　慈門到處利人天　道人所住無殊域　旅順京城皆福田

高田頴哉師が滿鮮布教記念畫帖に題す――化錫縱橫なり滿と鮮と。慈門到處人天を利す。道人住する所殊域無く。旅順京城皆な福田。

次丸田等觀仁者贈雄峰居士韻却呈

天龍降瑞潤華藏　忽見寶珠添異光　孝順由來惟至道　紹隆祖德浴恩香

天龍山寶珠院授戒會——天龍瑞を降して華藏を潤し。忽ち見る寶珠の異光を添ふるを。孝順由來惟れ至道。祖德を紹隆して恩香に浴せん。

大休悟由禪師誕生地記念碑除幕式　二首

敎苑鳳凰禪海龍　德光添輝吉祥峰　降生靈地人皆仰　碑石長堪傳聖蹤

大休悟由禪師誕生地記念碑除幕式——敎苑の鳳凰禪海の龍。德光輝を添ふ吉祥峰。降生の靈地人皆な仰ぐ。碑石は長く聖蹤を傳うるに堪へたり。

八十二年弘道人　百千萬劫利生身　湛然性海好遊戲　長泛慈船棹古津

八十二年弘道の人。百千萬劫利生の身。湛然たる性海遊戲するに好し。長く慈船を泛べて古津に棹す。

日比野雷風居士晉山記念絡子授與

報國劍兮濟世衣　禪心武道一其歸　誰知忍辱柔和裏　自有迅雷風烈機

日比野雷風居士に晉山記念絡子授與——報國の劍濟世の衣。禪心武道其歸を一にす。誰か知らん忍辱柔和の裏。自から迅雷烈風の機有ることを。

観音大士贊

遊戲神通無物遮　手中常捧法蓮華　五観十願圓於月　智德如珠瑩絕瑕

雪鬼襲人屍作山　禪膓寸斷涙潸潸　長陵有箇同情士　托鉢凍風射骨間

長岡禪學會員の親不知遭難者弔慰托鉢——雪鬼人を襲うて屍山を作し。禪膓寸斷して涙潸潸たり。長陵箇の同情の士有り。托鉢す凍風骨を射るの間。

於大坂鳳林寺永平默童禪師七年忌

慧日西沈七歴春　慕心猶覺涙痕新　鳳林賴有梅花笑　香露印來清淨身

大坂鳳林寺に於て永平默童禪師の七年忌——慧日西に沈みて七たび春を歴たり。慕心猶ほ覺ゆ涙痕の新なるを。鳳林賴に梅花の笑ふ有り。香露印し來る清淨身。

神守山楞嚴寺法幢開闢結制及戒會　二首

建幢啓戒化光新　錦上敷花覺苑春　誰識楞嚴三昧境　東風一路不留塵

神守山楞嚴寺法幢開闢結制及戒會——幢を建て戒を啓きて化光新なり。錦上花を敷く覺苑の春。誰か識らん楞嚴三昧の境。東風一路塵を留めず。

綠水青山皆說戒　風松雨竹又談禪　人人盡有圓通路　脚下須知別有天

綠水青山皆な戒を說き。風松雨竹又た禪を談ず。人人盡く圓通の路有り。脚下須らく知るべし別に天有ることを。

天龍山寶珠院授戒會

蓋代偉勳世共稱　一生功業德光弘　靈航棹破幽明浪　人去古津春月澄

大隈侯追弔會――蓋代の偉勳世共に稱し。一生の功業德光弘し。靈航棹破す幽明の浪。人去つて古津春月澄む

厚德盛名無匹儔　國民師表獨推侯　遺勳赫赫靈何去　永放神光照八洲

厚德盛名匹儔無く。國民の師表獨り侯を推す。遺勳赫赫靈何くにか去る。永く神光を放つて八洲を照す。

弔中樞院參議閔元植靈

志士仁人期殉國　死生有命豈堪論　至誠一貫靈長在　八道山河浴聖恩

中樞院參議閔元植の靈を弔ふ――志士仁人殉國を期す。死生命有り豈に論ずるに堪へん。至誠一貫靈長へに在り。八道の山河聖恩に浴す。

本山涅槃會

雙林日暮恨緜緜　春淺老梅花咽烟　誰識跋提河畔月　影明東海鶴灣天

本山涅槃會――雙林日暮れて恨み緜緜。春淺くして老梅の花煙に咽ぶ。誰か識らん跋提河畔の月。影は明かなり東海鶴灣の天。

長岡禪學會員親不知遭難者弔慰托鉢

恒遠教諭が十年勤續を謝す――業を學林に授けて既に十年。育成す洞上幾多の賢。豈に唯だ智能を啓發し去るのみならんや。教養期す他の德性全きを。

謝有吉教諭勤續十五年

厥身健則厥心康　教練體操自有方　增益學生精進力　荷擔正法腕頭强

有吉教諭勤續十五年を謝す――厥身健なれば則ち厥心康なり。體操を教練して自から方有り。增益す學生の精進力。正法を荷擔して腕頭强し。

祝名古屋河口加幾子喜壽

以信爲心法是身　賢良貞淑也天眞　蘭孫桂子交圍座　俱祝蓬萊喜壽春

名古屋河口加幾子の喜壽を祝す――信を以て心と爲す法は是れ身。賢良貞淑也た天眞。蘭孫桂子交ゝ座を圍み。俱に祝す蓬萊喜壽の春。

祝洗心菴觀音堂落慶

圓通閣就瑞光新　草木花開覺苑春　安養道場元在邇　淨邦自屬洗心人

洗心菴觀音堂の落慶を祝す――圓通閣就つて瑞光新なり。草木花開く覺苑の春。安養の道場元と邇きに在り。淨邦自から洗心の人に屬す。

大隈侯追弔會　二首

花發いて雄峯五百戰。今に到つて香氣家門に滿つ。

題無動寺青年授戒會寫眞帖

國家元氣在青年　修養先須結佛緣　戒法莊嚴無動會　道心自與信心堅

無動寺青年授戒會の寫眞帖に題す――國家の元氣は青年に在り。修養先づ須らく佛緣を結ぶべし。戒法莊嚴す無動の會。道心自から信心と堅し。

祝岩手縣石越記念圖書館七周年

文苑既開萬朶春　陸州佳色瑞彌加　更期錦上添華去　東北普敷一帶霞

岩手縣石越記念圖書館七周年を祝す――文苑既に開く萬朶の春。陸州の佳色瑞彌ゝ加はる。更に期す錦上華を添へ去り。東北普く敷く一帶の霞。

靜岡縣福昌寺開山鐵眞如禪大和尙尊像入佛開眼

鐵作眞人入福昌　一如禪力放靈光　分明點出圓通眼　萬朶紫雲繞道場

靜岡縣福昌寺開山鐵眞如禪大和尙の尊像入佛開眼――鐵眞人と作つて福昌に入り。一如の禪力靈光を放つ。分明に點出す圓通の眼。萬朶の紫雲道場を繞る。

謝恒遠教諭十年勤續

授業學林既十年　育成洞上幾多賢　豈唯啓發智能去　教養期他德性全

一月十八日雪降る――雪は都城に滿ちて鐵石氷り。乾坤一色白雲凝る。禪庭初夜人の到る無く。憶着す少林斷臂の僧。

大休廣錄完成拜覽有感　三首

性海洋洋不繫舟　逍遙八十二春秋　法身舍利輝千載　方識大休遂未休

大休廣錄完成し拜覽して感有り――性海洋洋舟を繫がす。逍遙す八十二春秋。法身舍利千載に輝き。方に知る大休遂に未だ休せざるを。

法海神龍祖宝燈　行持總是擧宗乘　六編廣錄皆金玉　非大心人爭可能

法海の神龍祖宝の燈。行持總て是れ宗乘を擧ぐ。六編の廣錄皆な金玉。大心の人に非ざれば爭でか能くすべけんや。

活捉休翁首尾全　眞人化迹得眞傳　法身常在何曾滅　多謝令貲了此編

休翁を活捉して首尾全く。眞人の化迹眞傳を得たり。法身常在何ぞ曾て滅せん。多謝す令貲の此編を了するを。

與日比野利三郎氏　最乘開山了菴禪師有緣名家

了翁寄錫和田原　這裏脫鞋開梵園　花發雄峯五百載　到今香氣滿家門

日比野利三郎氏に與ふ　最乘開山了菴禪師有緣の名家――了翁寄錫す和田の原。這裏鞋を脫して梵園を開く。

つて鐵の如く。笑つて凍風に立つて佛名を唱ふ。

贈臺灣鐵關居士

鐵關行脚路頭寛　親向聖心會報看　不恨臺灣千里遠　森羅萬象入禪觀

臺灣の鐵關居士に贈る――鐵關行脚して路頭寛し。親く聖心會報に向つて看る。恨まず臺灣千里の遠きを。森羅萬象禪觀に入る。

寄布哇勝沼君

君在布哇我武陽　太平洋上道情長　東風不隔東西岸　萬里波濤帶旭光

布哇の勝沼君に寄す――君は布哇に在り我れは武陽。太平洋上道情長し。東風隔てず東西の岸。萬里の波濤旭光を帶ぶ。

大隈侯追弔

蓋代英雄百世師　鶴林花落鳥空愁　英靈不與烟霞散　留與餘香薫四維

大隈侯追弔――蓋世の英雄百世の師。鶴林花落ちて鳥空く愁ふ。英靈は烟霞と散せず。餘香を留與して四維に薫ず。

一月十八日雪降

雪滿都城鐵石氷　乾坤一色白雲凝　禪庭初夜無人到　憶着少林斷臂僧

贈紐育田島繁二氏

一見恰如遇舊知　謝君友誼轉相親　東西別復幾千里　頼有煙霞不隔春

紐育の田島繁二氏に贈る——一見恰も舊知に遇ふが如く。謝す君が友誼轉た相親しきを。東西別れて復た幾千里。頼に煙霞の春を隔てざる有り。

次丸田等觀居士賓韻

佳茶佳羹入庫堂　謝君厚誼賑厨房　叢林何必愛枯淡　飽喫溫情法味長

丸田等觀居士の賓韻を次ぐ——佳茶佳羹庫堂に入る。謝す君が厚誼厨房を賑はすを。叢林何ぞ必ずしも枯淡を愛せん。溫情を飽喫して法味長し。

謝　悃

一圭墨玉双枝筆　佛使薰來解脫香　欲向虛空施點劃　誰知枯木吐新芳

謝悃——一圭の墨玉双枝の筆。佛使薰じ來る解脫の香。虛空に向つて點劃を施さんと欲す。誰か知らん枯木の新芳を吐くを。

祝長岡禪學會寒行圓成

二十五員活菩薩　履氷蹴雪打寒行　渾身信力凝如鐵　笑立凍風唱佛名

長岡禪學會の寒行圓成を祝す——二十五員の活菩薩。氷を履み雪を蹴つて寒行を打す。渾身の信力凝

さるは無し。

### 羅漢贊

雙林佛勅重似山　護法安人出世間　二八靈光珠一顆　神通遊戯白雲關

羅漢の贊――雙林の佛勅山よりも重く。法を護り人を安んじ世間を出づ。二八の靈光珠一顆。神通遊戯す白雲關。

### 迦葉尊者贊

瞥見拈花忽破顔　遼天鼻孔穿禪關　驀頭倒却刹竿去　殘月眠雲鷄足山

迦葉尊者の贊――拈花を瞥見して忽ち破顔し。遼天の鼻孔禪關を穿つ。驀頭刹竿を倒却し去り。殘月雲に眠る鷄足山。

予巡錫布哇及北米歸朝滿藏主盟宜勇宗師特描寫千手觀音大士尊像以表祝意丹靑藻色皆出淨信相好圓滿實是好箇之記念也因賦此謝悃

妙相端嚴燦放光　無邊福壽滿華藏　謝師無碍圓通筆　手眼千千悉吉祥

予が布哇及北米を巡錫して歸朝するや滿藏主盟宜勇宗師特に千手觀音大士の尊像を描寫して以て祝意を表さる。丹靑藻色皆な淨信に出で相好圓滿實に是れ好箇の記念なり。因て此れを賦し謝悃す――妙相端嚴燦として光を放ち。無邊の福壽は華藏に滿つ。謝す師が無碍圓通の筆。手眼千千悉く吉祥。

### 米山梅吉氏令息小祥忌

三寶齊歸淸淨觀　慈光照徹覺王壇　圓通萬德總持道　定慧莊嚴萬境安

米山梅吉氏令息の小祥忌——三寶齊しく歸す淸淨觀。慈光照徹す覺王壇。萬德總持の道を圓通して。定慧莊嚴萬境安し。

### 大隈侯病氣平癒祈禱般若

福慧莊嚴般若臺　總持門裏瑞光開　善神擁護金剛壽　枯木巖前春已回

大隈侯病氣平癒祈禱般若——福慧莊嚴す般若臺。總持門裏瑞光開く。善神擁護す金剛の壽。枯木巖前春已に回へる。

### 大坂藤野氏佛事

直與如來坐道場　高超生死入華藏　總持無上菩提道　萬象森羅等放光

大坂藤野氏の佛事——直に如來と道場に坐し。高く生死を超えて華藏に入る。總持無上菩提の道。萬象森羅等く光を放つ。

### 甲子會般若

大福大心大吉祥　黑漫漫地自成章　鶴山垂瑞無量壽　滿地無非功德藏

甲子會般若——大福大心大吉祥。黑漫漫地自から章を成す。鶴山瑞を垂る無量の壽。滿地功德藏に非

一枝梅發已催春　信水先通鶴海濱　感應道交恁地去　倶是盡忠報國身

堀内將軍に呈す——一枝梅は發いて已に春を催し。信水先づ通ず鶴海の濱。感應道交恁地に去る。倶に是れ盡忠報國の身。

旭日初昇氣載陽　彩霞垂瑞太平洋　晴波蕩漾浮紅影　映發春光與國光

旭日初めて昇り氣は載陽。彩霞瑞を垂る太平洋。晴波蕩漾として紅影を浮べ。春光と國光とに映發す。

神州自古愛平和　國際何時得止戈　春入蓬萊滄海靜　旭光分影照晴波

神州古より平和を愛す。國際何れの時か戈を止むるを得ん。春は蓬萊に入つて滄海靜かに。旭光影を分ちて晴波を照す。

萬仞富峯浮旭陽　晴暉先照太平洋　蓬萊普浴東皇澤　淑氣徹波波亦香

萬仞の富峯旭陽に浮び。晴暉先づ照す太平洋。蓬萊普く東皇の澤に浴し。淑氣波に徹し波亦た香し。

大源禪師五百年忌

誰怪市厨打貫錢　靈機豈墮色聲邊　幻人現幻威音路　源遠流長五百年

大源禪師五百年忌——誰か怪まん市厨貫錢を打するを。靈機豈に色聲の邊に墮せんや。幻人幻を現ずる威音の路。源遠く流は長し五百年。

渡米吟　次省研韻

旬日交參娑竭王　禪三昧裏渡南洋　布山米水親迎我　隨處無非遊戲場

渡米吟。省研の韻を次ぐ――旬日交ゝ參ず娑竭王。禪三昧裏南洋に渡る。布山米水親しく我れを迎へ。隨處遊戲場に非ざるは無し。

大正十一壬戌新年　三首

新陽啓祚瑞雲屯　先拜皇恩與祖恩　祝見三松添壽色　半天靈氣護都門

大正十一壬戌の新年――新陽啓祚瑞雲屯す。先づ皇恩と祖恩とを拜す。祝ひ見る三松壽色を添へ。半天の靈氣都門を護るを。

諸嶽含霞斗柄回　三松凝翠紫雲堆　山川等現新陽瑞　虛空亦展笑眉來

諸嶽霞を含んで斗柄回り。三松翠を凝らして紫雲堆し。山川等しく新陽の瑞を現じ。虛空亦た笑眉を展べて來る。

祖風欣見與年新　旭日照波鶴海濱　兄弟冀添南嶽壽　心華聯瑞覺園春

祖風欣び見る年と新なるを。旭日波を照す鶴海の濱。兄弟冀はくは南嶽の壽を添へ。心華瑞を覺園の春に聯ねんことを。

呈堀內將軍　四首

一浴頤神再浴仙　方知地此是禪天　興來徐曳吟笻歩　樂見波鷗抱夢眠

一浴神を頤ひ再浴すれば仙たり。方に知る此地是れ禪天なるを。興來つて徐に吟笻を曳いて歩し。樂み見る波鷗の夢を抱いて眠るを。

祝修養世界創刊十周年

雙手拈提載道器　宣傳修養十經春　文淵水淨靈龍躍　旭日照波影轉新

『修養世界』の創刊十周年を祝す――雙手拈提道器を載せ。修養を宣傳して十たび春を經たり。文淵水清うして靈龍躍り。旭日照破して影轉た新なり。

祝駒澤大學卒業生

志氣衝天遊學園　業成衣錦出黌門　普賢行願文殊智　斯道懸君肩上存

駒澤大學卒業生を祝す――志氣衝天學園に遊び。業成り錦を衣て黌門を出づ。普賢の行 願 文殊の智。斯道懸つて君が肩上に存す。

熱海假寓次田村省研韻

日與梅花打破顔　禪心不識世塵難　開窗大島奇於畫　横影水天髣髴間

熱海假寓に田村省研の韻を次ぐ――日日梅花と破顔を打し。禪心識らず世塵の難。窗を開けば大島畫よりも奇に。影を横ふ水天髣髴の間。

長く開く三會の春。

高野山無量光院

高祖曾開深密天　覺王又創秘藏筵　更有融師添德化　佛日增輝四百年

高野山無量光院——高祖曾て深密の天開き。覺王又た創む秘藏の筵。更に融師の德化を添ふる有り。佛日輝を增す四百年。

送來馬琢道師之歐洲

米邦半歲打禪遊　金錫又將赴歐洲　君有寫眞描實妙　兩洋風物一眸收

來馬琢道師の歐洲に之くを送る——米邦半歲禪遊を打し。金錫又た將に歐洲に赴かんとす。君に眞を寫し實を描くの妙有り。兩洋の風物一眸に收まらん。

熱海寓居漫吟　三首

海雲山月護仙寰　此境閒於禪室閒　世俗紅塵曾不到　潮聲遶夢抱晴灣

熱海寓居漫吟——海雲山月仙寰を護る。此境禪室の閒なるよりも閒なり。世俗の紅塵曾て到らず。潮聲夢を遶つて晴灣を抱く。

前面滄溟背後山　潮聲嵐色劃仙寰　一鄉風物含靈氣　數朶寒梅已破顏

前面は滄溟背後は山。潮聲嵐色仙寰を劃す。一鄉の風物靈氣を含み。數朶の寒梅已に破顏す。

五五圓通一念觀　普門豈有路行難　放光殿上香烟密　佛界莊嚴妙覺壇

成蹊女學校追弔會――五五圓通す一念觀。普門豈に路行の難有らんや。放光殿上香煙密かに。佛界莊嚴す妙覺壇。

西比利亞出征十六聯隊及卅聯隊忠死追弔

重義輕生克奉公　渾身熱血是誠忠　鐵槌難碎金剛骨　鶴嶺長留護國功

西比利亞出征十六聯隊及卅聯隊の忠死追弔――義を重んじ生を輕んじて克く公に奉じ。渾身の熱血是れ誠忠。鐵槌碎き難し金剛の骨。鶴嶺長く留む護國の功。

雪巖老師贈陶製達磨大士立像以祝予從北米歸朝好箇記念不堪感謝賦一絕以謝悃

迎得祖師感道情　龜毛拂上迅雷轟　虎鬚鬼面双眸活　勘破米邦萬里程

雪巖老師陶製の達磨大士立像を贈り以て予が北米より歸朝するを祝す。好箇の記念感謝に堪へず一絕を賦して以て謝悃す――祖師を迎へ得て道情に感ず。龜毛拂上迅雷轟く。虎鬚鬼面双眸活たり。勘破す米邦萬里の程。

詠印融大德

翰藻辯華皆入眞　無量光裏照迷倫　堂堂偉德猶如在　法苑長開三會春

印融大德を詠ず――翰藻辯華皆な眞に入り。無量光裏迷倫を照す。堂堂たる偉德猶ほ在すが如く。法苑

某婦人肖像の贊――内に養ふ賢善貞淑の德。外は修む勤儉和順の行。專ら四恩を報じ三寶に歸し。動靜云爲至誠に出づ。

祝安德現住大道玄機和尙轉法輪

大人安德坐禪床　道力旣開圓覺場　玄路莊嚴菩薩會　機前步步放光明

安德現住大道玄機和尙の轉法輪を祝す――大人安德禪床に坐し。道力旣に開く圓覺場。玄路菩薩會を莊嚴して。機前步步に光明を放つ。

賀圓覺寺首座泰心俊光具壽

心地泰然禪界寬　俊機貴不被他瞞　光明半座須任保　道念能堅境自安

圓覺寺首座泰心俊光具壽を賀す――心地泰然禪界寬く。俊機他に瞞ぜられざるを貴ぶ。光明半座須らく任保すべし。道念能く堅ければ境自から安し。

寄新潟新聞

北越人情直且和　田園千里富源多　偏期俱奮回天力　文化展開莫讓他

新潟新聞に寄す――北越の人情は直くして且つ和かなり。田園千里富源多し。偏に期す俱に回天の力を奮ひ。文化の展開他に讓る莫からんことを。

成蹊女學校追弔會

放光堂兩祖献飯諷經

**慧日輝空六百年　慈雲影覆幾山川　誰知恩大難酬處　一炷心香滿殿煙**

放光堂兩祖献飯諷經――慧日空に輝く六百年。慈雲の影は覆ふ幾山川。誰か知らん恩大にして酬い難き處。一炷の心香滿殿に煙るを。

丸田尙一郎君寄贈伊藤公眞筆扁額雲峰樓閣帶神氣七大字也乃揭待鳳館賦此恭謝

**雲峰樓閣帶神氣　一句寫成諸嶽眞　筆力雄渾鸞鳳躍　紫雲添瑞影彌新**

丸田尙一郎君伊藤公眞筆の扁額を寄贈せらる『雲峰樓閣帶神氣』の七大字なり。乃ち待鳳館に揭げ此を賦して恭しく謝す――雲峰樓閣神氣を帶ぶ。一句寫し成す諸嶽の眞。筆力雄渾にして鸞鳳躍り。紫雲瑞を添へて影彌〻新なり。

不安卽安和尙七年忌

**藏舟夜壑幾多年　古岸無人水帶煙　鶴海忽看帆影動　漁歌一曲月中天**

不安卽安和尙の七年忌――舟を夜壑に藏す幾多年。古岸人無く水煙を帶ぶ。鶴海忽ち看る帆影の動くを。漁歌一曲月天に中す。

某婦人肖像贊

**内養賢善貞淑德　外修勤儉和順行　專報四恩歸三寶　動靜云爲出至誠**

經國大才蓋代雄　神籌鬼策出誠忠　秋風一夜台星墜　留與餘光照極東

原敬氏の追弔――經國の大才蓋代の雄。神籌鬼策は誠忠に出づ。秋風一夜台星墜ち。餘光を留與して極東を照す。

一乘院空譽大光居士追弔　飛行機將校上野强次郎氏

鐵石丹心克奉公　幾驅雲艇度虛空　死生有命復何恨　史上長留報國功

一乘院空譽大光居士の追弔――鐵石の丹心克く公に奉じ。幾たびか雲艇を驅つて虛空を度る。死生命有り復た何んぞ恨みん。史上長く留む報國の功。

極樂山廣濟寺戒會啓建

曩祖曾開廣濟苑　心旣極樂境還安　即今嚴飾華藏刹　枯木忽回劫外春

極樂山廣濟寺戒會啓建――曩祖曾て開く廣濟苑。心旣に極樂境還た安し。即今嚴飾す華藏刹。枯木忽ち回す劫外の春。

善篤廿八世即中磨甎和尙肖像贊

七十五年弘道人　百千萬劫利生身　松風吹過那邊路　殘月拂雲穿古津

善篤廿八世即中磨甎和尙肖像の贊――七十五年弘道の人。百千萬劫利生の身。松風吹き過ぐ那邊の路。殘月雲を拂つて古津を穿つ。

瑞雲靉靆戒門高　空海無端捲怒濤　誰識長興堂下路　一雙枯木抱風號

越中の瑞雲山長興寺戒會――瑞雲靉靆として戒門高く。空海端無くも怒濤を捲く。誰れか識らん長興堂下の路。一雙の枯木風を抱いて號ぶ。

七日加行則古風　身心安住瑞雲中　出門不踏來時路　堪見奇禽翔大空

七日の加行古風に則る。身心安住す瑞雲の中。門を出でゝ踏まず來時の路。見るに堪へたり奇禽の大空に翔るを。

長岡安善寺長岡報恩講發會式

八萬法藏歸總持　三松長見瑞陰垂　道交感應今猶古　歡喜信心也佛慈

長岡安善寺長岡報恩講發會式――八萬の法藏總持に歸し。三松長く瑞陰の垂るゝを見る。道交感應今猶ほ古のごとく。歡喜す信心也た佛慈。

淨春院開山堂入佛式

悅翁開創給孤園　禪老中興不二門　錦上敷花新殿就　淨春長見紫雲繁

淨春院開山堂の入佛式――悅翁開創す給孤園。禪老中興す不二の門。錦上花を敷いて新殿就り。淨春長に見る紫雲の繁きを。

原敬氏追弔

政友會の原敬君追弔遙拜佛事——賢才達識 志彌〻剛に。皇猷を輔弼して政綱を統ぶ。無影樹邊跡を韜めて去り。大慈院裏に餘香を放つ。

宏氏妙德院七回忌明教院三回忌佛事

妙德莊嚴淨法身　明明教旨到今新　緇衣猶潤追懷涙　一炷心香薰徹人

宏氏の妙德院七回忌明教院三回忌の佛事——妙德莊嚴法身を淨うし。明明たる教旨今に到つて新なり。緇衣猶ほ潤ふ追懷の涙。一炷の心香人を薰徹す。

弔神戸修養會幹部小西利吉君

興隆正法護禪宮　瓊花何事散悲風　只應擴張修養會　菩提回向在此中

神戸修養會幹部小西利吉君を弔ふ——正法を興隆して禪宮を護り。瓊花何事ぞ悲風に散す。只だ應に修養會を擴張すべし。菩提の回向は此中に在り。

大圓玄致禪師小祥忌

八十年來牧鐵牛　祖園隨處聞嘉猷　莫言寂後無蹤跡　疊綠三松影自幽

大圓玄致禪師の小祥忌——八十年來鐵牛を牧し。祖園隨處に嘉猷を聞く。言ふ莫れ寂後蹤跡無しと。綠を疊む三松 影 自から幽なり。

越中瑞雲山長興寺戒會　二首

彌頂上の天。

新潟市法音寺戒場啓建

三學圓融禪戒彰　網羅密處現華藏　法音既震根塵外　福慧莊嚴選佛場

新潟市法音寺戒場啓建――三學圓融禪戒彰かに。網羅密なる處華藏を現ず。法音既に震ふ根塵の外。福慧莊嚴す選佛場。

本山放光堂早川千吉郎氏先考忌

七淨妙華甘露食　展開萬德總持門　梵音響徹幽明境　功德堪酬祖考恩

本山放光堂に早川千吉郎氏の先考忌――七淨の妙華甘露の食。展開す萬德總持の門。梵音響徹す幽明の境。功德は祖考の恩に酬ゆるに堪へたり。

謝毛利醫伯

二豎侵吾親病床　仁醫垂手復平常　晨昏已覺禪身健　北米將觀文化光

毛利醫伯に謝す――二豎吾を侵して病床に親む。仁醫手を垂れて平常に復す。晨昏已に禪身の健かなるを覺ゆ。北米將に觀んとす文化の光。

政友會原敬君追弔遙拜佛事

賢才達識志彌剛　輔弼皇猷統政綱　無影樹邊韜跡去　大慈院裏放餘香

大正十年十一月七日丸田氏尊考及令息佛事

法界廓然無異方　當頭眞是覺音場　梵音響破昏衢夢　枯木點花風露香

大正十年十一月七日丸田氏の尊考及令息の佛事——法界廓然として異方無く。當頭眞に是れ覺王場。梵音響破す昏衢の夢。枯木花を點じて風露香し。

龜峰山長泉寺戒會啓建

夜來膏雨洗昏塵　淨地莊嚴劫外春　仰見華藏千朶瑞　枝枝撥轉戒光輪

龜峰山長泉寺戒會啓建——夜來の膏雨昏塵を洗ひ。淨地莊嚴なり劫外の春。仰き見る華藏千朶の瑞。枝枝撥轉す戒光輪。

祝香川縣教育會長加藤君拜受藍綬褒章

育英興學志彌豪　明義存誠節益高　鳳賞忽從天外下　闔州誰不頌勳芳

香川縣教育會長加藤君が藍綬褒章を拜受するを祝す——育英興學志彌ゝ豪に。義を明かにし誠を存して節益ゝ高し。鳳賞忽ち天外より下り。闔州誰か勳芳を頌せざらん。

黃龍山東禪寺完戒

如來一大事因緣　或名佛戒又名禪　黃龍昨夜生頭角　衝破須彌頂上天

黃龍山東禪寺完戒——如來の一大事因緣。或は佛戒と名け又禪と名く。黃龍昨夜頭角を生じ。衝破す須

與駒形開教師

善應多年輔化門　教林隨處養靈根　布哇今是安身地　願攝羣機報四恩

駒形開教師に與ふ――善應多年化門を輔け。教林隨處に靈根を養ふ。布哇今是れ安身の地。願はくは羣機を攝して四恩に報ぜんことを。

和神谷師韻　二首

病魔曾襲老身肢　回復怡然浴晩颸　西望扶桑無限感　椰子林頭日沒時

神谷師の韻に和す――病魔曾て老身の肢を襲ふも。回復して怡然晩颸に浴す。西扶桑を望めは無限の感。椰子林頭日沒するの時。

化門志願未能行　世界秤頭或失衡　夢裏猶談宣教策　坐聽林外古鐘聲

化門の志願未だ能く行はれず。世界秤頭或は衡を失す。夢裏猶ほ談す宣教の策。坐して聽く林外古鐘の聲。

偶作

駐錫檀山已八旬　氣和風爽足隨身　迎來送往家常事　心與水雲相對親

偶作――錫を檀山に駐めて已に八旬。氣和かに風爽かに身を隨ふに足る。來を迎へ往を送るは家常の事。心は水雲と相對して親し。

和五老畫伯題自畫山水詩韻却寄

神機悟了畫中禪　雅趣高懷與月圓　丹青自越人工範　花鳥雲煙總自然

五老畫伯自畫の山水に題するの詩韻に和し却つて寄す――神機悟了す畫中の禪。雅趣の高懷月と圓かなり。丹青自から人工の範を越え。花鳥雲煙總て自然。

雲洞庵戒會中偶成

喜心之下檀雲簇　福壽之門戒德輝　三寶龍天降瑞雨　叢林綠意徹禪扉

雲洞庵戒會中偶成――喜心の下に檀雲簇り。福壽の門には戒德輝く。三寶龍天瑞雨を降だし。叢林の綠意禪扉に徹す。

布哇可愛呂安　二首

金錫鳴風可愛鄉　四來檀越繞禪床　誰知諸佛遊行地　處處無非古道場

布哇可愛呂安――金錫風に鳴る可愛の鄉。四來の檀越禪床を繞る。誰か知らん諸佛遊行の地。處處古道場に非ざるは無し。

滿林煙和吉峰煙　布島天通鶴海天　感應道交誰體得　微風吹雨入禪筵

滿林の煙は和す吉峰の煙。布島の天は通ず鶴海の天。感應道交誰か體得す。微風雨を吹いて禪筵に入る。

大正十年十一月三日午前十一時歸朝拜祖眞

黒漆崑崙夜裏奔　何妨殊域弄沙盆　放光臺上感何限　空手還鄕佛祖恩

大正十年十一月三日午前十一時歸朝して祖眞を拜す――黒漆の崑崙夜裏に奔る。何ぞ妨げん殊域沙盆を弄するを。放光臺上感何ぞ限らん。空手鄕に還るも佛祖の恩。

同十一月五日移轉祝日法要於兩祖尊前　二首

玉殿珠樓滿紺園　紫雲偏向鶴山繁　三松已帶千秋綠　黛色莊嚴諸嶽門

同じく十一月五日移轉の祝日兩祖の尊前に法要す――玉殿珠樓紺園に滿つ。紫雲偏に鶴山に向つて繁し。三松已に帶ぶ千秋の綠。黛色莊嚴す諸嶽の門。

祖眞垂迹鶴山濱　斗轉星回十一年　已見三松含壽色　靈燈添耀照禪天

祖眞跡を垂る鶴山の濱。斗轉じ星回つて十一年。已に見る三松壽色を含み。靈燈耀を添へて禪天を照す。

東洋汽船會社追弔會

眞身豈敢滯存亡　法性海中坐道場　誰識洪波浩渺裏　禪門別有活商量

東洋汽船會社追弔會――眞身豈敢て存亡に滯らん。法性海中道場に坐す。誰か識らん洪波浩渺の裏。禪門別に活商量有るを。

歸朝の洋上——人世猶ほ太平洋を度るが如く。順風逆浪其航に伴ふ。船體機關俱に堅牢。勤慮還つて知る靜趣の長きを。

法界無非我道場　南哇北米適觀光　歸程別有禪天樂　萬里滄溟月一航

法界我が道場に非ざる無し。南哇北米觀光に適す。歸程別に禪天の樂み有り。萬里の滄溟月一航。

大洋旬日巨船西　浩蕩煙波眼欲迷　水接天邊倚檻望　朝陽時上自雲隄

大洋旬日巨船西す。浩蕩たる煙波眼迷はんと欲す。水天に接するの邊欄に倚て望めば。朝陽時に雲隄より上る。

與覺庵紙屋傳一氏　東洋汽船會社前紐育支店長

身心解脫覺庵中　空盡乾坤空又空　任運逍遙閒夢外　紅塵堆裏占淸風

覺庵紙屋傳一氏に與ふ——身心解脫す覺庵の中。乾坤を空盡して空又た空。任運逍遙す閒夢の外。紅塵堆裏淸風を占む。

天長節遙拜式

太平洋上迎佳辰　萬歲聲中拜紫宸　叡算願垂龜鶴瑞　化光長與國光新

天長節遙拜式——太平洋上佳辰を迎へ。萬歲聲中紫宸を拜す。叡算願はくは龜鶴の瑞を垂れて。化光長く國光と新ならんことを。

佛心。

寄内田晃融上人

宣流正化度殊方　嚴護法城開德藏　佛所遊行無拘碍　異鄕隨處布慈光

内田晃融上人に寄す——正化を宣流して殊方を度し。嚴に法城を護つて德藏を開く。佛遊行する所拘碍無く。異鄕隨處に慈光を布く。

謝水谷長太郎君先導

三旬扶我伴遊行　二十餘州杖鉢輕　異域謝君先導力　安然觸處養詩情

水谷長太郎君の先導を謝す——三旬我を扶けて遊行に伴し。二十餘州杖鉢輕し。異域謝す君が先導の力。安然觸處に詩情を養ふ。

桑　港

高閣連軒車馬轟　大廈競美勢堪驚　開窗秋月圓於玉　影向金門港外明

桑港——高閣軒を連ねて車馬轟き。大廈美を競うて勢驚くに堪へたり。窗を開けば秋月玉よりも圓く。影は金門港外に向つて明かなり。

歸朝洋上　三　首

人世猶如度太洋　順風逆浪伴其航　船體機關倶堅牢　動處還知靜趣長

漠漠曠原秋漸深　絕無風趣觸吟心　車中半夜孤床夢　曳杖經行諸嶽岑

沙市車中――漠漠たる曠原秋漸く深く。絕えて風趣の吟心に觸るゝ無し。車中半夜孤床の夢。杖を曳い經行す諸嶽の岑。

百里深溪鐵路斜　巒峯重疊興彌加　隔窗遙望雲林曉　紅葉粧秋奇似花

百里の深溪鐵路斜なり。巒峯重疊して興彌ゝ加はる。窗を隔てゝ遙に望む雲林の曉。紅葉秋を粧うて奇なること花に似たり。

米國巡了　二首

經歷米邦廿一州　都市曠原適禪遊　此行誰道無詩趣　吟斷山川萬里秋

米國巡了――經歷す米邦廿一州。都市曠原禪遊に適す。此行誰か道ふ詩趣無しと。吟斷す山川萬里の秋。

今朝化錫入加州　沃野茫茫迷遠眸　瞥見同胞開發地　荷園千畝飾新秋

今朝化錫加州に入る。沃野茫茫遠眸を迷はす。瞥見す同胞開發の地。荷園千畝新秋を飾る。

與京極開敎師

羅府莊嚴功德林　欣求本願志難禁　慈光所照無封域　弘法利生是佛心

京極開敎師に與ふ――羅府莊嚴す功德林。欣求本願志禁じ難し。慈光照す所封域無く。弘法利生是れ

紐育——大廈高樓麗しきこと花に似たり。九街處として繁華ならざるは無し。摩天閣上頭を回して望めば。滿目の通衢彩霞を撒す。

華府

英名耳熟華盛頓　遺蹟長堪記偉人　白堊館頭靈若在　綠陰挾路地無塵

華府——英名耳に熟す華盛頓。遺蹟長く偉人を記するに堪へたり。白堊館頭靈在すが若く。綠陰路を挾んで地に塵無し。

市俄古

車馬縱橫人似織　瓊樓玉廈滿都門　拜金何若淸貧樂　陌上風塵掩地昏

市俄古——車馬縱橫人織るに似たり。瓊樓玉廈都門に滿つ。拜金何ぞ淸貧の樂みに若かん。陌上の風塵地を掩うて昏し。

米國客舍偶吟

米國文窗冠萬邦　堂堂意氣亦無雙　黃金滿地吾何管　獨愛旗亭月半窗

米國客舍偶吟——米國の文華萬邦に冠たり。堂堂として意氣亦た雙び無し。黃金滿地吾れ何ぞ管せん。獨り愛す旗亭の月半窗。

砂市車中　二首

を。隨處好し開かん選佛場。

路　機　山　四　首

山上添山峰疊峰　斷巖奇石幾重重　路機嶺外開窗望　眼下淸流雲半封

路機山――山上山を添へ峰峰を疊み。斷巖奇石幾重重。路機嶺外窗を開いて望めば。眼下の淸流雲半ばは封ず。

溪流十里水如馳　萬仭巨巖相對欹　來此莫談耶馬勝　羣山總是有形詩

溪流十里水馳しるが如く。萬仭の巨巖相對して欹つ。此に來つて談する莫れ耶馬の勝。羣山總て是れ有形の詩。

無蓋車頭與可乘　蜿蜒絕壁幾層層　米人未識比丘相　看作寒巖一老僧

無蓋の車頭與乘すべし。蜿蜒たる絕壁幾層層。米人未だ比丘の相を識らず。看て寒巖の一老僧と作す。

矗立巨巖勢欲崩　懸崖連續白雲凝　馬溪赤壁豈堪比　方識山靈倚斷層

矗立の巨巖 勢崩れんと欲す。懸崖連續して白雲凝る。馬溪赤壁豈に比するに堪へん。方に識る山靈斷層に倚るを。

紐　育

大廈高樓麗似花　九街無處不繁華　摩天閣上回頭望　滿目通衢撒彩霞

九月念八日北米大統領閣下に謁見して此作有り――米邦の文化は坤維に冠たり。謁見倶に語る親善の基。爲に献ず圓通菩薩の像。平和の要訣は便ち慈悲。

大正十年九月七日發布哇乘馬哇號向米國　二首

獨靠船欄臨太洋　南薰寄我滿身涼　舷頭占得無邊興　萬里滄溟月一航

大正十年九月七日布哇を發し馬哇號に乘つて米國に向ふ――獨り船欄に靠つて太洋に臨めば。南薰我れに寄す滿身の涼。舷頭占め得たり無邊の興。萬里の滄溟月一航。

巨船横斷太平洋　萬里海天情趣長　半夜高床眠漸熟　潮聲牽夢到扶桑

巨船横斷す太平洋。萬里の海天情趣長し。半夜高床眠漸く熟し。潮聲夢を牽いて扶桑に到る。

桑　港

高棟巨廈架雲梯　燦爛文華眼欲迷　誰識玉街金巷裏　絶無風趣上詩題

桑港――高棟巨廈雲梯を架し。燦爛たる文華眼迷はんと欲す。誰か識らん玉街金巷の裏。絶えて風趣の詩題に上る無きを。

太平洋鐵道

萬里一條鐵路長　迎山送水眼光忙　來玆方識坤輿大　隨處好開選佛場

太平洋鐵道――萬里一條鐵路長し。山を迎へ水を送つて眼光忙し。玆に來つて方に知る坤輿の大なる

半月擔取す滿城の花。

堡府別院授戒會迎聖

甘雨洗塵灌戒園　華藏開盡菩提門　誰知十六摩尼寶　照破無明長夜昏

堡府別院授戒會迎聖――甘雨塵を洗つて戒園に灌ぐ。華藏開き盡す菩提の門。誰か知らん十六の摩尼寶。照破す無明長夜の昏。

柴山得造氏母堂追弔拈香

萱堂辭世已三旬　孝子不堪悲淚頻　靈界何存生死境　梵音傳響自通眞

柴山得造氏が母堂の追弔拈香――萱堂世を辭し已に三旬。孝子悲淚の頻なるに堪へず。靈界何ぞ生死の境を存せんや。梵音響を傳へて自から眞に通ず。

與山本清三氏　法名樹德院禪心直指居士

樹德養眞耕福田　心頭直指一如禪　應機無礙涵波月　日用都如出水蓮

山本清三氏に與ふ――德を樹ゑ眞を養うて福田を耕し。心頭直指す一如の禪。機に應じて礙げ無し涵波の月。日用都て出水の蓮の如し。」

九月念八日謁見北米大統領閣下有此作

米邦文化冠坤維　謁見倶談親善基　爲献圓通菩薩像　平和要訣便慈悲

與垣浦明道師

久在布洲開化門　歸舟欲入舊祇園　道人隨處菩提座　傳教行持是報恩

垣浦明道師に與ふ――久しく布洲に在つて化門を開き。歸舟入らんと欲す舊祇園。道人は隨處菩提の座。傳教の行持是れ報恩。

與勝沼國手

體得米邦文化眞　扶援故國幾多人　畢生志業唯仁義　滿腹至誠自感神

勝沼國手に與ふ――米邦文化の眞を體得して。扶援す故國幾多の人。畢生の志業は唯だ仁義。滿腹の至誠自から神を感ぜしむ。

與藤岡勝二博士

萬里天涯海作關　偶然相會共開顏　知君二諦圓融行　滿載八洲風月還

藤岡勝二博士に與ふ――萬里の天涯海關を作す。偶然相會うて共に顏を開く。知る君が二諦圓融の行。八洲の風月を滿載して還るを。

布哇別院磯部開敎師見贈袈裟

西來東土一袈裟　解脫門頭無物遮　忍辱衣兮和合服　半肩擔取滿城花

布哇別院の磯部開敎師袈裟を贈らる――西來東土一袈裟。解脫門頭物の遮る無し。忍辱の衣和合の服。

君居壽院振眞宗　吾向南洋寄客蹤　憶着同風千里語　夢魂頻訪大雄峯

最乘の杉本山主に寄す――君は壽院に居して眞宗を振ひ。吾は南洋に向つて客蹤を寄す。同風千里の語を憶着して。夢魂頻に訪ふ大雄峰。

寄河合紀綱

吾遊布島浴淸涼　君在雄峯總紀綱　萬里雲程如咫尺　心心感應卽同床

河合紀綱に寄す――吾は布島に遊んで淸涼に浴し。君は雄峰に在つて紀綱を總ぶ。萬里の雲程咫尺の如し。心心感應すれば卽ち同床。

謝加哇新報記者福永楓舟氏寄其著加哇島誌

加哇島誌極硏精　愛讀全篇金玉聲　多謝楓舟靈妙筆　花園之美四疆鳴

加哇新報記者福永楓舟氏其著加哇島誌を寄するを謝す――加哇島誌は硏精を極む。愛讀す全篇金玉の聲。多謝す楓舟靈妙の筆。花園の美は四疆に鳴る。

與本願寺開教監督今村惠猛師

謝君異域拯羣萠　勇猛願行護法城　應物惠以眞實利　總持二諦化幽明

本願寺開敎監督今村惠猛師に與ふ――謝す君が異域羣萠を拯ひ。勇猛の願行法城を護るを。物に應じ惠むに眞實の利を以てし。二諦を總持して幽明を化す。

錫を異鄕に振つて化未だ周ねからず。願輪我れを驅つて休むを知らず。何れの時か法界眞致を傳へ。國際長く除かん爭門の憂。

次丸田等觀大人見寄韻

迷海幾人待慧航　願輪驅我向南洋　衲僧猶有望鄕切　不愛朝陽愛夕陽

丸田等觀大人が寄せらるゝの韻を次ぐ――迷海幾人か慧航を待つ。願輪我を驅つて南洋に向ふ。衲僧猶ほ望鄕の切なる有り。朝陽を愛せず夕陽を愛す。

與村上顯宗師

傳道利生誰作家　轉迷開悟一袈裟　知君必結菩提果　島裏園林總是花

村上顯宗師に與ふ――傳道利生誰か作家ぞ。轉迷開悟す一袈裟。知る君が必ず菩提果を結ばんことを。島裏の園林總て是れ花。

遊於路計禮谿

斷崖絕壁挾深谿　萬疊奇巒行欲迷　一線雲程人不到　幽禽獨和水聲啼

於路計禮谿に遊ぶ――斷崖絕壁深谿を挾み。萬疊の奇巒行々迷はんと欲す。一線の雲程人到らず。幽禽獨り水聲に和して啼く。

寄最乘杉本山主

煙渦まく。　活火山

百尺斷巖圍半溪　一條飛瀑下雲梯　怒雷吼破銀龍影　烟霧迸處懸彩霓　虹瀧

百尺の斷崖半溪を圍み。一條の飛瀑雲梯を下る。怒雷吼破す銀龍の影。烟霧迸る處彩霓を懸く。　虹瀧

一島仙區水作瀾　千株椰子影漂灣　隔林遙望摩峰頂　時見幽禽浴海還　椰子島

一島の仙區水瀾を作し。千株の椰子影灣に漂ふ。林を隔てゝ遙に望む摩峰の頂。時に見る幽禽海に浴して還るを。　椰子島

題新潟縣人會名簿

合志訂盟利斷金　同鄕況復宿緣深　親交直諒宜相益　公義溫情是佛心

新潟縣人會の名簿に題す——合志訂盟利は金を斷つ。同鄕況んや復た宿緣深し。親交直諒宜しく相益すべし。公義溫情是れ佛心。

次神谷鐵髯師寄韻　二首

枯笻隨處樂天眞　何事旬餘藥餌親　千里同風禪氣活　禪心常在鶴灣濱

神谷鐵髯師が寄するの韻を次ぐ——枯笻隨處に天眞を樂む。何事ぞ旬餘藥餌に親む。千里同風禪氣活たり。禪心常に鶴灣の濱に在り。

振錫異鄕化未周　願輪驅我不知休　何時法界傳眞敎　國際長除爭鬥憂

壇を擁するを。

布哇島古那白峯山大福寺

禪園谽谺面滄溟　後嶺摩天遠送青　最愛前灣波靜處　閒鷗托夢夕陽汀

布哇島古那の白峯山大福寺——禪園谽谺として滄溟に面し。後嶺天を摩して遠く青を送る。最も愛す前灣波靜なる處。閒鷗夢を托す夕陽の汀。

開窗朝望太平洋　移榻夕聞百草香　此境眞無寒暑處　薫風七月飽清涼

窗を開いて朝に望む太平洋。榻を移して夕に聞く百草の香。此境眞に無寒暑の處。薫風七月清涼に飽く。

示神原義孝和尚

佛子願行事爲人　報恩正道是精神　誰知忠孝兼仁義　收在利生弘法身

神原義孝和尚に示す——佛子の願行は爲人を事とす。報恩正道是れ精神。誰か知らん忠孝と仁義と。收めて利生弘法の身に在ることを。

布哇所見　三首

溶岩狼籍勢嵯峨　猛爆噴騰火作河　滿谷宛然阿鼻獄　硫黄堤上熱煙渦　活火山

布哇所見——溶岩狼籍勢嵯峨たり。猛爆噴騰して火河を作す。滿谷宛然たる阿鼻の獄。硫黄堤上熱

明治天皇十年祭――堂堂たる威德東洋に冠たり。赫赫たる文明は四疆を照す。大業既に傳ふ千載の績。萬邦誰か恩光に浴せざらん。

布哇比呂市白峰山大正寺　二首

此土莊嚴選佛場　滿庭花氣送幽香　檀林自帶傘松綠　寶閣長傳諸嶽涼

布哇比呂市の白峰山大正寺――此土莊嚴の選佛場。滿庭の花氣幽香を送る。檀林自から帶ぶ傘松の綠。寶閣長く傳ふ諸嶽の涼。

五蘊空時萬德全　迷雲散處智光圓　摩訶般若波羅密　六百玉龍忽躍淵

五蘊空なる時萬德全く。迷雲散ずる處智光圓なり。摩訶般若波羅密。六百の玉龍忽ち淵に躍る。

七月念四日齋藤宗四郎氏與他二氏先導遊伊阿於谿

一溪流水隔塵寰　萬疊奇峰雲半關　試掃青苔踞石上　吟心已向斷巖攀

七月念四日齋藤宗四郎氏他二氏と先導して伊阿於谿に遊ぶ――一溪の流水塵寰を隔て。萬疊の奇峰雲半ばは關す。試みに青苔を掃つて石上に踞すれば。吟心已に斷巖に向つて攀づ。

巴伊阿滿德寺開教所

道念行持鐵一團　異鄉喫盡幾艱難　馬洲開剏華藏刹　既見紫雲擁寶壇

巴伊阿滿德寺開教所――道念行持鐵一團。異鄉喫し盡す幾艱難。馬洲開剏す華藏刹。既に見る紫雲の擁

愛江阿布教所　二首

蓮華臺上打開光　瑞氣如雲繞道場　數杵靈鐘餘韻遠　眞珠灣上月波涼

愛江阿布教所——蓮華臺上に光を打開す。瑞氣雲の如く道場を繞る。數杵の靈鐘餘韻遠く。眞珠灣上月波涼し。

慈門法界絶封疆　感應道交致吉祥　觸處無非甘露刹　化風開得覺王場

慈門法界封疆を絶ち。感應道交吉祥を致す。觸處甘露刹に非ざるは無く。化風開き得たり覺王場。

馬頂山滿德寺　二首

萬德莊嚴馬頂山　仙洲別劃一仙寰　法輪轉處多奇特　雲滿巴峰月滿灣　兩祖上供

馬頂山滿德寺——萬德莊嚴の馬頂山。仙洲別に劃す一仙寰。法輪轉ずる處奇特多く。雲は巴峰に滿ち月は灣に滿つ。（兩祖上供）

滿盤法味賑存亡　甘露聯珠顆顆香　馬頂山頭雲忽散　一灣明月白於霜　施食

滿盤の法味は存亡を賑はし。甘露珠を聯ねて顆顆香し。馬頂山頭雲忽ち散し。一灣の明月霜よりも白し。（施食）

明治天皇十年祭

堂堂威德冠東洋　赫赫文明照四疆　大業既傳千載績　萬邦誰不浴恩光

七月十八日汽船に乘つて堡港を發し十九日馬哇の嘉布留伊に着す――鐵船浪を蹴つて佳灣に入る。巴嶽空に聳ゆ咫尺の間。滿目の叢林吾れを迎うるが如く。涼風雨を送つて禪寰を淨む。

七月十九日赴羅洴那港

快車衝嶮越雲關　舞宇連峰影壓灣　風景最歡羅洴港　一眸觀取四洲山

七月十九日羅洴那港に赴く――快車嶮を衝いて雲關を越え。宇に舞ふ連峰影灣を壓す。風景最も歡ぶ羅洴の港。一眸に觀取す四洲の山。

題富嶽圖

此君自具大人容　雪後飜看瑞霧濃　八面玲瓏無向背　滿天開盡玉芙蓉

富嶽の圖に題す――此君自から大人の容を具し。雪後飜つて看る瑞霧の濃かなるを。八面玲瓏向背無く。滿天開き盡す玉芙蓉。

七月六日横綱大錦關來參大錦以力鳴於天下加以篤孝之譽予爲授了空居士號

渾身威力錬金剛　了却眞空稱沒量　況復孝心淸似玉　錦衣添耀大扶桑

七月六日横綱大錦關來參す。大錦は力を以て天下に鳴り加ふに篤孝の譽を以てす。予爲めに了空居士の號を授く――渾身の威力金剛を錬り。眞空を了却して沒量と稱す。況んや復た孝心淸きこと玉に似たり。錦衣耀を添ふ大扶桑。

山本清三氏の外護を賞す——篤敬忠誠福田を培ひ。異邦業を闢んで志彌々堅なり。況んや還た別院扶護を加へ。效績長く商績と全し。

次永松爲次郎氏見示韻　二首

鳥戯樹兮魚躍渠　禪僧自笑世情疎　興來徐擎簾帷坐　讀破乾坤無字書

松永爲次郎氏が示さるゝの韻を次ぐ——鳥は樹に戯れ魚は渠に躍る。禪僧自から笑ふ世情の疎きを。興來つて徐ろに簾帷を擎けて坐し。讀破す乾坤無字の書。

檀香薫地影垂渠　繞殿芳叢密又疎　時事論來千萬語　不如乃祖一篇書

檀香地に薫じて影渠に垂れ。殿を繞るの芳叢密又疎なり。時事論じ來る千萬の語。如かず乃祖一篇の書。

寄長岡禪學會

烏藤巡歴幾山河　滿室薫風拂病魔　寄語長陵禪學會　木人歌曲聞耶麼

長岡禪學會に寄す——烏藤巡歴す幾山河。滿室の薫風病魔を拂ふ。語を寄す長陵の禪學會。木人の歌曲聞くや麼や。

七月十八日乘汽船發堡港十九日着馬哇嘉布留伊

鐵船蹴浪入佳灣　巴嶽聳空咫尺間　滿月叢林如迎我　涼風送雨淨禪寰

り幾山川。

堡府別院吟

數片檀雲凝不散　靈光普耀寶王臺　等閑薫破幽明境　五葉一華聯玉開

堡府別院の吟――數片の檀雲凝つて散せず。靈光普く耀く寶王臺。等閑に薫破す幽明の境。五葉一華玉を聯ねて開く。

謝監督磯部峰仙和尚之功勞

寶刹莊嚴璨放光　謝君多歲統宗綱　由來佛敎無封境　八島無非選佛場

監督磯部峰仙和尚の功勞を謝す――寶刹莊嚴璨として光を放つ。謝す君が多歲宗綱を統ぶるを。由來佛敎に封境無く。八島選佛場に非ざるは無し。

題雪中猛虎圖

雪鎖氷河水不瀾　羣峯削玉白漫漫　攀嵎猛虎時哮吼　電目放光毛骨寒

雪中猛虎の圖に題す――雪は氷河を鎖して水瀾たず。羣峰玉を削つて白漫漫。嵎を攀づるの猛虎時に哮吼すれば。電目光を放つて毛骨寒し。

賞山本清三氏外護

篤敬忠誠培福田　異邦勵業志彌堅　況還別院加扶護　敎績長兼商績全

欣君敎學兩施功　況復勞資自相融　檀信迎吾齊合掌　眞前愛見捧花童

七月二日和以巴富布敎所――欣ふ君が敎學兩ながら功を施くを。況んや復た勞資自から相融ずをや。檀信吾れを迎へて齊しく合掌す。眞前愛し見る花を捧ぐるの童。

上下相和福地開　一鄕宛是小蓬萊　南薫七月淸涼境　風自眞珠灣外來

上下相和して福地開け。一鄕宛も是れ小蓬萊。南薫七月淸涼の境。風は眞珠灣外より來る。

### 米國文化

人文日進競新奇　草木門姸四序宜　正是南洋安樂國　輝空四十七星旗

米國の文化――人文日に進んで新奇を競ひ。草木姸を門はして四序宜し。正に是れ南洋の安樂國。空に輝く四十七星の旗。

### 拿亞努崖探勝　二首

萬仞崖頭掃世氛　洲環灣曲目前分　多情風伯添威力　脚下輸來數片雲

拿亞努崖探勝――萬仞の崖頭世氛を掃ひ。洲環灣曲目前に分かる。多情の風伯威力を添へ。脚下に輸り來る數片の雲。

南洋奇勝四方傳　來此自疑羽化仙　莫道老僧無雅趣　吟囊包得幾山川

南洋の奇勝四方に傳ふ。此に來りて自から疑ふ羽化の仙かと。道ふ莫れ老僧雅趣無しと。吟囊包み得た

來れば身骨爽に。薫風綠樹夏猶ほ涼し。

六月念一謝堡府佛教聯合會開歡迎筵　二首

堡府莊嚴和合林　慇懃迎我道情深　豈唯香積供甘露　添得山雲海月心

六月念一堡府佛教聯合會が觀迎の筵を開くを謝す――堡府莊嚴和合の林。慇懃に我れを迎うて道情深し。豈に唯だ香積甘露を供するのみならんや。添へ得たり山雲海月の心。

倶是利生弘道人　異鄕攜手嘗酸辛　翕然爲我開佳宴　滿室香風溫似春

倶に是れ利生弘道の人。異鄕手を攜へて酸辛を甞む。翕然我が爲めに佳宴を開く。滿室の香風溫なること春に似たり。

偶吟　二首

布哇八島皆仙境　十有餘邦親結交　這裡休論人種別　元來四海是同胞

布哇八島皆な仙境。十有餘邦親しく交を結ぶ。這裡論ずるを休めよ人種の別。元來四海是れ同胞。

自他共敬協調源　主伴相扶道始尊　欲濟勞資親好美　祗當深感衆生恩

自他共に敬ふは協調の源。主伴相扶けて道始めて尊し。勞資親好の美を濟さんと欲せば。祗だ當に深く衆生恩を感ずべし。

七月二日和以巴富布教所　二首

堡府滯錫病中の吟——旬餘病を養うて日猶年のごとし。室を杜じて蹤を倣ふ摩竭仙。一夜檀山林下の夢。逍遙す布島の幾山川。

異鄕困臥幾朝昏　爲我誰開不二門　勿道病床無客到　薔薇侍枕月臨軒

異鄕困臥す幾朝昏。我が爲めに誰か不二の門を開かん。道ふ勿れ病床客到る無しと。薔薇は枕に侍し月は軒に臨む。

病魔瞞我礙觀光　客去禪床夜夢長　賴有吟心閒不得　八洲風月入詩囊　布哇有八島故及

病魔我れを瞞じて觀光を礙げ。客去つて禪床夜夢長し。賴に吟心の閒し得ざる有り。八洲の風月詩囊に入る。（布哇八島有り故に及ぶ。）

堡府偶感

日米駢軒似舊儕　支葡聯甍自成街　南洋現出樂天地　親善庶幾莫相排

堡府偶感——日米軒を駢べて舊儕に似たり。支葡甍を聯ねて自から街を成す。南洋現出す樂天地。親善庶幾くは相排すること莫れ。

六月念一訪堡府日本人病院

同情慈愛出丹腸　凝作濟生療養場　纔入門來身骨爽　薰風綠樹夏猶涼

六月念一堡府日本人病院を訪ふ——同情慈愛丹腸に出で。凝つて濟生療養の場と作る。纔に門に入り

艎。（船醫金井松司氏に與ふ）

願輪横斷太平洋　羅府街頭開法藏　佛日所輝無國界　東西等攝白毫光　與羅府淨土布教師

願輪横斷す太平洋。羅府の街頭法藏を開く。佛日輝く所國界無く。東西等しく攝す白毫光。（羅府の淨土布教師に與ふ。）

太平洋遠三千里　奇特鐵船水上奔　眼界洞然無一物　潮聲如夢繞吟魂

太平洋は遠し三千里。奇特なり鐵船水上を奔る。眼界洞然として一物無く。潮聲夢の如く吟魂を繞る。

布哇堡府別院　二首

太平洋上古仙寰　寶樹莊嚴新道場　賢聖相携臨此會　羣生誰不浴毫光

布哇堡府別院——太平洋上の古仙寰。寶樹莊嚴す新道場。賢聖相携へて此會に臨む。羣生誰か毫光に浴せざらん。

三松香靄吉峰霞　合成布島一林花　草木競芳春不老　幽禽繞室啄窗紗

三松の香靄吉祥の霞。合成す布島一林の花。草木芳を競うて春老いず。幽禽室を繞つて窗紗を啄む。

堡府滯錫病中吟　三首

旬餘養病日猶年　杜室做蹤摩竭仙　一夜檀山林下夢　逍遙布島幾山川

滄溟萬里日西銜　新月一鉤斜掛帆　四顧茫洋無片影　天容水色兩莊嚴

青松鋏額老師餞詞の韻を次ぐ――滄溟萬里日は西に銜まれ。新月一鉤斜に帆に掛かる。四顧茫洋として片影無く。天容水色兩ながら莊嚴。

太平洋上大洋丸船中吟　六首

大洋巨船牢如山　設備極精破浪關　船上猶如居靜室　優悠自與海鷗閒　與船長東郷正作氏

太平洋上太洋丸船中の吟――大洋の巨船牢として山の如く。設備極めて精にして浪關を破る。船上猶ほ靜室に居するが如く。優悠自から海鷗と閒なり。（船長東郷正作氏に與ふ）

病魔曠我事多違　醫療奏功堪轉機　萬里大洋空眼界　時看水鳥掠檣飛

病魔我を曠うして事多く違ふも。醫療功を奏して機を轉ずるに堪へたり。萬里の大洋眼界を空うし。時に看る水鳥の檣を掠めて飛ぶを。

君藏殺活縱横劒　我學圓通無碍機　目擊既知心相會　海天萬里一鷗飛　與原口大佐

君は藏す殺活縱横の劒。我は學ぶ圓通無碍の機。目擊既に知る心相會するを。海天萬里一鷗飛ぶ。（原口大佐に與ふ）

航海旬餘半病床　仁醫療我復安康　試登甲板吟心爽　萬里蒼空月一輪　與船醫金井松司氏

航海旬餘半ばは病床。仁醫我を療して安康に復す。試に甲板に登れば吟心爽に。萬里の蒼空月一

流泉中興の忌辰――流泉曾て擧ぐ中興の績。烏兎既に經たり廿七年。遺徳彰彰終に滅せず。華藏又た見る彩霞の鮮かなるを。

開眼佛像

渾身總是大慈悲　福慧莊嚴也太奇　如來善逝明行足　開光五眼照坤維

佛像を開眼す――渾身總て是れ大慈悲。福慧莊嚴也た太だ奇なり。如來善逝明行足。開光五眼坤維を照す。

信州龍雲山廣澤寺戒會祝偈

開闢法幢建戒壇　莊嚴寺塔彩靑欄　龍雲一夜降甘露　廣澤瀰同萬丈瀾

信州龍雲山廣澤寺戒會の祝偈――法幢を開闢して戒壇を建て。寺塔を莊嚴して靑欄彩る。龍雲一夜甘露を降し。廣澤瀰同す萬丈の瀾。

大正十年六月九日横濱出帆首途

海有船兮陸有車　雲涯萬里駕仙槎　此行休說前程遠　世界元來同一家

大正十年六月九日横濱出帆の首途――海に船有り陸に車有り。雲涯萬里仙槎に駕す。此行說くことを休めよ前程遠しと。世界元來同一家。

次寄松鉄額老師餞詞韻

誠に非ざるは無し。

雲洞菴完戒示衆

雲洞昔年吟雪人　三松今日守關身　拈香坐斷金城座　滿地莊嚴覺苑春

雲洞菴完戒示衆——雲洞昔年雪に吟ずるの人。三松今日關を守るの身。拈香坐斷す金城の座。滿地莊嚴す覺苑の春。

相國獨山禪師見贈祝雲洞晋山偈和而呈似

晝離技巧靈機動　書脫塵勞筆力全　禪師自有通神術　妙趣何唯水墨邊

相國獨山禪師雲洞晋山を祝するの偈を贈らる和して呈似す——晝は技巧を離れて靈機動き。書は塵勞を脫して筆力全し。禪師自から通神の術有り。妙趣何ぞ唯だ水墨の邊のみなんや。

西袋山流泉寺戒會完戒供養

西袋包容梵網堂　莊嚴覺路闡華藏　薰風吹徹流泉水　躑躅垂陰浪亦香

西袋山流泉寺戒會完戒供養——西袋包容す梵網堂。覺路を莊嚴して華藏を闡く。薰風吹き徹す流泉の水。躑躅陰を垂れて浪亦た香し。

流泉中興忌辰

流泉會擧中興績　烏兎既經廿七年　遺德彰彰終不滅　華藏又見彩霞鮮

賀首座禪山定雄

搜得眠山一朶華　逍遙護法半床霞　廓然說破禪門訣　拈弄雪峰鼈鼻蛇

首座禪山定雄を賀す——搜ね得たり眠山一朶の華。逍遙法を護る半床の霞。廓然說破す禪門の訣。拈弄す雪峰の鼈鼻蛇。

渡邊庄輔氏祖先尙絅齋源肖壽永居士百年忌拈香

衣錦尙絅道日章　星霜一百沐餘光　菩提園裏花爭發　覺果圓成德愈香

渡邊庄輔氏の祖先尙絅齋源肖壽永居士の百年忌拈香——錦を衣て絅を尙ふ道日に章かなり。星霜一百餘光に沐す。菩提園裏花爭うて發き。覺果圓成德愈〻香し。

賀太平龍潭師古稀

朝雲暮月與磨參　獨伴金龍臥碧潭　法壽七旬吟骨健　山帶丹青水湛藍

太平龍潭師の古稀を賀す——朝雲暮月與に磨參し。獨り金龍を伴うて碧潭に臥す。法壽七旬吟骨健かに。山は丹青を帶び水は藍を湛ふ。

大佛山楞嚴寺尸羅會

大佛峰頭慧日明　楞嚴閣上紫雲橫　戒香薰徹華藏會　見聞無非報德誠

大佛山楞嚴寺尸羅會——大佛峰頭慧日明かに。楞嚴閣上紫雲橫はる。戒香薰徹す華藏の會。見聞報德の

法幢馥へる處紫雲垂る。

次默狂韻　二首

祖席慙吾無力薫　錯逢推輓獨倥傯　唯存一片献芹誠　教界應分試活動

默狂の韻を次ぐ——祖席慙づ吾が力の薫ずる無きを。錯つて推輓に逢うて獨り倥傯。唯だ一片献芹の誠を存し。教界分に應じて活動を試みん。

木鐸多年警四鄰　詞林常占一枝春　國家文敎誰開展　威氣喜君與世新

木鐸多年四鄰を警め。詞林常に占む一枝の春。國家の文敎誰か開展す。威氣喜ぶ君が世と新なるを。

巨峰山喜福寺傳燈開山三百年忌報恩法會拈香

洞水開源三百春　巨峰凝翠護玄津　薫風忽鼓滔天浪　百億華藏餘澤新

巨峰山喜福寺傳燈開山三百年忌報恩法會拈香——洞水源を開いて三百春。巨峰翠を凝して玄津を護る。薫風忽ち鼓す滔天の浪。百億の華藏餘澤新なり。

護法山東泉寺尸羅會

溫良篤實則先賢　三寶住持護法禪　轉歩逍遙安穩坑　堪觀春月印東泉　廿八世安陽義磯和尙七周忌

護法山東泉寺尸羅會——溫良篤實先賢に則り。三寶住持護法の禪。轉歩逍遙す安穩坑。觀るに堪へたり春月東泉に印するを。（廿八世安陽義磯和尙七周忌）

行七日宣揚戒光以此薫力伸追孝之誠以莊嚴菩提堂頭感其篤志將追贈院號囑予乃贈以彰德院號

積善餘慶德聿彰　大圓鏡裏闡華藏　由來孝順惟正道　福慧莊嚴入覺場

永松爲次郎居士今年先考實法凉心居士の五十年忌に丁り其の郷里豐前驛舘邑任聖寺に於て青年授戒會を嚴修し加行七日戒光を宣揚す此の薫力を以て追孝の誠を伸べ以て菩提を莊嚴す。堂頭其の篤志に感じ將に院號を追贈せんとして予に囑す。乃ち贈るに彰德院の號を以てす――積善の餘慶德聿に彰れ。大圓鏡裏華藏を闡く。由來孝順惟れ正道。福慧莊嚴覺場に入る。

題身深正則氏書寫法華經　氏驛館村人其子以優等成績卒業中學殺中津叔母受無期徒刑氏悲之寫經氏現奉職宇佐中學校

誠心寫出大乘經　筆有信根墨有靈　點畫豈無消罪德　寶蓮朶朶放芳馨

身深正則氏書寫の法華經に題す。氏は驛館村の人。其子優等の成績を以て中學を卒業し中津の叔母を殺し無期徒刑を受く氏之を悲みて寫經す。氏は現に宇佐中學校に奉職す――誠心寫し出す大乘經。筆に信根有り墨に靈有り。點畫豈に消罪の德無からん。寶蓮朶朶芳馨を放つ。

黄龍山東禪寺戒會

黄龍捧出寶摩尼　普放戒光輝四維　獨聚日東禪苑瑞　法幢飜處紫雲垂

黄龍山東禪寺戒會――黄龍捧げ出す寶摩尼。普く戒光を放つて四維を輝す。獨り日東禪苑の瑞を聚めて。

大圓山任聖寺青年授戒會啓建――凍殺す衆生煩惱の熱。雪華繚亂香臺を繞る。大圓峰頂檀雲簇り。枯木巖前春色開く。

同前住龍海鳳洲和尙拈香

金龍入海浪飜淵　玉鳳翔雲影蓋天　遺德彰彰猶若在　華藏朶朶綴玉姸

同じく前住龍海鳳洲和尙拈香――金龍海に入つて浪淵に飜へり。玉鳳雲に翔けて影天を蓋ふ。遺德彰彰猶ほ在すが如く。華藏朶朶玉を綴つて姸なり。

和施主永松爲次郎氏韻　三首

青年佛子百餘人　不捨幻身成法身　二諦圓融人道顯　莊嚴忠孝兩全民

施主永松爲次郎氏の韻に和す――青年佛子百餘人。幻身を捨てず法身を成ず。二諦圓融して人道顯かに。莊嚴す忠孝兩全の民。

愛慕情濃五十年　孝心不與歲華遷　尸羅會上追恩淚　凝作香雲蓋墓前

愛慕の情は濃かなり五十年。孝心は歲華と遷らず。尸羅會上追恩の淚。凝つて香雲と作り墓前を蓋ふ。

一百青年融主賓　大圓鏡裏感緣因　心華齊結菩提果　葵藿倶迎追遠辰

一百の青年主賓を融じ。大圓鏡裏緣因を感ず。心華齊く結ぶ菩提の果。葵藿倶に迎ふ追遠の辰。

永松爲次郎居士今年丁先考實法凉心居士五十回忌於其鄕里豐前驛舘邑任聖巖修青年授戒會加

叡哲文明聖且つ神。聯邦誰か其仁を仰がざらん。滄溟萬里砥よりも平かに。印出す東方月一輪。

賀矢部鼎湖翁古稀

行持信念則先賢　講學啓蒙七十年　古聖有言仁者壽　此翁眞是好神仙

矢部鼎湖翁の古稀を賀す――行持信念先賢に則り。學を講じ蒙を啓く七十年。古聖言有り仁者は壽なりと。此翁眞に是れ好神仙。

默仙素童兩師追弔

明鑑靈機德獨尊　大圓鏡裏絕塵痕　正林今日梅花笑　東帝化光遍梵園

默仙素童兩師の追弔――明鑑靈機德獨り尊し。大圓鏡裏塵痕を絕つ。正林今日梅花笑ひ。東帝の化光梵園に遍し。

遠州國源山正林寺戒會啓建

正林春靜彩霞堆　百億華藏疊玉開　禪苑豈無奇特事　青天白日震春雷

遠州國源山正林寺戒會啓建――正林春靜にして彩霞堆く。百億の華藏玉を疊んで開く。禪苑豈に奇特の事無からんや。青天白日春雷を震ふ。

大圓山任聖寺青年授戒會啓建

凍殺衆生煩惱熱　雪華繚亂繞香臺　大圓峰頂檀雲簇　枯木巖前春色開

玉振金聲臣道論　眞忠實是德行源　豈唯皇國千秋訓　世界大經亦自存

臣道論を讀みて日比氏に寄す――玉振金聲の臣道論。眞忠は實に是れ德行の源。豈に唯だ皇國千秋の訓のみならん。世界の大經亦た自から存す。

涅槃忌　二首

生死岸頭波浪平　涅槃路上曉雲晴　乞看常在靈山月　影向三松密處明

涅槃忌――生死岸頭波浪平かに。涅槃路上曉雲晴る。乞ふ看よ常在靈山の月。影は三松密なる處に向つて明なり。

鶴林春淺綠猶微　毎遇斯辰淚濕衣　這裏何論生死事　孤峯一任雪花飛

鶴林春淺くして綠猶ほ微なり。斯辰に遇ふ每に淚衣を濕す。這裏何ぞ論ぜん生死の事。孤峯は雪花の飛ぶに一任す。

皇太子殿下御外遊御平安祈禱會拈香　二首

鶴駕西遊今上航　歐洲天地喜將狂　龍天三寶當扶護　聖德如花隨處香

皇太子殿下御外遊御平安祈禱會拈香――鶴駕西遊今航に上る。歐洲の天地喜び將に狂せんとす。龍天三寶當に扶護すべし。聖德花の如く隨處に香し。

歡哲文明聖且神　聯邦誰不仰其仁　滄溟萬里平於砥　印出東方月一輪

題題著身心双健之一路

三調安住菩提座　五位圓通般若臺　誰識身心双健道　總從禪定窟中開

著述『身心雙健の一路』に題す――三調安住す菩提の座。五位圓通す般若臺。誰か識らん身心双健の道。總て禪定窟中より開く。

題碓房六祖圖

碓房八月與雲鄰　打臼三聲驚衆倫　半宵活捉黄梅髓　嚴飾曹溪路上春

碓房六祖の圖に題す――碓房八月雲と鄰し。打臼三聲衆倫を驚かす。半宵黄梅の髓を活捉して。嚴飾す曹溪路上の春。

賀某氏銀婚　二首

琴瑟相和廿五春　芝蘭薫室志彌親　家門幸運當無極　福慶自歸偕樂人

某氏の銀婚を賀す――琴瑟相和して廿五春。芝蘭室に薫じて志彌〻親しむ。家門の幸運當た極り無かるべし。福慶自から歸す偕樂の人。

琴瑟相和廿五年　家榮室穩志彌堅　慶雲垂影仁人室　蘭桂聯芳滿福田

琴瑟相和す廿五年。家榮え室穩に志彌〻堅し。慶雲影を垂る仁人の室。蘭桂芳を聯ねて福田に滿つ。

讀臣道論寄日比氏

### 題曹洞大學卒業記念寫眞

參學兼修俗又眞　智通禪教德歸身　悟後妙行須策進　期待興宗護國人

曹洞大學卒業記念の寫眞に題す——參學兼修す俗又眞。智は禪教に通じ德は身に歸す。悟後の妙行須らく策進すべし。期待す興宗護國の人。

### 賀某氏九十四壽

仁者由來富壽量　喜君仙骨老彌强　九旬歲月還添四　秋月春風無盡藏

某氏の九十四壽を賀す——仁者由來壽量に富む。喜び見る仙骨老いて彌ゝ强きを。九旬の歲月還た四を添へ。秋月春風無盡藏。

### 次清信居士韻　二首

道人未必居雲外　觸處隨緣飜法旆　自愧願行猶未全　德器何日如山大

清信居士の韻を次ぐ——道人未だ必ずしも雲外に居せず。觸處緣に隨うて法旆を飜へす。自から愧づ願行猶ほ未だ全からざるを。德器何れの日か山の如く大ならん。

佛祖慈光遍九垠　感之唯在信心人　遙思臼岳行持德　道自圓通事自伸

佛祖の慈光九垠に遍し。之を感ずるは唯だ信心の人に在り。遙に思ふ臼岳行持の德。道は自から圓通事は自から伸ぶ。

の昌なるを。

道人隨所起宗風　知足菴中樂沒窮　吾亦常追先德跡　專心護念法王宮

道人隨所に宗風を起し。知足菴中樂み窮り沒し。吾れ亦た常に先德の跡を追ひ。專心に護念す法王宮。

次長國葦舟老兄賚韻

雄峰自擬一閒人　化作鶴灣透網鱗　回首叢林春色淺　祖園何日頌佳辰

長國葦舟老兄の賚韻を次ぐ――雄峰自から擬す一閒人。化して鶴灣透網の鱗と作る。首を回らせば叢林春色淺し。祖國何れの日か佳辰を頌さん。

次某氏韻

君子由來有恒心　樂天安命趣彌深　閒雲野鶴堪爲友　明月清風自伴吟

某氏の韻を次ぐ――君子由來恒心有り。天を樂み命に安んじて趣彌々深し。閒雲野鶴友と爲すに堪へたり。明月清風も自から吟伴。

次宮寄德次氏韻

信根堅牢德抽枝　誠意發時仁澤滋　人道佛行無二致　禪心學理總吾師

宮崎德次氏の韻を次ぐ――信根堅牢德枝を抽んじ。誠意發する時仁澤滋し。人道佛行二致無し。禪心學理總て吾が師。

鶴山の入山——道業生疎古人に愧づ。鶴灣に何れの日か金鱗と化せん。宗を扶け國を護る其歸一なり。衆星の北辰に朝すに倣はんと欲す。

次萬年山青松寺主見寄韻　二首

法盟常慕萬年翁　感應道交箭拄鋒　諸嶽未聽鶯共語　青松已見鶴相從

萬年山青松寺主が寄せらるゝの韻を次ぐ——法盟常に慕ふ萬年翁。感應道交箭鋒を拄ふ。諸嶽未だ鶯の共に語るを聽かざるに。青松已に見る鶴相從ふを。

謝君親寄新條曲　慚我固疎古雅風　却後願依扶護力　獻身携手起心宗

謝す君が親しく新條の曲を寄するを。慚づらくは我れ固と古雅の風に疎し。却後願はくは扶護の力に依り。獻身手を携へて心宗を起さん。

次觀清寺寓鈴木無三道友賚韻　三首

老梅漏笑鶴灣濱　珍重陽和應此辰　不恨梵園鶯未到　三松已見彩霞新

觀清寺寓鈴木無三道友の賚韻を次ぐ——老梅笑を漏らす鶴灣の濱。珍重す陽和此辰に應ずるを。恨まず梵園鶯未だ到らざるも。三松已に見る彩霞の新なるを。

高韻如珠璨放光　數篇寄與照禪堂　觀清寺裏賢君子　老去殊觀道念昌

高韻珠の如く璨として放光す。數篇を寄與して禪堂を照す。觀清寺裏の賢君子。老去つて殊に見る道念

樓臺高く聳ゆ紫雲の間。月は僧房を護り松は關を護る。首を回らせば鶴灣の奇蒼くに似たり。方に知る此境是れ靈山。

爲日比野雷風居士

神刀獨震迅雷機　信力猛於風烈威　一片至誠向無敵　念珠能足破重圍

日比野雷風居士の爲めに——神刀獨り震ふ迅雷の機。信力風の烈威より猛なり。一片の至誠向ふに敵無く。念珠能く重圍を破るに足る。

最乘退院　二首

設拜眞前動別愁　雪華敷地樹陰幽　鐘聲遶錫雄峰路　風送孤雲不許休

最乘の退院——拜を眞前に設けて別愁を動く。雪華地に敷いて樹陰幽なり。鐘聲錫を遶る雄峰の路。風は孤雲を送つて休むを許さず。

雪擁樓臺玉樹連　老梅迎我笑庭前　門頭進步停笻立　雷鼓穿霞震九天

雪は樓臺を擁して玉樹連なる。老梅我れを迎へて庭前に笑ふ。門頭步を進め笻を停めて立てば。雷鼓霞を穿つて九天に震ふ。

鶴山入山

道業生疎愧古人　鶴灣何日化金鱗　扶宗護國其歸一　欲倣衆星朝北辰

大正十年二月三日將に大雄山を辭さんとす此日節分にして雪降り尺に盈つ——佛祖の深恩力の酬ゆる沒し。至誠唯だ宗猷を闡かんと欲す。言ふ莫れ貧道山を辭し去ると。萬里の乾坤月一鈎。

同日乞暇金剛壽院

雪罩雄峯繞嶮巇　梅花漏笑兩三枝　感恩情極唯垂涙　壽院眞前設拜時

同日暇を金剛壽院に乞ふ——雪は雄峯を罩めて嶮巇を繞り。梅花笑を漏す兩三枝。感恩情極まつて唯だ涙を垂る。壽院眞前拜を設くるの時。

次渡邊百淳師賀進住嶽山韻

才徳居常愧古人　道心聊欲伍賢倫　回頭諸嶽猶留雪　獨有梅花漏笑新

渡邊百淳師が嶽山に進住するを賀するの韻を次ぐ——才徳居常古人に愧づ。道心聊か賢倫に伍せんと欲す。頭を回らせば諸嶽猶ほ雪を留め。獨り梅花の笑を漏す新なる有り。

次田村省研氏祝詞韻　二首

傘松諸嶽一家風　祖徳既充六合中　只願諸賢和合力　禪關速奏展開功

田村省研氏が祝詞の韻を次ぐ——傘松諸嶽一家風。祖徳既に充つ六合の中。只だ願ふ諸賢和合の力。禪關速に展開の功を奏せんことを。

樓臺高聳紫雲間　月護僧房松護關　回首鶴灣奇似畫　方知此境是靈山

ゆ。此道彌々隆にして此法存す。

勇猛精進會追弔法會

勵業安分克奉公　死生有命復何忡　須知佛法兼人道　盡在以身殉職中

勇猛精進會の追弔法會——業を勵み分に安んじて克く公に奉じ。死生命有り復た何をか忡へん。須らく知るべし佛法と人道と。盡く身を以て職に殉ずるの中に在るを。

隨喜長岡禪學會員寒行托鉢圓成

一心一鉢一袈裟　道念行持眞出家　雪夜何惶寒徹骨　通身既帶少林霞

長岡禪學會員寒行托鉢の圓成を隨喜す——一心一鉢一袈裟。道會行持眞に出家。雪夜何ぞ惶れん寒骨に徹するを。通身既に帶ぶ少林の霞。

杉浦鏡華居士見贈病床新年吟和呈

鐘聲破夢報佳晨　彩霞含春藹古津　日面佛兮月面佛　文殊本與淨名親

杉浦鏡華居士病床新年の吟を贈らる和して呈す——鐘聲夢を破つて佳晨を報じ。彩霞春を含んで古津に藹く。日面佛月面佛。文殊は本と淨名と親し。

大正十年二月三日將辭大雄山此日節分雪降盈尺

佛祖深恩沒力酬　至誠唯欲闡宗猷　莫言貧道辭山去　萬里乾坤月一鈎

秋雨春風既一年　菩提山裏月長圓　大空無影蹤難捜　猶聞嘯聲忽震天

宏虎童氏小祥忌拈香——秋雨春風既に一年。菩提山裏月長に圓なり。大空影無く蹤捜ね難し。猶ほ聞く嘯聲の忽ち天を震ふを。

大竹安太郎翁越後人天資醇厚勤儉自彊信念拔群及長辭鄕來住梁川初事石井家與予父交情如兄弟後獨立開業商運伸展遂致財巨萬今年迎米壽專修淨業孝子順孫皆繼其志家益榮予自幼年稟其傳護因緣殊深仍賦一偈祝之

齡迎米壽志彌剛　勤儉力行開福田　篤行眞是商家範　桂子蘭孫亦競姸

大竹安太郎翁は越後の人。天資醇厚勤儉自から彊め信念群を拔く。長ずるに及び鄕を辭して梁川に來住す。初め石井家に事へ予が父と交情兄弟の如し。後ち獨立開業し商運伸展遂に財巨萬を致す。今年米壽を迎へ專ら淨業を修し孝子順孫皆な其志を繼ぎ家益〻榮ゆ。予幼年より其の傳護を稟け因緣殊に深し。仍つて一偈を賦して之を祝す——齡米壽を迎へ志彌〻剛く。勤儉力行福田を開く。篤行眞に是れ商家の範。桂子蘭孫亦た姸を競ふ。

與大雄山先達保坂道隆氏

多歲歸投薩埵尊　大雄威德徹心魂　福泉深湛禪山聳　此道彌隆此法存

大雄山の先達保坂道隆氏に與ふ——多歲歸投す薩埵の尊。大雄の威德心魂に徹す。福泉深く湛へ禪山聳

道業何時倣古賢　未知頑石點頭禪　老兄願運同參好　向後爲予加一鞭

宇野默音師玉韻を惠まる和して呈す――道業何れの時か古賢に倣はん。未だ知らず頑石點頭の禪。老兄願はくは同參の好みを運らして。向後予が爲めに一鞭を加へよ。

辛酉一月二十日所感　二首

闔宗恩意感何堪　孱手無端負重擔　願籍大方推輓力　莊嚴禪界活伽藍

辛酉一月二十日の所感――闔宗の恩意感何ぞ堪へん。孱手端無くも重擔を負ふ。願はくは大方推輓の力を藉りて。禪界の活伽藍を莊嚴せん。

法幢二萬一家風　諸嶽傘松和氣融　行到鶴灣波靜處　献身欲報祖恩洪

法幢二萬一家風。諸嶽傘松和氣融す。行いて到る鶴灣波靜かなる處。献身報ぜんと欲す祖恩の洪いなるに。

題達磨圖　手持一軸經行

手中唯有乾坤軸　收得山雲海月情　赤脚踏飜空外路　休言傳法救迷情

達磨の圖に題す。手に一軸を持して經行す――手中唯だ乾坤の軸有り。收め得たり山雲海月の情。赤脚踏飜す空外の路。言ふこと休めよ法を傳へて迷情を救ふと。

宏虎童氏小祥忌拈香

新豐古曲久傳來　三寶榮昌法運開　自是山門添德化　覺雲常簇梵王臺

新豐山榮昌寺の法地昇進を祝す――新豐の古曲久しく傳來し。三寶榮昌法運開く。是れより山門德化を添へ。覺雲常に簇る梵王臺。

次鷲峰道人佐藤大鱗師賚韻

祖道緜緜直到今　鷲峰凝翠路頭深　白雲常護安禪座　石磬長傳古佛心

鷲峰道人佐藤大鱗師の賚韻を次ぐ――祖道緜緜直に今に到り。鷲峰翠を凝して路頭深し。白雲常に護る安禪の座。石磬長く傳ふ古佛の心。

向松菴　二首

翠巒高處劃仙鄉　宛爾禪林古道場　遊戲一旬形外樂　湘陽山水滿吟囊

向松菴――翠巒高き處仙鄉を劃し。宛爾たり禪林の古道場。遊戲一旬形外の樂み。湘陽の山水吟囊に滿つ。

一旬留錫向松菴　海色山光映翠嵐　世上紅塵飛不到　晨昏只見白雲參

一旬錫を留む向松菴。海色山光翠嵐に映ず。世上の紅塵飛び到らず。晨昏只だ見る白雲の參ずるを。

宇野默音師見惠玉韻和呈

烏兎忽忽豈待人　迎來五十八年春　幸依三寶冥加德　心鏡如然不惹塵
烏兎忽忽として豈に人を待たん。迎へ來る五十八年の春。幸に三寶冥加の德に依つて。心鏡如然として塵を惹かず。

次龜谷聖馨先生韻　二首

知君多歲拔丹誠　名敎收功忘利名　雪裏深山年欲暮　只聞幽鳥喚朋聲
知る君が多歲丹誠を拔んじ。名敎功を收めて利名を忘るゝを。雪裏深山年暮れんと欲し。只だ聞く幽鳥朋を喚ぶの聲。

雪鎖雄峰曉未開　新年佛法也奇哉　無邊瑞色無量壽　總自華嚴三昧來
龜谷聖馨先生の韻を次ぐ――雪は雄峰を鎖して曉未だ開けず。新年の佛法也た奇なる哉。無邊の瑞色無量の壽。總て華嚴三昧より來る。

襲杉浦鏡華居士賚韻

昨非今是竟相同　歲月工夫兩欲窮　一縷香煙如慰我　數聲鐘鼓凜生風
杉浦鏡華居士の賚韻を襲ぐ――昨非今是竟に相同じ。歲月工夫兩ながら窮らんと欲す。一縷の香煙我れを慰むるが如く。數聲の鐘鼓凜として風を生ず。

祝新豐山榮昌寺法地昇進

こと秋に似たり。

與安陀衣於石松山永福菴主文山義臺和尙

石松高抱半溪雲　山紫水明交作文　珍重道人安坐境　福田衣下德香薫

安陀衣を石松山永福菴主文山義臺和尙に與ふ——石松高く抱く半溪の雲。山紫水明交〻文を作す。珍重す道人安坐の境。福田衣下德香の薫ずるを。

大雄山庚申除夜

雪鎖禪房意晏如　老來殊覺世情疎　瓶梅未漏東君信　忽聽鐘聲報歲除

大雄山庚申除夜——雪は禪房を鎖して意晏如。老來殊に覺ゆ世情の疎なるを。瓶梅未だ漏さず東君の信。忽ち聞く鐘聲の歲除を報ずるを。

同　辛酉新年　三　首

雪華敷地不留塵　壽院香殘靜似春　誰剖虛空成兩段　同時送舊又迎新

同じく辛酉新年——雪華地に敷いて塵を留めず。壽院香殘靜なること春に似たり。誰か虛空を剖ちて兩段と成す。同時舊を送り又た新を迎ふ。

曉鐘聲裏起禪床　先拜仁王與法王　回首大雄峰下路　千林一白等含光

曉鐘聲裏禪床を起ち。先づ拜す仁王と法王とを。首を回らす大雄峰下の路。千林一白等しく光を含む。

靜岡縣中泉町神谷別莊駐錫――狂飈石を飛ばし雨は盆を傾け。樹木曉を含んで雲競ひ奔る。須臾風收つて天洗ふに似たり。蟬聲鳥に和して仙園に戯る。（大正七年八月三十日の颱風）

叢林鬱密綠成陰　招隱閣邊興最深　殘月入窗風滿堂　蟲聲如夢觸禪心

叢林鬱密として綠陰を成し。招隱閣邊興最も深し。殘月窗に入つて風堂に滿ち。蟲聲夢の如く禪心に觸る。

賀常林寺首座永山仙秀具壽

永平佛法嶽山禪　兩手拈來奉大仙　萬仭富峰當面秀　威容影動竹篦邊

常林寺首座永山仙秀具壽を賀す――永平の佛法嶽山の禪。兩手拈し來つて大仙に奉ず。萬仭の富峰は當面に秀で。威容影は動く竹篦の邊。

釧路山定光寺偶成　二首

濃霧濛濛密似霞　空門一路戒光加　絕無塵事侵禪榻　獨有濤聲伴結跏

釧路山定光寺偶成――濃霧濛濛密にして霞に似たり。空門一路戒光加はる。絕えて塵事の禪榻を侵す無く。獨り濤聲の結跏に伴ふ有り。

境靜林間塔影幽　漫天濃霧鎖香樓　薰風八月忘煩暑　爽氣襲人冷似秋

境靜に林間にして塔影幽なり。漫天の濃霧香樓を鎖す。薰風八月煩暑を忘れ。爽氣人を襲うて冷なる

中泉町神谷惣吉氏別莊寄杖中の吟――境靜に林閒にして別に天有り。自から隱を招ぎ又た仙を呼ぶに堪へたり。一盞の茶味賓主を融じ。飽くまで清風を喫して禪を說かず。（別莊に招隱閣と命名す）

戰病死者追弔及戰捷祈禱　二首

仁義之師至善兵　皇軍所嚮鬼神驚　佛天威力輝天地　文德武功隨處明

戰病死者の追弔及び戰捷の祈禱――仁義の師至善の兵。皇軍嚮ふ所鬼神驚く。佛天の威力天地に輝き。文德武功隨處に明かなり。

忠節奉公豈懼死　水飛閃電地轟雷　知君一蹴滔天浪　觸着天邊明月來

忠節公に奉じて豈に死を懼れんや。水は閃電を飛ばし地は雷を轟かす。知る君が滔天の浪を一蹴して。天邊の明月に觸着し來るを。

賀雲洞首座秀雲孝巖具壽

白雲垂影鎖寒巖　新月放輝昇半簾　喜子金城伸大孝　老松秀處打鎚鉗

雲洞首座秀雲孝巖具壽を賀す――白雲影を垂れて寒巖を鎖し。新月輝を放つて半簾に昇る。喜ぶ子が金城大孝を伸べ。老松秀づる處に鎚鉗を打するを。

靜岡縣中泉町神谷別莊駐錫　二首

狂飈飛石雨傾盆　樹木含曉雲競奔　須臾風收天似洗　蟬聲和鳥戲仙園　大正七年八月三十日颱風

道人不管暑侵身　豈要逐凉遁海濱　爽氣常生三昧座　心隨明月自爲輪

福井孝顯寺の講習會中某師の韻に和す――道人管せず暑の身を侵すを。豈要せんや凉を逐うて海濱に遁るゝを。爽氣常に生す三昧の座。心は明月に隨つて自から輪となる。

終日嘮嘮開禍門　自慚忘醜入膠盆　羽江賴有清涼月　遊畢竟空照夢魂

終日嘮嘮として禍門を開き。自から慚づ醜を忘れて膠盆に入るを。羽江賴に清涼の月有り。畢竟空に遊んで夢魂を照らす。

釧路山定光寺安居中作　二首

允武允文世絶倫　聖明治績到今新　拈香欲報天恩厚　濃霧半晴仙鳳濱　仙鳳寺先帝奉悼會

釧路山定光寺安居中の作――允武允文世に倫を絶ち。聖明の治績今に到つて新たなり。香を拈じ天恩の厚きに報いんと欲す。濃霧半ばは晴る仙鳳の濱。（仙鳳寺の先帝奉悼會）

佛日增輝照講堂　此間正好倚禪床　人間煩暑消無跡　占斷曹溪一味涼　講習開會上供

佛日輝を增して講堂を照す。此間正に好し禪床に倚るに。人間の煩暑消えて跡無く。占斷す曹溪一味の涼。（講習開會の上供）

中泉町神谷惣吉氏別莊寄杖中吟

境靜林閒別有天　自堪招隱又呼仙　一盞茶味融賓主　飽喫清風不說禪　別莊命名招隱閣

を帶びて還る。（同日眞野御陵參拜）

境靜林閒夜色涼　松雲一帶護山房　絕無塵事侵吟榻　只見流螢掠石床　同夜宿眞野村山本悌二郎氏別邸

境靜かに林閒夜色涼し。松雲一帶山房を護る。絕えて塵事の吟榻を侵す無く。只だ見る流螢の石床を掠むるを。（同夜眞野村山本悌二郎氏の別邸に宿す）

承久天皇手植梅　淸香郁郁滿蓬萊　祝融逞勢難燒盡　再出新芽薰九垓　佐州苦梅被燒山火更出新芽

承久天皇手植の梅。淸香郁郁として蓬萊に滿つ。祝融勢を逞うするも燒き盡し難く。再び新芽を出して九垓を薰ず。（佐州の苦梅山火に燒かるゝも更に新芽を出す）

佐渡金澤村思川莊

幽庭新就惹情長　石有神容水有香　佐國由來多勝蹟　更添千種思川莊

佐渡金澤村思川莊——幽庭新に就つて情を惹くこと長し。石に神容有り水に香有り。佐國由來勝蹟多し。更に添ふ千種の思川莊。

風吹微雨興尤多　爽氣入窗海不波　試放吟眸舷上立　展望兩佐幾山河　七月十五日乘佐渡丸發兩津

風は微雨を吹いて興尤も多く。爽氣窗に入つて海波うたず。試に吟眸を放つて舷上に立てば。展望す兩佐の幾山河。（七月十五日佐渡丸に乘つて兩津を發す）

福井孝顯寺講習會中和某師韻　二首

眼疾を除き。光明閣上回春を見るを。

佐渡行吟　七首　大正七年七月十一日發新潟赴佐渡十五日歸新潟

波平風靜爽如秋　載夢汽船向佐州　承久御陵今欲拜　廿年宿志一時酬　赴佐州

佐渡行吟。大正七年七月十一日新潟を發し佐渡に赴き十五日新潟に歸る　——波平かに風靜かに爽なること秋の如く。夢を載せて汽船佐州に向ふ。承久の御陵今拜さんと欲す。廿年の宿志一時に酬いらる。

（佐渡に赴く）

明月放輝般若筵　白雲垂影老松邊　饅頭自現神通力　異草靈苗滿福田　七月十二日宿河原田町松雲山本田寺次不老閣猊下玉韻

明月輝を放つ般若の筵。白雲影を垂る老松の邊。饅頭自から現ず神通力。異草靈苗福田に滿つ。

（七月十二日河原田町松雲山本田寺に宿し不老閣猊下の玉韻を次ぐ）

承久明君御所蹤　滿庭草木有神容　低頭咽涙終無語　嘿禮皇儲手植松　同十三日黒木御所參拜

承久明君御所の蹤。滿庭の草木神容有り。低頭涙に咽びて終に語無く。嘿禮す皇儲手植の松。

（同十三日黒木御所參拜）

雲林鬱密劃仙寰　自覺神威鎭此山　松樹不言人不語　幽禽時帶夕陽還　同日眞野御陵參拜

雲林鬱密として仙寰を劃し。自から覺ゆ神威此の山を鎭するを。松樹言はず人語らず。幽禽時に夕陽

鷄谷山花榮寺戒場迎聖

雲籠鷄谷隔紅塵　鷲嶺風烟一段新　傾盡丹誠開戒殿　花榮凝瑞靜如春

鷄谷山花榮寺戒場迎聖――雲は鷄谷を籠めて紅塵を隔て。鷲嶺の風烟一段新なり。丹精を傾け盡して戒殿を開けば。花榮瑞を凝して靜なること春の如し。

長岡野本恭八郎翁建設互尊文庫

文庫開來智德門　四成三貴報天恩　長陵有箇眞菩薩　擧體獨尊皆互尊

長岡の野本恭八郎翁互尊文庫を建設す――文庫開來す智德の門。四成三貴天恩に報ず。長陵箇の眞菩薩有り。擧體獨尊皆な互尊。

柏崎庄司兩兄銅像開眼

爲弟爲兄豈偶然　慕心切切也深緣　遺容忽現幽庭裏　對立心心自克傳

柏崎庄司兩兄の銅像開眼――弟爲り兄爲る豈に偶然ならんや。慕心切切也た深緣。遺容忽ち現ず幽庭の裏。對立すれば心心自から克く傳ふ。

與洞雲足慧和尙

滿池荷葉大如輪　相遇深歡道味新　敎界待君除眼疾　光明閣上見回春

洞雲足慧和尙に與ふ――滿池の荷葉大いさ輪の如し。相遇うて深く歡ぶ道味の新なるを。敎界待つ君が

以道作心禪作身　慈悲忍辱是家珍　平常的事須參究　觸處無非轉法輪

送行。植木道忍力生に與ふ――道を以て心と作し禪を身と作す。慈悲忍辱是れ家珍。平常的の事須らく參究すべし。觸處轉法輪に非らざるは無し。

悼北海道圓通寺開基惠心和尚遷化

插草莊嚴六湛山　報恩行業幾辛艱　杖錫忽追師跡去　落梅花裏唱陽關

北海道圓通寺開基惠心和尚の遷化を悼む――插草莊嚴す六湛山。報恩の行業幾辛艱。杖錫忽ち師跡を追うて去り。落梅花裏陽關を唱ふ。

越後血峰山龍昌寺啓戒

夜來風雨撼叢林　洗淨衆生塵垢心　誰識祥雲垂影處　戒光如玉映青岑

越後血峰山韻昌寺啓戒――夜來の風雨叢林を撼かし。洗淨す衆生塵垢の心。誰か識らん祥雲影を垂るゝ處。戒光玉の如く青岑に映ず。

同　祝衣偈

降伏衆魔把赤旛　血峰千仭定乾坤　雙肩掛着袈裟角　攝取靈山八萬門

同じく祝衣の偈――衆魔を降伏して赤旛を把る。血峰千仭乾坤を定む。雙肩掛着す袈裟の角。攝取す靈山八萬の門。

一夜金龍頭角生　頷珠弄得怒雷轟　孤巖留與靈山月　影向血峰高處明

龍昌寺首座巖山金龍具壽を賀す――一夜金龍頭角生じ。頷珠弄し得て怒雷轟く。孤巖留與す靈山の月。影は血峰高處に向つて明かなり。

### 松山溫泉雜詠　三首

吟身一夜浴靈泉　洗淨煩塵骨欲仙　禮讚講經總不要　梵音獨有老松傳

松山溫泉雜詠――吟身一夜靈泉に浴し。煩塵を洗淨して骨仙たらんと欲す。禮讚講經總て要せず。梵音獨り老松の傳ふる有り。

積善餘慶一夜仙　吾忘我去浴靈泉　浩然身在紅塵外　結夢松山也佛緣　此行依積善組合之好意起句故及

積善の餘慶一夜の仙。吾れ我れを忘れ去つて靈泉に浴す。浩然の身は紅塵の外に在り。夢を松山に結ふも也た佛緣。此の行積善組合の好意に依る。起句故に及ぶ。

噴泉數丈勢何雄　恰似白龍曉躍空　忽化溫湯降浴舍　洗淸仙骨樂無窮

噴泉數丈勢何ぞ雄なる。恰も似たり白龍の曉空に躍るに。忽ち溫湯と化して浴舍に降る。仙骨を洗淸して樂み窮り無し。

### 送行　與植木道忍力生

英靈志氣道心深　久住龍雲德作霖　寂後七年如昨夢　顏顏相對好知音

龍雲石田靈鳳師七回忌――英靈の志氣道心深く。久しく龍雲に住して德霖を作す。寂後七年昨夢の如く。顏顏相對す好知音。

西行望嶽圖

萬似富峰疊玉高　如今忽喜得仙曹　無心人對無心境　世上是非輕似毛

西行望嶽の圖――萬似の富峰玉を疊んで高く。如今忽ち喜ぶ仙曹を得たるを。無心の人は對す無心の境。世上の是非輕きこと毛に似たり。

望山翁

曾聞仁者壽無彊　此壽難以劫數量　六十一年雲外樂　別乾坤裏望山王

望山翁――曾て聞く仁者は壽彊り無しと。此壽劫數を以て量り難し。六十一年雲外の樂み。別乾坤裏の望山王。

敷仁養德終猶始　樂靜悠然獨望山　寶杖忽追仙跡去　無端踏斷死生關

仁を敷き德を養ひ終り猶始めのごとく。靜を樂んで悠然獨り山を望む。寶杖忽ち仙跡を追うて去り。端無く踏斷す死生の關。

賀龍昌寺首座巖山金龍具壽

霜華三百五旬の春。挿草の遺恩尚ほ新なるを覺ゆ。雪は寒巖を鎖して鶯未だ語らず。老梅笑を含んで珠脣を動かす。

### 三俣雪害遭難死者追弔

雪魔降禍鬼神傷　家破人亡轉斷腸　爲薦醍醐微妙食　老梅含露影還香

三俣雪害遭難死者の追弔――雪魔禍を降して鬼神傷む。家破れ人亡びて轉た斷腸。爲めに薦む醍醐微妙の食。老梅露を含んで影還た香し。

### 飛驒高山慈恩山正雲寺尸羅會

雨霽千山綠味深　正雲凝彩吉祥林　戒壇點出華藏境　覺路莊嚴古佛心

飛驒高山慈恩山正雲寺尸羅會――雨霽れて千山綠味深く。正雲彩を凝らす吉祥林。戒壇點出す華藏境。覺路莊嚴す古佛の心。

### 同　送聖

正雲垂瑞覆兒孫　緇素歡呼擁戒門　開祖未曾離此境　登壇授脉也慈恩

同じく送聖――正雲瑞を垂れて兒孫を覆ひ。緇素歡呼して戒門を擁す。開祖未だ曾て此境を離れず。登壇授脉も也た慈恩。

### 龍雲石田靈鳳師七回忌

尾州法幢山普濟寺尸羅會平和克復祈禱　二首

降魔成道現眞慈　佛法由來王法資　誰識東洋平穩德　頓開世界大安基

尾州法幢山普濟寺尸羅會。平和克復の祈禱――降魔成道眞慈を現す。佛法由來王法の資。誰か識らん東洋平穩の德。頓に開く世界大安の基。

戰雲深漲歐洲天　爛肉成山血作川　梵唄呼醒生死夢　怨親普濟紫金蓮

戰雲深く漲る歐洲の天。爛肉山を成し血は川を作す。梵唄呼び醒す生死の夢。怨親普く濟ふ紫金蓮。

祝光明寺富山師轉法輪

海月山雲富一生　身心直下放光明　烏藤卓立須彌頂　龍象如霞遶法城

光明寺富山師の轉法輪を祝す――海月山雲一生を富にし。身心直下に光明を放つ。烏藤卓立す須彌の頂。龍象霞の如く法城を遶る。

普濟寺戒場性海慈船禪師追恩　二首

一箭離弦四閲年　餘恩猶覺法光新　普濟堂中追慕涙　醸成春雨濕衣巾

普濟寺戒場性海慈船禪師追恩――一箭弦を離れて四たび年を閲す。餘恩猶覺ゆ法光の新たるを。普濟堂中追慕の涙。春雨を醸成して衣巾を濕す。

霜華三百五旬春　挿草遺恩尙覺新　雪鎖寒巖鶯未語　老梅含笑動珠脣

黏出趙州一味禪　松濤影裏占風烟　吉祥臺畔無窮瑞　錦上敷花賑法筵

吉祥寺關嶺宗師の開堂を祝す――黏出す趙州一味の禪。松濤影裏風烟を占む。吉祥臺畔無窮の瑞。錦上花敷いて法筵を賑はす。

題布袋持念珠圖

布袋包容無盡藏　念珠顆顆放神光　不知肚裏收何物　蘿月松風道味長

布袋念珠を持するの圖に題す――布袋包容す無盡藏。念珠顆顆神光を放つ。知らず肚裏何物をか收む。蘿月松風道味長し。

寶泉山龍門寺安陀會書祝衣裏面

龍門三級月籠霞　影照寶泉波似華　珍重祖庭無限瑞　分明付屬一袈裟

寶山龍泉門寺安陀會祝衣の裏面に書す――龍門三級月霞を籠む。影は寶泉を照して波華に似たり。珍重す祖庭無限の瑞。分明に付屬す一袈裟。

五泉町鹽原勘吉氏求法號授以吟龍院豪潮惘海居士因附一偈

朝聽潮聲志益豪　夢望惘海眼彌高　蒼龍吟破天涯月　氣驅鯨鯢蹴怒濤

五泉町鹽原勘吉氏法號を求む授くるに吟龍院豪潮惘海居士を以てし因に一偈を附す――朝に潮聲を聽いて志益々豪に。夕に惘海を望んで眼彌々高し。蒼龍吟破す天涯の月。氣は鯨鯢を驅つて怒濤を蹴る。

井上圓了博士に呈す――信念の筆眞理の文。慧刀一掃す怪魔の軍。活論況んや復た昏夢を驚かす。敎界の恩人此君を推す。

慧光玄照禪師三周忌　二首

慧日西沈三閱春　慕心猶覺涙痕新　餘光印出豐川水　照耀吉祥峰下人

慧光玄照禪師三周忌――慧日西に沈んで三たび春を閱し。慕心猶覺ゆ涙痕の新なるを。餘光印出す豐川の水。照耀す吉祥峰下の人。

信念常存赤子情　渾身慈愛向人傾　涅槃一路超三際　無盡燈前月色清

信念常に存す赤子の情。渾身の慈愛人に向つて傾く。涅槃の一路三際を超え。無盡燈前月色清し。

寄神戸修養會降誕會講演　二首

淨信現時萬德成　獨尊唯我度羣情　不知修養諸君子　幾箇佛心能誕生

神戸修養會降誕會講演――淨信現ずる時萬德成り。獨尊唯我羣情を度す。知らず修養の諸君子。幾箇の佛心か能く誕生せん。

百花叢裏彩霞鋪　下地上天歸指呼　斯場直是藍毘苑　降誕眞風見也無

百花叢裏彩霞鋪く。下地上天指呼に歸す。斯の場直に是れ藍毘苑。降誕の眞風見や也た無や。

祝吉祥寺關嶺宗師開堂

春禽舞ひ。露出す山雲海月の情。

同書祝衣絡子裏面

行持道念瑩無瑕　卓錫祥平嶺頭霞　喜見華藏春色麗　祝君呈似佛袈裟

同じく祝衣絡子の裏面に書す——行持道念瑩として瑕無く。錫を卓す祥平嶺頭の霞。喜び見る華藏春色の麗しきを。君を祝して呈似す佛の袈裟。

同開基小泉城主三百年忌

文經武緯併成仁　凛凛金剛不壞身　一脈龍泉霞氣動　莊嚴戒地覺園春

同じく開基小泉城主三百年忌——文經武緯併せて仁を成す。凛凛たり金剛不壞の身。一脈の龍泉霞氣動き。莊嚴す戒地覺園の春。

丹波須彌塔山賴光寺啓戒

雲鎖高峰雪未消　彩霞既見透禪嶠　和風微動華藏界　數點鐘聲徹碧霄

丹波須彌塔山賴光寺啓戒——雲は高峰を鎖して雪未だ消えず。彩霞既に見る禪嶠を透るを。和風微に動く華藏界。數點の鐘聲碧霄に徹す。

呈井上圓了博士

信念筆兮眞理文　慧刀一掃怪魔軍　活論況復驚昏夢　教界恩人推此君

次鏡華居士席上示千葉宗師韻

一院烟霞鳥是賓　梅梢着蕾未招春　恩師寂後經年四　猶覺溫容慈訓新

鏡華居士が席上千葉宗師に示すの韻を次ぐ――一院の烟霞鳥は是れ賓。梅梢蕾を着けて未だ春を招かず。恩師寂して後年を經ること四たび。猶覺ゆ溫容慈訓の新なるを。

次同偶成　寄美原師韻

湘陽春淺思彌深　恍聞霜鐘出遠村　黄鳥不來霞不動　梅花獨露法王心

同じく偶成美原師に寄するの韻を次ぐ――湘陽春淺くして思ひ彌ゝ深く。恍として聞く霜鐘の遠村に出づるを。黄鳥來らず霞動かず。梅花獨露す法王の心。

三州西明寺寶飯郡青年授戒會送聖

佛子傾誠入戒門　華藏界裏種靈根　期他培養心芽去　長利羣生報四恩

三州西明寺寶飯郡青年授戒會送聖――佛子誠を傾けて戒門に入り。華藏界裏靈根を種ゆ。期す他の心芽を培養し去りて。長く羣生を利して四恩に報ゆるを。

上州祥平山龍泉院戒會完戒

一脉龍泉徹底清　烟霞鎖浪護祥平　梅花含笑春禽舞　露出山雲海月情

上州祥平山龍泉院戒會完戒――一脉の龍泉徹底清く。烟霞浪を鎖して祥平を護る。梅花笑を含むで

秀苗芳蕾夢長年　忽爾辭枝入幻泉　香魂豈墮幽明浪　謝盡塵緣結覺緣

越後刈田郡丸田尙一郎君の二男悌三郎氏二月七日を以て東京大學病院に死す。因に丸田飯塚兩賢の悼詞を見二月十二日の夜初願忌逮夜を修し次韻拈香す——秀苗芳蕾長年を夢み。忽爾枝を辭して幻泉に入る。香魂豈に幽明の浪に墮せんや。塵緣を謝し盡して覺緣を結ぶ。

雛鳳潛蹤切利霞　玉音既絕路頭賒　玄庭留箇無根樹　空劫那邊點着花

雛鳳蹤を潛む切利の霞。玉音既に絕えて路頭賒なり。玄庭箇の無根の樹を留め。空劫那邊にか花を點着す。

次丸田櫻陰居士悼孫悌韻

一具精靈越斷常　翻身證入菩提場　多生恩愛深如海　想子淨邦望本鄉

丸田櫻陰居士が孫悌を悼むの韻を次ぐ——一具の精靈斷常を越え。身を翻へして證入す菩提場。多生の恩愛深きこと海の如く。想ふ子が淨邦本鄉を望むを。

櫻陰居士見惠玉什襲其韻却呈

仁人活計思無邪　禪味詩情老益加　不是尋常文雅客　一代風流奉國家

櫻陰居士玉什を惠まる其韻を襲いで却呈す——仁人の活計思ひ邪無し。禪味詩情老いて益〻加はる。是れ尋常文雅の客にあらず。一代の風流國家に奉ず。

鏡華居士見寄喜予到福泉寺詩和之示覺禪

洞流將渇福泉門　誰整紀綱草梵園　嚴護法城任最大　須傾道念聞靈源

鏡華居士予が福泉寺に到るを喜ぶの詩を寄せらる。之に和して覺禪に示す――洞流將に渇れんとす福泉の門。誰れか紀綱を整へん草梵園。法城を嚴護する任最も大なり。須らく道念を傾けて靈源を聞くべし。

謝盛岡市報恩寺尾崎文英師訪雄峰

仙筇忽入牛雲亭　目撃既知道味馨　慙我對賓無好遇　聊以山水供觀聽

盛岡市報恩寺尾崎文英師の雄峰を訪ふを謝す――仙筇忽ち入る牛雲亭。目撃既に知る道味の馨しきを。慙づ我れ賓に對して好遇無きを。聊か山水を以て觀聽に供す――

牛頭山天王寺啓建

雲鎖戒壇滋味深　春風春雨滿春林　天王威德濺甘露　打濕離塵清淨心

牛頭山天王寺啓建――雲は戒壇を鎖して滋味深く。春風春雨春林に滿つ。天王の威德甘露を濺ぎ。打濕す離塵清淨の心。

越後刈田郡丸田尙一郎君二男悌三郎氏以二月七日死於東京大學病院　因見丸田飯塚兩賢之悼詞

二月十二日夜修初願忌追夜次韻拈香　二首

び狂せんと欲す。目撃既に通ず無限の意。暫時の話柄道情長し。

和鏡華居士見贈予及隆雅居士韻

半榻烟霞春七分　盆梅帶笑洩香氛　都門此日紅塵絶　惹得湘南一朶雲

鏡華居士が予及隆雅居士に贈られし韻に和す――半榻の烟霞春七分。盆梅笑を帶びて香氛を洩らす。都門此日紅塵絶え。惹き得たり湘南一朶の雲。

春雪次鏡華居士韻　二首

天華亂墜逸情長　雲衲圍爐倣六藏　兀坐不憂寒徹骨　銀臺喜見雪加霜

春雪鏡華居士の韻を次ぐ――天華亂れ墜ちて逸情長く。雲衲爐を圍んで六藏に倣ふ。兀坐憂へず寒骨に徹するも。銀臺喜び見る雪霜を加ふるを。

五葉一華春滿林　餘寒忽爾逼衣襟　開窗天地皚皚白　露出山僧不染心

五葉一華春滿林。餘寒忽爾として衣襟に逼る。窗を開けば天地皚皚として白く。露出す山僧不染の心。

和鏡華居士見訪追分支院韻

都塵不許入僧園　何幸地仙蔵洞門　雲已去時龍漸到　幽庭空見竹筇痕

鏡華居士が追分支院を訪ねらるゝの韻に和す――都塵許さず僧園に入るを。何の幸ぞ地仙洞門を蔵く。雲已に去る時龍漸く到り。幽庭空しく見る竹筇の痕。

不斷の煙。湘南春色の淺きを憾ます。心華捧げ盡す法王の前。

林院無塵春已回　湘陽景趣也佳哉　閒庭失却仙禽影　只見老梅呈笑來

林院塵無く春已に回り。湘陽の景趣也た佳なる哉。閒庭失却す仙禽の影。只だ見る老梅の笑ひを呈し來るを。

新年和佐藤大麟師所感

玉曆更端意闊如　慶雲忽簇日昇初　山房莫怪開窗急　招得新風拂舊廬

新年佐藤大麟師の所感に和す――玉曆更端意闊如たり。慶雲忽ち簇る日昇の初め。山房怪む莫れ窗を開くこと急なるを。新風を招き得て舊廬を拂はん。

清隆山福泉寺本尊上供

心地清隆福作泉　道場必現直心前　滿林枯木花將發　覺路莊嚴逐日全

清隆山福泉寺本尊上供――心地清隆なれば福泉を作し。道場必ず現ず直心の前。滿林の枯木花將に發かんとし。覺路の莊嚴日を逐うて全し。

鏡華見訪追分支院山僧不在却相逢東京驛

主僧閒却待賓堂　驛舍相逢喜欲狂　目擊既通無限意　暫時話柄道情長

鏡華追分支院を訪ねられ山僧不在。却つて東京驛に相逢ふ――主僧待賓堂を閒却し。驛舍に相逢うて喜

屋頭松矣雪中梅　黛影清香劈面開　一片閑田閒不得　耕雲種月幾千回

閑田老師雪鷗全集を贈らる。收むる所盡く是れ璞玉渾金些の塵影無し。乃ち一哩囉を賦して記念す――屋頭の松雪中の梅。黛影清香劈面に開く。一片の閑田閒を得ず。耕雲種月幾千回。

清隆山福泉寺本尊開光　於最乘寺

法身垂迹大雄嶺　悲願今將入福泉　徹底清隆無限潤　眞光寂照幾三千

清隆山福泉寺本尊開光。最上寺に於いて――法身迹を垂る大雄の嶺。悲願今將に福泉に入らんとす。清隆無限の潤ひを徹底して。眞光寂照す幾三千。

戊午新年鏡華大士遙見寄玉什及蘭室女史書畫採蓮女史書不堪感激恭襲其韻伸謝

開緘宛若接溫容　三紙分明話我宗　無聲詩與有聲畫　莊嚴新歲大雄峰

戊午新年鏡華大士遙に玉什及蘭室女史の書畫採蓮女史の書を寄せらる。感激に堪へず恭しく其韻を襲ぎ謝を伸ぶ――緘を開けは宛も溫容に接するが若く。三紙分明に我が宗を話す。無聲の詩と有聲の畫と。莊嚴す新歲の大雄峰。

大正七年一月九日訪鏡華居士設拜於六湛恩師　二首

恩師寂後四經年　寶鼎香噴不斷烟　不憾湘南春色淺　心華捧盡法王前

大正七年一月九日鏡華居士を訪うて拜を六湛恩師に設く――恩師の寂後四たび年を經る。寶鼎香は噴く

大正丁巳十月豊川閣慧光禪師眞儀——七十六年弘道の身。百千萬劫利生の人。吉祥峰頂玲瓏の月。影を豊川に留めて刹塵を照らす。

祝守保山天桂寺全巖玉光師建法幢

琢磨靈玉燦成章　天桂華開影亦香　守國護宗無限瑞　龍吟鳳舞覺王場

守保山天桂寺全巖玉光師が法幢を建つるを祝す——靈玉を琢磨し燦として章を成し。天桂華開いて影亦た香し。國を守り宗を護る無限の瑞。龍は吟し鳳は舞ふ覺王場。

和豊後中津前安全

神工鬼鑿劃仙寰　雲外奇勝閒更閒　羅漢堂前回首立　樓臺半在碧巖間

豊後中津前の安全に和す——神工鬼鑿仙寰を劃し。雲外の奇勝閒更に閒なり。羅漢堂前首を回らして立てば。樓臺半ばは碧巖の間に在り。

和東濃

物外道人何處尋　濃陽古佛富禪心　詩情況具神通力　括盡乾坤齊上吟

東濃に和す——物外の道人何れの處にか尋ねん。濃陽の古佛禪心に富む。詩情況や具ふ神通力。乾坤を括盡して齊しく吟に上す。

閑田老師見贈雪鷗全集所收盡是璞玉渾金無些塵影乃賦一哩嘿記念

年の綠。鶴翅龍鱗瑞昌を競ふ。

名古屋梅屋寺庫院落成祝慶轉若

空門二十瑞雲堆　特地莊嚴香積臺　覺苑春回梅屋座　松風竹月放光來

名古屋梅屋寺庫院落成の祝慶轉若――空門二十瑞雲堆く。特地莊嚴す香積臺。覺苑春は回る梅屋の座。松風竹月も光を放ち來る。

賀信州頼岳寺本堂再建落成

金剛願力鑄心肝　再造殿堂新寺觀　頼岳從斯風月足　彌天龍象簇仙壇

信州頼岳寺本堂再建の落成を賀す――金剛の願力心肝を鑄る。殿堂を再建して寺觀を新にす。頼岳斯れより風月足り。彌天の龍象仙壇に簇がる。

賀遠州延命寺新命神谷鐵髯師

以道爲心法是身　行持但倣祖師眞　垂釣延命無他意　釣盡曹溪月一輪

遠州延命寺新命神谷鐵髯師を賀す――道を以て心と爲す法は是れ身。行持但だ倣ふ祖師の眞。釣を延命に垂れて他意無し。釣り盡す曹溪の月一輪。

大正丁巳十月豐川閣慧光禪師眞儀

七十六年弘道身　百千萬刧利生人　吉祥峰頂玲瓏月　留影豐川照刹塵

題幽靈髑髏圖

頽容亂髮面容皺　鬼氣啾啾欲逼人　一箇髑髏無好惡　笑他迷影妄勞神

幽靈髑髏の圖に題す――頽容髮を亂し面容皺み。鬼氣啾啾人に逼らんと欲す。一箇の髑髏好惡無く。笑ふ他の影に迷うて妄に神を勞するを。

題觀音大士駕龍圖

逍遥鳥道駕金龍　法雨慈雲件聖蹤　三十三身天外月　圓通五五靜時鐘

觀音大士龍に駕するの圖に題す――鳥道に逍遥して金龍に駕し。法雨慈雲聖蹤を件ふ。三十三身天外の月。圓通五五靜時の鐘。

永住二十五世中興象山良威大和尚

一生弘法又安人　寂後猶觀遺德新　雨霽滿山秋氣爽　露光交耀舍那身

永住二十五世中興象山良威大和尚――一生法を弘め又た人を安んじ。寂後猶ほ觀る遺德の新なるを。雨霽れて滿山秋氣爽に。露光交ゝ耀く舍那の身。

美濃岩村上田東治氏金剛石婚式

欝密雙松壽色長　堅心勁節鑄金剛　貞羝獨帶千年緑　鶴翅龍鱗競瑞昌

美濃岩村の上田東治氏が金剛石婚式――欝密たる雙松壽色長し。堅心勁節金剛を鑄る。貞羝獨り帶ぶ千

賀九州三重野幸夫君養母石子刀自還暦

春風秋雨暦日還　慈愛如花映憙顏　壽室任他談昨夢　幾枝蘭桂繞仙宴

九州三重野幸夫君の養母石子刀自が還暦を賀す——春風秋雨暦日還へり。慈愛花の如く憙顏に映ず。壽室任他あれ昨夢を談ずるも。幾枝の蘭桂仙宴を繞ぐる。

賀北海道圓通寺開基三戸惠心首版于高龍寺

知足菴中養惠心　圓通閣就化門深　國華堂裏分筵日　瑞氣高籠六湛岑

北海道圓通寺開基三戸惠心が高龍寺に首版たるを賀す——知足菴中惠心を養ひ。圓通閣就つて化門深し。國華堂裡分筵の日。瑞氣高く籠む六湛の岑。

博多講習會

匝地清風涼可人　賓中主對主中賓　講堂今日留何物　筑紫灣頭月一輪

博多講習會——匝地の清風涼人に可し。賓中の主は對す主中の賓。講堂今日何物をか留むる。筑紫灣頭月一輪

開窗獨見白雲心　掩耳徐聞隻手音　澗水松風鬧聒聒　與君彈盡沒絃琴

窗を開いて獨り見る白雲の心。耳を掩うて徐ろに聞く隻手の音。澗水松風鬧聒聒。君と彈じ盡す沒絃琴。

より歸る。

## 感慨三首

古路迢迢馬不前　衲僧猶滯利名邊　宗風不起禪園寂　慨見閒雲斷復連

感慨――古路迢迢馬前まず。衲僧猶ほ滯る名利の邊。宗風起らす禪園寂たり。慨き見る閒雲の斷え復た連るを。

深山縱有石泉清　叵洗憂宗憂國情　幾萬緇徒爲甚事　化門何日播嘉聲

深山縱ひ石泉の清き有るも。洗ひ叵し憂宗憂國の情。幾萬の緇徒甚事をか爲す。化門何れの日か嘉聲を播かん。

廿年近侍大休堂　祖苑如今感寂寥　天下豈無作家漢　願攀驥尾闖眞場

廿年近侍す大休の堂。祖苑如今寂寥を感ず。天下豈作家の漢無からんや。願はくは驥尾に攀ぢて眞場を闖かん。

## 宿紫雲寺村觀音寺

駐錫龍華峰頂雲　深沈古殿絶塵氛　千株松下焚香坐　天籟清調眼處聞

紫雲寺村觀音寺に宿す――錫を駐む龍華峰頂の雲。深沈たる古殿塵氛を絶つ。千株の松下香を焚いて坐せば。天籟の清調眼處に聞く。

花香書院寂如山　中有眞人與鶴閒　獨望雲霄求道侶　仙蹊未許世人攀

花香書院寂として山の如く。中に眞人と鶴との閒なる有り。獨り雲霄を望んで道侶を求むるも。仙蹊未だ世人の攀づるを許さず。

## 最乘寺　四首

朝提葛杖入天宮　夕坐繩床說古風　滿地白雲凝不散　自疑身在磬聲中

最上寺——朝に葛杖を提げて天宮に入り。夕に繩床に坐して古風を說く。滿地の白雲凝つて散せず。自から疑ふ身の磬聲の中に在ることを。

矗矗峰巒鳥道迢　枯藤動處白雲飄　山僧不管人間事　靜聽鐘聲披七條

矗矗たる峰巒鳥道迢なり。枯藤動く處白雲飄へる。山僧は管せず人間の事。靜に鐘聲を聽いて七條を披す。

樓閣層層聚似邨　半雲亭靜倚巖根　曾無塵點侵禪榻　自有松風觸夢魂

樓閣層層聚まりて邨に似たり。半雲亭は靜に巖根に倚る。曾て塵點の禪榻を侵す無く。自から松風の夢魂に觸るゝ有り。

空翠凝寒苔作斑　溪聲打着白雲關　開窗下瞰澄潭月　幽鳥時歸自主山

空翠寒を凝らして苔斑を作し。溪聲打着す白雲關。窗を開いて下瞰すれば澄潭の月。幽鳥は時に主山

六湛禪師——耕雲種月德孤にあらず。綿密の行持珠を貫くに似たり。旭日天に登つて星影盡き。一天の宗匠有るも無きが如し。

供慈船禪師眞　二首

金粟如來垂跡身　終生遊戲吉祥春　默而能說寬而密　瞻仰宗門第一人

金粟如來垂跡の身。終生遊戲す吉祥の春。默して能く說き寬にして密。瞻仰す宗門第一の人と。

泣捧心香烟滿堂　霜華三閱夢茫茫　波翻偃月橋邊水　雲鎖涅槃寂默鄉

慈船禪師の眞に供ふ——泣いて心香を捧ぐれば烟堂に滿つ。霜華三び閱す夢茫茫。波は翻へる偃月橋邊の水。雲は鎖す涅槃寂默の鄉。

慈心未必守雲關　振錫湘南潭北間　悲願豈留生死岸　法身常在吉祥山

慈心未だ必ずしも雲關を守らず。錫を振ふ湘南潭北の間。悲願豈に生死の岸に留らんや。法身常に在り吉祥山。

花香書院　二首

千株梅樹影橫斜　百畝田園半是霞　吟榻不留塵世影　高堂靜似衲僧家

花香書院——千株の梅樹影橫斜。百畝の田園半は是れ霞。吟榻留めず塵世の影。高堂靜かなること衲僧の家に似たり。

人の活計他事無し。道を以て心と爲す法は是れ躬。

江州曹澤寺結制圓成

曹澤雲深紫翠堆　烏藤忽動鳳凰臺　太湖三萬六千頃　月自波心轉影來

江州曹澤寺結制圓成――曹澤雲深うして紫翠堆し。烏藤忽ち動く鳳凰臺。太湖三萬六千頃。月は波心より影を轉じて來る。

賀慈雲寺首座延運道壽具壽

夙掬桂原無底泉　又攀鎌嶺斷崖烟　珍重慈雲分座客　隻手全提默照禪

慈雲寺首座延運道壽具壽を賀す――夙に掬す桂原無底の泉。又た攀づ鎌嶺斷崖の煙。珍重す慈雲分座の客。隻手全提す默照の禪。

賀延壽山高德寺同契則心首座

曾投龍澤搜深淵　同契大虛攀九天　占取壽峰那半座　飲光遺照滿禪筵

延壽山高德寺同契則心首座を賀す――曾て龍澤に投じて深淵を搜り。同契の大虛九天に攀づ。壽峰の那半座を占取して。飲光の遺照禪筵に滿つ。

六湛禪師　二首

耕雲種月德非孤　綿密行持似貫珠　旭日登天星影盡　一天宗匠有如無

長岡市妙喜菴地藏講式

振錫周遊法界中　捧珠隨處賑貧窮　無邊願力無量德　統御刹塵揚化風

長岡市妙喜菴の地藏講式——錫を振つて周遊す法界の中。珠を捧げて隨處に貧窮を賑はす。無邊の願力無量の德。刹塵を統御して化風を揚ぐ。

妙喜菴大般若解繙法會

摩尼六百耀瑤臺　句句文文是聖財　轉轉打成功德聚　天無妖象地無災

妙喜菴大般若解繙法會——摩尼六百瑤臺に耀く。句句文文是れ聖財。轉轉功德聚を打成して。天に妖像無く地に災無し。

賀正龍寺首座密山謹悟

求道曾投大智門　南詢多歲客靈源　即今把定正龍角　半座光明照法園

正龍寺首座密山謹悟を賀す——道を求め曾て投ず大智の門。南詢多歲靈源に客たり。即今正龍の角を把定して。半座の光明法園を照らす。

祝萬頂山高岩寺巨海道雄師轉法輪

嶺頂摩天巨海中　高岩更歷萬峰雄　眞人活計無他事　以道爲心法是躬

萬頂山高岩寺巨海道雄師の轉法輪を祝す——嶺頂天を摩す巨海の中。高巖更に萬峰を歷して雄なり。眞

光明八十二回春　德不孤兮自有鄰　無影樹頭花忽發　莊嚴淸淨法空身

光明八十二回の春。德は孤ならず自から鄰有り。無影樹頭花忽ち發き。莊嚴す淸淨法空の身。

恩師移錫上天堂　四海禪林感寂寥　獨有湘南書院在　花香遠到涅槃場

恩師錫を移して天堂に上り。四海の禪林寂寥を感ず。獨り湘南書院の在る有り。花香遠く到る涅槃場。

每迎斯日設齋筵　追想慈恩浩似天　萬斛淚珠凝不解　紫爛燒罷坐眞前

斯日を迎うる每に齋筵を設け。慈恩を追懷すれば浩きこと天に似たり。萬斛の淚珠凝つて解けず。紫爛燒き罷んで眞前に坐す。

和知足菴鈴木無三老師賚韻

集福多年養德元　化風既見蓋乾坤　野僧何幸辱恩遇　交久彌知古佛尊

知足菴鈴木無三老師の賚韻に和す——集福多年德元を養ひ。化風既に見る乾坤を蓋ふを。野僧何の幸ぞ恩遇を辱なうし。交久しうして彌知る古佛の尊。

大雄山開祖忌

疊翠峰巒濃又澹　交芳躑躅白還紅　幽庭千古金剛水　潤澤仙林雲一叢

大雄山開祖忌——疊翠の峰巒濃かに又た澹し。芳を交ふるの躑躅白還た紅なり。幽庭千古の金剛水。潤澤す仙林の雲一叢。

慈船禪師大祥忌拈香　二首

恩師去世已三春　德澤豈唯重萬鈞　賴有遺光藏不得　幾千緇素望風臻

慈船禪師の大祥忌拈香――恩師世を去つて已に三春。德澤豈唯だ重きこと萬鈞ならんや。賴に遺光の藏し得ざる有り。幾千の緇素風を望んで臻る。

祖屋棟梁法界王　遺恩千古覆扶桑　金龍未必離潭底　莫怪痴兒汲夜塘

祖屋の棟梁法界の王。遺恩千古扶桑を覆ふ。金龍未だ必ずしも潭底を離れず。怪むなかれ痴兒夜塘に汲むを。

加州天德院主太壽老師請不老閣猊下啓建戒會賦祝

綿密行持倣祖翁　如天道德老彌隆　優曇現瑞華藏刹　葉葉枝枝帶古風

加州天德院主太壽老師不老閣猊下を請して戒會を啓建す。賦して祝す――綿密の行持は祖翁に倣ひ。如天の道德老いて彌々隆なり。優曇瑞を現ず華藏刹。葉葉枝枝古風を帶ぶ。

慈船禪師追慕詞　和鏡華居士書懷韻　四首

慈航多歲棹玄津　忽戢錦帆還本眞　唯有遺恩長蓋世　度來天下陸沈人

慈船禪師追慕詞。鏡華居士が書懷の韻に和す――慈航多歲玄津に棹さし。忽ち錦帆を戢めて本眞に還る。唯だ遺恩の長く世を蓋ふ有りて。天下陸沈の人を度し來る。

呈紫雲臺猊下

東光西照暫無休　悲願應機聞祖猷　只望保全千歳壽　慈雲靉靆蓋神州

紫雲臺猊下に呈す――東光西照暫くも休する無く。悲願機に應じて祖猷を聞く。只だ望むらくは千歳の壽を保全し。慈雲靉靆神州を蓋はんことを。

祝舞鶴桂林寺主請紫雲臺猊下啓建尸羅會

舞鶴濱頭宣福音　幾株嫩桂欝成林　紫雲移影華藏室　春月如珠映浪深

舞鶴の桂林寺主紫雲臺猊下を請して尸羅會を啓建するを祝す――舞鶴濱頭福音を宣ぶ。幾株の嫩桂欝として林を成す。紫雲影を移す華藏の室。春月玉の如く浪に映じて深し。

病後巡錫　二首

守約彷徨病後身　半親藥石半親人　宗乘本在言詮外　勿怪山僧不啓脣

病後巡錫――約を守つて彷徨す病後の身。半ば藥石に親み半ば人に親む。宗乘本と言詮の外に在り。怪む勿れ山僧脣を啓かざるを。

湘濱養病三經月　藥石收來七分功　自笑枯笻閒不得　追緣踏破幾山雲

湘濱病を養うて三たび月を經る。藥石收め來る七分の功。自から笑ふ枯笻閒し得ざるを。緣を追うて踏破す幾山の雲

既以天地做經書　好把虚空充草廬　滿腔開來無礙界　華嚴境裏轉幽居

龜谷聖馨氏が居を麻溪廣尾に移すの韻を次ぐ――既に天地を以て經書と做し。好く虚空を把つて草廬に充つ。滿腔開き來る無礙界。華嚴境裏幽居を轉ず。

肉身大士氣何豪　行願重重樂劬勞　不假善財閒手脚　菩提樹畔一星高

肉身の大士氣何ぞ豪なる。行願重重劬勞を樂む。假らず善財の閒手脚。菩提樹畔一星高し。

祝安居山高淨寺新命悟山覺了具壽　二首

莊嚴覺道了眞玄　坐斷安居嶺頂烟　悟後妙行高且淨　須振勇猛祖師禪

安居山高淨寺新命悟山覺了具壽を祝す――覺道を莊嚴して眞玄を了じ。坐斷す安居嶺頂の煙。悟後の妙行高く且つ淨し。須らく振ふべし勇猛祖師の禪。

朝渉禪河夕悟山　安居峰頂占仙寰　懋哉二利莊嚴德　道在喫茶喫飯間

朝に禪河を渉り夕に悟山。安居峰頂仙寰を占む。懋めよや二利莊嚴の德。道は喫茶喫飯の間に在り。

贈高牟禮義孝師

以法爲身道是心　喜君願力錬眞金　神龍豈是池中物　當向禪天澍梵霖

高牟禮義孝師に贈る――法を以て身と爲す道は是れ心。喜ぶ君が願力眞金を錬るを。神龍豈に是れ池中の物ならんや。當に禪天に向つて梵霖を澍ぐべし。

曇花の瑞。春月霞を含んで赤幡に映ず。

頤海寺鏡輝和尚罹頑疾明治二十四年以來不能運歩手曲體瘦專事寫經製功徳衣

頑病損形足失機　專書經典報恩輝　道心弄得通身筆　寫出最尊功徳衣

頤海寺靈輝和尚頑疾に罹り明治二十四年以來歩を運ぶ能はず手曲り體瘦せ專ら寫經を事とし功徳衣を製す――頑病形を損し足機を失す。專ら經典を書して恩輝を報ず。道心弄し得たり通身の筆。寫し出す最尊功徳の衣。

與曹澤後堂齋藤歡導師

朝迎龍象振禪風　夕接人天轉化機　珍重住持三寶力　應緣隨處放宗輝

曹澤の後堂齋藤歡導師に與ふ――朝に龍象を迎へて禪風を振ひ。夕に人天を接して化機を轉ず。珍重す住持三寶の力。緣に應じて隨處に宗輝を放つを。

丹波清光山圓淨寺戒場迎聖

殿閣聯珠恢德輝　法輪三轉振宗威　錦旛高飄華藏界　一段清光徹翠微

丹波清光山圓淨寺戒場迎聖――殿閣珠を聯ねて德輝を恢む。法輪三たび轉じて宗威を振ふ。錦旛高く飄る華藏界。一段の清光翠微に徹す。

次龜谷聖馨氏移居于厩溪廣尾韻　二首

規繩許さず絲毫を犯すを。境に接して好し般若の刀を揮ふに。退後進前須らく返照すべし。離婁は却て是れ眼睛高し。

開士惠吾金玉篇　篇篇無不道情詮　期師法體加康健　長向帝都振洞禪

開士吾に惠む金玉の篇。篇篇道情の詮ならざるは無し。期す師が法體康健を加へ。長く帝都に向て洞禪を揮ふを。

琵琶湖上　二首

萬頃湖波霞半封　千山煙水影重重　竹生洲外停船處　望入天台第一峰

琵琶湖上――萬頃の湖波霞半ば封じ。千山煙水影重重。竹生洲外船を停むる處。望み入る天台の第一峰。

太湖幾度入吟心　此日重來興更深　最愛亂峰浮影處　歸舟如矢向前岑

太湖幾度か吟心に入る。此の日重來興更に深し。最も愛す亂峰影を浮ぶ處。歸舟矢の如く前岑に向ふを。

羽前永寂寺大俊力生建法幢

地泰天和海也溫　覺林永寂絕譁喧　禪庭忽現曇花瑞　春月含霞映赤幡

羽前永寂寺大俊力生法幢を建つ――地泰く天和し海も亦た溫み。覺林永寂譁喧を絕つ。禪庭忽ち現ず

靈山正脈少林傳　名戒號心又稱禪　花笑鳥歌曹澤境　洞雲長護太湖天

曹澤寺戒會法語——靈山の正脈少林に傳ふ。戒と名け心と號し又た禪に稱ふ。花笑ひ鳥歌ふ曹澤の境洞雲長く護す太湖の天。

次韻無三老師　六首

丈夫先物作心師　信念如堅法自隨　翠竹猶存凌雪節　青松不改歲寒姿

無三老師に次韻す——丈夫物に先つて心師と作る。信念如し堅ければ法は自から隨ふ。翠竹猶ほ存す凌雪の節。青松は改めず歲寒の姿。

百花春到爲誰開　這裏要他參究來　諸佛法身曾不滅　朝三暮四好追陪

百花春到り誰が爲めにか開く。這裏要他す參究し來るを。諸佛の法身曾て滅せず。朝三暮四好し追陪するに。

擲倒慢山截愛河　莊嚴三密入空阿　三更月落人皆去　遺得蒼髯老杜多

慢山を擲倒し愛河を截り。莊嚴三密空阿に入る。三更月落ち人皆去り。遺し得たり蒼髯の老杜多。

根境交參百念忘　刹塵回互網羅張　不追微笑拈花跡　暗裏黄梅撲鼻香

根境交も參じ百念忘る。刹塵回互網羅張る。微笑拈花の跡を追ざるも。暗裏黄梅鼻を撲つて香ばし。

規繩不許犯絲毫　接境好揮般若刀　退後進前須返照　離婁却是眼睛高

三十三勝開淨域　五觀十願德無垠　慈光照徹幽明路　道樹花鮮覺苑春

名古屋の蓬城居士曾て西國三十三所靈場を巡拜し每場詩あり。一讀の餘感歎此を賦す――三十三勝淨域を開く。五觀十願德垠り無し。慈光照徹す幽明の路。道樹花鮮かなり覺苑の春。

次賢宗老師問疾之韻　二首

倣顰徒擬老維摩　宿病未除添一痾　開士賜吾金玉偈　頓令寒骨感春和

賢宗老師問疾の韻に次す――顰に倣うて徒らに擬す老維摩。宿病未だ除かざるに一痾を添ふ。開士吾に賜ふ金玉の偈。頓に寒骨をして春和を感ぜしむ。

業繫尋常修懺摩　猶依宿債引頑痾　天來一偈似良藥　吟了心調身亦和

業繫尋常懺摩を修す。猶ほ宿債に依て頑痾を引く。天來の一偈良藥に似たり。吟了して心調ひ身も亦た和す。

山水行舟圖

山高水靜副仙寰　嘯月吟風興自閒　一棹放舟何處去　欲尋天外白雲關

山水行舟の圖――山高く水靜かに仙寰に副ふ。月に嘯き風に吟じ興自から閒なり。一棹舟を放ち何れの處にか去り。天外の白雲關を尋ねんと欲す。

曹澤寺戒會法語

四十餘年大雄に侍し。慕心切切兩師翁。報恩の一着多子無し。坐臥經行古風を學ぶ。兩師は大休禪師及び本師を指す。

上州最興寺良存師還暦

經禪緯戒道彌高　華甲今看仙骨牢　詞苑煙霞春不老　吟心獨與道心豪

上州最興寺良存師の還暦――禪を經とし戒を緯とし道彌高く。華甲今看る仙骨の牢きを。詞苑の煙霞春老いず。吟心獨り道心と豪なり。

丙辰歲晚

道業生踈錯果然　寒單何日了參禪　追懷往事頻催感　屈指悠悠算歲年

丙辰の歲晚。道業生踈にして錯果然。寒單何れの日か參禪を了ぜん。往事を追懷して頻りに感を催す。指を屈して悠悠歲年を算ふ。

丙辰臘月浴豆州長岡溫泉

長陵五日浴溫泉　靈氣徹肌身欲仙　誰識水因三昧裏　分明坐斷四禪天

丙辰臘月豆州長岡の溫泉に浴す――長陵五日溫泉に浴し。靈氣肌に徹して身仙ならんと欲す。誰か識らん水因三昧の裏。分明に坐斷す四禪天。

名古屋蓬城居士曾巡拜西國三十三所靈場每場有詩一讀之餘感歎賦此

豐川閣老師の問疾を謝す――多謝す老師の客盧に臨むを。慙づ吾が禮遇轉た生疎なることを。恩情愛語報うに由無し。樂み見る閒雲卷いて復た舒ぶ。

慧光玄照禪師小祥忌獻香

慧日西沈已一年　吾心思慕涙漣然　溫容髣髴猶如在　恭獻香燈願受旃

慧光玄照禪師小祥忌獻香――慧日西に沈み已に一年。吾が心思慕して涙漣然。溫容髣髴猶ほ在が如し。恭しく香燈を獻ず願くば旃を受けたまへ。

伯州定光寺老師八十壽言

釣月眺雲八十春　老來禪骨益清新　高僧有箇長生術　以道爲心法是身

伯州定光寺老師八十の壽言――釣月眺雲八十春。老來禪骨益す清新。高僧箇の長生の術有り。道を以て心と爲す法は是れ身なり。

和鏡華居士追慕六湛師翁之韻　二首

遙憶湘南仙子莊　雲光樹影色茫茫　花香院裏拈香處　一鶴聲高在上堂

鏡華居士が六湛師翁を追慕するの韻に和す――遙かに憶ふ湘南仙子の莊。雲光樹影色茫茫。花香院裏拈香の處。一鶴聲高く上堂に在り。

四十餘年侍大雄　慕心切切兩師翁　報恩一着無多子　坐臥經行學古風　兩師指大休禪師及本師

鎌府の西繪島の東。潮聲遠く龍宮より到る。知音三たび惠まる陽春の曲。調は煙霞に入て碧空を彩る。

祝伊賀廣禪寺俊道師請不老閣啓建戒場

奉請宗師建戒壇　華藏開盡化門寬　遙懷四衆盈堂日　瑞氣如雲擁玉欄

伊賀廣禪寺俊道師が不老閣を請して戒場を啓建するを祝す——宗師を奉請して戒壇を建つ。華藏開き盡して化門寬かなり。遙かに懷ふ四衆堂に盈るの日。瑞氣雲の如く玉欄を擁するを。

名古屋禪芳方丈訪滿香戒場

千里遠來通月峰　相迎深喜道情濃　此心不許傍人識　唯有二僧形影從

名古屋の禪芳方丈滿光戒場を訪はる——千里遠く來る通月峰。相迎へて深く喜ぶ道情の濃かなるを。此心許さず傍人の識るを。唯二僧の形影從ふ有り。

謝井谷國手見訪滿光戒場

佳賓幸辱訪禪房　董奉厚情何可忘　勿怪病軀全覺快　戒場今日見醫王

井谷國手が滿光戒場を訪はるゝを謝す——佳賓幸に禪房を訪ふことを辱なうす。董奉の厚情何ぞ忘る可けん。怪しむ勿れ病軀の全く快を覺ゆるを。戒場今日醫王を見る。

謝豐川閣老師問疾

多謝老師臨客廬　慚吾禮遇轉生踈　恩情愛語無由報　樂見閒雲卷復舒

迎ふるを。前鳳後鸞文彩燦たり。山陰喜び見る德輝の殷なるを。

喜妙智寺老師就祖山維那重任

幾拔鯨波掉願航　錦帆留影祖師堂　請看萬古曹溪水　偏向玲瓏巖畔長

妙智寺老師の祖山維那の重任に就くを喜ぶ——幾たびか鯨波を拔いて願航に掉す。錦帆影を留む祖師の堂。請ふ看よ萬古曹溪の水。偏に玲瓏巖畔に向つて長し。

無三老師惠問疾偈和韻却呈　四首

久於集福豁禪天　今在東都鋤福田　何幸仙笻臨陋屋　温容愛語兩怡然

無三老師問疾の偈を惠む和韻して却呈す——久しく集福に於て禪天を豁す。今東都に在て福田を鋤す。何の幸ぞ仙笻陋屋に臨み。温容愛語兩ながら怡然。

幻身駐錫相陽濱　忘却世間出世間　佳客臨門無別遇　富峯如玉映温顏

幻身錫を駐む相陽の濱。忘却す世間と出世間と。佳客門に臨むも別遇無し。富峯玉の如く温顏に映ず。

湘濱假寓又因緣　坐臥擬來禪外禪　多謝高賓親慰我　時看江島帶霞鮮

湘濱の假寓も又た因緣。坐臥擬し來る禪外の禪。多謝す高賓親しく我を慰さむるを。時に看る江島霞を帶て鮮かなり。

鎌府之西繪島東　潮聲遠到白龍宮　知音三惠陽春曲　調入煙霞彩碧空

滿光寺戒場中吟

建化門頭帶重擔　病軀憑杖出湘南　慙吾道骨猶無力　七日加行半放參

滿光寺戒場中の吟――建化門頭重擔を帶び。病軀杖に憑りて湘南を出づ。慙づ吾が道骨猶力無く。七日の加行半ば放參するを。

祝孝道老師可睡開堂

禪苑麒麟敎海龍　通身手眼廣眞宗　當堂拈弄曇華髓　現出遠陽靈鷲峯

孝道老師の可睡開堂を祝す――禪苑の麒麟敎海の龍。通身手眼眞宗を廣む。當堂拈弄す曇華の髓。現出す遠陽靈鷲の峯。

寄祖山監院

願心金鐵老彌雄　接水接雲追祖風　古佛操行人會否　只知有法不知躬

祖山監院に寄す――願心金鐵老いて彌雄なり。水に接し雲に接し祖風を追ふ。古佛の操行人會するや否や。只だ法有るを知て躬を知らず。

祝祖山後堂慧昭師鶯遷但州智源寺

水能呼月嶽呼雲　不怪智源迎此君　前鳳後鸞文彩燦　山陰喜見德輝殷

祖山後堂慧昭師の但州智源寺に鶯遷するを祝す――水能月を呼び嶽は雲を呼ぶ。怪しまず智源此の君を

法駕殷勤訪病床　道情深厚不能忘　絕無花鳥遇君子　自有煙霞陪客堂

無三師の疾を問はるゝを謝す――法駕殷勤に病床を訪らはる。道情深厚忘るゝ能はず。絕て花鳥の君子に遇ふ無きも。自から煙霞の客堂に陪する有り。

謝養麟師問疾

倣跡維摩避世譁　謝師自苦訪毘耶　閒房待客無多事　江島煙波富嶽霞

養麟師の疾を問はるゝを謝す――跡を維摩に倣うて世譁を避く。謝す師が自から苦に毘耶を訪ふを。閒房客を待す多事無し。江島の煙波富嶽の霞。

發湘南赴三州

偶依教約不能逃　枯杖强爲塵外遨　含露梅浮春月影　葩葩代我放毫光

湘南を發し三州に赴むく――偶教約に依つて逃る能はず。枯杖强て塵外の遨を爲す。露を含む梅は春月の影を浮べ。葩葩我に代て毫光を放つ。

三州通月山滿光寺啓戒

祥雲瑞霧彩華城　天地乾坤滿戒香　誰捧毘盧心印去　分明點著菩提場

三州通月山滿光寺啓戒――祥雲瑞霧華城を彩り。天地乾坤戒香を滿たす。誰か毘盧心印を捧げて去る。分明に點著す菩提場。

皮袋を荷擔して蓬瀛に入り。諸緣を放下して道情を養ふ。象外の風流誰か自得す。獨り滄海に臨んで潮聲を聽く。

和青松寺鋏額老師詩

一簇雲懸般若臺　萬年松倚碧崔嵬　誰知百鳥啣花處　飜轉曹溪波浪來

青松寺鋏額老師の詩に和す——一簇の雲は懸る般若臺。萬年の松は倚る碧崔嵬。誰か知らん百鳥花を啣む處。曹溪の波浪を飜轉し來る。

喜瓶城老師點頭護國院住持

以法爲身道是心　隨緣霧海把南針　東遊西化怱怱裏　更向金城弄古琴

瓶城老師の護國院住持を點頭するを喜ぶ——法を以て身と爲す道は是れ心。緣に隨うて霧海に南針を把る。東遊西化怱怱の裏。更に金城に向うて古琴を弄す。

祝瓶城師應請仁王山

深喜仁王邀正師　自今護國力能持　切祈諸士加扶翼　普向金城恢化儀

瓶城師仁王山に應請せらるゝを祝す——深く喜ぶ仁王の正師を邀ふるを。今より護國力能く持たん。切に祈る諸士の扶翼を加へ。普ねく金城に向つて化儀を恢めんことを。

謝無三師問疾

示敬道上座

八萬威儀敬是規　三千經卷信爲基　道心存處眞菩薩　須對人天作導師

敬道上座に示す――八萬の威儀敬是れ規。三千の經卷信を基と爲す。道心存する處眞の菩薩。須らく人天に對して導師と作るべし。

次塚本善三郎君見示詩

脫落身心火裏蓮　祗應照顧脚頭邊　如來大道豈其遠　一貫三千年上年

塚本善三郎君が示さるゝ詩に次す――脫落身心火裏の蓮。祗應に脚頭邊を照顧すべし。如來の大道豈其れ遠からん。一貫す三千年上の年。

七里濱閒居　三首

春到未知春事諱　江西日月歎空華　寒庭不恨無梅樹　萬里滄溟總是霞

七里が濱閒居――春到りて未だ知らず春事の諱きを。江西の日月空華を歎ず。寒庭恨みず梅樹無きを。萬里の滄溟總て是れ霞。

駐錫湘南七里濱　無爲靜養病羸身　枕頭唯有潮聲響　不受浮生萬丈塵

錫を駐む湘南七里が濱。無爲靜養す病羸の身。枕頭唯潮聲の響きあり。受けず浮生萬丈の塵。

荷擔皮袋入蓬瀛　放下諸緣養道情　象外風流誰自得　獨臨滄海聽潮聲

言行一一發丹脇　切切溫情終叵忘　多謝依君仁術手　病軀追日見安康

井谷佐一郎醫伯に寄す——言行一一丹脇に發し。切切たる溫情終に忘れ叵し。多謝す君が仁術の手に依て。病軀追日安康を見るを。

次鐵髯老兄詩

暫傚毘耶杜室人　修行無力打南巡　煙霞頼未乖山衲　嚴飾春光護古濱

鐵髯老兄の詩に次す——暫らく傚ふ毘耶杜室の人。修行力の南巡を打する無し。煙霞頼に未だ山衲に乖かず。春光を嚴飾して古濱を護る。

鏡華居士被惠手製梅干賦此言謝

顆顆圓成梅法師　赤心片片味殊奇　花香院外流風客　忽向湘濱擧化儀

鏡華居士手製の梅干を惠まる。此を賦して謝を言ふ——顆顆圓成の梅法師。赤心片片　味　殊に奇なり。花香院外流風の客。忽ち湘濱に向うて化儀を擧ぐ。

祝京都慈眼寺請不老閣猊下啓建戒場

慈眼欽觀照鑒新　戒壇高仰法王身　洛陽城裏梅花發　露現靈山不老春

京都慈眼寺の不老閣猊下を請して戒場を啓建するを祝す——慈眼欽ひ觀る照鑒新たなるを。戒壇高く仰ぐ法王身。洛陽城裏梅花發き。露現す靈山不老の春。

呈不老閣猊下

金錫鳴風響震天　恩光無處不周圓　東垂西迹機輪轉　打併山川化福田

不老閣猊下に呈す――金錫風に鳴つて響き天に震ひ。恩光處として周圓ならざるは無し。東垂西迹機輪轉じ。山川を打併して福田と化せん。

和木童居士問疾詩　二首

負山臨海眼華新　占斷湘南萬里春　客問老僧猶有病　笑言單是放參人

木童居士が問疾の詩に和す――山を負ひ海に臨んで眼華新たなり。占斷す湘南萬里の春。客老僧猶ほ病有りやと問はゞ。笑て言はん單是れ放參の人と。

景物湘陽閒見新　病軀何事未回春　忘機不語浮生事　彷彿毘耶城裏人

景物湘陽閒見新たなり。病軀何事ぞ未だ回春せざる。忘機語らず浮生の事。彷彿たり毘耶城裏の人。

寄名古屋禪芳寺主大英老師

湘濱養病臥閒床　日覺身心復健康　追憶華巖春色麗　宵宵魂夢入禪芳

名古屋禪芳寺主大英老師に寄す――湘濱に病を養うて閒床に臥す。日に覺ゆ身心健康に復するを。華巖春色の麗しきを追憶して。宵宵魂夢禪芳に入る。

寄井谷佐一郎醫伯

錺華居士祖山に拜登香を六湛恩師に捧ぐ偈あり　恭しく和す——追孝の行持至情に發し。心操の淸きは老梅の淸きに似たり。無縫塔下拈香の處。一片の虛空碎けて聲あり。

寄日比野雷風先生

一劍單提殺活機　迅雷風烈振全威　白雲深處孤峯秀　紫電奔頭巨鳥飛　三四或作虛虛實實雖甄辨萬里長空電火飛

日比野雷風先生に寄す——一劍單提す殺活の機。迅雷風烈全威を振ふ。白雲深き處孤峯秀で。紫電奔頭巨鳥飛ぶ。三四或は『虛虛實實甄辨し難く。萬里の長空電火飛ぶ』に作る。

和說三老兄見示六湛禪師大祥忌供眞韻

禪林迸出鳳凰兒　一化行持百世師　偉德至今餘慶在　空華影裏秀靈芝

說三老兄が示さるゝ六湛禪師大祥忌供眞の韻に和す——禪林迸出す鳳凰兒。一化の行持百世の師。偉德今に至るも餘慶在り。空華影裏靈芝秀づ。

次說三老兄問疾詩

欣師特地道情深　一偈堪爲痛處鍼　何日親趨風月室　對床傾盡白雲心

說三老兄が疾を問はるゝ詩に次す——欣ぶ師が特地に道情深きを。一偈痛處の鍼と爲すに堪へたり。何れの日か親しく風月の室に趨り。對床傾むけ盡さん白雲の心。

養病湘南已幾旬　無爲絶學作閒人　寒梅旁有一華在　掬取嵩邱五葉春

病を湘南に養うて已に幾旬ぞ。　無爲絶學閒人と作る。　寒梅旁に一華の在る有り。　掬取す嵩邱五葉の春。

十笏毘耶不有塵　山爲藥石海爲賓　禪房拜得梅花贈　不羨城中萬卉春

十笏の毘耶塵有らず。　山を藥石と爲し海を賓と爲す。　禪房に梅花の贈りを拜し得て。　羨まず城中萬卉の春。

性海慈船禪師大祥忌拈香　二首

自喪師翁三閱春　羹牆無奈慕心頻　耳邊猶記殷勤語　法不獨弘弘在人

性海慈船禪師大祥忌拈香——師翁を喪ひしより三たび春を閱す。　羹牆奈ともする無し慕心頻りなるを。　耳邊猶ほ記す殷勤の語。　法獨り弘まらず弘むるは人に在り。

藏舟夜壑已三年　漠漠愁雲暗一天　古岸忽看帆影動　巉崖路絶月如弦

舟を夜壑に藏し已に三年。　漠漠たる愁雲一天に暗し。　古岸忽ち看る帆影の動くを。　巉崖路絶て月弦の如し。

鏡華居士拜登祖山捧香六湛恩師有偈恭和

追孝行持發至情　心操清似老梅清　無縫塔下拈香處　一片虛空碎有聲

心の月。光は及ぶ禪林の最上層。

養病於七里濱湘濱館　三首

三十年來無病身　一朝錯倣淨名顰　此間宜默不宜說　我是毘耶城裏人
病を七里が濱の湘濱館に養ふ――三十年來無病の身。一朝錯て淨名の顰に倣ふ。此の間默に宜しく說に宜しからず。我は是れ毘耶城裏の人。

擔來四大寓湘濱　不獨養身兼養神　笑殺山形拄杖子　空懸高閣避紅塵
四大を擔ひ來りて湘濱に寓す。獨身を養ふのみならず兼て神を養ふ。笑殺す山形の拄杖子。空しく高閣に懸て紅塵を避く。

閑却諸緣徐攝心　分明聽盡海潮音　開窗獨放雙眸坐　思入芙蓉第一峰
諸緣を閑却して徐ろに心を攝し。分明に聽き盡す海潮音。窗を開き獨り雙眸を放ちて坐せば。思は入る芙蓉の第一峯。

鏡華居士見贈梅花　三首

暫向湘陽寄幻身　知音贈我一枝春　挿瓶先獻恩師座　不倣尋香捉影人
鏡華居士梅花を贈る――暫らく湘陽に向うて幻身を寄す。知音我に贈る一枝の春。瓶に挿んで先づ恩師の座に獻じ。倣はず香を尋ね影を捉るの人に。

半輪の春月半開の梅。夜色清香兩がら快なる哉。一榻誰か知らん天地の潤を。千山萬水詩に入り來る。

寄武陽修證會

朋雲友水打商量　隨處打開枯木堂　幾許葛藤無別事　從來大道在平常

朋雲友水商量を打し。隨處に打開す枯木堂。幾許の葛藤も別事無し。從來大道は平常に在り。

禪林嗟見色蕭條　屋裏法燈誰克挑　多謝武陽修證會　化門先衆示手標

武陽の修證會に寄す――禪林見るを嗟す色蕭條たるを。屋裏の法燈誰か克く挑ぐ。多謝す武陽の修證會。化門衆に先て手標を示す。

問興聖寺石梁老師病

洞門長者祖庭麟　何事病魔侵法身　枯木花開從古有　唯希速地示回春

興聖寺石梁老師の病を問ふ――洞門の長者祖庭の麟。何事ぞ病魔法身を侵す。枯木花開く古より有り。唯希ふ速地に回春を示すを。

峰師進住興聖寺

高德代師紹法燈　期公特地振宗乘　玲瓏宇水波心月　光及禪林最上層

峰師興聖寺に進住す――高德師に代りて法燈を紹ぐ。期す公が特地に宗乘を振ふを。玲瓏たる宇水波

困臥華巖已數旬　雖逢新歲不知春　禪觀幸會安心術　不做尋常病客顰

一月十四日より二月五日に至る名古屋華巖山禪芳寺病居――華巖に困臥して已に幾旬。新歲に逢ふと雖も春を知らず。禪觀幸に會す安心の術。做はず尋常病客の顰みに。

養病金城避世譁　朔風掠地撒空華　寒床不結人間夢　夢繞湘南處士家　懷鏡華居士

病を金城に養うて世譁を避く。朔風地を掠めて空華を撒す。寒床結ばず人間の夢。夢は繞る湘南處士の家。鏡華居士を懷ふ。

一月下澣鏡華居士見贈林檎及湯暖保賦謝

深謝平生道誼親　美如甘露暖如春　寒僧幸受天供養　又保浮泡幻沫身

一月下澣鏡華居士林檎及び湯暖保を贈らる賦して謝す――深く謝す平生道誼の親みを。美は甘露の如く暖かきは春の如し。寒僧幸に天の供養を受け。又た保つ浮泡幻沫の身。

小川得水老兄見寄玉什和韻以呈　三首

貧道從來不會禪　更慚慧眼未開圓　誰言佛法無多子　纔涉商量路八千

小川得水老兄玉什を寄せらる。和韻以て呈す――貧道從來禪を會せず。更に慚づ慧眼の未だ開くこと圓ならざるを。誰か言ふ佛法多子無しと。纔かに商量に涉れば路八千。

半輪春月半開梅　夜色淸光兩快哉　一榻誰知天地濶　千山萬水入詩來

去り。寒梅一樹誰とか親しまん。

一軸金文拂六塵　破團蒲下足安身　孤燈影暗年將盡　當牖寒梅凍不春

一軸の金文六塵を拂ひ。破團蒲の下身を安んずるに足る。孤燈影暗く年將に盡きんとす。牖に當るの寒梅凍つて春ならず。

尾州興昌寺完戒示衆

戒品重重色卽空　空門有路自圓通　興昌現出毘盧境　枯木巖前花作叢

尾州興昌寺完戒示衆――戒品重重色卽空。空門路あり自から圓通。興昌現出す毘盧の境。枯木巖前花叢を作す。

興昌戒會中發病　二首

自許道軀堪苦難　無端此被病魔瞞　窗前一夜風聲怒　忽見空華飾戒壇

興昌戒會中發病――自から許す道軀苦難に堪ゆと。端なく此に病魔に瞞ぜらる。窗前一夜風聲怒り。忽ち見る空華戒壇を飾るを。

冱寒如箭射袈裟　老骨等閒招病魔　坐上慰吾良友在　紅梅花又白桃花

冱寒箭の如く袈裟を射る。老骨等閒に病魔を招く。坐上吾を慰するに良友在り。紅梅花又白桃花。

自一月十四日至二月五日名古屋華巖山禪芳寺病居　二首

廓然たる胸天は自から太平。

奉佛尊神又敬儒　我家呵有罵空無　多岐競走亡羊客　不識清娯屬老愚

佛を奉じ神を尊び又た儒を敬ふ。我家有を呵し空無を罵る。多岐競走す亡羊の客。識らず清娯の老愚に屬するを。

大正六年元旦祝聖

元正啓祚物皆新　恭捧心香向紫宸　掬得金剛無底水　灑來先祝萬年春

大正六年元旦祝聖——元正啓祚物皆新たなり。恭しく心香を捧げて紫宸に向ふ。金剛無底の水を掬し得て。灑ぎ來り先づ祝す萬年の春。

丁巳元旦

五十四年漫算砂　新條一句付梅花　山中莫道無祥瑞　嶺有祥煙潤瑞霞

丁巳元旦——五十四年漫りに砂を算し。新條の一句梅花に付す。山中道ふこと莫れ祥瑞無しと。嶺には祥煙あり潤には瑞霞。

丙辰歳晩　想六湛師翁　二首

福田衣下養斯身　心境慚吾易惹塵　六湛堂前人已去　寒梅一樹與誰親

丙辰歳晩六湛師翁を想ふ——福田衣下に斯の身を養ひ。心境慙づ吾が塵を惹き易きを。六湛堂前人已に

七月六日米山に上る――雲外雲有り古堂を圍む。石磴攀ぢ盡して醫王を拜す。求めず三十三天の樂。却て喜ぶ人間此郷有ることを。

次肥田野才之丞居士庚子元旦韻

拜年風俗好同塵　天地清寧啓祚春　松竹梅花青眼友　依然六十七齡人

肥田野才之丞居士が庚子元旦の韻を次ぐ――拜年の風俗好し同塵せん。天地清寧祚を啓くの春。松竹梅花は青眼の友。依然たり六十七齡の人。

次偶成　四首

利走名奔擧世然　同塵賣弄老婆禪　閑來默坐蒲團上　養氣如龍在九淵

偶成韻を次ぐ――利に走り名に奔る世を擧げて然り。塵に同じて賣弄す老婆禪。閑來默坐す蒲團の上。氣を養ふ龍の九淵に在るが如し。

懶僧無意弄新晴　偶得郵書憶友生　坐和高山流水曲　驚動大空擊節聲

懶僧新晴を弄するに意無く。偶郵書を得て友生を憶ふ。坐に高山流水の曲に和し。大空を驚動す擊節の聲。

順逆交參合道情　有時打草要蛇驚　森羅萬象崢嶸起　廓落胸天自太平

順逆交參して道情に合し。時有つて草を打ち蛇を驚かさんことを要す。森羅萬象崢嶸として起るも。

長舌上風雷を走らすを。

同　送聖

月轉西時日出東　光光相映大虛空　曼荼綴錦英林曉　一段清香繞梵宮

同じく送聖――月西に轉ずる時日は東に出づ。光光相映ず大虛空。曼荼錦を綴る英林の曉。一段の清香梵宮を繞る。

林宗力生乞法號安以洞陽之二字

投鞋洞上白雲岑　卓錫承陽無影林　却後心身總脫落　宗風振起古來今

林宗力生法號を乞ふ。安ずるに洞陽の二字を以てす――鞋を洞上白雲の岑に投じ。錫を承陽無影の林に卓す。却後心身總べて脫落し。宗風振起す古來今。

慰問東泉精舍火災祈再建圓成

禍害於人是亦天　須磨志氣補前緣　唯期復舊功成日　瑞彩莊嚴八福田

東泉精舍の火災を慰問し再建の圓成を祈る――禍害人に於てし是れ亦た天なり。須く志氣を磨して前緣を補ふべし。唯期す復舊功成るの日。瑞彩八福田を莊嚴せんことを。

七月六日上米山

雲外有雲圍古堂　石磴攀盡拜醫王　不求三十三天樂　却喜人間有此鄉

同じく戦捷祈禱――向ふ所前無し仁義の軍。堂堂たる鐵脚祥雲を踏む。乾坤盡く神州の德に化し。觸處明明に懿勳を策す。

同　忠死者追悼會　二首

以身殉道至人情　一死須知勝萬生　閃電擊空雷火怒　涅槃城裏路縱橫

同じく忠死者追悼會――身を以て道に殉ずるは至人の情。一死須く知るべし萬生に勝るを。閃電空を擊ちて雷火怒り。涅槃城裏路縱橫。

一死奉公酬宿志。忠勇肝膽只恁麼　悲風唱起無生曲　落葉深邊月色多

一死公に奉じて宿志に酬い。忠勇の肝膽只だ恁麼。悲風唱へ起す無生の曲。落葉深き邊月色多し。

同　先住忌拈香

五嶽凌雲聳碧空　英林綴玉笑春風　休訝更與蒸沈水　寫出那邊兩老公

同じく先住忌の拈香――五嶽雲を凌いで碧空に聳え。英林玉を綴つて春風に笑ふ。訝かるを休めよ更に與に沈水を蒸し。那邊兩老公を寫出するを。

同　完戒

寒巖枯木點花來　一帶紅霞染玉臺　勿怪戒光從口出　廣長舌上走風雷

同じく完戒――寒巖の枯木花を點じ來り。一帶の紅霞玉臺を染む。怪しむこと勿れ戒光口より出て。廣

獨立紘頭叱怒雷　安心淨似月前梅　英靈不與江波沒　劈破滔天白浪來

鐵心院山賀大三君を弔ふ——獨り紘頭に立つて怒雷を叱し。安心淨きこと月前の梅に似たり。英靈は江波と與に沒せず。滔天の白浪を劈破し來る。

忠勇武烈破天荒　恰似梅花壓衆芳　鐵石心肝精且一　餘芬豈啻漲扶桑

忠勇武烈天荒を破り。恰も梅花の衆芳を壓するに似たり。鐵石の心肝精且つ一　餘芬豈に啻だ扶桑に漲るのみならんや。

以身殉道聖賢心　一死知君報國深　驀直進前須着眼　三千世界是吾家

身を以て道に殉ずるは聖賢の心。一死知る君が國に報ゆるの深きを。驀直に進前して須く着眼すべし。三千世界是れ吾が家なることを。

凌雲山英林寺戒會迎聖

萬嶽雲舒丹鳳翼　千峯雪築白銀臺　曇華再現英林曉　香自不萠枝上來

凌雲山英林寺戒會迎聖——萬嶽の雲は丹鳳の翼を舒べ。千峯の雪は白銀の臺を築く。曇華再現す英林の曉。香は不萠枝上より來る。

同　戰捷祈禱

所向無前仁義軍　堂堂鐵脚踏辟雲　乾坤盡化神州德　觸處明明策懿勳

雪松霜菊徑猶存し。天爵は人爵の尊きよりも尊し。寡欲にして始めて忠孝の旨を知る。終生只だ皇恩に報いんと欲す。

柔順院法事香語

柔和善順德流輝　黛柏貞松遶玉扉　覺路灑來甘露雨　莊嚴淨界踏雲歸

柔順院法事の香語——柔和善順德輝を流き。黛柏貞松玉扉を遶る。覺路灑ぎ來る甘露の雨。莊嚴の淨界雲を踏んで歸る。

太平山興國寺完戒

祥光滿地戒門清　四海五湖歸太平　大用現前坤軸動　或爲鐵壁或金城

太平山興國寺完戒——祥光滿地戒門清く。四海五湖太平に歸す。大用現前して坤軸動き。或は鐵壁と爲り或は金城。

與雲洞内安居海衆

辨道未曾離脚下　工夫却在日常間　金城萬古溪山潔　代我打開向上關

雲洞内安居の海衆に與ふ——辨道未だ曾て脚下を離れず。工夫却て日常の間に在り。金城萬古溪山潔し。我に代つて打開せよ向上の關。

弔鐵心院山賀代三君　二首

戰捷祈禱――吉祥常に善良の人を保り。天祐永く忠孝の臣を全うす。只だ願ふ死中能く活を得て。東洋の天下盡く仁に歸せんことを。

赤柴大尉夫人八重野子代列戒位需法號安以報國院節堂正儀居士之稱號因打一偈

滿腔肝膽盡忠神　節義堂堂德有鄰　至道不遐惟報國　戒光長屬赤誠人

赤柴大尉夫人八重野子代つて戒位に列し法號を需む。安ずるに報國院節堂正儀居士の稱號を以てす。因みに一偈を打す――滿腔の肝膽盡忠の神。節義堂堂德鄰有り。至道遐からず惟だ報國。戒光長く屬す赤誠の人。

次蒼洲居士見惠韻却呈似　三首

不二門開道義存　情離說默話彌尊　文殊喫却維摩酒　高笑微吟亦佛恩

蒼洲居士の惠まれし韻を次いで却つて呈似す――不二の門開けて道義存し。情は說默を離れて話彌よ尊し。文殊維摩の酒を喫却して。高笑微吟するも亦た佛恩。

到處山川道自存　見聞無不釋迦尊　空囊足貯風流事　水月於吾皆有恩

到處山川道自ら存し。見聞釋迦尊にあらざるは無し。空囊貯ふるに足る風流の事。水月吾に於て皆な恩有り。

雪松霜菊徑猶存　天爵尊於人爵尊　寡欲始知忠孝旨　終生只欲報皇恩

し。天樞を把定して有章を喚ぶ。霞水梅溪瑞を垂るゝの夕。一光分れて百千芳と作る。

勳八等陸軍步兵特務曹長渡邊安藏君從征露第一軍轉戰各處數奏武功　明治三十七年十月十一日負傷於沙河會戰翌十二日遂歿于陣矣　幅中所收布袋之圖君嘗於征淸之役所得以堪爲永世紀念　仍賦一絕聊伸追悼之微衷

忠肝義膽出精誠　一劍縱横屠敵營　驀直進前端的活　唯知有死不知生

勳八等陸軍步兵特務曹長渡邊安藏君征露第一軍に從つて各處に轉戰し數〻武功を奏す。明治三十七年十月十一日沙河の會戰に負傷し翌十二日遂に陣に歿す。幅中收むる所の布袋の圖は君が嘗て征淸の役に得る所以て永世の紀念と爲すに堪へたり。仍て一絕を賦し聊か追悼の微衷を伸ぶ――忠肝義膽精誠に出で。一劍縱横敵營を屠る。驀直に進前して端的に活し。唯だ死有るを知つて生を知らず。

## 戰死者追弔會

重義輕身只奉公　懸軍萬里負精忠　丹心買得無量壽　一死收來絕代功

戰死者追弔會――義を重んじ身を輕んじて只だ公に奉じ。懸軍萬里精忠を負ふ。丹心は無量壽を買得し。一死は絕代の功を收め來る。

## 戰捷祈禱

吉祥常保善良人　天祐永全忠孝臣　只願死中能得活　東洋天下盡歸仁

滿林紅葉錦縫鮮　數頃香風入福田　雲影已開興國瑞　月向太平山頂圓

興國寺戒會迎聖――滿林の紅葉錦縫鮮に。數頃の香風福田に入る。雲影已に開く興國の瑞。月は太平山頂に向つて圓なり。

十一月二日禁酒

恩愛於吾遠且深　爲佗幾度役身心　分明拂却金罍露　不令景山侵戒禁

十一月二日酒を禁ず――恩愛吾に於て遠く且つ深し。佗の爲に幾度か身心を役す。分明に拂却す金罍の露。景山をして戒禁を侵さしめず。

赤柴大尉參加沙河會戰爲名譽之負傷聞此快復在近想大尉之勇敢更加一層賦此慰問

風揚砂石萬雷轟　紫電衝雲射敵營　好肉剜來忠義印　血染紅心滴滴鳴

赤柴大尉沙河の會戰に參加して名譽の負傷を爲し此が快復近きに在りと聞き大尉の勇敢更に一層を加うるを想ひ此を賦して慰問す――風は砂石を揚げて萬雷轟き。紫電雲を衝いて敵營を射る。好肉剜り來る忠義の印。血は紅心を染めて滴滴鳴る。

星見芳次郎君需法號安以德星院天章芳彥居士之稱號

靈星聚德耀精芒　把定天樞喚有章　霞水梅溪垂瑞夕　一光分作百千芳

星見芳次郎君法號を需む安ずるに德星院天章芳彥居士之稱號を以てす――靈星德を聚めて精芒を耀か

同じく戰死追弔會——生死岸頭に怒雷を轟かし。涅槃の路上紫雲堆し。滿盤に托出す醍醐の食。未だ唇邊を動かずして飽滿し來る。

七月中旬襲嘿地老兄韻賛陶祖加藤景正翁應遠裔亮吾君囑

獨弄泥團驅地神　偉勳長賑國兼民　分明陶冶乃翁髓　格外玄機屬此人

七月中旬嘿地老兄の韻を襲ぎて陶祖加藤景正翁を賛し遠裔亮吾君の囑に應ず——獨り泥團を弄して地神を驅り。偉勳は長く國と民とを賑はす。分明に陶冶す乃翁が髓。格外の玄機此の人に屬す。

清水寺戰捷祈禱

百萬貔貅勢似神　神光拂盡滿洲塵　妖氛不犯忠勇士　瑞靄長籠鐵石身

清水寺戰捷祈禱——百萬の貔貅勢神に似たり。神光拂ひ盡くす滿洲の塵。妖氛犯さず忠勇の士。瑞靄長く籠む鐵石の身。

同　宏家供養

打開無上菩提門　定慧莊嚴功德園　驀直歸投三寶海　波淸不見刻舟痕

同じく宏家の供養——無上菩提の門を打開して。定慧莊嚴す功德の園。驀直に三寶の海に歸投すれば。波淸うして刻舟の痕を見ず。

興國寺戒會迎聖

雲烟一抹羅龕を繞り。幽榻妨げず飛蝶参ずるを。珍重す三更窗外の月。澹光夢の如く僧菴に落つ。

七月安田村慶福寺戰捷祈禱

一劍全提掣電機　身邊笑見火星飛　天頒慶福賜忠士　六百摩尼腦後輝

七月安田村慶福寺戰捷の祈禱――一劍全提す掣電の機。身邊笑つて見る火星の飛ぶを。天は慶福を頒ちて忠士に賜ひ。六百の摩尼腦後に輝かん。

七月中旬鯨波妙智寺羅漢講式戰捷祈念

温然五百寶摩尼　瑩徹連城照四維　更喜鯨波擎月夕　潮聲號怒震華夷

七月中旬鯨波妙智寺の羅漢講式に戰捷の祈念――温然たり五百の寶摩尼。連城に瑩徹して四維を照す。更に喜ぶ鯨波月を擎ぐるの夕。潮聲號怒して華夷に震ふ。

同　醍醐寺戰捷祈禱

劍輪摧破露山河　豪氣分明降四魔　惟願死中能得活　東洋永遠樂平和

同じく醍醐寺の戰捷祈禱――劍輪摧破す露の山河。豪氣分明に四魔を降す。惟だ願はくは死中能く活を得て。東洋永遠に平和を樂しまん。

同　戰死追弔會

生死岸頭轟怒雷　涅槃路上紫雲堆　滿盤托出醍醐食　未動唇邊飽滿來

劍光如鏡倚天開　鐵壁銀山喝便摧　血滴妝成生死路　莊嚴古佛道場來

戰死追悼會――劍光鏡の如く天に倚て開き。鐵壁銀山喝すれば便ち摧く。血滴妝ひ成す生死の路。古佛の道場を莊嚴し來る。

七月初旬再來中野目邑圓福精舍　二首

多幸再來圓福場　園林欝密隔塵鄕　忽然安住詩三昧　半日幽閑夢亦涼

七月初旬再び中野目邑圓福精舍に來る――多幸再び來る圓福場。園林欝密塵鄕を隔つ。忽然安住す詩三昧。半日の幽閑夢亦た涼し。

自笑半生甘不能　死中猶活一烏藤　白雲賓與青山主　俱對松風待月昇

自から笑ふ半生不能に甘んずるを。死中猶ほ活す一烏藤。白雲の賓と青山の主と。俱に松風に對して月の昇るを待つ。

宿見龍寺　二首

孤筇偶訪見龍嶺　滿地薫風雨似煙　一夜園林梅子熟　點來黃面老金仙

見龍寺に宿す――孤筇偶訪ふ見龍の嶺。滿地の薫風雨煙に似たり。一夜園林梅子熟し。點じ來る黃面の老金仙。

雲烟一抹繞蘿龕　幽榻不妨飛蝶參　珍重三更窗外月　澹光如夢落伴菴

光影裏に渾身を養ふ。

孟夏次洞雲寺主閑月子韻

嵐光翠影掩窗溫　夢裏溪聲覺後聞　拂案時繙蘇子賦　欣然讀破嶺頭雲

孟夏洞雲寺主閑月子の韻を次ぐ——嵐光翠影窗を掩うて溫かく。夢裏の溪聲覺後に聞く。案を拂うて時に蘇子が賦を繙き。欣然讀破す嶺頭の雲。

次櫻陰居士見惠瑤韻。時在香積寺

片雲孤鶴自徘徊　遮莫清泉逝不回　霞舞鳥歌香積閣　宛然錦上布花來

櫻陰居士の惠まれし瑤韻を次ぐ。時に香積寺に在り——片雲孤鶴自ら徘徊す、遮莫清泉は逝いて回らざるも。霞は舞ひ鳥は歌ふ香積閣。宛然たり錦上花を布き來る。

中魚沼郡長源寺戰死追弔會

義如山嶽死如生　石火光中骨也清　了却降魔成道事　菩提花發剡浮城

中魚沼郡長源寺戰死追弔會——義は山嶽の如く死も生の如く。石火光中骨也た清し。了却す降魔成道の事。菩提の花は發く剡浮城

戰死追悼會

解夏與文放靈牛首座

蹄有花兮角有文　收來放去兩超羣　薫風徐覺芳叢夢　吼破靈山萬疊雲

解夏文放靈牛首座に與ふ——蹄に花有り角に文有り。收來放去 兩ながら超羣。薫風 徐に芳叢の夢を覺せば。吼破す靈山萬疊の雲。

贈長岡町清水珠吉男陸軍少尉儀三郎氏

一劍縱橫殺活機　青雲白日振征衣　期君降服魔軍去　擔得蓋天英氣歸

長岡町清水珠吉の男陸軍少尉儀三郎氏に贈る——一劍縱橫殺活の機。青雲白日に征衣を振ふ。君に期す魔軍を降伏し去り。蓋天の英氣を擔ひ得て歸るを。

太平山興國寺施餓鬼拈香

光明臺上瑞雲深　滿地莊嚴功德林　覺月徐浮甘露影　天風靜奏不絃琴

太平山興國寺の施餓鬼拈香——光明臺上瑞雲深く。滿地莊嚴す功德林。覺月 徐に浮ぶ甘露の影。天風靜に奏す不絃の琴。

同　戰捷祈禱

曇華現瑞太平晨　玉鳳來儀興國春　凜凜威風誰觸犯　電光影裏養渾身

同じく戰捷祈禱——曇華瑞を現す太平の晨。玉鳳來り儀す興國の春。凜凜たる威風誰か觸れ犯さん。電

戒光浮動法華臺　破人天鼻孔來　誰識高松千仭翠　古岩村裏帶雲堆

同じく迻聖――戒光浮動す法華臺。人天の鼻孔を驀破し來る。誰か知らん高松千仭の翠。古岩村裏雲を帶びて堆きを

賀岩村首座漢三義徹

義林巧染五天霞　鐵樹無端抽道芽　前後三三春一色　岩村開盡鬱曇華

岩村首座漢三義徹を賀す――義林巧に五天の霞を染め。鐵樹端無く道芽を抽きんず。前後三三春一色。岩村開き盡す鬱曇華。

文梁上座索法號安以棟門之二字

驀直翻身入祖堂　門庭特地着文章　他時辨道工夫後　法苑須期作棟梁

文梁上座法號を索む安ずるに棟門の二字を以てす――驀直に身を翻へして祖堂に入り。門庭特地に文章を着く。他時辨道工夫の後。法苑須らく期すべし棟梁と作ることを。」

賀昌福寺主轉法輪

氷輪夕轉萬融岑　瑞霧朝浮昌福林　聽盡松風千古曲　綠陰幽處養禪心

昌福寺主が轉法輪を賀す――氷輪夕に轉ず萬融の岑。瑞霧朝に浮ぶ昌福の林。松風千古の曲を聽き盡して。綠陰幽き處に禪心を養ふ。

圓通大士の贊——四八瑞嚴微妙の相。補陀巖畔海天寬し。神人は奉劍し雲龍は侍す。白浪霞を浸して翠攔を遶る。

三島山口君病少快歡喜賦呈

函嶺之南富嶽東　毘耶城裡路將通　業風不到維摩室　魔外爭侵金粟躬

三島の山口君が病少快を歡喜し賦して呈す——函嶺の南富嶽の東。毘耶城裡路將に通ぜんとす。業風到らず維摩の室。魔外爭か侵さん金粟の躬。

賀雲洞首座楳巖瑞芳

巖角古楳花忽開　芳英吐瑞遶春臺　丹心徐抱金城月　直下銀盤捧玉來

雲洞首座楳巖瑞芳を賀す——巖角の古楳花忽ち開き。芳英瑞を吐いて春臺を遶る。丹心徐に抱く金城の月。直下に銀盤に玉を捧げ來る。

高松山岩村寺戒會迎聖

高松疊翠掩禪關　鶴夢悠悠和月閒　珍重春風隨處動　烟霞影裏望家山

高松山岩村寺戒會迎聖——高松翠を疊んで禪關を掩ひ。鶴夢悠悠月と閒なり。珍重す春風隨處に動き。烟霞影裏に家山を望むを。

同　送聖

松聲の雨聲に似る有り。

到處有師還有禪　一身彷彿畫中仙　山房夜半工夫熟　不識潮聲訪枕邊

到る處師あり還た禪有り。一身彷彿たり畫中の仙。山房夜半工夫熟し。識らず潮聲の枕邊に訪るを。

同　碧巖錄開講

瞬目揚眉入禍胎　無根鐵樹枉栽培　誰知雪竇舊公案　分付山雲海月來

同じく碧巖錄開講――瞬目揚眉禍胎に入り。無根の鐵樹枉げて栽培す。誰か知らん雪竇の舊公案。山雲海月を分付し來るを。

賀寶光寺主大道宗師還曆　二首

瑞色流虹甲子新　仙顏道骨亦天眞　鸞庭乍湧長生曲　壽鶴翺翔不老春

寶光寺主大道宗師の還曆を賀す――瑞色虹を流して甲子新なり。仙顏道骨亦た天眞。鸞庭乍ち湧く長生の曲。壽鶴翺翔す不老の春。

德星如月映袈裟　壽室已籠南嶽霞　昨夜虛空添異彩　春風點出老梅花

德星月の如く袈裟に映じ。壽室已に籠む南嶽の霞。昨夜虛空に異彩を添へ。春風點出す老梅の花。

圓通大士賛

四八端嚴微妙相　補陀巖畔海天寬　神人捧劍雲龍侍　白浪浸霞遶翠巒

同献供

遮斷紅塵聳壑松。掀飜雲雨駕雷龍　幽窗印出鍊巖月　秋入金城第一峯。

同じく献供――紅塵を遮斷す壑に聳ゆる松。雲雨を掀飜す雷に駕する龍。幽窗に印出す鍊巖の月。秋は入る金城の第一峯。

同二十日轉大般若拈香

無所住時心自融　泯來往處道常通　溪聲話盡深般若　石磬能開二十空

同じく二十日轉大般若拈香――無所住の時心　自から融じ。往處を泯じ來つて道常に通ず。溪聲話し盡くす深般若。石磬能開く二十空。

癸卯七月十六日赴萬松寺

衲僧何必打閒謀　觸處無心自在遊　愉快萬松峯下水　冷涵金嶺一輪秋

癸卯七月十六日萬松寺に赴く――衲僧何ぞ必ずしも閒謀を打せん。觸處無心自在に遊ぶ。愉快なり萬松峯下の水。冷かに涵す金嶺一輪の秋。

癸卯七月五智國分寺滯杖　三首

碧樹陰森繞梵城　香雲一抹覆丹楹　晩來客去乾坤閴　只有松聲似雨聲

癸卯七月五智國分寺滯杖――碧樹陰森梵城を繞り。香雲一抹丹楹を覆ふ。晩來客去つて乾坤閴たり。只

自嗤英氣與年新　借問梅花點幾脣　不管雪團擣解急　一詩塑斷五湖春

櫻陰居士が山家新年の韻に和す――自ら嗤ふ英氣年と新なることを。借問す梅花幾脣をか點ずる。管せず雪團解を擣つこと急なるも。一詩塑斷す五湖の春。

和櫻陰居士見寄次閑月師歳晩之韻

挑盡殘燈榾柮焚　拈花一則斷塵紛　雲兄水弟齊圍座　不識東峯曙色分

櫻陰居士が寄せられし閑月師歳晩の韻を次ぐに和す――殘燈を挑げ盡して榾柮を焚き。拈花の一則塵紛を斷つ。雲兄水弟齊く座を圍み。不識ず東峯曙色の分るるを。

和木童居士雪達磨韻

可憐嵩嶽壁觀翁　化作寒庭白玉童　滿腔禪機凝不釋　還於默處說虛空

木童居士が雪達磨の韻に和す――憐むべし嵩嶽の壁觀の翁。化して寒庭の白玉童と作る。滿腔の禪機凝つて釋けず。還つて默處に於いて虛空を說く。

癸卯七月十九日雲洞羅漢尊者及本尊前點眼供養拈香

揑聚虛空鑄膽魂　眉間聳翠鐵崑崙　毫端點出機先眼　開盡如來五智門

癸卯七月十九日雲洞の羅漢尊者及本尊前點眼供養拈香――虛空を揑聚して膽魂を鑄る。眉間翠を聳やかす鐵崑崙。毫端機先の眼を點出して。開き盡くす如來五智の門。

骸骨美人の手を挽くの圖に題す——皮膚脱落して眞實を存し。燒菴婆子が家に背却す。手を携へ踏飜す寒月の影。蛾眉縱に片雲をして遮らしむ。

和賢明長老雪中所感韻

鞋底何嫌積雪纏　臺山不假老婆禪　風頭撒玉機先路　幾點花圍枯木鮮

賢明長老が雪中所感の韻に和す——鞋底何ぞ嫌はん積雪の纏ふことを。臺山に假らず老婆の禪。風頭に玉を撒ず機先の路。幾點の花は枯木を圍んで鮮なり。

次木童居士韻

擊竹聲聲落枕邊　夢魂終夜伴神仙　開窗懶踏氷輪影　伐木橋頭玉一川

木童居士の韻を次ぐ——擊竹聲聲枕邊に落ち。夢魂終夜神仙を伴ふ。窗を開き踏むに懶し氷輪の影。伐木橋頭玉一川。

巖上松

維石巖巖擁紫宸　老松凌雪翠彌新　龍吟八萬由旬頂　鶴宿二千五百年

巖山の松——維石巖巖紫宸を擁り。老松雪を凌いで翠彌新なり。龍は吟ず八萬由旬の頂。鶴は宿る二千五百年。

和櫻陰居士山家新年韻

陰陽異曆春猶臘　新舊隔年閒亦忙　雪壓老梅花未開　既看瑞氣漲僧堂

陽曆新年示衆――陰陽曆を異にし春猶ほ臘なり。新舊年を隔て閒亦た忙。雪は老梅を壓して花未だ開かず。既に看る瑞氣僧堂に漲るを。

瑞祥偶成　歩木童居士韻　三首

殿鐘三會起爐邊　堂上水雲皆是仙　勿向他求新日月　瑤華沒了舊山川

瑞祥偶成木童居士の韻を歩す――殿鐘三會爐邊に起り。堂上の水雲皆是れ仙なり。他に向つて新日月を求むること勿れ。瑤華沒了す舊山川。

深談未必挂脣邊　珍重雪華封澗泉　可惜更鐘三兩點　幾驚雲水一床眠

深談未だ必ずしも脣邊に挂からず。珍重す雪華の澗泉を封ずるを。惜む可し更鐘三兩點。幾たびか驚かす雲水一床の眠。

叢林復遇歲時更　定裏新詩八九成　不要拈花微笑去　却娛飛雪伴經行

叢林復た歲時の更まるに遇ひ。定裏に新詩八九成る。拈花微笑し去ることを要せず。却つて娛む飛雪の經行に伴ふを。

題骸骨拽美人手圖

皮膚脫落存眞實　背却燒菴婆子家　携手踏翻寒月影　峨眉縱教片雲遮

摩詰床を連ぬ古佛宮。文殊蓋を傾く善財童。江山の雪色淸きこと鏡の如く。萬象總べて融す圓覺の中。

瑞祥安居　歩木童居士見和碧潭之韻　二首

千林點着玉琅玕　夢鎖溪聲興自閑　竹伯梅孃交護室　雲兄水弟共傾歡
瑞祥の安居。木童居士が和せられし碧潭の韻を歩す――千林點着す玉琅玕。夢は溪聲に鎖されて興自ら閑なり。竹伯梅孃交室を護り。雲兄水弟共に歡を傾く。

雪掩祇園花未開　暮鐘聲裏擧茶杯　寒房占得三禪樂　霞袂雲衫入室來
雪は祇園を掩ふて花未だ開かず。暮鐘聲裏茶杯を擧ぐ。寒房占め得たり三禪の樂。霞袂雲衫室に入り來る。

雪中所感　二首

三冬駐錫水雲鄉　蕭殺寒風砭洞房　幸有老梅那一曲　雪團團裏骨毛香
雪中所感――三冬錫を駐む水雲の鄉。蕭殺たる寒風洞房を砭す。幸に老梅の那一曲有り。雪團團裏骨毛香し。

枯木巖頭一肚皮　飽來閑展兩莖眉　寒風咬破虛空骨　吐作漫天玉散兒
枯木巖頭の一肚皮。飽き來りて閑に展ぶ兩莖の眉。寒風咬破す虛空の骨。吐いて漫天の玉散兒と作る。

陽曆新年示衆

穗端猶帶ぶ嶺南の烟。子粒既に磨して白玉妍なり。默杵誰か知らん聲却て大なるを。盧行者も亦た退くこと三千。

題黒川楞嚴寺吉祥講員勸募帖

吉祥山吐吉祥雲　織出吉祥功德文　偏喜吉祥開講日　祖風永屬吉祥羣

黒川楞嚴寺の吉祥講員勸募帖に題す——吉祥山は吐く吉祥の雲。織り出す吉祥功德の文。偏に喜ぶ吉祥開講の日。祖風永く屬す吉祥の羣。

安善寺地藏供養之因轉大般若經禱祈渡邊氏當歳之男子馨福壽無窮

福海波平龍夢穩　壽山雲靜鳳吟長　此兒希被顧王育　明德馨於黍稷香

安善寺地藏供養の因み大般若經を轉じ渡邊氏當歳の男子馨の福壽無窮を禱祈す——福海波平に龍夢穩なり。壽山雲靜に鳳吟長し。此兒希くは顧王に育せられて。明德黍稷の香よりも馨しきを。

雪路訪木童居士　二首

溪山幻出水晶宮　徐踏空華訪木童　休道本來無一物　掀飜天地入詩中

雪路木童居士を訪ふ——溪山幻出す水晶宮。徐に空華を踏んで木童を訪ふ。道ふことを休めよ本來無一物と。天地を掀飜して詩中に入る。

摩詰連床古佛宮　文殊傾蓋善財童　江山雪色淸如鏡　萬象總融圓覺中

溪聲頻に綴る有聲の詩。月は疎松を透して翠帷に入る。這裏何ぞ論ぜん僧又俗を。禪心自ら水雲と奇なり。

弔井口先生　法名貫譽清愼榴莊居士

溫良恭謙思無邪　學問文章別一家　德澤到今乾不盡　松風帶露濕袈裟

井口先生を弔ふ——溫良恭謙思邪無く。學問文章別に一家。德澤今に到りて乾き盡きず。松風露を帶びて袈裟を濕す。

榴莊先生歿後其家人被贈遺笏　孟冬啓尸羅會於瑞祥晨參暮請終始隨身　因賦一絶恭供眞前

虛空劃出神龍骨　化作先生笏一枝　餘勢猶存山衲手　噴雲吸霧動坤維

榴莊先生歿後其家人遺笏を贈らる。孟冬尸羅會を瑞祥に啓き晨參暮請終始身に隨ふ。因つて一絶を賦し恭しく眞前に供ふ——虛空劃り出す神龍の骨。化して先生の笏一枝と作る。餘勢猶存す山衲の手。雲を噴き霧を吸うて坤維を動かす。

長岡興國寺確能禪兄需予安其徒法號　仍付以仙穎確雲四字

穩端猶帶嶺南烟　子粒既磨白玉姸　默杵誰知聲却大　盧行者亦退三千

長岡興國寺確能禪兄予に其徒の法號を安ぜんことを需む。仍つて付するに仙穎確雲の四字を以てす——

百億の蓮葩梵臺に下る。

同　安居戲作寄東雲上人　二首

方丈堪以容法界　雪華既帶瑞祥披　文殊喫却維摩酒　醉後猶吟無字詩
同じく安居の戲作東雲上人に寄す——方丈は以て法界を容るゝに堪へ。雪華は既に瑞祥を帶びて披く。文殊喫却す維摩の酒。醉後猶吟ず無字の詩。

醉後猶吟無字詩　任他飛雪襲簾帷　梁園恨缺東雲主　興味雖優未到奇
醉後猶吟ず無字の詩。任他飛雪の簾帷を襲ふも。梁園恨むらくは東雲の主を缺く。興味優なりと雖も未だ奇に到らず。

東雲上人見和前韵疊賦　三首

上人吟詠盡金玉　一誦欣然笑瞼披　野衲從來無佛法　木魚聲裏獨成詩
東雲上人前韻に和せらる疊ねて賦す——上人の吟詠盡く金玉。一誦欣然として笑瞼披く。野衲從來佛法無し。木魚聲裏獨り詩を成す。

木魚聲裏獨成詩　雪滿禪房宿霧披　畢竟通身無影像　滿天風月吐靈奇
木魚聲裏獨り詩を成す。雪は禪房に滿ちて宿霧披く。畢竟通身影像無し。滿天風月靈奇を吐く。

溪聲頻綴有聲詩　月透疎松入翠帷　這裏何論僧又俗　禪心自與水雲奇

祝德本首座泰衡

嘗投鎌嶺刈紛荊　忽上靈枝吐玉英　鐵笛横吹泰平曲　禪筵好是司權衡

德本首座泰衡を祝す——嘗て鎌嶺に投じて紛荊を刈り。忽ち靈枝に上つて玉英を吐く。鐵笛横吹す泰平の曲。禪筵好し是れ權衡を司るに。

瑞祥菴戒會啓建迎聖

驀直打開方丈門　祥雲瑞霧漲乾坤　虛空吐却圓通路　添得溪頭月一痕

瑞祥菴戒會啓建迎聖——驀直に打開す方丈の門。祥雲瑞霧乾坤に漲る。虛空吐却す圓通の路。添へ得たり溪頭の月一痕。

同　送聖

性海閒浮一釣船　金鱗幾個躍深淵　去來無迹雲津路　萬古桂輪華自鮮

同じく送聖——性海閒に浮ぶ一釣船。金鱗幾個か深淵に躍る。去來迹無し雲津の路。萬古の桂輪華自ら鮮かなり。

同　完戒上堂

日輝方丈室無埃　瑞雪祥霞兩作堆　眞風點破虛空骨　百億蓮葩下梵臺

同じく完戒上堂——日は方丈に輝きて室に埃無く。瑞雪祥霞兩ながら堆を作す。眞風點破す虛空の骨。

て風露香し。金波玉を含んで泉藏に漲る。九郎往昔斯の地を過ぐ。天下倶に知る信義の郷。

喜南魚沼佛敎會創立謝發企人諸公　二首

多謝諸君護念親　願行唯爲度民人　回天事業期須待　滿地轉來正法輪

南魚沼佛敎會の創立を喜びて發企人諸公に謝す――多謝す諸君が護念の親しきを。願行唯だ民人を度するが爲なり。回天の事業期して須く待つべし。滿地に轉じ來る正法輪。

月華含露玉壺泓　豈有閒雲點太淸　八海九山秋似畫　乾坤無處不光明

月華露を含んで玉壺泓し。豈に閒雲の太淸に點ずる有らんや。八海九山秋畫に似たり。乾坤處として光明ならざる無し。

湯澤旅館與押木慶藏君　二首

千年苦樂邯鄲夢　一世窮通水上漚　若達因緣空寂理　六輪輪轉也風流

湯澤旅館に押木慶藏君に與ふ――千年の苦樂は邯鄲の夢。一世の窮通は水上の漚。若し因緣空寂の理に達すれば。六輪輪轉も也た風流。

衆生無盡病還然　只要明心友聖賢　生死涅槃總脫落　人間到處是神仙

衆生無盡病も還た然り。只要す心を明にして聖賢を友とすることを。生死涅槃總べて脫落せば。人間到處是れ神仙。

の要門惟一信。報恩と唯稱名と新なり。

癸卯陰暦七月。修羅漢講式於雲洞。東雲上人見訪有詩次其韻　二首

乍喜神仙上梵臺　快然相接笑眉開　廣長舌弄懸河辯　八萬奔波濺玉來

癸卯陰暦七月羅漢講式を雲洞に修し東雲上人訪ねられて詩有り其の韻を次ぐ――乍ち喜ぶ神仙梵臺に上るを。快然相接して笑眉開く。廣長舌は弄す懸河の辯。八萬の奔波玉を濺ぎ來る。

一片閑雲一杓湯　篆影縈簾一爇香　慙愧禪房乏展待　也臨西澗挹斜陽

一片の閑雲一杓の湯。篆影簾に縈ふ一爇の香。慙愧す禪房展待に乏しきを。也た西澗に臨んで斜陽を挹む。

癸卯秋末蓮華寺戒會承陽忌

雨洗風磨七百年　越山宇水月如烟　新霜染出千林錦　秋到圓通一段鮮

癸卯秋末蓮華寺戒會の承陽忌――雨洗ひ風磨す七百年。越山宇水月烟の如し。新霜染め出す千林の錦。秋は圓通に到つて一段鮮かなり。

泉藏精舍。古稱桂關相傳源九郎過此關。葢富樫某所守也

月滿桂關風露香　金波含玉漲泉藏　九郎往昔過斯地　天下倶知信義鄉

泉藏精舍。古は桂關と稱し相傳ふ源九郎此關を過ぐと。葢し富樫某の守る所なり――月は桂關に滿ち

十二因緣夢一場　浩然隨處占清涼　前身莫是廣成子　進退兩遊無極鄕

感を記す――十二因緣夢一場。浩然として隨處に清涼を占む。前身是れ廣成子にあらず。進退兩ながら遊ぶ無極の鄕。

萬年山龍耕寺滯杖

滿池荷葉擎珠盤　數片閒雲鎖碧巒　珍重萬年峯頂月　禪窗印影展蒲團

萬年山龍耕寺滯杖――滿池の荷葉は珠盤を擎げ。數片の閒雲は碧巒を鎖す。珍重す萬年峯頂の月。禪窗影を印して蒲團に展ぶ。

在龍耕寺開演心經

色卽是空空亦空　摩訶般若妙難窮　金龍耕破三山月　繚亂桂花飜晚風

龍耕寺に在り心經を開演す――色卽是空空も亦空なり。摩訶般若の妙窮め難し。金龍耕破す三山の月。繚亂たる桂花晚風に飜る。

眞宗綱要　次英林賢道宗師韻

二雙三類判來親　萬古堪仰愚禿人　成佛要門惟一信　報恩唯與稱名新

眞宗綱要。英林賢道宗師の韻を次ぐ――二雙三類判じ來つて親し。萬古仰ぐに堪へたり愚禿の人。成佛

夏日洞源寺の請に赴く――朝に金城を發して洞源に入れば。嘉禾瑞を呈して田園に漲る。黃昏獨り禪心の爽なるを覺え。贏ち得たり峨眉の月一軒。

又逐因緣起坐禪　芒鞋竹杖澹於烟　前程不管炎塵襲　一隴稻花秋滿田

又因緣を逐うて坐禪を起ち。芒鞋竹杖烟よりも澹し。前程管せず炎塵の襲ふを。一隴の稻花秋滿田。

夏日詣明白山慈光寺　二首

石徑斜穿關外關　老杉蓊鬱隔塵寰　奇雲斷續機如活　忽爾無山又有山

夏日明白山慈光寺に詣づ――石徑斜に穿つ關外の關。老杉蓊鬱として塵寰を隔つ。奇雲斷續機活けるが如し。忽爾として山無く又山有り。

一路淸風翠作堆　徐行踏斷紫雲臺　停笻立盡溪聲裡　雲自白山祠畔來

一路の淸風翠堆を作し。徐行踏斷す紫雲臺。笻を停めて溪聲の裡に立ち盡せば。雲は白山祠畔より來る。

賀龍耕寺首座悅山禪和

玄津探盡九淵深　薦取山雲海月心　好是龍耕半杓水　他時化雨濕叢林

耕龍寺首座悅山禪和を賀す――玄津探り盡くす九淵の深。薦取す山雲海月の心。好し是れ龍耕半杓の水。他時雨と化して叢林を濕す。

明治廿一夏七月十六日。和尊師賀諸嶽山頭僧堂新築之韻。兼奉賀受總持後堂之任

禪林骨髓在僧堂　諸嶽連珠輿國光　一朶寒梅一片鐵　放香囀色滿扶桑

明治廿一夏七月十六日。尊師が諸嶽山頭僧堂の新築を賀するの韻に和し兼ねて總持後堂の任を受くるを賀し奉る――禪林の骨髓僧堂に在り。諸嶽の連珠は國光を輿す。一朶の寒梅一片の鐵。香を放ち色を囀やかして扶桑に滿つ。

同七月念九日寄松塢居士

常在世間離世間　一身落落富江山　萬松亭上眞居士　開得維摩不二關

同じく七月念九日松塢居士に寄す――常に世間に在りて世間を離れ。一身落落江山に富む。萬松亭上の眞居士。開き得たり維摩不二の關。

圓覺院仙巖木童居士安名偈

圓覺道平雲自閒　奇巖玉立護仙寰　木童徐奏無生曲　調入淸風明月間

圓覺院仙巖木童居士安名の偈――圓覺道平にして雲自ら閒なり。奇巖玉立して仙寰を護る。木童徐に奏す無生の曲。調は淸風明月の間に入る。

夏日赴洞源寺請　二首

朝發金城入洞源　嘉禾呈瑞漲田園　黃昏獨覺禪心爽　贏得峨眉月一軒

同じく代作——勝林の門下春陽を弄し。六國山頭飲光を現ず。仰ぎ看る化龍天上の日。瑞氣祥氣東昌に滿つ。

賀道龍圓準禪師初轉法輪代作　四首

金剛眼目夜珠光　一片慈雲滿道場　法雨灑來双嶺頂　縱逢三伏亦清涼

道龍圓準禪師初轉法輪を賀するの代作——金剛の眼目夜珠の光。一片の慈雲道場に滿つ。法雨灑ぎ來る双嶺の頂。縱ひ三伏に逢ふも亦た清涼。

法幢高聳富双中　德蓋江湖道普通　誰識門庭平坦處　栴檀葉葉起香風

法幢高く聳ゆ富双の中。德は江湖を蓋うて道普く通ず。誰か識らん門庭平坦の處。栴檀の葉葉香風を起すを。

高步丹霄路自通　富双那畔起宗風　門庭施設難思議　掌裏金剛跳碧空

丹霄を高步するに路自ら通ず。富双那畔に宗風起る。門庭の施設は思議し難く。掌裏の金剛碧空に跳る。

香飄靈鷲嶺頭花　月冷曹溪水上霞　佛祖法身曾未滅　慈門開發白牛車

香は飄る靈鷲嶺頭の花。月は冷かなり曹溪水上の霞。佛祖の法身曾て未だ滅びず。慈門開發す白牛車。

大竹村寶泉寺主に呈す――大仙脉を通じて寶泉深く。節を示す庭前の竹一林。豈に但だ心潭に覺月を浮ぶるのみならんや。竿頭自ら奏す不調の琴。

賀親應養麟首座八字之榮代作　二首

耕雲種月弄心田　蹈破草鞋坐半筵　消息堂堂何用祝　爲報承陽證上禪

親應養麟首座八字之榮を賀するの代作――耕雲種月心田を弄し。草鞋を蹈破して半筵に坐す。消息堂堂何ぞ祝ふを用ひん。承陽證上の禪に報いんが爲めのみ。

佛祖風流荷一肩　拈得三尺竹篦禪　試看靈鷲山頭月　人在金剛座半筵

佛祖の風流を一肩に荷し。拈じ得たり三尺竹篦の禪。試みに看よ靈鷲山頭の月。人は金剛座の半筵に在り。

賀東昌寺首座棟秀彥龍

彥標高秀勝林峯　須作棟梁揮祖宗　六國山頭添黛色　濤聲忽起紫雲龍

東昌寺首座棟秀彥龍を賀す――彥標高く秀づ勝林の峯。須く棟梁と作つて祖宗を揮はしむべし。六國山頭黛色を添へ。濤聲忽ち起す紫雲龍。

同代作

勝林門下弄春陽　六國山頭現飲光　仰見化龍天上日　瑞氣祥氣滿東昌

浴す。

### 端午和韻

新暦五陽佳節來　菖蒲未啓牡丹開　貧僧却不貧詩句　麥隴含秋人帯哈

端午和韻――新暦五陽の佳節來り。菖蒲未だ啓かず牡丹開く。貧僧却つて詩句に貧ならず。麥隴秋を含んで人哈ひを帯ぶ。

### 和冠松塢居士被寄韻題萬松樓

一上高樓四景新　分明寫得淨名眞　風流豈但江山裏　誰識江山屬此人

冠松塢居士が寄せらるる韻に和して萬松樓に題す――一たび高樓に上れば四景新なり。分明に寫し得たり淨名の眞。風流豈に但だ江山の裏のみならん。誰か識らん江山の此人に屬するを。

### 和本師見示韻

慈山悲海擁兒孫　讃仰洪恩晨又昏　銘得曹山孝滿語　泣感常拜臥龍尊

本師の示さるゝ韻に和す――慈山悲海兒孫を擁す。洪恩を讃仰す晨又昏。曹山孝滿の語を銘じ得て。泣感常に拜す臥龍の尊。

### 呈大竹村寶泉寺主

大仙通脉寶泉深　示節庭前竹一林　豈但心潭浮覺月　竿頭自奏不調琴

次雨餘閒吟韻

竹外淸風雨漸晴　殘紅去樹滿門程　駐筇轉惜春林老　况復新鵑啼一聲

雨餘閒吟の韻を次ぐ――竹外の淸風雨漸く晴れ。殘紅樹を去り門程に滿つ。筇を駐めて轉た惜む春林の老ゆるを。况んや復た新鵑啼く一聲をや。

次江湖雜詠韻

滿苑紅飛夏色歸　江湖興味沒人知　案頭忘却身斯客　記得東坡悟道詩

江湖雜詠の韻を次ぐ。――滿苑紅飛び夏色歸り。江湖の興味人の知る沒し。案頭忘却す身斯れ客なるを。記得す東坡悟道の詩。

見藤花有感

花如彩鳳葉如雲　草字交加織作文　可惜一身依架上　生涯爲客自離羣

藤花を見て感有り――花は彩鳳の如く葉は雲の如し。草字交へ加へ織つて文を作す。惜むべし一身架上に依るを。生涯客と爲て自から離羣す。

誕生會

毘藍園裏四時春　七步周行太斬新　孝順兒孫心似鐵　滿盆香水浴全身

誕生會――毘藍園裏四時の春。七步の周行太だ斬新。孝順なる兒孫心鐵に似たり。滿盆の香水全身に

有らされば晩春を奈何せん。」

至大川戸　二首

高脫塵勞心計蠹　前林獨有鳥聲呼　吟行蹈遍青郊路　堪笑一生被杖扶

大川戸に至る――高く塵勞を脫して心計蠹く。前林獨り鳥聲の呼ぶ有り。吟行蹈み遍す青郊の路。笑ふに堪へたり一生杖に扶け被るゝを。

占得青郊一日閒　痩笻携到大堤山　桃花猶有待吾意　數樹殘紅點曲灣

占め得たり青郊一日の閒。痩笻携へ到る大堤山。桃花猶ほ吾を待つの意有り。數樹の殘紅曲灣に點す。

安行途上

筑波山上曉雲遮　刀禰江頭綠水斜　雲水悠悠元不住　愛花未已又悲花

安行途上――筑波山上曉雲遮り。刀禰江頭綠水斜なり。雲水悠悠元と住まらず。花を愛すること未だ已まざるに又た花を悲む。

落花

昨日猶聞黃鳥忙　今朝減殺一庭香　人間不有飛紅雨　客路長斯極樂鄉

落花――昨日猶ほ聞く黃鳥の忙しきを。今朝は減殺す一庭の香。人間飛紅の雨有らされば。客路長く斯れ極樂鄉。

り。

## 題畫梅

富貴之君國色仙　少林五葉畫來鮮　斯花未假陰陽力　別有眞香味外傳

畫梅に題す――富貴の君國色の仙。少林の五葉畫き來つて鮮なり。斯花未だ假らず陰陽の力。別に眞香の味外に傳ふる有り。

## 桃花二首

桃花開盡洞門春　爛漫紅霞簇水濱　黃鳥不知禪衲樂　頻將巧舌召詩人

桃花――桃花開き盡くす洞門の春。爛漫たる紅霞水濱に簇がる。黃鳥は知らず禪衲の樂。頻に巧舌を將つて詩人を召ぐ。

春風開遍滿江邨　休道三雄起是園　四海淸平波亦靜　堪題人界小桃源

春風開き遍して江邨に滿つ。道ふを休めよ三雄是の園に起ると。四海淸平波亦た靜に。題するに堪へたり人界の小桃源。

## 櫻花

淸絕未如梅骨貧　風神爭及柳姿淳　紅妝獨占三陽冠　不有斯花奈晚春

櫻花――淸絕未だ梅骨の貧に如かず。風神爭か柳姿の淳なるに及ばん。紅妝獨り占む三陽の冠。斯の花

一片羈情實可憐　柴門不閉却蕭然　通宵獨對孤燈坐　雨滴聲聲落枕邊
梅雨——一片の羈情實に憐む可し。柴門閉さず却つて蕭然。通宵獨り孤燈に對して坐せば。雨滴聲枕邊に落つ。

雲擁青窗猶未晴　黄梅五月斷人行　孤情寂寥訴無處　抛擲工夫入雨聲
雲は青窗を擁して猶ほ未だ晴れず。黄梅五月人行を斷つ。孤情寂寥訴うるに處無し。工夫を抛擲して雨聲に入る。

風拂梅窗雨忽晴　波山露頂斷雲輕　黄昏最好庭前竹　葉葉珠含新月明
風は梅窗を拂つて雨忽ち晴れ。波山頂を露して斷雲輕し。黄昏最も好し庭前の竹。葉葉の珠は新月の明を含む。

悼石島定惠　二首

天何不使斯人住　訃至悲傷堪絶絃　窗月影寒頻破夢　枕頭況亦聽啼鵑
石島定惠を悼む——天何ぞ斯の人をして住めざる。訃至つて悲傷絃を絶つに堪へたり。窗月影寒うして頻に夢を破る。枕頭況んや亦た啼鵑を聽くをや。

苗而不秀忽凋枯　路限幽明負却吾　巴峽猿啼膓寸斷　江湖夢覺月舟孤
苗して秀でず忽ち凋枯す。路は幽明を限り吾に負却す。巴峽猿啼いて膓寸斷。江湖夢覺めて月舟孤な

跳出金毛獅子窟　双鞋一鉢轉風流　臨行呼喚莫回首　驀直歸家捋虎頭

送行——金毛獅子の窟を跳出して。双鞋一鉢轉た風流。行に臨んで呼喚するも首を回らす莫れ。驀直に歸家して虎頭を捋せよ。

惜別爭啼屋角鴉　牽衣爲唱摘楊花　出門莫顧漫漫草　足踏春風一片霞

別を惜み爭ひ啼く屋角の鴉。衣を牽き爲に唱ふ摘楊花。門を出でゝ顧みる莫れ漫漫の草。足は蹈む春風一片の霞。

灞水橋頭殘月傾　衲衣侵曉杖鞋輕　牽衣爲唱陽關曲　時聽竹林鐘一聲

灞水橋頭殘月傾き。衲衣曉を侵し杖鞋輕し。衣を牽き爲に唱ふ陽關の曲。時に聽く竹林の鐘一聲。

數點鐘聲夢忽驚　曉風殘月送歸程　低頭叉手終無語　別後莫忘兄弟情

數點の鐘聲夢忽ち驚き。曉風殘月歸程を送る。低頭叉手終に語無く。別後忘るゝ莫れ兄弟の情。

## 光嚴精舍

悠悠我意不能平　歳月難繫奈此生　熱血腔中無限恨　揮毫獨向硯池傾

光嚴精舍——悠悠たる我が意平なる能はず。歳月繫ぎ難く此の生を奈何せん。熱血腔中無限の恨。揮毫獨り硯池に向つて傾く。

## 梅雨三首

和寶國師參同契講習韻　二首

摩醯鼎足一而三　講習石頭玄妙談　若了源派明暗旨　春來依舊草挼藍

寶國師が參同契講習の韻に和す――摩醯の鼎足一にして三。講習す石頭玄妙の談。若し源派明暗の旨を了ぜば、春來舊に依つて草藍を挼る。

源派斟來問再三　參同妙旨太難談　多言多慮都蛇足　唐畫風流絕粉藍

源派斟み來り問ふこと再三。參同の妙旨太だ談じ難し。多言多慮都て蛇足。唐畫の風流粉藍を絕す。

和同學坐禪儀人韻

三昧在吾豈可疑　非思量處不要知　坐牀能具平常眼　辨道當看恁麼時

同じく坐禪儀を學ぶ人の韻に和す――三昧吾れに在り豈に疑ふべけんや。非思量の處知るを要せず。牀に坐して能く具す平常の眼。辨道當に看るべし恁麼の時。

和同試驗韻

謀伏輸機恥等倫　筆鋒舌劍聳全身　請看科第城中士　誰是先登第一人

同じく試驗の韻に和す――謀輸機を伏すれば等倫に恥づ。筆鋒舌劍全身を聳やかす。請ふ看よ科第城中の士。誰か是れ先登第一の人ぞ。

送　行　四　首

到保福寺宿

廣招共到古禪宮　道味方知俗氣空　一刻淸談三椀酒　山雲海月在其中

保福寺に到つて宿る——廣く招き共に到る古禪宮。道味方に知る俗氣空しきを。一刻の淸談三椀の酒。山雲海月其中に在り。

和述懷韻

掛籍僧門了此生　風流慷慨適時成　前程萬里長安路　一任紅塵礙屐行

述懷の韻に和す——籍を僧門に掛けて此生を了す。風流慷慨適時に成る。前程萬里長安の路。一任す紅塵の屐行を礙ぐるに。

和寶國師見示韻　二首

淡水之交自有馨　九旬荷德大家寧　春風吹滿叢林曉　又見曹溪山色靑

寶國師が示さるゝの韻に和す——淡水の交り自ら馨有り。九旬の荷德大家寧し、春風吹き滿つ叢林の曉。又見る曹溪山色靑きを。

一參龍澤嶺頭師　買盡風流奇不奇　更得江湖春雨潤　花紅柳綠有何涯

一たび龍澤嶺頭の師に參じ。買ひ盡くす風流の奇不奇。更に江湖春雨の潤ひを得て。花紅柳綠何の涯か有らん。

偶感和韻

社會開明日日新　堪憂敎海受埃塵　滔滔天下螢窗客　借問誰斯具眼人

偶感韻に和す——社會開明日日新なり。憂ふるに堪へたり敎海埃塵を受くるを。滔滔天下螢窗の客。借問す誰か斯れ具眼の人ぞ。

成道忌　四首

夜夜星光徹照鮮　慚惶六歲自相謾　忽然穿破娘生眼　驚覺羣生億萬眠

成道忌——夜夜星光徹照鮮に。慚惶す六歲自から相謾くを。忽然娘生の眼を穿破して。驚覺す羣生億萬の眠。

星光入眼撒空華　吐却從來一米麻　自是雪山群草客　勞勞火宅拽三車

星光眼に入つて空華を撒じ。吐却す從來の一米麻。是れより雪山群草の客。勞勞火宅に三車を拽く。

六歲苦行知爲誰　道成未必見星時　如何澆世其人少　三炷坐禪猶訴疲

六歲の苦行知んぬ誰が爲ぞ。道成る未だ必ずしも星を見の時のみならず。如何ぞ澆世其人少き。三炷の坐禪も猶ほ疲を訴ふ。

秀出雪山梅一枝　威音劫外已栽培　餘香薰滿東洋路　穿却人天鼻孔來

秀出す雪山の梅一枝。威音劫外已に栽培す。餘香薰じ滿つ東洋の路。人天の鼻孔を穿却し來る。

ふ有り。哂ふに堪へたり春の僧衣を捨てざることを。

舊歲已過新歲來　媿吾不似小園梅　卻悲佛教多秋色　縱得東風難挽回

舊歲已に過ぎて新歲來る。媿づらくは吾れ小園の梅にだも似ず。卻つて悲む佛教秋色の多く。縱ひ東風を得るも挽回し難きを。

胸中宿物與年盡　餘得平生匪石心　新歲豈憂無賀客　案頭書卷總知音

胸中の宿物年と與に盡き。餘し得たり平生匪石の心。新歲豈に賀客の無きを憂へん。案頭の書卷總て知音。

新歲恰如舊歲安　病軀但覺早春寒　詩僧自有神通在　驅盡風光入筆端

新歲恰も舊歲の安きが如く。病軀但だ早春の寒きを覺ゆ。詩僧自ら神通の在る有り。風光を驅り盡くして筆端に入る。

祖父田園歲復回　春風春雨好栽培　太平家曲人相問　拈却瓶中一朶梅

祖父の田園歲復た回り。春風春雨栽培するに好し。太平の家曲人相問はば。拈却せん瓶中一朶の梅。

烟盡曉天一炷香　坐聞雲版下禪床　鶯歌未破梅梢玉　已見春風滿法堂

烟は盡く曉天一炷の香。坐して雲版を聞き禪牀を下る。鶯歌未だ梅梢の玉を破らず。已に見る春風法堂に滿つるを。

天了妙戒信士――妙理天眞物皆然り。靈源了了機先を露はす。路頭何れの處か涅拌の岸なる。毘盧頂上戒光鮮なり。

寶國寺尸羅會香語　二首

恭向戒場設藥石　香積臺中供四趨　龍澤山頭雲雨起　捧來寶國一盂珠

寶國寺尸羅會香語――恭しく戒場に向つて藥石を設け。香積臺中四趨に供す。龍澤山頭雲雨起り。捧げ來る寶國一盂の珠。

功德海中功德聚　本來面目露堂堂　欲知定慧莊嚴旨　一炷心香滿殿香

功德海中の功德聚。本來の面目露堂堂。定慧莊嚴の旨を知らんと欲せば。一炷の心香滿殿に香し。

除　夜

病軀守歲坐燈前　爐冷還哂乏酒錢　人事晦明陵谷勢　三更忽見月輪圓

除夜――病軀歲を守りて燈前に坐す。爐冷へ還つて哂ふ酒錢に乏きを。人事の晦明は陵谷の勢。三更忽ち見る月輪の圓きを。

明治戊子歲旦　六首

身賓龍澤迎新歲　却喜人間賀客稀　唯有東風拂我面　堪哂春不捨僧衣

明治戊子歲旦――身は龍澤に賓して新歲を迎へ。却つて喜ぶ人間の賀客稀なるを。唯だ東風我が面を拂

訪ね來つて蓋を傾く梵王宮。道義悠悠たり目擊の中。怪む勿れ詩の厚意に酬ゆる無きを。一簾の微雨半牀の風。

住山本沒買山錢　幽石閒雲樂浩然　相對唯言喫茶去　輕香好得趙州禪

住山本と買山の錢沒し。幽石閒雲浩然を樂む。相對して唯言ふ茶を喫し去れと。輕香好し趙州の禪得たり。

明治十九年中秋

桂子飜香一半秋　蟾光流影上簾鉤　欲知詩味宜觀月　皓彩豈唯庾亮樓

明治十九年中秋――桂子香を飜へす一半の秋。蟾光の流影簾鉤に上る。詩味を知らんと欲せば宜しく月を觀るべし。皎彩豈に唯だ庾亮の樓のみならんや。

螢

數點聚來難照書　二光影盡志纔舒　可愍秋露浮生短　草際徒誇地星譽

螢――數點聚り來るも書を照し難く。二光の影盡きて志纔に舒ぶ。愍むべし秋露浮世短きを。草際徒らに誇る地星の譽。

天了妙戒信士

妙理天眞物皆然　靈源了了露機先　路頭何處湼拌岸　毘盧頂上戒光鮮

病　癒

四百四痾尙易治　無明一疾最難醫　胸中良劑多年坐　驀直打開眼上眉

病癒ゆ――四百四痾は尙ほ治し易く。無明の一疾最も醫し難し。胸中の良劑多年の坐。驀直に打開す眼上の眉。

偶　作

烟霞四面路西東　老去枯腸猶未空　出沒白雲如有意　隨風閒訪草廬中

偶作――烟霞四面路西東。老去つて枯腸猶ほ未だ空ならず。出沒する白雲意有るが如く。風に隨つて閒に訪ふ草廬の中。

拄杖頭邊卓草菴　禪風祖月任君參　烟霞一片閒生計　脫落南方五十三

拄杖頭邊草菴に卓し。禪風祖月君が參ずるに任す。烟霞一片の閒生計。脫落す南方五十三。

賢宗師眞龍具壽見訪喜賦　三　首

冐雨禪兄叩不二　山前一笑互開顏　更疑身在江湖上　明滅月波煙靄間

賢宗師眞龍具壽に訪ねられ喜び賦す――雨を冐して禪兄不二を叩く。山前一笑互に顏を開く。更に疑ふ身は江湖の上に在るかと。明滅す月波煙靄の間。

訪來傾蓋梵王宮　道義悠悠目擊中　勿怪無詩酬厚意　一簾微雨半牀風

君是驪龍領下珠　騎雲跨雨療枯瘵　誰知歸去叢林穩　當向九淵捋鬣鬚

眞龍師の歸省を送る——君は是れ驪龍領下の珠。雲に騎り雨に跨つて枯瘵を療す。誰か知らん歸去つて叢林穩なるを。當に九淵に向つて鬣鬚を捋すべし。

到松川盛林寺

月穿松霧映前川　風滿盛林祥氣鮮　古鏡雙雙相對立　光明一色入那邊

松川盛林寺に到る——月は松霧を穿ちて前川に映じ。風は盛林に滿ちて祥氣鮮なり。古鏡雙雙相對立し。光明一色那邊にか入る。

孟春和韻寄賢宗師在能山

銀闕玄鎖幾層層　透地透天志氣凝　唯貴結緣兄莫捨　好斯三世主賓僧

孟春韻に和して賢宗師の能山に在るに寄す——銀闕玄鎖幾層層。透地透天志氣凝る。唯だ結緣を貴んで兄捨つること莫れ。好し斯れ三世主賓の僧。

夏日

趙盾蒸炊毒我膓　北窗徒羨傲義皇　阿香偶送千山雨　占得薰風一味涼

夏日——趙盾の蒸炊我が膓を毒し。北窗徒らに羨む義皇に傲るを。阿香偶送る千山の雨。占め得たり薰風一味の涼。

明治十八年中秋觀月

素影穿簾入座隅　知君舊意不吾辜　氷心相會時無語　能使愁人終夜娛

明治十八年中秋月を觀る――素影簾を穿ちて座隅に入る。知る君が舊意吾れに辜かざるを。氷心相會して時に語無く。能く愁人をして終夜娛ましむ。

秋夜

舊痾凝痼苦吾形　半夜秋風不忍聽　同病相憐無限意　枕邊一部淨名經

秋夜――舊痾凝痼吾が形を苦め。半夜の秋風聽くに忍びず。同病相憐む無限の意。枕邊一部の淨名經。

一天秋色月東南　敗衲虛牕亦可甘　豹隱豈唯山水裏　風流萬古半茅菴

一天秋色月東南。敗衲虛牕亦た甘んず可し。豹隱豈に唯だ山水の裏のみならんや。風流萬古半は茅菴。

與祖庭光岳長老

明白身心月洗霜　桂花連玉祖庭香　靈然機廣遍河岳　懷抱古今爲夜光

祖庭光岳長老に與ふ――明白たる身心月霜を洗ふ。桂花玉を連ねて祖庭香し。靈然機廣うして河岳に遍く。古今を懷抱して夜光と爲る。

送眞龍師歸省

## 題白扇　三首

通身皎潔巻舒全　萬里清風歸一拳　不識文明開化世　誰人得是自由權

白扇に題す――通身皎潔にして巻舒全く。萬里の清風一拳に歸す。識らず文明開化の世。誰人か是の自由の權を得ん。

爲消人界蒸砂熱　閒帶清風出篋中　大柄若歸知己手　吾家舊物用無窮

人界の蒸砂熱を消さんが爲に。閒に清風を帶びて篋中を出づ。大柄若し知己の手に歸せば。吾が家の舊物用ひて窮り無けん。

身隨風性沒行藏　大小鹽官太卒忙　一片芳心舒不盡　誰知搖手卽清涼

身は風性に隨つて行藏沒し。大小の鹽官太だ卒忙。一片の芳心舒べて盡きず。誰か知らん手を搖かせば卽ち清涼なるを。

# 詩偈歌頌篇

# 詩偈歌頌篇

## 目次

次奎堂子壽華頂堂芳韻恭祝喜壽

三徑無塵雲自封
主翁常坐大雄峰
歡迎喜壽猶忘老
室有芝蘭庭有松

松陰竹影護吟臺
軒外時觀孤鶴來
唯為奉公心太切
屢呼杖履踏青苔

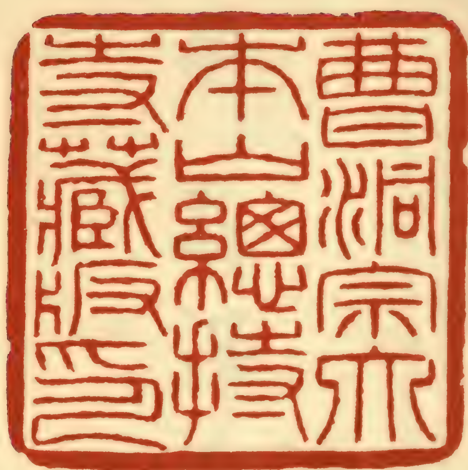
老來猶未損音容
壽域堪看瑞氣濃
心似白雲身似鶴
人生夢外五更鐘

總持石禪


LIBRARY
JAN 4 1968
UNIVERSITY OF TORONTO

# 新井石禅全集




曹洞宗大本山總持寺藏版之

